
バカとテストともう一人の帰国子女

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストともう一人の帰国子女

【Nコード】

N8814T

【作者名】

原石

【あらすじ】

「Fクラスにもう一人、帰国子女がくる」その帰国子女、神無月劉真は文月学園最低クラスに転入することとなった。試験召喚戦争？面白そうだな。任せろ！！勉強は嫌いだけど！！え？待て！美波！！俺の腕はそっちにはまがらな・・・ギャアアア！！はたして劉真は無事に学校生活を送ることができるのか！！真剣にバカなことをする文月学園の生徒たちに劉真はついていけるのか！！そして劉真の常識はずれの行動に雄二たちは耐えられるのか！！劉真たちが繰り広げる笑いあり、恋愛あり、コメディありの青春コメディス

トリーの開演です！！やっとの思いで十万アクセス・ユニーク
万突破！！ありがとうございます！！

俺の主人公のキャラ紹介（前書き）

原石です！！ついにバカテスに手を出してしまいました！！
ぜひ読んでください！！

俺の主人公のキャラ紹介

かんなつきりゆうま
神無月劉真

容姿

顔は中の上。目と髪は黒。髪型はところどころがはねている。

身長

165cmいくかないか

体重

50kg前後

性格

基本は冷静。面白いこと好き。

得意教科

数学

苦手教科

古典

召喚獣

学ランにトンファー所持

腕輪

停止（相手の召喚獣の動きを止める。一回の使用につき、100点消費する）

イメージCV

神谷浩史（Angel Beats!の音無弓弦）

親の都合で幼いころにドイツに渡欧した。そこで、島田美波と出会い、両想いになる。数学が得意なのは日本にいる美波が数学が得意だと知り、足手まといになりたくなかったから。古典が苦手なのは帰国子女だから。14歳のときに旅行に来ていた土屋一家と仲良く

なり、それ以来、土屋康太とは親友であり、文通仲間。美波の得意科目を教えたのも康太。

> i28999
— 3416<

> i29000
— 3416<

召喚獣です。

> i29001
— 3416<

俺の主人公のキャラ紹介（後書き）

主人公はAクラス戦から合流します。

ウチとアイツは帰国子女(前書き)

本編開始です!!

この小説は一話4000文字ぐらいでいらんかなと思ってます!..

ウチとアイツは帰国子女

ここは1年前のドイツ

その空港では2人の男女が言い争いをしていた。

『俺は行けない・・・』

『どうして!?!一緒に行きましょうよ!?!』

『まだ、親と話を付けていないんだ・・・』

『・・・なら一つだけ約束して!?!』

『約束?』

『美波ー!もう飛行機出ちゃうわよー!』

『絶対に一年以内に文月学園に来て!?!』

『文月学園?』

『そう!?!そこに私は通うから!?!』

『ああ、約束する!?!』

『じゃあ、キスしてくれる?』

『いや、それは・・・』

『もうしょうがないわね!?!』

二人の唇がそつと触れ合う

『!?!?』

『今はこれで許してあげる』

『美波・・・』

『じゃあまた一年後ね・・・リュウ・・・』

『・・・だ』

「・・・まだ」

「島田！！」

「は、はい！！」

しまった！またあの時のことを考えてしまった！！

「居眠りするのも結構だが、板書ぐらいはしてくれ、お前は古典が壊滅的なんだからな」

「す、すみません」

あああああ、また恥かっちゃった・・・

あ、紹介が遅れたわね、ウチは島田美波よ。説明はしなくても大丈夫だよ

「このクラスに新しい仲間が増えることになった」

西村先生が突然すごいことを言い出した

「この時期に！？」

「どんな人なんだ？」

「まったく、敬語を使えといつも言ってるだろうが吉井に坂本・・・転入してくるのはドイツからの帰国子女だ」

「帰国子女！？だったら女の子なんだ！！」

「明久、帰国子女は女とはかぎらねえぞ・・・」

「え、そうなの？雄二」

ドイツからの帰国子女ですって！？まさかあいつが・・・

「美波！！」

「え、あ、何？」

「どうしたのさつきからボーッとしてるよ」

「なんでもないわ」

トントン

私の肩をクラスメイトの土屋がつついてきた

「どうしたの？土屋」

「・・・ドイツなら劉真の可能性が極めて高い」

「そういえば、リュウと文通してるんだったわね」

「・・・（コクコク）」

「何のはなしですか？」

「あ、瑞希。いや、なんでもないわよ。」

「嘘だ！！」

「瑞希、ひぐらしネタはもう古いわよ・・・」

何でこの子がネタにはしるのかしら・・・

「何で教えてくれないんですかぁ・・・」

「明日になったら分かるから、ね」

そして時間は次の日へと進んでいく

「ここが文月学園か・・・」

校門の中央で一人の少年が立ち尽くしている

「一年か・・・長かったな・・・待ってるよ、美波」

そして場面はFクラスに移り変わる

「おい！席につけ！！転入生の紹介をする！！」

クラス内の騒音が一気に無くなる

「よし、入ってこい」

ガラッ

「こいつが転入生の神無月だ」

「神無月劉真です。ドイツから来ました。日本のことは康太に聞いているので支障はありません。一年間よろしくお願いします」

「何か質問のある奴は？」

「はい！！」

「吉井」

「ムツツリーニに聞いているってどういうことですか？」

「ムツツリーニ・・・？」

「このバカ、いきなりそんなこと言われても分かんねえだろ。すまなかつたな、俺はこのクラスの代表を務めている坂本雄二だ。ムツツリーニってというのは土屋康太のことだ」

「坂本雄二・・・元神童か？」

「お、よく知ってるな」

「日本にいたころ聞いたことがあったからな」

「そうか・・・劉真って呼んでいいか？」

「かまわないぞ、俺も雄二と呼ばせてもらおう」

「で、聞いているというのは」

「ああ、昔、康太がドイツに来てな、そのときに仲良くなったんだ。で、今まで文通をしていたというわけだ」

「次はだれか質問はあるか」

「はい」

「島田」

「美波……」

「リュウ……会いたかった!!」

ガシッ

「……!?!?!」

「約束守れなかったな、すまねえ」

「いいの!こうしてリュウに会えたんだから!!」

しかし、二人の時間は長くは続かなかった

「劉真、どうということなんだ?」

「ああ、俺と美波は恋人同士なんだ」

「……恋人同士?!?!」

そのときクラスが殺気にまみれた

「劉真……」

「何だ……吉井……」

「このクラスではね、恋人同士っていうのはね」

「恋人同士というのは?」

「処刑対象なんだ!!!!」

「……Let's party!!!!」

「何だそれ!?!」

「死にさせええ!!!!!!」

「うわ、あぶねえ!!ちつ、美波、行くぞ!!」
「え、ちよつと!?!」

タタタタタタ

「ここまでくればもう安心だろ・・・」

結局、屋上まで逃げてきた劉真は息を整えながら咳く

「何なんだ、あのクラスは・・・まあ面白いからいいんだけどな・・・」

「ふふ、全然変わってないわね」

「そうか?背は伸びたと思うんだが」

「そっちじゃないわよ。ていうか、アンタ、ウチとあまり変わらないじゃない」

「俺、男なんだけどな」

「土屋よりは高いわよ」

「康太は小柄だからな」

「アンタが言っちゃだめでしょ」

ギョッ

「お帰り、でいいのかな?リュウ」

「いいんじゃないか?ただいま、美波」

2人は長い時間お互いに抱きしめあっていた、

ウチとアイツは帰国子女（後書き）

この小説ではすでに担任が鉄人です
次回、劉真の点数が明らかに！！

俺と古典と試験結果（前書き）

今回、バカッパルの二人が暴走します・・・

俺と古典と試験結果

劉真side

「『試験召喚戦争』?」

「今、Fクラスはその試験召喚戦争をしてるの」

「それって何だ?」

「試験召喚戦争は『試召戦争』と呼ばれているわ。簡単に言えば、クラス同士が召喚獣を呼び出して戦う

競技みたいなものね」

「なるほど」

「で、明日Aクラスと勝負するってわけ」

「勝てるのか?」

「うーん・・・リュウはまだ召喚獣を使ったことがないからね・・・」

「それなら、心配ねえぞ」

「「!?!?」」

声が出たほうを振り返ると、そこにはクラス代表の雄二がいた

「坂本!?!?いつからそこにいたの!?!?」

「『何なんだ、あのクラスは』ぐらいからだ」

「ほとんど始めからじゃない!?!?」

隣では美波が「見られた・・・」と嘆いていた

「雄二、覗きとは感心しないな」

「すまねえな、劉真に用があつて来たんだが、いい雰囲気だったもんでな」

「そうかい」

「ラブラブなんだな」

「／／／」

「心配すんな。誰にも言わねえよ」

「ホント？」

「俺も貴重な戦力は失いたくないからな」

「どうということ？」

そういえば、美波は俺の点数を知らなかったっけ

「劉真の編入試験の点数を見たか？」

「いいえ、見てないけど・・・」

「これだ」

神無月劉真

現国 210点

古典 12点

数学 420点

現社 200点

日本史 190点

世界史 300点

英語 340点

保健体育 15点

「これは・・・」

「正直驚いたぜ。こんな人材がFクラスに入ってくれるなんてな。五本勝負だから助かった」

「リュウを出すの!？」

「ああ」

「リュウはまだ召喚獣を使ったことがないのよ!！」

「だから心配無いつて言っただろう。劉真には島田とタッグを組んで戦ってもらおう」

「リュウとタッグ!？」

「美波・・・もしかして嫌か？」

「とんでもないわ!!大歓迎よ!!」

「イチヤイチャするのはあとにしてくれ。で、勝てるのか？」

「心配ないわ!!ねえ、リュウ!!」

「ああ、俺たちは・・・」

「「数学最強コンビだ!!」(よ!!)」「」

「そうか、なら頼んだぞ」

「え、リアクション薄くないか・・・」

「いや、リアクションとれって言われてもな・・・」

「リュウ、大丈夫よ。私がついてるわ」

「美波・・・」

「リュウ・・・」

やっぱり美波は良いやつだ!!

「勝手にしてくれ・・・期待してるからな」

帰り道

「あんなこと言っちゃまったけど大丈夫なのか？」

「心配しないで!!私が守ってあげるから!!」

「それは男としてどうなんかな・・・」

「ほら！！落ち込まないの！！」

俺は地面にorzになった

「そういえば、リュウってどこに住んでるの？」

「お、早速彼氏の家に乗り込むってか」

「ち、違うわよ！！ちよつと気になっただけ！！」

「なら教えなくてもいいのか？」

「もう！！いじわる！！」

「悪かった！！だから関節を極めないで！！」

「で、どこに住んでるの？」

やっとなんて解放された・・・

「最近できたマンションに一人暮らししてるんだ」

「最近できたマンションって・・・まさか!？」

「お前の家の近くだったりするんだなこれが」

「なんですってー!？」

「驚いたか？」

「何で連絡してくれなかったのよ!!」

「ビックリさせたかったんだ」

「もう・・・ノノ馬鹿・・・ノノ」

「上がっていくか？」

「ええ。そうさせてもらおうわ」

劉真の部屋

「案外広いわね」

「まあ、ファミリーマンションだからな」

「で、私を上げた理由は？」

「分かってんだろ？」

「そうね・・・」

「久しぶりだからな・・・」

「テーブルゲーム！！Let's play!!」

一時間後

「負けた・・・」

「やったー！！弱くなったわねえリュウ」

「忙しかったからな」

「もしかして、私に会うための話し合いで一年を費やしたとか？」

「・・・そうだよ・・・」

「え？」

「美波に会うためにこの一年必死だった！！」

「リュウ・・・」

「美波・・・」

俺は美波に顔を向けた。美波もこちらに顔を向けており、お互いの顔の距離は30cmもないだろう

「あのおとき以来かしら？」

「すること決定かよ」

「嫌なの？」

「そんなわけないだろ」

2人は一年ぶりに口づけをかわした・・・

俺と古典と試験結果（後書き）

次回からAクラス戦本番です!!

俺と召喚と初めての戦闘(前書き)

今回は短めです

俺と召喚と初めての戦闘

明久side

今日はAクラス戦当日だ

「勝てるかな・・・」

「あら、リュウにしては珍しく弱気ね」

「そりゃ、初めての試召戦争だから」

「大丈夫。ウチが付いてるから」

「そうだな、よろしく頼むぞ」

イチヤイチヤイチヤイチヤ

・・・異端者発見、これより異端審問会を・・・

「やめんか、ボケ」

「ああああ！！！僕の腕が次世代の形に!？」

「最高の戦力を潰そうとしてどうする」

「だって劉真がイチヤイチヤしてるのが許せなくて!!」

「」「」「許すまじ、神無月劉真・・・」「」「」

「止めるっての、あの二人は今日の試合でタッグを組んでもらう」とにした」

「え？劉真一人じゃないの？」

「バカか。劉真はまだ召喚獣を使ったことがないんだぞ」

「そういえばそうだったね」

「劉真の点数はどのくらいあるのじゃ？」

「まあ、見てなって」

「どれくらいかだけ教えてもらえませんか？」

「そうだな・・・古典と保健体育以外ならAクラス入り確実だな」
「そんなに高いの!？」
「・・・・・・・・劉真は勉強嫌い」

それでAクラスレベルの点数!?

「古典が悪いのは想像できるのじゃが、何故保健体育が悪いのじゃ？」

「それは僕も気になるな!!」

「・・・・・・・・昔、電話で保健体育の深いところまで説明してしまっ
た」

「それだけで？」

「・・・・・・・・劉真はウブな奴だから」

「「ああ・・・・・・・・」」

それなら納得できるね

「Fクラス対Aクラスの召喚獣対決を始めます。先鋒、前へ」

「「はい」」

こっちの先鋒は美波で相手の先鋒は秀吉の双子の姉の木下優子さんだ
ホントにそっくりだなあ

「教科はどうしますか？」

「数学のタッグ形式でお願いします」

「分かりました。では、ペアを決めてください」

「リュウー!!」

「ああ!!」

「優斗!!」

「おう!!」

「俺は神無月劉真。先日ドイツから来たんだよろしくな」

「俺は唐津優斗だ!!よろしくたのむぜ!!」

「それでは・・・始め!!」

数学

神無月劉真 420点

島田美波 360点

VS

木下優子 390点

唐津優斗 350点

「『『『『400点オーバー!?』』』』」

雄二の言ったとおりだ!!

「どうだ明久、最高の戦力だろ？」

「う、うん」

これなら勝てるかもしれない!!

俺と召喚と初めての戦闘(後書き)

次回は数学コンビがぼろっとうします

俺と美波とおしおきタイム（前書き）

お久しぶりです!!

いやー、とあるシリーズのほうに意識が向いちゃってましてねー
それでは、久しぶりのバカテス、スタート!!

俺と美波とおしおきタイム

劉真 side

『それでは、始め!』

「リュウ!!--まずは操作に慣れて!!--」

「オーケー!!--」

「させないわよ!!--」

後ろに下がろうとした俺の召喚獣に木下姉の召喚獣が迫ってくる

「リュウ!!--」

「アンタの相手は俺だぜ」

「く・・・女子に男子を当ててくるとはね・・・」

「俺も嫌なんだけどさあ、優子にどやされるのは嫌なんでね!!--」

唐津が美波を止めてるな・・・

「ぼーっとしてると、負けるわよ!!--」

「アンタも見逃してくれればいいのに!」

「素人でもあの点数は脅威なのよ!」

俺は木下姉の攻撃をトンファーで受け流しながら、後退していく

「何で、初めてのくせにこんなに操作が上手いわけ!？」

「なるほど、自分の感覚を共有するつもりでいけばいいのか」

「リュウ!腕輪を使ってみて!」

「でも、どんな能力かしらねえぞ!」

「ウチはアンタを信じてるから!」

「美波・・・」

お前は最高のパートナーだよ!!

『許すまじ、神無月劉真・・・』

「分かったから、後にしてくれ!」

今、異端審問会に拘束されたら、勝てねえ!!

「いくぜ!!俺の腕輪の能力を受けてみよ!!」

「!?!?」

俺が叫ぶと、召喚獣の腕輪が光りだした

「……これからどうすりゃいいんだ?」

『そりゃそつですよ!!』

「腕輪がどんなのか知りたいしな」

「劉真!!お前にこれを託そう」

雄二は俺に紙の束を投げつける

「これは……」

「お前の召喚獣のデータだ」

「何でお前が持っているのかとか何で今渡すのかとかいっつミッ」
「今は無しにしておいてやる」

「十分ツッコんでますけどね」

これでやっと戦える!!

「もう一度!!」『停止』!!

俺が叫ぶと腕輪が光り、相手の召喚獣の動きが止まった

「何!?この腕輪!?!」

「俺の腕輪は相手の召喚獣の動きを好きな時間だけ止めることができる腕輪だ!!」

『反則だろ!!』

「でも、点数は削られていくんだぞ」

「リュウ、それは何点ずつなの?」

「1点」

『お前、もう試合戦争に出るな!!』

「1秒に1点ずつ点数が減っていく、デメリットがあるのに」

『デメリットっていうほど負担が無い!!』

「リュウ!!アンタやっぱり最高だわ!!」

「美波！！今のうちにケリをつけるぞ！！」

「うわー！！こっち来るな！！」

「動いて！！お願い動いてよ！！」

俺たちは中央で固まっている憐れな子羊に歩み寄り

「「数学コンビなめんな！！」」

ポコポコにし始めた

「あははははは！！！！トンファアの味はどうですかあ？？」

「サーベルで切り刻んであげる！！」

「止めてくれ！！」

「こんなにあんまりよ！！」

はははは！！！！俺の力を思い知れ！！

.....
.....

.....

明久side

「雄二……」

「何だ？」

「あれ、僕だったら即死だよな」

「ある意味、学園で最強だろうな」

「劉真を見なよ！！もうキャラが崩壊しまくってるんだよ！？」

「あ、勝負がついたみたいだぞ」

数学

神無月劉真 300点

島田美波 260点

VS

木下優子 0点

唐津優斗 0点

「圧勝だね・・・」

「見るよ明久、木下姉が放心状態になってるぞ」

「何だつて!？」

相手のベンチでは唐津君に肩を揺さぶられている木下さんの姿があった

『優子!!しっかりしろ!!』

『ははは・・・召喚獣が動かない・・・』

『もう勝負は終わってる!!』

『ボクに任せて!!』

『工藤!!できるのか!?!』

『どんとこーいだよ!!』

『なあ、工藤。まさかそのスタンガンで?』

バチバチバチッ

『やりやがったああああ!!!!』

『ははは・・・ハッ!? 私は何を!?!』

『優子!!! 戻って来たか!?!』

『これがスタンガンの力さ!?!』

「劉真」

「何だ? 吉井」

「明久でいいって」

「じゃあ、アキでいいや。で、何だよ?」

「Aクラスに土下座してきて」

「土下座!? 何で突然!?!」

「あの光景を見てまだそんなことが言えるのか!?!」

「・・・さすがにやりすぎだな、分かった逝ってくる」

「リュウ!!! ウチも逝くわ!!!」

「何か、文字が違う気がするんだけど」

2人はAクラスの方へ行き

『すまなかつたな、唐津』

『ウチ等やりすぎたわ』

『いいんだ。これが戦争だからな』

『次は負けないわよ!!』

『おい!! 誰か優子を抑えててくれ!!』

「神のごとき強さだったよね」

「次はムツツリーニだ、頼むぞ」

「え? この雰囲気で次いくの!？」

「……まかせておけ」

「もついいや」

ツッコんでも止まらないしね!!

余談だけど、この後、劉真の腕輪が一回の使用につき1000点消費するように改造されたのはいうまでもないよね

俺と美波とおしおきタイム（後書き）

劉真の腕輪はチートです。

取扱いには十分お気を付けください

エロと愛子と保健体育（前書き）

お久しぶりです!!

こっちのほうはあまり更新できてませんね・・・すみません

エロと愛子と保健体育

劉真 side

高橋「それでは、二人目、前へ」

俺が一本目を制し、勝負は二本目に差し掛かろうとしていた
Aクラスの二人目はメガネ少女の佐藤美穂だ。(さつき美波から教
えてもらった)

いかにも、真面目そうな人だな・・・

雄二「よし、明久、逝って来い」

明久「何か文字が違う気がするんだけど・・・」

それは気のせいではなく本当だと思う。

どうやら、雄二はアキが勝つとは思ってないようだ

雄二「大丈夫だ、俺を信じろ」

明久「今までの自分をもう一度見つめなおしてみろ!!」

雄二は今まで、アキにどう接してきたんだろうか・・・

そして、アキと佐藤がフィールドに入っていく

雄二「明久!! そろそろ本当のお前を見せてやってもいいんじゃない
いか?」

明久「ふう・・・。やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

アキの実力は知らねえが、あれは絶対ハツタリだと思う

佐藤「吉井君、でしたか？あなた、まさか・・・」

佐藤が大げさにポーズをとりながら、驚いている
ホント、この学校の人はノリがいいよな・・・

明久「あれ？気づいた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出し
ちゃあいない」

アキは戦闘のために袖をまくり、手首を振る。軽い準備体操をして
いるのだろう。

佐藤「それじゃ、あなたは・・・！！」

明久「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は
僕ー」

アキは大きく息を吸い込み、この場にいる皆に告げた

明久「・・・左利きなんだ」

物理

Aクラス 佐藤美穂 389点

VS

Fクラス 吉井明久 62点

勝負は一瞬でついた。あのバカ・・・やりやがった・・・

美波「このバカ!!! テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが!!!」

明久「み、美波!!! フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して!!!」

ふう・・・ちょっと助けてやるか

劉真「美波、それぐらいで止めとけ」

アキの爪を剥ごうとしていた美波を止める

美波「リュウが言うなら・・・」

明久「劉真、ありがとう。あのままじゃ爪なしになるところだったよ」

劉真「気にすんな」

俺は懐からトンファーを取り出し、腕に装着する肩を回し、軽い準備体操。

そして、トンファーを構えて、アキに告げた

劉真「・・・次は俺の番だ」

明久「危険度が増した!?!」

愚か者には罰を与えなきゃな!!!

高橋『それでは、三人目の方どうぞ』

康太「・・・(スック)」

康太が立ち上がる

ここでも、教科選択権が活きてくるな
なぜなら、康太は保健体育で総合得点の80%を取っているからだ
(これも美波に聞いた)

愛子「じゃ、ボクがいこうかな」

Aクラスからはボーイッシュな女子が出てきた
さきほど、木下姉をスタンガンで甦らせた工藤というやつだ

愛子「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

ぱっと見は美少年のようだな。

高橋「教科は何にしますか？」

康太「………保健体育」

やっぱり、保健体育で勝負するようだ。というか、保健体育でしか
勝負できないのが現実だ

愛子「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が康太に話しかける。多分だが、康太の実力を知らないのだろう

愛子「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？………君と違っ
て、実技で、ね」

何だと！？学校の授業に実技なんてあったのか！？

美波「多分、アンタが考えてることじゃないと思うんだけど……」

美波が俺を見て呆れたような視線を向けてくる
何で、俺が考えてることがわかったんだろ？

愛子「そっちの君たち。吉井君と神無月君だっけ？吉井君は勉強苦手そうだし、神無月君はウブそうだから勉強教えてあげようか？もちろん実技で」

明&劉「フツ。望むところー」

姫路「明久君にはそんな機会は一生来ないから、保健体育の勉強なんて必要ないです！！」

美波「リュウ！！何、相手に乗せられてんのよ！！」

しまった！！つい、口が滑っちゃまった！！

明久「……………」

雄二「姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

アキ、お前にもそんな機会が来るさ……来世で

明久「何でだろ？何か今物凄く、劉真を殴りたくなっただけど」

劉真「気のせいじゃないか！？」

ついに地の文を読み取るようになりやがったか！！

高橋『そろそろ召喚を開始してください』

業を煮やした高橋教諭が二人に告げる

愛子「はい。試獣召喚つと」

康太「……………試獣召喚」

2人に似た召喚獣が、それぞれ武器を持って出現する。

康太は忍者装束に小太刀の二刀流。工藤は……ってなんじゃありや！？

劉真「何だあの巨大な斧は！？」

すべてのものを一撃で粉碎できそうな巨大な斧。
おまけに腕輪までしてやがる

愛子「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまとわせ、目にも止まらぬスピードで康太の召喚獣に詰め寄る

明久「ムツツリーニ！！」

アキが康太の名を切迫しながら叫ぶ
だが、俺には分かっていた

康太「………加速」

康太がこれくらいじゃ負けないってことぐらい

康太の腕輪が輝き、召喚獣の姿がブレた。

愛子「……え？」

工藤は状況がつかめていないようだ。

康太「……………加速、終了」

ボソリと、康太が呟く。

一呼吸おいて、工藤の召喚獣が血を吹き出して倒れた結構、グロテスクだな、オイ。

保健体育

Aクラス 工藤愛子 446点

VS

Fクラス 土屋康太 572点

いや、勝つとは思ったけど、何だよあの点数……

雄二「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

Bクラス戦のときの点数は知らないが、流石としか言いようがない

愛子「そ、そんな……！このボクが……！」

工藤が床に膝をつく。相当ショックだったのだろう。
すると、康太が工藤に駆け寄った

康太「……………工藤愛子」

愛子「何？もう勝負は終わっちゃったんだから、早く戻らないと」

康太「……………良い勝負だった」

愛子「!？」

あいつらしいな

康太「……………いつでも、勝負は受けてやる。だから……………」

愛子「だから？」

康太は顔を真っ赤にして、明後日の方向を見ながら言った

康太「……………俺に勝つまで誰にも負けるな」

愛子「え!？あ……………うん／＼／」

これはフラグが立ったっていうんじゃないか!？

Aクラス戦三本目はFクラスの勝利だ

エロと愛子と保健体育（後書き）

では、亀更新になると思いますが、今後もよろしくお願いします！

僕とメガネとクライスト（前書き）

「クライストと呼んでください」

B y 竹山

僕とメガネとクライスト

劉真 side

康太が少年漫画の主人公ばりの恥ずかしいセリフで工藤を落とした。

それは俺には信じられない光景だったんだ。康太が、あの人見知り康太が人に、それも女子にあんなことまで言えるようになってたなんて……お兄ちゃん、嬉しい！！

美波「いや、アンタは土屋の兄じゃないから」

明久「劉真って時々おかしくなるんだね……」

雄二「外見だけならクールなのにな」

美波「でも、そこがカッコいいでしょ？」

明久「そうだね。恨めしいほどに……」

雄二「分かったからその蠟燭と縄を片付ける」

劉真「待て！！何で蠟燭と縄を常備してんだよ！！」

明久「え？常識じゃない？」

劉真「どこのだ！！」

明久「須川くんとか…横溝君とか…」

それは、異端審問会だけの常識って言うんだよ！！

高橋「次、どうぞ」

久保「僕が行こう」

Aクラスからはメガネの優等生久保利光（美波に聞いた）が出るようだ。

雄二「姫路、頼むぞ」

姫路「ハイ！！頑張ります！！」

お。こっちは姫路か。頂上決戦ってわけかな。

明久「大丈夫なの？姫路さん」

アキは姫路の何を心配しているのだろう。お前が心配するよつな成績じゃないのに

姫路「大丈夫です！！」

明久「そう。じゃあ、頑張ってね！！」

明久の一言で姫路の表情が子供の様に明るくなる。

姫路「はい！！」

高橋「教科は何にしますか？」

久保「総合科目で」

明久「な！？そんな勝手に「いいんです！！」姫路さん……」

姫路「私、頑張りますから！！」

姫&久「試獣召喚！！」

2人の足元と目の前に幾何学模様の魔法陣が浮き上がり、2人をデフォルメしたような召喚獣が登場する。

総合科目

Fクラス 姫路瑞希 4403点

VS

Aクラス 久保利光 4402点

「「「「「1点差!?!?!?!?!」」」」」

ほぼ互角ってわけか…

久保「僕も負けるわけにはいかなくてね!?!」

姫路「それは、こつちも同じです!?!」

姫路の召喚獣がグレイエーターを久保の召喚獣に叩き付ける。
しかし、剣が巨大すぎるせいで久保の素早い動きに追いつけない。

姫路「この!?!この!?!」

久保「そろそろ終わらせようか!?!」

久保の召喚獣の腕輪が光ると同時に久保の召喚獣の姿が消える。

姫路「な…!?!」

久保「僕の腕輪は『瞬間移動』。持ち点の2000点を消費する技だから、総合科目でしか使えないのだけどね!?!」

ザシユウ！！

姫路の召喚獣の首が久保の召喚獣の鎌に刈り取られる。

総合科目

Fクラス 姫路瑞希 0点

VS

Aクラス 久保利光 2202点

明久「姫路さんが負けた…！？」

雄二「予想外だな。もう後がねえ」

雄二は冷静そうにしているが顔には大量の汗が浮かんでいる。

劉真「面白くなってきた…！」

美波「次で最後なの？」

劉真「はあ！？ウソだろ！？」

美波「嘘じゃないわよ…！てか、何で知らないのよ…！」

劉真「だって、秀吉がまだ出てない」

秀吉「ワシは今回は出らんぞ？」

そおんなあバカなああああああああああああああ…！！

美波「うるさい」

劉真「ゲブオ…！」

美波にストマックブローを決められ、意識を失う俺。

秀吉「よ、容赦ないのう……」

美波「昔からだからいいのよ」

2人の会話が聞こえた気がした……

僕とメガネとクライスト（後書き）

「何で竹山が!？」

B y 神無月劉真

俺と雄「ととよなら自由」前書き

「あばよお

ーっっあーんーっ」

B Y 神無月劉真

俺と雄二とさよなら自由

劉真「ついに、最後か…」

俺は感慨深く呟く。面白いことが終わる。それはとても、悲しいことだ。

雄二「じゃあ、行ってくる」

雄二が中央に歩いていく。今の雄二の顔、死ぬ前の兵士みたいだったが、大丈夫かな？

明久「雄二…！！負けたら承知しないよ！！」

雄二「おう！！分かってらあ！！」

アキが雄二にエールを送っている。自分が負けてしまったので応援は真面目にするそうだ。

Aクラスからは、学年主席の霧島翔子（美波に聞いた）が出てきた。

高橋「教科は何にしますか？」

雄二「教科は歴史でレベルは小学生の上限アリだ！！」

ザワ…

雄二の言葉に周囲のやつらが騒々しくなる。

『上限アリだと…！？』

『一問でも間違えたら即アウトだぞ…』
『注意力の勝負になるな…』

高橋『分かりました。それでは問題を作ってきますのでしばらくお待ちください』

そう告げて職員室に戻る高橋女史。

明久「雄二…」

雄二「大丈夫だ。俺を信じろ」

劉真「今までの自分を振り返ってからその言葉を言えよ…」

秀吉「頑張るのじゃぞ」

雄二「ああ」

美波「負けたら承知しないわよ!!」

雄二「分かってるさ」

康太「……」

雄二「ムツツリーニ、お前には助けられたな」

康太「……（グッ）」

瑞希「頑張ってください!!」

雄二「ああ、任せろ」

高橋『では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かつて下さい』

テストを作り終え、戻ってきた高橋先生が雄二たち2人に声をかける。

翔子「……はい」

霧島は短く返事すると、教室を出て視聴覚室に向かった。

雄二「んじゃ、俺も行ってくるか」

瑞希「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

姫路に送り出され、雄二も最後の戦いの戦場に向かう。

これで、戦いが終わる。

劉真「そういえば、何で雄二はこの戦いを選んだんだ？」

明久「霧島さんが絶対に間違える問題が出る可能性があるからだつて」

劉真「小学生レベルでかよ…」

俺が自分の疑問を解決していると、中央のディスプレイにテストの問題が映し出された。

<次の()に正しい年号を記入しなさい>

()年 平城京に遷都

()年 平安京に遷都

俺は帰国子女だから分かんねえけど、これが小学生のレベルの問題なのか…

() 鎌倉幕府成立

そして…

()年 大化の改新

明久「あ……！」

明久が思わず声を漏らす。どうやらこれが雄二の言っていた問題のようだな。

瑞希「よ、吉井君っ!!」

明久「うん」

瑞希「これで、私たちっ……!!」

明久「うん!!これで僕らの卓袱台が」

「「「「システムデスクに!!」「「「「

Fクラスの歓喜の声が揃う。

明久「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ!!」

「「「「うおおおっ!!」「「「「

教室を揺るがすような歓喜の声。

しかし、俺は嫌な予感がしていた。本当にこのまま勝利で終われるのか……!?

そして、ディスプレイに2人の特典が映し出された。

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

Aクラス 桐島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

転入早々、俺のクラスの卓袱台はみかん箱になった。

高橋「3対2でAクラスの勝利です」

視聴覚室に雪崩れ込んだ俺たちを出迎えたのは、高橋先生の冷静な一言だった。

翔子「……雄二、私の勝ち」

床に膝をついている雄二に霧島が歩み寄る。

雄二「……殺せ」

明久「いい覚悟だ、殺してやる！！歯を食いしばれ！！」

瑞希「吉井君、落ち着いてください！！」

姫路がアキを後ろから羽交い絞めにする。

明久「だいたい、53点ってなんだよ!!0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと」
雄二「いかにも俺の全力だ」

雄二の顔が曇る。そこにはもう神童の面影など微塵も感じられなかった。

明久「この阿呆があーっ!!」

美波「アキ、落ち着きなさい!!アンタだったら30点も取れないでしょうが!!」

明久「それについては否定しない!!」

瑞希「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ!!」

明久「くっ!!何故止めるんだ姫路さんに美波!!この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに!!」

瑞希「それって体罰じゃなくて処刑です!!」

姫路が体を張ってアキを止める。フウ…俺の出番か…。

劉真「そうだぞアキ」

明久「劉真まで!!」

俺は雄二の傍まで歩き、懐からトンファーを取り出した。

劉真「喉笛を引き裂くぐらいで終わらせるわけにはいかない」

瑞希「神無月君まで!?!」

美波「コラ!!リュウ!!止めなさい!!」

美波が俺を羽交い絞めにする。くっ!!なんてパワーだ!!

劉真「離せ美波！！俺にはやらなくちゃならないことがあるんだ！！」

美波「アンタは坂本を殺す気でしようが！！」

劉真「大丈夫だ。ちよっと三途の川までピクニックしてもらっただけだから」

美波「それが殺人だっけってんのよ

！！」

美波が俺にサブミッションを決める。

劉真「ギャア

！！」

くっ。美波の優しさに感謝するんだな。俺は渋々トンファアを懐に入れる。

美波「いつも持ち歩いてるの？それ……」

美波がジト目でこちらを見る。

劉真「自衛用だ」

美波「そう……」

何だ？今、美波が俺を可哀相なものを見るような目で見てきたんだが……気のせいかな？

翔子「……でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断してなければ負けてた」

雄二「言い訳はしねえ」

雄二は男らしく見えるが、凶星である。

翔子「……ところで、約束」

康太「……………！！（カチャカチャカチャカチャ！！）」

康太がスゴイスピードで撮影の準備をしていた。

アキもなぜか手伝ってるし……

雄二「分かっている。何でも言え」

翔子「……それじゃ」

霧島が姫路に一度視線を送り、雄二に再び視線を戻す。

翔子「……雄二、私と付き合って」

霧島が超ド級の爆弾を投下した。

雄二「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

翔子「私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

なるほど、だからあんな約束をしていたのか。

劉真「ブラボー。2人ともお幸せに（パチパチパチパチ）」

翔子「……神無月、ありがとう」

雄二「テメエ、状況をしらねえからって……」

状況？これで、2人は恋人同士に

翔子「だから、今からデートに行く」

雄二「ぐあつ！！離せ！！やっぱりこの約束はなかったことに

」

霧島が雄二の首根っこを掴んで、視聴覚室を出ていくのを俺たちは黙って茫然と見つめていた。

西村「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

俺たちが呆然としてしていると、後ろから俺たちの耳に野太い声がかかる。

明久「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

西村「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っとなって神無月！！」

俺は逃げたんじゃない。自由の為に走り去っただけだ。

劉真「あばよお ！とつつぁーん！！」

西村「お前と吉井と坂本は念入りに指導してやるからなあ

！！！」

俺は西村先生の声を背中に浴びながら、家へと帰還した。

俺と雄「とさよなら自由」後書き

「親友会をしようよ!」

B y 吉井明久

僕と秘密とスタンガン（前書き）

「そこを、開けるなあ

！！」

B Y 神無月劉真

僕と秘密とスタンガン

Aクラス戦によって、もはや教室と呼べるかどうか微妙な線なFクラスを見て、今後の学園生活が心配になってきた今日この頃。

と、そんなことをしている場合じゃなかった。

今、俺たちは屋上にいる。

俺たちというのは、俺・美波・康太・アキ・秀吉・姫路・雄二の7人だ。

雄二「明久、何の用だ？」

そう。俺たちを呼び出したのは、アキだ。

雄二の顔には深いクマができていたが、あれにはツッコまない方がよさそうだ。

70

明久「今度さ、皆で親友会をしない？」

康太「……………明久、それを言うなら親睦会」

相変わらず、アキの頭はお花畑だ。

明久「そうそう親睦会親睦会」

秀吉「しかし、親睦会なんて今更ではないかのう？」

明久「そうだね。でも、僕たちは劉真の事をあまり知らないよね」

そういうことか。

つまり、アキは俺と親睦を深めたいって訳か……

劉真「アキ、俺はノーマルだ」

明久「何でこのタイミングでそんなことを言うの！？僕だってノーマルだよ！！って何で皆一歩後ろに下がるの！？こっちによって！僕たち友達でしょ！？」

雄二「スマン、縁を切ってもいいか？」

明久「だから、誤解だつてえ

！！」

劉真「落ち着いたか？」

アキが天に向かって咆哮してからしばらくして俺はアキに声をかけた。

明久「うん。でも、劉真のせいだよな？」

雄二「で、どこで親睦会をするんだ？」

明久「無視しないでよ！！うん…劉真の家じゃダメかな？」

劉&美「「え」……………」

俺と美波はアキの発言に固まってしまった…

劉真 side out

明久 side in

僕の言葉に劉真と美波が真底嫌そうな顔をした。どうしたんだろう？

雄二「どうした劉真？家に何か見られてはいけないものでもあるのか？」

劉真「そ、そそそそそそんなことないじゃないか！！な、なあ美波！！！」

美波「そそそそそそそうね！！別に何も無いわよ！？ねえ、リュウ！！！」

「……………」

僕たちは黙って2人を見る。

怪しい、怪しすぎる。2人ともあさつての方向を向いて口笛まで吹いている。

雄二「じゃあ、会場は劉真の家で決定だな（ニヤリ）」

雄二が悪そうな顔で告げる。

劉真「そんな！？あんまりだ！！！」

美波「そうよ！！家主の許可なくなんて！！」

それでも、食い下がる2人。しょうがないあの手を使うか…

明久「（ムツツリーニ、2人にあの写真を）」

康太「（……………了解）」

ムツツリーニが劉真と美波にある1枚の写真を見せる。

それは、2人が屋上でキスしている写真だった。

明久「これをばら撒かれなくなかったら、家の使用許可を出すんだ！！」

劉真「く！！何でこんな写真が！！」

瑞希「何が映ってるんですか？」

美波「駄目よ瑞希！！あなたには早すぎるわ！！ていうか見ないで！！」

康太「……………俺の行動範囲を舐めるな」

劉真「康太！！テメエ、親友を見捨てたな！！」

康太「……………これも劉真が皆と仲良くしてもらったため」

美波「土屋…………」

劉真「それなら康太。そのポケットから覗いている札束は何だ？」

康太「……………ハンカチ」

劉真「嘘つけ！！お前絶対商売しただろうが！！」

雄二「いつまでもぐちぐち言ってるな」

美波「でも坂本！！この写真は！！」

雄二「大丈夫だ。絶対にばら撒いたりなんかしねえさ。お前らが家の使用許可を出せばな」

流石雄二、これで2人は使用許可を出さないといけなくなっただね。

劉真「…分かった」

雄二「よし。じゃあ親睦会は今日行おうぜ」

美波「そんな！あんまりよ！！」

雄二「部屋の片づけなんてさせるわけにはいかねえからな」

秀吉「ナイスじゃ雄二！！」

劉真「秀吉！？お前だけは味方だと思ってたのに！！」

秀吉「スマ又劉真。しかし、ワシも劉真と島田の秘密が知りたいのじゃ」

劉真「この薄情もの！！」

明久「じゃあ、今日の放課後校門に集合しようよ」

「「「了解」」」

劉真「嫌だ！！俺はもう帰るぞ！！」

ムツツリー二に劉真が羽交い絞めにされてた気がするけど、気のせいだよ！！

僕たちはその場を後にした。

劉真「で、だ」

放課後、僕たちが校門に集まると劉真が額に青筋を浮かべて言った。

劉真「何で霧島と木下姉と工藤と唐津がいるんだ!!」

そう。校門に集まっていたのは僕たちだけじゃなくてAクラスの霧島さんたちも集まっていたんだ。

翔子「……夫の傍にいるのは妻の役目」

雄二「俺はまだ認めてないからな!!」

愛子「ボクは代表に呼ばれたんだけど……」

優子「愛子は土屋君がいるからよ。アタシは優斗が行くって言ったから」

愛子「ちょっと優子!?!」

劉真「オイ唐津。どういうことだ?」

うわあ!!劉真の額の青筋から血が噴き出してる!!

優斗「まず血を止めるよ。俺は霧島に誘われただけだぜ?」

翔子「……人は多い方が楽しいから」

美波「ウチ達の秘密があ……」

劉真「諦めようぜ美波。俺たちはそついう運命なんだ……」

まずい。このままじゃ2人の家に行く前に計画が破綻してしまうかもしれない。

秀吉「では、行くとするかのう」

雄二「そうだな」

康太「……………劉真の家はこっち」

瑞希「何で土屋君が神無月君の家の場所を知ってるんですか？」

康太「……………親友の家の場所を調べるくらい朝飯前」

劉真「お前とは一度話をした方がいいな」

雄二「いいから早く行こうぜ」

美波「そんなあ……………」

嫌がる2人を引っ張って僕らは劉真の家に向かった。

劉真の家の中を見た途端に僕らは言葉を失った。

優子「マンションの中なのに、広さがおかしいわよ……」

木下さんの言う通りだ。

劉真の家はマンションの6階にある。で、部屋の広さと数が桁違いだった。

愛子「どこの豪邸……?」

劉真「いや、俺の家ってちよつと特殊だから……」

明久「特殊って?」

僕がそう言つと劉真と美波とムツツリーニが顔を引き攣らせる。

美波「いや、その……」

康太「……劉真の親の職業は……」

優斗「何だよ、早く教えろよー」

美波とムツツリーニが言葉を濁らせると、唐津君が3人を急かした。

劉真「……俺の親の職業は石油王だ」

「「「「「石油王!」」「「「「「「」」

それって職業なの!? 石油王って職業なの!?

雄二「お、驚いたな……」

瑞希「せ、石油王ですか……」

劉真の言葉に皆が呆然とする。当然だよな。僕だって言葉が出ないもん。

秀吉「それはそうとしてじゃ。2人の秘密を探さぬかの？」
優斗「そうだよなあ。やっぱりそれをしなくちゃ始まらねえよな！」

流石だねこの2人は。あの衝撃の言葉を聞いても尚、劉真と美波の秘密を知ろうというのだから。

雄二「それじゃ、手分けして家を検索しよう」

明久「それはいい考えだね」

劉真「お前らそれ犯罪だからな」

優斗「大丈夫だ。友人の家だからな」

劉真「それは理由になつてねえよ!!」

劉真の講義を右から左へ受け流す。

雄二「それじゃ行こうぜ」

雄二が霧島さんを引き連れて劉真の家に入っていく。

劉真「んー!!んー!!」

美波「むー!!むーむー!!」

あまりにも反抗したため、劉真と美波はお互いに抱き着きあった状態で縄で縛った。

明久「あはは。大丈夫だよ2人とも。僕たちはただ2人の秘密を知りたいだけだからさ」

劉真「んんんんんー!!（ふざけんなー!!）」

美波「むむむむむー!!（あんまりよー!!）」

明久「あはは、聞こえないね。それじゃ行くところか皆」
秀吉「お主、案外鬼畜じゃな……」

僕は皆を連れて部屋に入っただった。

優子「それにしても片付いてるよねこの家」

優子「そうね、男子の家とは思えないわ」

瑞希「几帳面なんですね」

康太「……………劉真は島田に殴られるからだって」

優斗「アイツも苦労してんだなあ……」

明久「そうだね、やっぱり劉真らしいや」

僕が何気なく近くの部屋の扉を開くと衝撃の光景が目に入った。

劉真「ん

！！！」

劉真の必死の叫び声が耳にかかる。でも、僕の目は部屋に釘付けになっていた。

雄二「どうしたんだ明久

」

秀吉「何固まっておるのじゃ

」

優斗「ん？どうしたんだ俺にも見せてみ

」

康太「

！？（ヒョイ）」

僕以外の男性陣も部屋の中を見るなり言葉を失う。

瑞希「どうしたんですか？」

愛子「ボクたちにも見せてよー」

翔子「……男子で見えない」

優子「ちよつと退いてよ！！」

後ろで女性陣が講義に声を上げている。しかし、この部屋を女性陣に見せるわけにはいかないと思う。

僕は玄関で縛られている劉真と美波を見た。

劉&美「」（ウルウルウルウルウル）」

2人とも目が涙目だ。そんなにこの部屋が見られなくなかったんだろつ。

今ならその気持ち痛いほど分かる気がした。

なぜなら、

「「「「「何でマンションの中に拷問部屋があるんだろう……」」」」

手錠や鞭。その他にも未成年にはよろしくないものが所せましと並べられている。

パタン

僕たちは静かに扉を閉めた。ここはもう開いてはいけない。そんな気がしたからだ。

瑞希「吉井君。何でそんなに悲しそうな顔をしているんですか？私たちにも見せてくださいっ」

明久「駄目だ姫路さん！！この部屋を開けると、姫路さんたちの心と劉真と美波の社会的地位が光の速さで崩壊してしまうんだ！！」

翔子「……雄二、どいて」

雄二「嫌だ！！俺は劉真という親友の為にここをどくわけにはいかねえ！！」

優子「優斗？アタシどいてほしいなあ」

優斗「優子、ごめんけど今回は言うことを聞けない」

愛子「土屋君。ちよっと退いてくれるかな？」

康太「……………俺は壁」

拷問部屋の扉を必死に守る僕たち男子。
守るんだ！！劉真のために！！美波のために！！

翔子「……仕方ない。強攻策をとる」

そう言うと霧島さんはバッグからスタンガンを取り出した。

愛&優「「えい！！」」

工藤さんと木下さんが僕らに水をかける。

明久「ははは。霧島さんまさかとは思うけど、そのスタンガンをもど
うするのかな？」

翔子「……吉井は良い子」

明久「嫌だ！！こんなところでくたばるわけには

バチッ！！

「「「「「ギヤアアアアアアアアアア！！」」」」」

僕たちは霧島さんのスタンガンによって意識を刈り取られた。

僕と秘密とスタンガン（後書き）

「もういやあ

！！」

B Y 島田美波

俺と料理と初体験（前書き）

「年齢制限大丈夫かな……」

B y 神無月劉真

俺と料理と初体験

明久「ん？ここは…？」

霧島さんの電気攻撃スタンガンによって、意識を失ってしまった僕たちは知らない天井を見上げていた。

美波「リュウの家のリビングよ」

明久「美波…さつきはごめんね」

美波「もういいわよ。でも…」

美波が顔を曇らせる。

明久「どうしたの美波？」

美波「霧島さんや瑞希たちに使用許可を出してしまったの」

最悪だ。僕たちの人権が著しく侵害されている。

明久「何で！？何で僕たちがそんな目に!？」

美波「リュウが…リュウがああ部屋で瑞希たちに」

美波は最後まで言わずに床に膝から崩れ落ちる。

雄二「島田…」

美波「リュウの体に蝟燭が鞭が…」

秀吉「もう分かったのじゃ。あそこを開けてしまったワシらが悪かったのじゃ…」

美波「ウチは瑞希たちにどっちがSでどっちがMなのか聴かれて…」

……」
優斗「その質問には答えなくていいと思うぞ」

唐津君の言うとおりだ。それに答えてしまうと2人の社会的地位が今度こそ崩壊してしまうだろう。

康太「……………そういえば、劉真は？」

美波「あっち」

顔を両手で抑えていた美波がとある部屋を指差す。

雄二「あの部屋には何があるんだ？」

美波「自分の目で見てきて。ウチはもうあんなリユウを見たくない

」

そんなにヤバイ部屋なのだろうか。あの部屋は。

康太「……………行くぞ」

雄二「ああ」

秀吉「親友を助けるのじゃ」

優斗「男の友情ってやつだな」

例の部屋のドアの前に立つ僕ら。

キィィィ

ムツツリーニがゆっくりとドアを開く。

明久「劉真

！？」

そこには

女装させられた劉真が手かせをはめられていた。

瑞希『次はどの服が良いですか？』

劉真『どれも嫌だ！！女装なんてしたくない！！』

翔子『……着ないと、あの部屋の事をばらす』

劉真『お前らは悪魔か！？』

優子『女装した美少年……！！萌えるわ……』

愛子『ははは……皆、ちよっと落ち着こうよ。ね？』

「「「「「「……」」」」」

パタン

僕は静かにドアを閉める。

明久「今僕らは何か見た？」

「「「「いいや。別に何も見ていない」「」「」

明久「じゃあ、今からの僕らの行動は？」

「「「「親睦会のための料理を作ること」「」「」

明久「じゃあ、行こうか」

「「「「応」」」」

劉真『美波

！！助けて

！！』

目の前のドアの向こうから親友の悲鳴が聞こえた気がした。

明久「劉真……君のことは忘れないよ……」

雄二「アイツは良いやつだった……」

康太「……安らかに眠れ。友よ」

秀吉「人間一度ぐらいは女装するものじゃ……」

優斗「俺たちは大切な友を失った……」

僕たちは涙を流しながら、その場を後にした。

劉真 side in

劉真「酷い目にあつた……」

女性陣に弄ばれた俺は解放された後に、リビングのソファで頂垂れ
ていた。

明久「おつかれ、劉真」

劉真「ああ、アキか。あやうく男としての尊厳を失うところだった
ぜ……」

秀吉「それは悲惨じゃったのう」

アキと秀吉が俺を慰める。うう…俺は良い友人を持ったよ……

明久「（まさか見捨てましたなんて言えるわけないよね…）」

秀吉「（そうじゃな。ワシたちが恨まれることになりかねん）」

劉真「どうしたんだ？2人で耳打ちなんてして」

明久「な、なんでもないよ。それより、美波のところに行つて来た
ら？」

美波か……。今はアイツが恋しいよ。

劉真「そうだな。行つてくる」

明久「その間に僕たちは料理を作っておくから」

劉真「ああ。よろしく」

明久たちの厚意に甘えておくとしますか。

俺は美波の部屋（何故か、美波が作っていた）に向かった。

コンコン

劉真「美波ー、入るぞー」

俺は返事を待たずに中に入る。

劉真「まったくひどい目にあっただぜ
」

俺はその時、何故返事を待たなかったのか心底、後悔した。
なぜならそこには

下着を急いで着けようとしている美波の姿があったからだ。

美波「……………」

汗をかいたのか綺麗な柔肌には玉のような粒が見て取れる。
美波の胸が見えてはいけなるところまで露わになっている。
その他にも男子は絶対に見てはいけなるところまでが俺の目の前には広がっていた。

劉真「す、すまん！！出ていくから　　「ま、待って！！」

「！！」

俺が部屋を後にしようとするのと美波が俺の腕を掴んだ。

美波「一緒にいて……………」

美波が後ろから抱き着いてくる。

胸が！！背中にも美波の胸が当たってる……………！！？

美波「ウチ、もう我慢できないの……」

美波が俺の顔を自分に向かせる形に動かす。
お互いの距離がほぼ0に近い。

劉真「美波……!?!」

美波「ウチ、もう……」

劉真「でも、部屋の外には皆が……」

美波「もうメールしたわ。一時間は部屋に来ないように警告してる」

劉真「じゅ、準備が良いな……」

美波の顔が火照っているように見える。

劉真「後悔しないな？」

美波「リュウが望むなら……」

そして俺たちは肌を重ねた。

明久「あ、おかえり。随分と遅かったね」

俺たちがリビングに戻るとテーブルに数々の料理が所狭しと並べられていた。

劉真「おお、スゲエな。でも、こんな遅くまで居ても大丈夫なのか？」

雄二「俺たち男子は日曜日まで泊まる予定だ」

翔子「……私たちも同じ」

劉真「まあ、部屋は余るほどあるからいいけどさ」

愛子「あの部屋を作るくらいだもんね」

劉&美「」

ツ！？／／／／／

工藤め「あとで覚えているよ……」

秀吉「それより早く夕飯にせぬかの？ワシ、もう我慢できんのじゃ」

劉真「が、我慢できない!？」

さきほどのことがあったせいでこの言葉に引っかかってしまう。

秀吉「？お腹が空きすぎているという意味なのじゃが……」

劉真「そ、そうだよな!!あはは、あはははは……」

みんながジト目でこちらを見てくる。まずい、あれは気づいているんだ。

優斗「いいから、早く食べようぜ」

唐津が助け舟を出す。お前は最高の友人だよ……

劉真「か、唐津の言うとおりだ！…さつさと食べよう！…」

優斗「あ。俺の事は優斗でいいから」

劉真「そ、そうか？分かった…じゃあ」

「……………いただきます！」「……………」

まずは目の前にあるパエリアを口に運ぶ。

劉真「うまいな、これ。誰が作ったんだ？」

明久「それは僕だよ」

雄二「明久は料理が上手いことだけが取り柄だからな」

明久「大きなお世話だよ。そっちのグラタンは雄二が作ったんだよ」

劉真「へえ……うん。美味しいな」

雄二「そう言ってくれると悪い気はしないな。あ、そのエビチリはムツツリーニが作ったんだ」

劉真「康太は料理が上手いらしいからなあ……美味しい！！流石、康太だな！！」

康太「……………こんなの朝飯前」

劉真「うん。これも美味しいな」

優子「それはアタシと愛子が作ったのよ」

愛子「初めてだったから自信はないけどね……ねえ、土屋君、どうかな……」

康太「（パクツ）……………悪くない／／／／」

愛子「はは、そう言ってくれると嬉しいよ／／／／」

優子「あゝ愛子ってば照れてる」

愛子「も、もう！！優子！！」

劉真「おお！！このパフェは美波だな！！」

美波「よく分かったわね。こっちに来てからまだ一度も作ってあげてないのに」

劉真「昔の味のままでったからな」

美波「覚えててくれたんだ…」

劉真「当たり前だろ。お前の料理の味を忘れるわけがないだろう」

美波「　　ッ！！」

瑞希「ラブラブですね、2人とも。あ、神無月君。これも食べてみてください」

劉真「これは姫路が作ったのか？」

瑞希「はい！！」

劉真「じゃあ、いただくよ」

俺は姫路が持っている皿から卵焼きを取る。

明久「あ！！その料理は！！」

秀吉「待つのがじゃ劉真！！」

雄二「それを食べては　　！！」

パクッ

「　　」ああ　　！！　　」

劉真「どうしたんだ？4人ともそんな顔して」

明久「りゅ、劉真はその料理平気なの？」

劉真「ん？そうだなあ…中はベチャベチャ外はベチャベチャ甘すぎず辛すぎる味わいが……ンゴバツ！！」

な、何だ！？この味は！？し、舌が！！舌が溶ける！！違う意味で！！

あ……なんだか意識が遠のいて……

雄二「明久！！劉真を部屋に運ぶぞ！！」

明久「うん！！美波、劉真の部屋は！？」

美波「こ、こつちよ！！」

あはは……あんなところに綺麗なお花畑があ……

俺はそれから1時間の間、三途の川を往復するという奇跡の体験をした。

俺と料理と初体験（後書き）

「多分、大丈夫じゃないわよ」

B Y 島田美波

姉と家族と衝撃の事実（前書き）

「あ…ね…き…？」

B y 神無月劉真

姉と家族と衝撃の事実

明久『劉真!!!劉真!!!』

何だろう?アキの声が頭に響いてくる……

雄二『クソツ!!脈が戻らねえ!!』

秀吉『常人には耐えきれないほどの味じゃったか……』

康太『……まだ諦めない』

優斗『劉真!!!目を覚ませ!!!』

どうしてみんな焦ってるんだろう……目の前にはあんなにきれいなお花畑が広がっているのに……

明久『雄二!!!劉真の顔から生気が無くなってきてるよ!?!』

雄二『まずいな……おそらく劉真は今、三途リバーの目の前にいるぐらいか……』

秀吉『何でそんなことまでわかるのじゃ?』

明&雄『何度も死線を見てきたから』

優斗『お前らの人生どうなってんだよ……』

雄二『チツ。しゃあねえ!!!劉真!!!歯あ食いしばれよ!!!』

ボコオツ!!!!!!

劉真『ギヤア

!!!!!!腹が!!!俺の腹が!!!』

誰だ!?!いきなりストマックブローなんて決めやがったのは!?!?

雄二「よし、戻って来たな……」

明久「いやあ、劉真の脈が止まった時は凄く焦ったけどね」

秀吉「こんな状況で迅速な対応ができるお主らは流石じゃと思うぞ

……」

康太「……………よかった。親友を失うことにならなくて」

劉真「ああ…俺、あの姫路の料理を食べてから　　って何な

んだあの料理は！？ありえねえだろ！！一口で意識が持ってたか
れたぞ！？」

よく生きてたな俺！！奇跡が起きたよ！！意外に頑丈だよ！！姉貴
のおかげだよ！！

明久「姫路さんの料理は化学兵器レベルの代物なんだ……」

雄二「実際、薬品とか入ってるしな」

劉真「薬品！？それは料理じゃなくて実験だろ！？姫路は味見とか
しねえのか！？」

康太「……………太るかもしれないからって」

あの内面無自覚^{ひめじみすき}天然悪魔必殺料理人がア…………

優斗「なんか劉真から禍々しいオーラが感じられるんだけど」

雄二「気のせいだ。なんか俺もそんな気がするが気のせいだ。そん
なことより、部屋割りについてなんだが　　」

部屋割りなんてどうせ男女別に決まってるんだから今更どうしようも
ないと思うんだけど……

雄二「　　」
女子陣は男女一人ずつのペアを希望し
ている」

劉真「んなアホな!？」

秀吉「なぜに関西弁なのじゃ？」

劉真「何で男女別じゃないんだよ!!冗談だろ!？」

明久「それが冗談じゃないんだよ……」

雄二「俺が説得してジャンケンで決めることにはなっただが、男女別になるように勝つなんてほぼ不可能だ……」

ジャンケンか。それなら何とかなるかもしれない。俺には神無月家に代々伝わるジャンケン必勝法があるからな。

劉真「みんなよく聞いてくれ。ジャンケンなら何とかなるかもしれない」

明久「どうするの?」

俺はみんなを集め、必勝法について話した。

優斗「それで本当に勝てるのか?」

劉真「これは勝つんじゃない。みんなで一緒になるための方法だ」

明久「みんなと同じ手を出す、か……」

秀吉「じゃが、そんなにうまくいくかのう……」

秀吉が渋い顔をするのも無理はない。みんな同じ手を出すといつてもこれはジャンケン。

いつまでも同じ手を出し続けられるかが大事だし、裏切者が出るかもしれない。ジャンケンは何が起こるのか分からないものだ。

劉真「じゃあ、こうしよう。俺たちは勝負が終わるまでずっとゲーを出す。女子に気づかれてもめげずに出し続けるんだ。これが守れたら、この外国産の秘蔵本を1人1冊授けよう」

俺は懐から、4冊の本を取り出す。

「……任せる親友」「」

秀吉「お主たちは……」

秀吉は流石に釣られないか。ならば……

カシヤ

秀吉「劉真よ。何故ワシを写真で撮っておるのじゃ？」

劉真「俺の姉さんの好みの男性に近いからな秀吉は。だから、写メールを送ったんだ」

秀吉「ほう、そうじゃったか　　って良くないわ！！何をしてくれてるのじゃ！？」

劉真「いいじゃん。自分の姉を褒めるのもなんだけど、俺の姉貴は超美人だぜ？」

秀吉「じゃが……」

雄二「秀吉。これはお前が男として見られるチャンスじゃないか？」
秀吉「！！そうじゃな！！これはワシのためか……」

秀吉も説得できたな。まあ、嘘はついてないし、姉貴は才色兼備の完璧人間だ。

まあ、ボーイッシュすぎるのが玉にキズなんだけど……

トントン

劉真「何だ康太？」

康太「……姉貴ってまさか」

劉真「お前のよく知るあの人さ」

康太「……ッ！？（ガタガタガタ）」

姉貴という言葉に肩を震わせる康太。あの姉は性格に難ありで美波と康太の心に大きな傷を残した女性だ。

康太「……………もう蝋燭は嫌だ」

劉真「大丈夫だ。あの人はアメリカにいるから」

もうこれはトラウマなんてレベルじゃねえだろ…

~~~~~

俺が康太の震えを止めていると、着信音が鳴った。どうやら、俺のケータイのようだ。

ケータイを開き、ディスプレイを見る。

『姉貴』

康太「……………ッ!？」

ディスプレイの文字を見ただけで気を失う康太。

明久「ムツツリーニ、大丈夫!？」

康太「……………劉真に悪魔からの連絡が…」

優斗「悪魔って誰だ？」

劉真「俺の…姉貴さ…」

雄二「どうしてそんなに遠い目してるんだ？」



劉真「いろいろあったんだ。察してくれ」

このまま着信音を鳴らせ続けるのも康太に悪いので通話ボタンを押し、電話に出る。

劉真「この電話番号はただいま使われておりません」

大雅「大雅特性【右ストレート】を顔面に食らわせてやるうか？」

劉真「電話番号が復活しました！！幸運ですねお客様！！」

大雅「バカなことやってないで、私の話を聞け」

劉真「はあ、なんだよ」

大雅「そ、その…さっきの写真の男子について詳しく教えてほしいんだけど…」

姉貴が珍しく照れながら話している。どうやら、秀吉は超どストライクゾーンだったようだ。

劉真「テレビ電話で直接話すか？」

大雅「そ、そこにいるのか！？」

劉真「虎みたいな名前と性格のやつが猫みたいな態度になるな。死ぬほど似合ってるねえから。おーい！！秀吉ー。姉貴が代わってくれてさー」

大雅「ちょー！？」

姉貴の抗議の声を無視して秀吉にテレビ電話状態のケータイを渡す。

秀吉「ワ、ワシかの！？」

劉真「そうだよ。楽しんでこい。じゃあ、邪魔者は退散しますかねー。行くぞーお前ら」

大雅「ちよっと劉真！？」

俺はアキたちをつれて部屋を出る。

優斗「何だよ折角おもしろそうだったのに」

明久「まったくだよ。劉真のお姉さんの顔見たかったのに」

アキと優斗の2人がブーブー言ってくる。

劉真「せっかく、ケータイに仕込んでおいたカメラと盗聴器で電話の様子を見せてやろうと思ったのに……」

「「すいませんでした」」

アキと優斗がスゴイスピードで土下座をする。  
何これ。メチャクチャ面白いんだけど。

劉真「そんなに聞きたい？」

「「是非」」

劉真「雄二たちは？」

雄二「言わなくても分かってたんだろ？」

康太「……………劉真のパソコンに繋いだからこっちでも見れる」

流石雄二、よく分かっている。

それと、康太。相変わらず機械系になると超人的な行動を見せるのは止める。

劉真「じゃあいくぞー」

俺が1つのプログラムを起動させると、だんだんとはっきりとした声と画像が映ってきた。

明久「この人が劉真のお姉さん？」

雄二「おい。この人ってまさか…」

劉真「そのまさかだ」

優斗「どうということだ？」

雄二以外は気づいていないようだ。まあ、秀吉は電話で知るだろうし、康太はよく知っている人物だし、姉貴は有名人だからなあ…

雄二「俺の記憶が正しければ、この女性はハーバード大学出身のハリウッド女優だ」

優斗「ハーバード!？」

明久「ハリウッド!？」

そう。俺の家族はみんな普通の職業に就いていないのだ。

親父は石油を見つける千里眼みたいな能力もってるし、

母さんはNASAの幹部だし、

兄貴はプロ野球選手だし、

とどめに妹は水泳の日本ジュニアチャンピオンだ。

雄二「お前の家族は人外だよ…」

明久「そういえば、劉真は何か能力を持ってないの？」

劉真「持つてるぞ?1つだけ」

優斗「どんな能力なんだ？」

劉真「10分の1の確率までなら絶対に外さない能力」

雄二「漫画ネタかよ!!」

明久「魔王の主人公みたいだね…」

劉真「俺は本気を出せば、一生競馬だけで暮らせる男だ」

康太「……………劉真は親にギャンブルと宝くじは禁止されている」

明久「どうして?自分たちが得をするのに?」

康太「……………劉真は昔、ドイツのマフィアのカジノを一時間で潰したことがある」

雄二「そりゃ、禁止にされるわな」

劉真「でも、金は返したんだぜ？泣きながら受け取ってくれて。それ以来、ドイツのマフィアの奴らからは【兄さん】と呼ばれるようになったけど」

明久「マフィアが味方に付いてる!？」

劉真「一応、日本にも来てるみたいだけどな。親父に頼まれて俺に危害をなす人間をなくすようにしているみたいだ。まあ、本人たちは気づかれてないと思ってるようだけど、殺気がヤバイからバレバシなんだけどな」

明久「ははは……」

ガチャ

俺がアキたちに家族について話し終えたときにほくほく顔の秀吉が部屋から出てきた。

秀吉「お主の姉上は凄いのう。今度、ハリウッドに連れて行ってもらう約束をもらったのじゃ」

雄二「秀吉は俳優を目指してるからな。願ってもないチャンスだろ」

秀吉「うむ。演劇をする者にとっての聖域とも言われておるハリウッドに行けるなんて幸せ者じゃ…やはり、持つべきものは友達じゃな」

劉真「それはいいんだけどさ。姉貴はアメリカにいるから、日本に迎えに来れないと思うんだけど」

姉貴は大人気女優だから、スケジュールが家族で一番空いてないと思うんだけど…

秀吉「どうやら、しばらく休業して日本に帰ってくるようじゃぞ」

劉&康「な、何だとお

!?!」

バカな！？あの姉貴が日本に来るだと！？俺の楽しい一人暮らしが終焉を迎えるなんて！！

美波「そろそろ、ジャンケンしましょーってどうしたの？リュウに土屋。そんなところで膝をついて」

美波が俺たちを呼びに来た。しかし、俺たちはそんなことよりいつ来るか分からない恐怖に身を震わせるしかなかった。

劉真「美波。覚悟を決めて聞いてくれ」

美波「どうしたのよ突然」

康太「……………大雅さんが日本に帰ってくる」

美波「……………え？」

困惑した表情のまま凍りつく美波。足もガクガクと震えている。

美波「ウソでしょ？だって、大雅さんは忙しいはず」

劉真「しばらく仕事を休んでこっちに帰ってくるらしい」

美波「あの人も相変わらずメチャクチャするわね……………」

康太「……………秀吉。大雅さんはいつごろ帰ってくるって？」

血の涙を流しながら秀吉に尋ねる康太。

秀吉「ら、来月と言っておったが……………」

美波「何で木下が大雅さんの予定を知ってるのよ？」

劉真「思いついた美波。姉貴の好きな男性のタイプを……………」

美波「守りがいがある女性のような男性……………ビンゴね」

劉真「おそらく姉貴はこの家に住むつもりだ。だから、早くあの拷問部屋を撤去する必要がある」

康太「…………でも、あの部屋を作ったのは大雅さんだ」  
劉真「そうだった　　！！勝手に壊したりしたら俺が殺され  
る　　！！」

再び、床に膝をつく俺。

もう駄目だ…危険を回避する方法が見つからない……

美波「大雅さんが来る来月って清涼祭があったわよね？」

康太「…………最後の平和な学園行事になるかも」

劉真「まあ、その話は他のみんなの力も借りて話し合おうぜ」

美波「そうね。まずは部屋割りよ」

康太「……………そうだな」

諦めた俺たち3人はリビングへと歩いていく。

「…………ははは……………」

取り残された4人は乾いた笑いをするしかなかった……………

姉と家族と衝撃の事実（後書き）

「「たい…が…さん…？」」

B Y 土屋康太&島田美波

俺と兄貴とヤンデレな妹（前書き）

「そこで颯太の名前を出すなよ!!」

B Y 神無月玄武



## 俺と兄貴とヤンデレな妹

愛子「遅かったねー。何してたの？」

リビングに戻った俺たちを出迎えたのはジャンケンの予行練習をしている女性陣だった。

劉真「なあに、ちょっと理不尽を見ただけさ。なあ、康太、美波」

康太「……………寿命が来月までに縮まった」

愛子「それ、縮まりすぎじゃない!？」

美波「清涼祭が楽しみだわ……………」

愛子「全然、楽しみそうに見えないよ!？」

翔子「……………漫才はそこまでにして、早くジャンケン」

霧島はそんなに雄二と部屋が一緒になりたいのかあ。愛されてるなあ、雄二は。

雄二「おう。じゃあ……………」

雄二が深く息を吸う。それに合わせて俺たち男子も息を吸う。

「最強王者決定戦!？ガチンコジャンケン対決!！」

「イェ……………」

雄二「明久!!ルールの説明を!!」

明久「OK。この場にいる全員でジャンケンをして、綺麗に分かれることができたならそれが今日の部屋割り!!」

劉真「準備はいいか？」

男子のテンションに乗り遅れている女子に声をかける。

翔子「……いつでも」

愛子「ボクも大丈夫だよ」

優子「負けないわよ!!」

瑞希「頑張ります!!」

美波「OKよ」

みんな準備ができたようだな…

チラッ

俺は男子にアイコンタクトを取る。

雄二「(任せろ)」

明久「(絶対に男女別になるんだ)」

康太「(……………準備はOK)」

秀吉「(ワシのポーカーフェイスならばれることはないぞい)」

優斗「(どんと来い!!)」

ホント俺は良い友人を持ったよ。アイコンタクトだけでここまで会話が成立するなんて。

劉真「じゃあ、いくぞ!!セーの」

「……………最初は、グー!!ジャンケン  
ン!!……………」  
ポ

俺 グー

雄二 グー

明久 グー

康太 グー  
秀吉 グー  
優斗 グー  
翔子 チヨキ  
愛子 チヨキ  
優子 チヨキ  
瑞希 チヨキ  
美波 チヨキ

「「「「「よっしや

「!」「」「」

勝った!!!一回で勝った!!!ていうか

劉真「女子の手が全部同じって何だよ……」

瑞希「うう……美波ちゃんの作戦があ……」

美波「神無月家のジャンケン必勝法を使ったのに……」

明久「何で美波がその必勝法を知ってるのさ……」

劉真「コイツはよく俺の家に来てたし、母さんに気に入られてたからその時にでも教えてもらったんじゃないかねえの?」

美波「いえ、玄武さんに教えてもらったの」

劉真「兄貴かよ。よく会えたな。アイツはスゴク忙しいはずなのに」

美波「朱雀ちゃんもいたわよ?」

劉真「そうかい……」

雄二「そんな会話は後にしてくれ。それより

」

雄二が満面の笑みで霧島を見る。

雄二「これで部屋割りには男女別だな」

翔子「……これは勝負。おとなしく従う」

愛子「うう……土屋君とが……」

優子「ほら、そんなところで小さくならない」

瑞希「愛子ちゃん。私も似たようなものですから」

秀吉「たかが部屋でここまで一喜一憂できるものなのか…」

秀吉、それは本人にしか分からないことだから。

雄二「じゃあ、風呂にでも入るか」

ジャンケンの後、みんなでトランプをしていると雄二がそんなことを言い出した。

劉真「悪い。この家の風呂は今は使えないんだ」

明久「どういうこと？」

美波「ウチが壊しちゃったのよ…」

秀吉「何をどうしたら風呂が壊れるなんて悲劇が起こるのじゃ？」

美波「それはこの場では言えないわ」

優斗「お前ら、普段この家で何してんだよ……」

劉真「黙秘権」

翔子「……それは後で部屋で聴かせてもらうとして」

愛子「どうするの？このままじゃお風呂に入れないよ？」

工藤の言うとおりだ。俺の家の風呂は一応、6人までなら余裕で入れる広さだが、使えないから意味がない。ふむ……どうしたものか……

雄二「なら、銭湯にでも行こうぜ」

雄二が財布の中身を確認しながら言う。

明久「いいね。それならみんなすぐに入れるしね」

秀吉「じゃが、この近くに銭湯なんてあったかのう」

優斗「島田、この近くにあるのか？」

美波「さあ……ウチはあまり銭湯なんて行かないから……」

劉真「なあ、1つ聞いてもいいか？」

雄二「ん？何だ？」

俺はさつきから疑問に思ってたことを質問する。

劉真「銭湯って何だ？」

「……………は？」「……………」

雄二「劉真。今何て言った？」

劉真「だから、銭湯って何だ？」

美波「そうだったわ……リュウの実家には世界で一番大きい温泉があるから銭湯なんて行く必要なかったんだわ……」

明久「世界で一番大きい温泉って……」

愛子「神無月君の家って何のお仕事してるの!？」

康太「……………そういえば、島田以外の女子は知らなかった」

俺は美波以外の女子に俺の家族のことを懇切丁寧に説明した。

優子「せ、石油王って…」

瑞希「あの大雅さんがお姉さんなんですか!？」

愛子「まさか、あの水泳女王の朱雀ちゃんが妹だとはね…」

翔子「………凄い家系」

まあ、驚くのも無理はないと思う。俺はあの家族の中で一番まだ目立たない能力持ってるからなあ。

まさか、名字だけで気づくやつなんていねえだろ。

瑞希「あの、神無月君…」

劉真「何だ?」

瑞希「大雅さんのサイン貰ってきてくれませんか?」

それは危険だ。あの姉貴はファンには聖母のように優しいけど、俺には優しくない。

というか、下僕のような扱いをしてくるような奴だ。

劉真「姉貴は来月帰ってくるから、その時に会わせてやるよ」

姫路「ホントですか!？」

康太「………それが俺たちにとっての悪夢の始まり」

美波「ああ…大雅さんの強烈な拷問にはもう遭いたくない…」

愛子「裏では凄いことしてるんだね。あの人…」

工藤が苦笑いを浮かべる。

~~~~~

すると、俺の家の電話の着信音が鳴った。ディスプレイには

『兄貴』

劉真「マジかよ……」

明久「今度は誰なの？」

劉真「兄貴だ」

優斗「それって、プロ野球選手のか？」

劉真「ああ。おそらく、朱雀のやつもいると思う。あいつ等、一緒に住んでるから」

俺はため息をつきながら通話ボタンを押し、電話に出た。

劉真「死ね」

玄武『劉真、実の兄貴に対して【死ね】はないだろ！？』

劉真「うっせえよ。颯太さんの人生の唯一の汚点だ」

玄武『そこで、颯太の名前を出すなよ！！しかも、汚点とかいうな！！』

明久「颯太さんって誰？」

康太「……………俺の兄さん」

雄二「家族ぐるみの付き合いかよ……」

康太「……………一応、俺と颯兄は劉真の実家に自由に入れる」

明久「あれ？ムツツリ二って4人兄弟じゃなかったっけ？」

康太「……………後の2人はいろいろあった」

秀吉「一体、何をしたのじゃ……」

皆の会話が耳にかかる。陽太さんたちの話は後日することになるだろう。

劉真「で、何の用だよ。今は、友人が泊まりに来てるから忙しいんだっての」

玄武「朱雀がお前と話したいんだってよ」

げ。朱雀かよ…あいつはどうしても苦手だ。

朱雀「お兄ちゃんひつさつしづつり

！！！！！！！

劉真「やかましい！！電話でそんな大声を出すな！！」

見る！！周囲の奴らですら耳を塞いでるんだぞ！？

朱雀「元気にしてた？私がいなくてさびしくなかった？」

劉真「逆に静かで、平和だ」

朱雀「そうかー。寂しかったかー」

劉真「お前に耳と脳はついてんのか！？」

朱雀「ねえ、まさかとは思うけど、女の子とか泊まりに来てないよねー？」

ゾクウ！！

拙い。電話越しなのに殺気がピンピン伝わってくる。電話の向こうから『ヒイ！！』なんていう兄貴の悲鳴が聞こえたし。

俺は後ろの奴らにアイコンタクトで『一言も喋るな。物音を立てるな。動くな』と合図を取る。

劉真「そんなわけないだろ。男子だけだ」

朱雀『ふーん…』

怖い。実の妹にここまで恐怖するのは世界探しても俺と兄貴だけだ
と思う。

朱雀『じゃあ、テレビ電話に切り替えてよ』

テレビ電話！？拙いぞ。この家のテレビ電話は家中を監視する監視
カメラのようなもの。クソッ！！泥棒対策が仇となったか！！

劉真「スマンな。今、テレビ電話は使えないんだ」

朱雀『どうして?』

劉真「えっと……」

考える！！脳を働かせる！！俺なら出来る！！最高の言い訳が！！

ガチャ

俺は電話を切り、コンセントを抜いた。

劉真「フウ…一件落着」

「……………」

みんながジト目で俺を見てくる。

しょうがないだろ！！あの妹の怖ろしさは世界一なんだよ！！

劉真「は、早く、銭湯とやらに行こうぜ！…」

「……………」

俺は、みんなの冷たい視線を見ないようにしながら、家を出た。

俺と兄貴とヤンデレな妹（後書き）

「お兄ちゃん？」

B Y 神無月朱雀

俺と銭湯と負けられない戦い(前書き)

「感……無……量……」

B Y 吉井明久&木下秀吉

俺と銭湯と負けられない戦い

雄二「で。銭湯の場所も分からないのに、どうやって行くんだ？」

家を逃げるように飛び出した後、雄二が今の一番の問題を提示した。

明久「誰か、親切そうな人に聞くとか？」

優斗「今、7時だぜ？」

秀吉「おそらく、家に帰ってる者が大半じゃろうな」

秀吉の言うとおりだ。だが、銭湯を見つけないことには…

『あー！！どうしようもなく銭湯に人を案内しなくなってきたなー！！』

突然、前の方からそんな声が聞こえた。

『その道を左に曲がって二番目の信号を右折して、真っ直ぐ5分ぐらい歩けば銭湯があるなー！！』

『兄貴。その演技はワザとらしくないですかい？』

『こ、これは演技じゃねえ！！道案内だ！！』

あのバカどもが…

美波「ねえ、あの人たちってリュウの知り合い？」

劉真「残念ながら、さっき話した。ドイツ産のマフィアの奴らだ」

翔子「……でも、これで銭湯の場所が分かる」

愛子「ははは…」

工藤。その苦笑いは俺たちみんなの心情を見事に表してくれてるよ…

雄二「意外に大きいな」

さきほどのバカどもの言った通りに進むと、木造の建物についた。

劉真「これが、銭湯…？」

優子「ホントに初めてなのね…」

美波「ほらほら、そんなところで突っ立ってないでさっさと入る」

美波に腕を引つ張られ、建物の中に入る。

『いらつしゃい。ゆっくりして行ってください』

劉真「なあ、美波。何で、あそこに人が座ってるんだ？」

美波「あそこでお金を払うのよ」

劉真「ふーん…あ。この温泉のオーナー、俺の親父じゃん」

「……………は？」「……………」

『あ、貴方様は、麒麟様のお子さんでは！？』

劉真「ああ。そうだけど」

『だ、代金なんていりません！！お友人の皆様もどうぞ好きなだけお入りください！！』

銭湯の従業員はそう言うと、俺たちに一枚ずつカードを渡した。

『そのカードをここで見せていただければ、今後、無料で温泉に入ることができます』

明久「ホント！？」

雄二「よかったな明久。これで、いつでもお湯に浸かれるぞ」

秀吉「ついに、お湯まで止められておったのか…」

劉真「いいのか？別にお金ぐらい払うのに…」

『と、とんでもございません！！麒麟様にはいつも良くしてもらってますので…！』

あの親父がオーナーの銭湯か…嫌な予感しかしねえ…

劉真「まあ、いいか。じゃあ、行くつぜ」

俺たちは男女で分かれ、脱衣所に向かった…

脱衣所で秀吉が服を脱ぐなり、康太が鼻血を出してぶっ倒れた。

明久「ム、ムツツリーニ!？」

雄二「秀吉は男だろうが…」

劉真「まさか、康太が男の着替えで興奮するなんて…」

明久「2人とも何言ってるのさ!!秀吉は第3の性別『秀吉』だよ
!!」

劉真「お前が何言ってるんだ!？」

秀吉「じゃから、ワシは男じゃと言っておろうに…」

そんなこんなで着替えを済ませ、温泉に入る。

劉真「……………」

雄二「どうだ劉真？これが銭湯だ」

すげえ。壁に富士山が描いてある…。しかも、たくさんの種類の温泉があるなんて！！

明久「喜んでもらえたみたいだね　　って、ムツツリーニ、何してるの？」

明久が壁に前でしゃがんでいる康太に声をかける。

康太「……………」これを見る」

康太がその場をどく。俺たちはそこにあつた衝撃のものを凝視していた。

優斗「これは、まさか…」

秀吉「覗き穴じゃな」

劉真「やっぱり…あのエロ親父がオーナーなだけあるぜ…」

やはり、何か仕込んでやがったか…。おそらく、自分が来た時の為のものだろう。

康太「……………」これで、女子風呂が覗き放題」

雄二「お前もつくづく欲に正直な男だな…」

明久「あ。誰か入って来たよ！！」

ドタバタドタバタ

小さな覗き穴を巡って、争う俺たち5人。

優斗「（優子の裸が見れるかもしれないねえんだ！！俺に一番は譲れよ！！）」

明久「（唐津君は家で好きなだけ見せてもらえばいいじゃないか！
！僕は姫路さんの裸が見たいんだ！！）」

雄二「（劉真！！お前はいつも島田の裸を見てんだろう！？ここは俺に譲りやがれ！！）」

劉真「（美波以外の裸なんて見る機会がないんだ！！）」
康太「（……………工藤の全裸……………！！）」

秀吉「ちゃんとばれないように小声で争ってるのが流石じゃ……………」

このままじゃ、誰も見れずに終わっちまう！！……………そうだ！！

劉真「じゃあ、こうしよう。この覗き穴はどうやら、体を洗うところのどこでも繋がるようにできているみたいだ。まず、秀吉がこの覗き穴を見る。そして、木下姉が来たら、優斗に。姫路が来たら、アキに。霧島が来たら、雄二に。工藤が来たら、康太に。そして、美波が来たら、俺に代わる。それでどうだ？」

明久「それなら、良いけど……………」

優斗「まあ、俺が見たいのは優子だけだしな」

雄二「俺は別に……………」

康太「……………異議なし」

秀吉「ワシが見るのは決定なのかのう……………」

劉真「秀吉。姉貴のメアドと電話番号を授けよう」

秀吉「是非、やらせてほしいのじゃ！！」

これで、準備は整った！！目指せ！！男の戦いの勝利を！！

今思えば、この時の俺たちは、どうかしてたんだと思う。

秀吉「……………」

秀吉が真剣な顔で覗き穴をじ

っと見る。

明久「今思えば、凄い光景だよな」

雄二「ああ。女子みたいな顔の奴が覗き穴を使ってるからな」

秀吉「……………ッ!? (ブシャアアアアアアア!!)」

すると突然、秀吉が大量の鼻血を出して倒れた。

優斗「どうした秀吉!?!」

明久「一体何が

ッ!? (ブシャア

アアアアア!!)」

秀吉に続いて、アキまでもが大量の鼻血を出してぶっ倒れる。

明&秀「感…無量……………」

雄二「明久はともかく、秀吉までもがぶっ倒れるなんてな…」

優斗「何が見えんだ? えーっと……………ッ!? (ブシャアアア

アア!!)」

劉真「(優斗 ……!!)」

雄二「そこで大声出さないお前に賞賛を送りたい気分だが、この惨状、どうする?」

地面には、3人の男子の死体。しかも血まみれ。顔は満足そうにしている。殺人現場より酷い有様だ。

康太「……………俺が行く」

雄二「ムツツリーニ…」

劉真「お前、見ただけだろ」

康太「……………!! (ブンブン)」

雄二「いいから見るなら早く見てくれ。俺たちが見れなくなっちまう」

康太「……………分かった
ブシャアアアアアアアアアアア！」

ぐ！？（

康太が今回一番の鼻血を吹き出してぶっ倒れた。

劉真「3メートルか…」

雄二「いや、鼻血の飛距離を図るなよ」

劉真「すまん。…次は誰が行く？」

雄二「……………」

俺　　グー

雄二　パー

雄二「俺からだ」

劉真「俺もすぐに後を追うぜ。親友」

雄二「俺がこれぐらいでやられると思うか

ッ

！？

雄二が覗き穴を見た瞬間に鼻を抑えて踏みとどまる。

劉真「どうした!？」

雄二「拙いぞ。あいつ等、この覗き穴の存在に気づいてやがる…」

劉真「な!？」

雄二「翔子が自分の手で胸を隠してやがった…」

劉真「なのに、鼻血が出んのかよ…」

雄二「アイツの裸なんて見て耐えられるか!！」

劉真「じゃあ、次は俺の番だ」

雄二「俺の話聞いてたか!？」

劉真「聞いてたからこそ、覗くんだ。良いか雄二。男には、負けら

雄二「劉真!？」

美波め…俺の弱点で攻めてきやがって…

雄二「劉真!!しっかりしろ!!」

雄二が倒れた俺を介抱する。

劉真「猫耳は…反…則…だろ…(ガクツ)」
雄二「劉真 ……!!!!」

俺は再び、三途リバーに行くこととなり、そこで康太たちと再会していた。

俺と銭湯と負けられない戦い(後書き)

「「覚悟はいいかしら?」「

B Y 島田美波&木下優子

ウチと俺らの秘密の会話（前書き）

「主人公のキャラ紹介に改変を加えたから見ておいてくれよな」

B y 神無月劉真

ウチと俺らの秘密の会話

劉真「酷い目に遭った…」

銭湯での悲劇後、俺たち男子は帰り道で本物の修羅とご対面し、再び悲劇を見ることとなった。

美波「リュウが覗きなんてするからよ」

劉真「あれは、その…ノリだ」

美波「もういっぺん、その体に覗きがどれだけの罪か叩き込んでやろうかしら？」

劉真「スマン！もう金輪際、覗きなんてしない！！」

美波「分かればいいのよ。分かれば」

美波はそう言うと、女子の部屋に戻っていった。

雄二「話は終わったか？」

劉真「雄二…何でテーブルの下なんかにいるんだよ…」

雄二「さっき翔子に『…次、覗きなんかしたら二度と光が拝めない目にする』って言われてな…」

劉真「お前も大変だな…」

雄二「じゃあ、俺たちも部屋に戻ろう。聞きたいこともたくさんあるしな（ニヤリ）」

劉真「ははは…お手柔らかに頼むよ…」

あのメンバーだからな…覚悟を決めねえと…

俺と雄二も男子の部屋に戻っていった。

劉真 side out

美波 side in

優子「お泊り恒例、【あの子の秘密知りたいな。なら、バラしちゃおうよ！】の時間だよー！！」

帰りたい。今すぐ、家に帰りたい。こんな企画嫌な予感しかないもの…。

優子「じゃあ、このくじを引いて。書いてある番号順に話していきましょー」

優子の手の中にあるクジを引こうとする。あれ？もう、1つしか残ってないじゃない…

美波「(キツ)」

優子「睨まないでよ。みんなが一瞬で引いちゃったんだから」

瑞希「ごめんなさい美波ちゃん」

翔子「……つい」

愛子「ほらほら、後1つ残ってるんだしさ」

美波「はあ…1番じゃありませんように。1番じゃありませんように…」

ウチは願いながらクジを引き、番号を確認した。

『1』

ガクウ

膝から崩れ落ちるウチ。そんな…ありえないでしょ…

愛子「いやあ、2番だったよー」

瑞希「私は3番です」

翔子「……4番」

優子「アタシは5番ね。というわけで…」

「」「美波(美波ちゃん)。どうぞ」「」「」

美波「絶対、仕組んでたわよね!？」

愛子「そんなことないよー」

美波「愛子。顔がにやけてるわよ」

優子「アタシたちは別に普通に引いただけよ」

美波「優子。面白がってるわよね?」

翔子「……別に仕組んでなんかない」

美波「その背後にある大量の割り箸は何かしら?」

翔子「……ラーメン食べたときの」

美波「今日はラーメンなんて食べてないでしょ!？」

瑞希「そうですね。美波ちゃん。仕組んでなんかいませんよ」

美波「歯を食いしばりなさい。瑞希」

瑞希「何で私だけ殴られるんですか!？」

この子たちは…。他人事だからって、組むなんて…。

美波「はあ…分かったわよ。で、誰から？」

愛子「じゃあ、ボクからいくね」

愛子「からか…スツゴイ嫌なことを聞かれそうね…。

愛子「神無月君とはどこまでいったの？」

美波「いきなり核心ついてきた!？」

愛子「ボクの予想だと、〇〇〇ぐらいまではしてると思っただけだなー」

瑞希「愛子ちゃん。そういう発言はあまりしない方が…女の子なんですから…」

愛子「にやははーごめんねー。で、どうなの?」

愛子の目が獲物を狩るライオンのように見えるのは気のせいかしら?

美波「リュウとは…その…」

優子「やっぱり、その質問は深すぎだったんじゃないかしら?」

愛子「そうかなあ?答えられると思っただけだなー」

た、助かった!!ありがとう優子!!

しかし、現実はそのなにか甘くなかったの…

翔子「……さつき、美波と神無月が一時間以上部屋に籠ってた時の

映像がここにある」

美波「何ですって」

!？」

優子「代表…何でそんなものを持つてるの？」

翔子「…神無月を女装させているときに仕込んでおいた」

瑞希「それを見せてくれませんか？」

美波「駄目よ瑞希!!子供にはまだ早いわ!!」

愛子「あれえ?子供に見せられないようなことしてたのお？」

美波「な…!!?／／／／」

優子「凶星みたいね。じゃあ見てみましょうよ」

美波「止めて!!見ないで!!Don't watch it!!」

翔子「…瑞希。美波を抑えて」

美波「離して瑞希!!ウチはあいつらを止めないといけないの!!」

瑞希「美波ちゃんごめんなさい!!でも、私も興味があります!!」

美波「この裏切者」

!!!!」

<<みんなで映像鑑賞中>>

結局、最後まで見られちゃった…うう…恥ずかしい…

美波「もう、お嫁にいけない…」

愛子「いけると思うよ。神無月君のところに」

優子「でも、美波ったらアタシたちがいるってことを分かってるのに、こんなことしてたんだあ」

瑞希「（プシュー）」

翔子「……瑞希が処理落ちしてる」

愛子「あははー。ウブな子には刺激が強すぎたかなー？」

美波「もう…いつそ殺して…」

優子「ほらー。元気出しなさいって。次はアタシの質問の番ね」

もう嫌だ…。この恐怖から早く逃れたい…

優子「ほら、覚悟決めなさい」

美波「もう、いやああああ

「！！！！」

ウチはそれから、全員に恥ずかしい質問をされ続けたわ…

美波 side ut

劉真 side in

部屋に戻った俺たちは定番ともいえる遊びをしていた。

雄二「明久から始まる山手線ゲーム!!」

劉真「お題は『好きな女子』だな」

チャンチャン

明久「ひ、姫路さん!!」

「「「「(ニヤニヤ)」「」」」」

明久「早く進めてよ!!」

愛いやつめ…。顔を赤くしてるぜ。ケツケツケ…

チャンチャン

秀吉「次はワシじゃな。大雅さんじゃ」

優斗「いさぎいいな」

秀吉「もう、ばれてるじゃろうからのう」

明久「次行くよ!!」

チャンチャン

雄二「……………」

劉真「どうした雄二？早く言えよ（ニヤニヤ）」

康太「……………素直になれ（ニヤニヤ）」

雄二「くっそ　　！！し、翔子だ！！」

「…………（ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤ）」

雄二「早く次いけ！！」

チャンチャン

優斗「優子だな」

秀吉「お主たちはすでに恋人同士じゃからのう」

劉真「じゃ、次な」

チャンチャン

劉真「美波だな」

明久「妬ましいほどに羨ましい…」

秀吉「お主も早く告白すればよかるうに」

明久「そ、そんなのできるわけないじゃないか！！」

劉真「アキ。今回の親睦会中に姫路に告れよ。これは決定事項だ。依存はあるか？」

「…無い」

明久「僕のことなのにみんなが返事しないでよ！！」

雄二「うっさい。次だ」

チャンチャン

康太「……………」

……工藤愛子／／／」

雄二「よく頑張ったなムツツリー二」

優斗「スゴク覚悟のいることだったぜ」

でも、これでやること無くなっちまったな。あとは…やっぱり

劉真「罰ゲームありのババ抜きでもするか？」

秀吉「それは名案じゃー！！」

雄二「そうだな。じゃあ、1人ずつしてほしい罰ゲームを書いてこの箱に入れてくれ」

明久「何でそんな箱がここにあるのさ…」

劉真「それは、ここが俺の部屋だからだ」

優斗「答えになってねえだろ、それ…」

皆に紙とペンを渡し、罰ゲームを書いていく。

罰ゲームか…。『好きな奴に愛の告白』でいいか。

雄二「みんな書き終わったな。それじゃ、トランプを配るぞ」

手慣れた手つきでカードを配る雄二。

優斗「坂本ってカード配るの上手いな」

雄二「雄二でいい。明久と秀吉とムツツリー二とよくポーカーやってたからな」

雄二がカードを配り終わる。えーっと、俺のカードはーっと…

あ。キングと2とクイーンが被ってる。5と6もか…。

お互いに被ったカードを捨てていくと、手持ちの枚数は以下のよう
になった。

俺 5枚

雄二 6枚

明久 13枚

秀吉 5枚

康太 3枚

優斗 5枚

雄二「相変わらず、運がないな明久」

明久「うう…罰ゲームは嫌だ…」

劉真「まだ分かんないだろ。それより、順番はどうする？」

秀吉「明久からでいいじゃろ」

康太「……………同意見」

優斗「だってよ、吉井。早く引け」

順番は

アキ

優斗

雄二

俺

秀吉

康太

だ。

明久「明久でいいよ。じゃあいくね」

アキがカードを引き、2枚を場に捨てる。

「どうやら、被ってたようだな。なら、ババは誰が持ってるんだ？」

優斗「引くぞ雄二」

雄二「ああ」

優斗が引いたカードを見て、渋い顔をする。あれはババか？いや、ただ被ってないだけかもしれない。

雄二「劉真」

劉真「あ、ああ…悪い」

雄二がカードを引き、場に2枚捨てる。

こんな調子でババ抜きは進んでいった…

結局、最後の2人は康太と明久の2人が残っていた。

明久「これがババじゃなければ　　！！やったー！！上がりだー！！」

康太「……………不覚」

劉真「じゃあ、引いてもらっぞ」

康太がクジを引き、ゆっくりと中身を見る。

康太「ッ!？」

どうやら、最悪なものを引いたようだ。

雄二「ムツツリーニ、見せてくれなのじゃ……………おお、これはえげつないのう…」

優斗「どれどれ……うわぁ、これってだれが書いたんだ？」

劉真「俺たちにも見せてくれ」

優斗からクジを奪い、中身を見ている。

『好きな人に愛の告白。1人だけ同じ罰ゲームを受けさせることができる』

雄二「これは俺のだな」

劉真「雄二……お前は俺の一段上を用意してたんだな……」

明久「劉真も結構えげつないよね……」

雄二「他のは何て書いてあるんだ？」

箱をひっくり返し、全員が書いた罰ゲームを確認する。

『全裸で街を徘徊』

秀吉「これはワシじゃな」

劉真「お前が一番えげつねえよ!!」

『姫路の料理を1人で完食』

優斗「これは俺のだな」

雄二「これは普通だ……」

『僕に一生忠誠を誓う』

劉&雄「お前、もう死ねよ」「」

明久「2人とも酷い!!」

まあ、アキなら書きそうなことだし…それより

劉真「康太。誰を生贄にするんだ？」

康太「……………勿論、明久」

明久「何で僕なのさ!？」

雄二「ムツツリーニの他にお前だけが独り身だからだ」

明久「そんな!？」

劉真「諦める。そして、派手に散って来い」

明久「散るなんて言わないで

!?!?!」

俺たちの親睦会はまだまだ終わらない。

ウチと俺らの秘密の会話（後書き）

「姫路さん。大事な話があるんだ……」

B y 吉井明久

僕と姫路さんと初めてのデート(前書き)

「耐える…僕の理性…」

B y 吉井明久

僕と姫路さんと初めてのデート

アキと康太の罰ゲームが決定してから、一夜明けた今日。俺たちは呑気に朝食を取っていた。

優斗「美味しいなこのパン。劉真が作ったのか？」

劉真「俺がパンなんて焼けるわけないだろ。近くの店で買ったんだよ」

正確には、マフィアの店でだが。

雄二「そうなのか。今度その店教えてくれ」

劉真「それぐらい。いいぞ」

優斗「俺にも俺にも」

秀吉「ワシにも頼むぞい。それにしても……」

秀吉がある一点に視線をやる。

秀吉「明久とムツツリー二、緊張しすぎではないかのう……」

そこには、コップ片手に朝食を取るアキと康太の姿があった。でも、脚が凄まじい震えを見せている。

明久「そそそそそそそんなことなないよ!?!」

優斗「はつきりと日本語を喋れ」

康太「……………いつも通り(ガタガタガタ)」

雄二「震えでコップの中身が零れそうなんだが……」

まあ、2人は今日、愛の告白をしなくちゃならないから緊張するの

も無理はないけど…。

劉真「安心しろよ。準備はこつちでしておくからさ」

秀吉「お主らは告白の文でも考えておくと良いじゃろう」

明久「簡単に言わないでよ。こつちは必死なんだよ!？」

康太「……………告白なんて生まれて初めて」

雄二「大丈夫だろ。2人とも失敗するとは思えないが」

まあ、そうだろうなあ。あの2人は脈ありだろうし。両想いなんじゃないか？お互いに。

明久「分からないじゃないか!! 姫路さんは僕を恋愛対象として見てくれないかもしれぬよ!!」

秀吉「今までの姫路の態度を見て、よくそんなセリフが言えるのう

……………

康太「……………工藤ももしかしたら……………」

優斗「大丈夫だと思うけどなあ……………」

緊張のしすぎで神経質になっている2人。うーん…先が心配だ…。

雄二「じゃあ、そろそろ女子が起きてくるころだし、俺たちは準備を始めるか」

秀吉「打ち合わせ通りでいいんじゃないかな？」

優斗「俺と秀吉が康太のサポートだったよな」

明久「あれ？劉真はムツツリーニのサポートじゃないの？」

劉真「俺は康太よりもお前の方が心配だから。下手な失敗しそうですし」

明久「言い返せないのが悔しい……………」

雄二「よし。じゃあ……………」

……………幸運を祈る……………」

明久「う、うん……」
康太「……………頑張る……」

数分後、女子たちが部屋から出てきた。ようやくお目覚めか…。

優子「おはよう。早いわね？」

翔子「……………雄二にしては早起き」

劉真「俺たちは完徹だから」

瑞希「大丈夫なんですか？」

姫路が心配そうな顔で俺たちを見てくる。

雄二「大丈夫だ。それより、島田の顔色が優れないようだが、何かあったのか？」

美波「聞かないでくれると嬉しいわ……」

優斗「相当、辛いことがあったみたいだな……」

美波のことは心配だが、今はアキと康太のことが最優先だ。

劉真「姫路。今日はアキが2人で出かけたいそうだ」

瑞希「ホントですか明久君!？」

明久「う、うん……」

よし。上手く話しは合わせられたみたいだ。

明久「（ちょっと劉真!! 姫路さんと2人で出かけるなんて聞いてないよ!!!）」

劉真「（準備のための時間稼ぎだ。楽しんで来い）」

明久「（でも……）」

瑞希「何を2人で話してるんですか？」

明久「な、何でもないよ！？出かけるのは午後からでいいかな！？服とか取りに帰りたいし！！」
瑞希「それは私も賛成です。目一杯、オシヤレしなくちゃいけないですし……」

ういのう。ういのう。これだから、おせっかいは止められない。

雄二「工藤。ムツツリーニと一緒に買い物に行ってほしいそうだ」

康太「……………！？」

愛子「え？…本当？土屋君……」

康太「……………新品のカメラを買いきたいから……」

あっちも上手くやってるようだな。この調子で準備も頑張りますか。

劉真「じゃあ俺たちはすることがあるから」

俺は雄二たちと共に今日のメインイベントの準備をするための行動にでた……

劉真 side out

明久 side in

服を取りに家に帰ってきたのは良いんだけど…

明久「何を着ていけばいいんだ…？」

女の子と2人で出かけるなんて生まれて初めてのことから、何を着ればいいのかよく分からない！！

明久「そうだ！！こういうときは劉真に聞けばいいんだ！！」

いざというときは電話しろって言われてたしね。

ケータイの電話帳から劉真の番号を探し出し、通話ボタンを押す。

劉真「もしもし？」

明久「僕だけど…」

劉真「まさかとは思うが、着ていく服が分からないなんてことじゃないよな？」

そのまさか通りになってしまっているということは口が裂けても言いたくないが今回は事情が事情だ。

明久「そのまさかなんだよ……」

劉真「はあ……。自分が着たい服を着ればいいと思うぞ」

明久「それで大丈夫なの？」

劉真「周囲の目を気にするんじゃない。自分で服は決めるんだ。それが相手にたいする礼儀つてもものじゃないか？」

劉真の言うとおりだ。僕はあまりの自信のなさに人に頼ろうとしてた。でも、それじゃ駄目だよな。

明久「ありがとう劉真。僕、頑張るよ」

劉真「そうか。頑張「チイ！！森に逃げたぞ！！」……頑張れよ」

明久「今なにか聞いてはいけないような声が聞こえたような気がするけど、気にしないよ。じゃあ、また後で」

あの声は雄二だったな……。森に逃げるものって何だろう？動物だよな……。

まあ、いつか。僕は姫路さんとのデートを頑張らなくちゃ！！

僕は大量のゲーム（お金を稼ぐため）と財布とケータイを持って家を出た。

僕にとつての宝物であるゲームを大量に売りさばき、デートに支障が出ないくらいのお金（戦利品）を確保した僕は、集合場所である街の噴水の傍に立って姫路さんを待っていた。

明久「やっぱり、少し早かったかな…」

結局、いつもの私服で来てしまったし…。

明久「大丈夫。自分に自信を持つんだ…。僕は昔から姉さんに心を鍛えてもらってたじゃないか…。大丈夫。ちよつとやそつとじゃ僕の心は折れないぞ…」

瑞希「なにを呟いてるんですか？」

明久「おお！？ひ、姫路さん来てたんだ…」

ビックリしたあ…。自分の世界にトリップしてたから、全然気づかなかつたよ…。

瑞希「はい。ところで、明久君…その…私の恰好、おかしくないですか…？」

姫路さんがスカートの裾を指でいじりながら問いかけてくる。か、可愛い！！仕種の一つ一つに可愛さを感じられる！！

『おかあさーん。どうしてあのお兄ちゃんの息は荒いのー？』
『シッ！！見ちゃいけません！！』

落ち着け。落ち着くんた僕。このままじゃ僕は同級生の私服で興奮する変態になつてしまつ…。

明久「うん。似合ってるよ。凄く可愛い」

瑞希「ホ、ホントですか！？良かったです…／／／」

よし。うまくいったぞ…。でも、どうして姫路さんの顔は赤いんだろ？走ってきて疲れたとか？今度から気を付けさせないと…。

瑞希「どこから廻りますか？」

明久「そうだなあ…姫路さんが行きたいところでいいよ」

僕的には楽しんでる姫路さんを見るのが唯一の楽しみのようなものだからね。とは口にしない。

瑞希「じゃあ、見たい映画があるので映画館に行きましょう」

明久「そうだね。じゃあ、行こうか」

映画館はこの近くのショッピングモールの2階にあつたはずだ『ギョッ』からつて…

明久「ひ、姫路さん？何で僕の手を握ってるのかな？」

そう。僕の左手は姫路さんの右手によって塞がれたのだ。

うう…姫路さんの体温が直に伝わってくる…こゝこれはまるで…

明久「（恋人同士みたいじゃないか…）」

瑞希「ふえ？何か言いましたか？」

明久「いやいやいやいや別にも言っていないよ!？」

瑞希「そうですか？なら、早く行きましょう」

ひ、姫路さん!？手を繋ぐだけならまだしも、う、腕に抱き着くのは反則じゃないかな!？

何か柔らかいものが腕に当たってるし…。

僕はこみ上げてくる赤い衝撃に必死に耐えながら、映画館へ向かった。

明久「で、姫路さんが見たい映画ってどれ？」

必死の思いで映画館にたどり着いた僕は姫路さんにそう尋ねた。

瑞希「あの…これなんですけど…」

そう言つて、ある1つの映画を指差す姫路さん。

どれどれ……………『恋はまるでスタンガン』か…。何でこの題名にしたんだろう？この映画の監督さんはちょっと疲れてたのかな？それに、何故かある1人の友人を連想させる題名だし。

瑞希「じゃあ、高校生代金で…」

明久「あ、姫路さん。僕が払うよ」

瑞希「え？でも、明久君はお金が…」

明久「大丈夫。今日は余裕で使えるぐらいのお金を持ってきてるからね」

その裏側では大切な仲間たち（ゲーム）との悲しい別れがあったというのと言わない方がいいだろう。

瑞希「そうですか…ありがとうございます…」

明久「えーっと…高校生代金は…」

店員「カップルのお2人にはこの【恋人料金】というものがありませんが」

明&瑞「こ、恋人!?!」

店員「はい…もしかしてお2人は恋人同士じゃないですか…?」

明久「はい「恋人ですっ!!」それで…姫路さん!?!」

今凄いい顔をしていたような…気のせいかな？しかもスツゴク必死だったし…。

店員『では、お2人の席はこちらとなっております。楽しんできて

くださーい』

僕らは指定された席に着き、映画を楽しんだ。

僕と姫路さんと初めてのデート（後書き）

「実は僕、姫路さんのことが」

B y 吉井明久

僕と姫路さんと決死の告白（前書き）

「私は…明久君を…吉井明久君のことが

」

B y 姫路瑞希

僕と姫路さんと決死の告白

映画を観終わった僕らは、昼食を兼ねて、近くの喫茶店に来ていた。

瑞希「感動しましたあ」

僕の目の前に座る姫路さんが恍惚とした表情で言う。

明久「うん。予想外に面白かったよね」

映画はスゴク面白かったけど、結局最後まで題名と内容が一致することはなかった。

明久「で、次はどこにいきたい？」

瑞希「次は明久君が行きたいところに行きましょう。私も明久君の楽しむ顔が見たいです」

僕「の行きたいところか…。あ、そうだ。あそこに行こう。」

明久「じゃあさ、ゲームセンターに行かない？」

瑞希「はい。分かりました!!」

僕と姫路さんは昼食を済ませ、ショッピングモール内のゲームセンターに向かった。

ゲームセンター内は休日ということもあってか、凄い賑わいを見せていた。

明久「じゃあ、まずは……姫路さん？」

姫路さんはある一つのUFOキャッチャーに目が釘付けになっていた。

明久「おい。姫路さん？」

姫路さんの顔の前で手を振る。

瑞希「…ハッ!? あ、明久君!? ど、どうしたんですか!？」

明久「いや、姫路さんがぼーっとしてるみたいだから…」

瑞希「え!?! い、いや…違うんです!?! 別に私はこの商品が欲しいというわけではなくて…」

顔を真っ赤にして否定の素振りを見せる姫路さん。

明久「とってあげようか？」

僕はUFOキャッチャーは得意だし、そんなに出費はないだろう。

瑞希「い、いいんですか？」

明久「いいよ。僕からの日々のお礼だと思ってよ」

財布から100円を取り出し、スリットに入れる。

どうやら、このゲームは一本の棒で商品を引き掛ける仕様になっているらしい。

姫路さんが狙ってたのは……ああ。あの雪うさぎの腕輪だね。

僕は慎重に棒を動かし、腕輪の輪の部分に通す。

クレーンがあがると、腕輪も上がる。どうやら、上手くいったみたいだね。

明久「はい。姫路さん」

僕は戦利品の腕輪を姫路さんに渡す。

瑞希「あ、ありがとうございます。大切にしますね？」

いや、100円で採れた商品を大切にする必要はないと思うんだけど…。

~~~~~

そのとき、僕のケータイの着信音が鳴った。

明久「ちよつと、ごめんね」  
瑞希「はい」

姫路さんに断りを入れ、ケータイを開き、電話に出る。

明久「もしもし？」

劉真『俺だ。調子はどうだ？』

明久「順調だよ。で、どうしたの？」

劉真『こつちの準備も終わったから戻って来いって言おうとしてたんだよ。お前らは気づいてないと思うが、もう5時を回ってるしな』

嘘!?

僕は腕時計を確かめる。

<<17:27分>>

思ったより、長い時間ショッピングモールにいたみたいだ。

劉真『6時には戻って来いよ。折角の準備が無駄になっちゃう』

明久「う、うん。分かったよ」

劉真はそう言うと、電話を切った。

瑞希「誰からですか？」

明久「ん？劉真からだよ。そろそろ夕飯だから、戻って来いってさ」

あえて戻る理由は夕飯ということにしておいた。劉真たちの準備したものをよく知らないし、嘘はついてないと思うからね。

瑞希「もう、終わりですか…」

露骨にしよんぼりする姫路さん。

明久「よかつたらさ…また2人で遊びにいかない？」

ここで、デートの約束をすれば、また2人で出かける口実ができる  
！！

瑞希「ふえ！？い、良いんですか？」

明久「うん。僕もなんだか物足りないって感じだしね」

瑞希「ぜ、是非ともお願いします！！」

明久「うん。じゃあ、みんなのところに帰ろうか」

瑞希「はい！！」

僕らはそれぞれ戦利品を手に入れて、劉真の家に戻った。

劉真の家に向かうと、ムツツリー二と工藤さんの2人がドアの前に立っていた。

瑞希「あら？愛子ちゃんに土屋君。どうしたんですか？お2人も一緒に出掛けてたとか…？」

姫路さんがいきなり核心を吐く疑問を2人にぶつける。

愛子「そ…そうなんだよ！！康太君のカメラ探しに付き合ってたね！！！」

康太「……………愛子に手伝ってもらってた」

瑞希「え？『康太君』に『愛子』ですか…呼び方が変わりましたね」

姫路さん、流石だよ。僕も気づいていたけど2人の為にあえて口にしなかったというのに…。

愛子「え！？べ、別に深い意味はないよ！？ねえ、康太君！！」

康太「……………ただの気まぐれ」

瑞希「ふーん…」

姫路さんそこらへんにしてあげて！！2人のライフポイントはもう0だから！！

ガチャ

雄二「お前ら、こんなところで何やってんだ？」

姫路さんの怖ろしさを実体験していると、雄二が家から出てきた。

明久「えっと…か、鍵が無かったからどうやって入ろうか迷ってたんだよ!!」

雄二「インターホンを押せばいいだろうが」

僕のバカ。それぐらい人類の常識じゃないか。

雄二「はあ…いいから、早く上がれ。せっかく作った飯が冷めちゃう」

あれ？やっぱり夕飯の準備をしていたのかな？でも、それが準備だっていうのはなんか辻褄が合わないような…。

愛子「は、早く上がろうよ!!」

康太「……………同意見。（バタバタ）」

工藤さんとムツツリーニが姫路さんから逃げるように家に駆けこんでいく。

明久「姫路さん。じゃあ、僕らも上がろうか」

瑞希「そうですね…。愛子ちゃんには後でじっくりとO・H・A・N・A・S・H・Iすればいいですからね…」

何でだろう。最近、姫路さんの笑顔に可愛さと綺麗さの他に、凄くヤバイものを感じられるのは気のせいだろうか。

僕らは2人の後を追いかけるようにリビングに向かった。

リビングに向かった僕らを出迎えたのは、多種多様の料理の数々だった。

明久「凄いね…」

思わず感嘆の声を漏らす。

秀吉「おお、明久か。どうじゃ？ワシと劉真と優斗と雄二で作ったのじゃ」

優斗「秀吉はほぼ手伝いだっただけだな」

秀吉「それを言われると痛いのじゃ…」

劉真「ほらほら、そんなところで漫才してないでさっさと席についでくれ」

巨大な皿を持った劉真が僕らを席に促す。

劉真「いくぜ！！今日のメイン料理。俺と雄二が必死に捕まえた野生の黒毛和牛の焼肉だ！！」

ドン！！とテーブルの中央に大量の肉が乗った皿を置く劉真。

美波「どこに野生の黒毛和牛なんていたのよ!？」

劉真「企業秘密だ」

雄二「あまり聞かないでくれ。話したくない…」

雄二「…一体何があったんだろう。霧島さんから逃げ切った後よりも疲労してる様に見える。」

劉真「じゃあ

」

僕たちは手を合わせ

「「「「「「「「「「「「「「いただきますっ!!」「」「」「」「」「」「」

親睦会最後の夕食を堪能した。

夕飯を食べ終えた僕はマンションの近くの公園に来ていた。

ちよつと食べすぎちゃって夜風に当たりたくなつたからだ。

明久「告白、か…」

正直言つと、まだ告白のセリフは考えてない。というか、考える時間も余裕もなかった。

明久「劉真に電話したいけど、これを劉真に頼っちゃったら、僕の告白じゃなくなるし…」

ブルツ

うう…ちよつと寒くなつてきたなあ。そろそろ家に帰ろつかない。公園から出ようとすると、入り口に誰かが立ってるのに気付いた。

明久「ひ、姫路さん！？こんなところでなにしてるの!？」

そう。そこには家にいるはずの姫路さんが立っていた。

瑞希「え？神無月君が『明久が公園でお前を待ってる。大事な話があるそうだ』って…」

あのお節介野郎の仕業か…でもグッジョブだ。これで2人きりになることができたし。

明久「とりあえず。ベンチに座ろつか」

僕は姫路さんと公園のベンチに腰掛ける。

瑞希「で、話つてなんですか？」



早速来たか。どうする僕？告白のチャンスは今しかないぞ。せつかく、劉真がこの状況を作ってくれたんだ。最大限に活用しないと…。

明久「あのさ。僕が試召戦争を始めた理由を知ってる？」

瑞希「あの設備が嫌だったからじゃ…？」

明久「それもあるけど、ホントはね

これまでずっと隠し続けてきたことを本人に告げる。

明久「 姫路さんのためだったんだ」

瑞希「……………え？」

明久「姫路さんは学力で言えばAクラス入り確実なのにあんな廃屋のようなFクラスで一年間過ごすことになっちゃって、これはあんまりだと思っただよね…」

瑞希「明久君…」

明久「でも結局失敗しちゃって…ごめんね」

明久「僕がもつと勉強をしていれば、あの戦いはFクラスの勝利だったんだ。自分で始めた戦争なのに自分でまけを誘発してしまうなんて…」

瑞希「そんなことはありません!!」

明久「え？」

瑞希「明久君のせいなんかじゃないです!!明久君は頑張ってた!!拳を駄目にしながらも壁を壊したり、痛みに耐えながらも誰よりも戦ってました!!」

明久「姫路さん…」

瑞希「私は…私は…」

瑞希「そんな優しい明久君のことが大好きなんです!!」

明久「え？」

イマ、ヒメジサンハナンテイツタ？

瑞希「友達としてなんかじゃありません!!一人の異性として…私は明久君を…吉井明久君本人のことを心から愛しています!!」

明久「……………ははっ…姫路さんが先に言っちゃうなんてね…」

これじゃ、僕の苦勞が水の泡じゃないか…。

明久「僕はね、姫路さん…君のことが小学生の時から好きなんだ」

瑞希「!？」

明久「姫路さんは昔から誰よりも頑張っていたよね。勉強でも運動でも…」

僕は知っている。姫路さんがどれだけ頑張ってきたかを…。

明久「だから、言わせてもらおうね」

もう迷わない。僕は決めたんだ。

明久「僕は姫路瑞希を心から愛してる！！」

瑞希「あ、明久君……」

姫路さんが泣きじゃくりながら僕に抱き着く。

瑞希「ずっと……私の気持ちに……気づいてもらえなかったから……」

明久「ごめんね。僕が鈍感だったから……」

瑞希「う……うわああああああん！！！」

僕は泣きじゃくる姫路さんが泣き止むまでその震える肩を抱き続けた。

明久「落ち着いた？」

一時間ほどして、泣くのをやめた姫路さんにそう問いかける。

瑞希「はい…もう、大丈夫です」

明久「そう。じゃあ、みんなのところに帰ろうよ。ここじゃ風邪を引いちゃうかも」

今はまだ春だから夜は少し冷え込むし…。

瑞希「あ、明久君!!」

後ろから姫路さんが僕の名前を呼ぶ。

明久「何？姫路さ

!？」

僕の言葉は姫路さんの唇によって塞がれてしまった。

瑞希「プハッ…これで、今までのチャラです。あと…私の事は今度から名前で呼んでくださいね？」

今…姫路さんが…み、瑞希が…僕にキスを……？

明久「（プシュー）」

瑞希「あ、明久君！？しつかりしてください！！明久君！！」

こんな調子でこれから耐えられるかな…？

僕はいろいろな意味で今後の生活が心配になってきた。

僕と姫路さんと決死の告白（後書き）

「ははは。冗談はよせよ」

B y 坂本雄二

俺と劉真と命がけの狩り(前書き)

「こんな体験は後にも先にもしたくないな……」

B y 坂本雄二

## 俺と劉真と命がけの狩り

明久たちがデートをしている頃、俺は劉真の無茶な行動に付き合わされていた…

劉真「よし。雄二、牛を取りに行こう」

明久とムツツリー二たちが家を出て、他のみんなも遊びやら、買い物やらに出かけたすぐあと、劉真が意味不明なことを言い出した。

雄二「スマン。よく聞こえなかったんだが…」

劉真「正確には、黒毛和牛を捕獲しに行こうってことだ」

雄二「お前その日本語は日常生活では絶対に発することがないセリフだからな!？」

黒毛和牛が捕獲できるわけがない。あれは牧場で育てられる牛のはずだ。

劉真「文句なら後で聞くから、さっさと動きやすい服に着替えてこい」

雄二「マジで捕獲しに行くのか…?」

劉真「大マジだ。しかも野生のな」



もう駄目だ…今日は生きて帰れる気がしない…。

劉真「着替え終わったら、マンションの入り口に来てくれ。車を回しておくから」

劉真のリッチな発言を背中を受けながら、俺は一旦、家に戻り、ジヤージに着替え、再びマンションに戻った。

マンションに戻ると、リムジンが停まっていた。

雄二「……………」

何でこんなところにリムジンが停まってるんだ？いや、すでに分か

ってるじゃないか。このリムジンはおそろく

雄二「劉真のか…」

普通、車を回すって言ったらワゴンとか軽自動車で来るだろ。なんでリムジンが迎えに来るんだ。

いつから俺の社会の常識は通用しなくなったんだ？

劉真「おー。雄二の方が早かったか」

俺が頭を抱えていると、マンションからジャージ姿の劉真が出てきた。

肩に猟銃を2丁と馬鹿でかい網を持って。

劉真「乗れよ。現地までは結構かかるから

」

雄二「その装備はなんだあ

！！」

なんで猟銃を持っているんだ！！それより、高校生が猟銃で狩りをする事自体が大きく間違っている！！

劉真「ん？ああ。これぐらい装備を整えないと、死ぬからな」

雄二「お前はただの夕飯に何を期待してるんだ！？」

劉真「肉」

雄二「それならスーパーで買えばいいだろうが！！」

劉真「えー。でも、無料で黒毛和牛が手に入るのに…」

雄二「金持ちが無料という言葉に誘われるな！！」

劉真「ふう…お前ら、雄二をリムジンに乗せろ」

劉真が運転席と助手席に座っている黒いスーツの男たちにそう言う  
と、彼らは車のドアを開け、俺の肩を掴んだ。

マフィア1『おとなしく乗れ』

雄二「嫌だ！！そんな死の匂いがプンプンするような場所には絶対  
に行かぬえ！！」

マフィア2『兄さんの命令は絶対だ』

雄二「どこまで従順なんだテメエらはあ

！！

グペッ」

首筋にチョップを決められた俺は、意識を失った。

雄二「ん…？ここは…？」

確か…劉真の部下のマフィアたちに意識を刈り取られて…

劉真「お、ようやく起きたか雄二」

諸悪の根源が目の前で準備体操をしていた。

雄二「イツシャアアアア！！！！」

劉真「うわ！？危ない！！」

チツ！！俺のキックを避けるとはな。このボンボンがあ！！

雄二「ここはどこだ！？」

俺の周りには一面草原が広がっている。

劉真「神無月家所有の日本地図に載っていない牧場だ」

雄二「また、エライところに俺を連れて来たな…」

劉真「ちなみに、ここにいる動物は別に飼育しているわけじゃないからそこら辺の動物の10倍は凶暴だ」

どうやら俺は地獄に連れてこられたみたいだ。

雄二「こんな危険な場所の黒毛和牛って…もうすでに食われてんじゃないか？」

弱肉強食の中で牛が生きていられるとはとても思えない。

劉真「その心配はないな。ここの黒毛和牛はアフリカゾウを一撃で倒せるほどのパワーを持っているから」

そうかあ…アフリカゾウを一撃で倒すかあ…

雄二「そんな凶暴な牛を高校生2人だけで捕まえられるわけないだろうが!!」

劉真「大丈夫だって。そのためにこの猟銃と網があるんだから」

劉真によると、この猟銃は鉄をも貫通させる威力があり、網はジンベイザメが暴れても壊れないぐらいの強度があるらしい。だから、そんな危険なものを一般家庭に置くんじゃねえよ!!

雄二「はあ…まあ、いいか。で、その黒毛和牛とやらはどこにいらんだ？」

劉真「ん？ああ。えーっと…あれだよあれ」

劉真が指差した方を見ると、巨大な山があった。

雄二「ははは。何を言ってるんだ？あれはどう見ても牛じゃないだ





結果は惨敗だった。俺は突っ込んだ瞬間に弾き飛ばされ、宙を舞った。

劉真「雄二い　　！！」

背中から地面に落ちる。いってえ…やるじゃねえか。牛風情が…。

雄二「大丈夫だ！！それより、アイツを森に　　」

俺は言葉を途中で止めざるを得なかった。なぜなら、牛が劉真に圧倒的に圧されていたからだ。

劉真「おお

！！」



劉真は猟銃ではなく、自前のトンファーで牛の丸太のような前足を殴り続けていた。

劉真「とどめ!！」

劉真のフィニッシュが牛の顔面に叩き込まれる。

牛「ブモオ……」

効いてる…銃が効かないのに、劉真のトンファーのラッシュユで大ダメージを受けてやがる…

劉真「雄二!! アイツの前足にぶっ放せ!！」

雄二「お、応!！」

俺は言われた通りに銃弾を叩き込む。

牛「ブモオオオオオオオオオオオ!!!!」

すると、化け物牛が森に向かって走り出した。

雄二「チィ!!! 森に逃げたぞ!！」

俺たちは森に向かって逃げ出した牛を追いかけに行った。

森の中には歩けば当たるといった具合に罠が張り巡らされていた。

今、俺たちの目の前には巨大な落とし穴に嵌って動けなくなっている巨大な牛がいる。

雄二「もう、絶対にモンハン真似したたる……」

劉真「よく分かったな。この他にも、『しびれ罠』と『大タル爆弾

G』と『撃牛槍』がある」

雄二「すでに要塞レベルじゃねえか……」

すると、劉真が腰のポシエットから手のひらサイズの丸いものを取り出した。

雄二「まさかとは思うが、それは？」

劉真「お前のよく知る、『捕獲用麻醉玉』だ」

もう、ツッコまねえ。コイツの周りで何があってもツッコまねえ……。

劉真「よっほっ」

劉真が暴れまわっている牛の顔面に『捕獲用麻醉玉』を投げる。

劉真「よっほっでりゃあ  
……！」

て、投げすぎだろ！？何発投げればいいんだよ！！

ドスン！！

麻醉玉によって沈黙した牛は地面に崩れ落ちた。

劉真「よし。帰るか」

雄二「こんな巨大な牛、どうやって持って帰るんだよ……」

劉真「まあ、見てなっつて」

パチンッ

劉真が指を鳴らすと、一瞬で牛が部位ごとに切り分けられた。

雄二「……………」

劉真「この森では狩った動物は勝手に切り分けてくれるんだよ」

雄二「……なんでもありかよ……………」

その後、俺たちは牛を持てるだけ持ち、家に帰還した。

その日の夜、この牛を使って焼肉をしたわけだが、

明久「なんか、銃弾みたいなものが入ってるんだけど」

明久の呟きに答えられない俺がいた。

もう、2度とあんなところに行くかよ！！



俺と劉真と命がけの狩り（後書き）

「感想待ってます!!」

B y 神無月劉真

ボクとカメラと彼からの首飾り（前書き）

「べ、別に嬉しくなんかないんだからね!」

B y 工藤愛子

## ボクとカメラと彼からの首飾り

土屋君と2人で買い物に行くことになった。

愛子「これって、デートっていうんじゃない…」

ボクは自分の家の部屋で服を選びながら呟く。

愛子「ち、違うよ！…これはただの買い物物の付添いであってデ、デートなんかじゃ…」

もうやめよう。自分で言っけて悲しくなってくる。

愛子「土屋君は少しでも、意識してくれてるのかなあ…」

ボクはそんな感情にとらわれながらも着替えを済ませ、家を出た。



ボクは集合場所に指定された街のシンボルでもある噴水の傍で土屋君を待っていた。

愛子「集合の一时间前に来ちゃった…どうしよう…」

焦らずにじっくりと服を選んでればよかったな…。あまり自信がないよ…。

康太「……………お待たせ」

ボクが上の空になっていると、初めて見る私服姿の土屋君が目の前に立っていた。

愛子「は、早いね。まだ、集合時間に全然なっていないのに…」

康太「……………それはお互い様」

うう…土屋君に言い負かされるなんて…やっぱり本調子じゃないよ…。

康太「……………どうした？」

いきなり黙り込んだボクを心配そうに見る土屋君。お互いの身長さがあまり無いせいで自分の目の高さに土屋君の目がある。

愛子「な、なんでもないよ!!そ、それより、せっかく早く集合したんだし、買い物に行こうか!!」

康太「……………？まあ、いいか」

ボク達は変な空気になったまま目的の商店街に向かった。

商店街はなかなかの賑わいを見せていた。

愛子「近くに大きなショッピングモールがあるのに、人が多いね」

康太「……………町の人の努力の賜物」

あはは…そう言っちゃうとダメなような気がするんだけど…。

康太「……………今日の目的はココ」

しばらく歩くと、土屋君がある店の前で止まった。

愛子「カメラ専門店…？こんなお店があるなんて知らなかったよ」

康太「……………盗聴器と監視カメラもここで購入してる」

愛子「カメラ以外も売ってるんだね…」

土屋君と何気ない会話をしながら中に入る。よし。普通に会話できてるぞ。これなら安心だね。

店員『いらつしゃい！あ、康太じゃねえか！！また盗聴器でも買いに来たの』

土屋君の隣に立っているボクを見て固まる店員の人。そして、目にも止まらぬ速さで土屋君の傍に行き、耳元で何か話し始めた。

店員「（おいおい、何だ？今日は彼女づれかあ？）」

康太「（……………そ、そんなんじゃない。（ブンブン））」

？。何のことについて話してるんだろう。ここからじゃよく聞こえないや。

店員「よし。今日は大サービスだ！！康太とそこのお嬢ちゃんは全品9割OFFで売ってやるよ！！」

土屋君との会話に何があったんだろう？サービスと言えないぐらいの出血大サービスだ。

康太「……………助かる。工藤も何か選べば？」

愛子「えと…ボクはあまり、カメラのことは分からなくて…」

康太「……………俺が教えてやる。ついてこい」

親切だなあ、土屋君は…。

ボクはそれから土屋君の説明を受け、カメラと録音機を買うことに

なった。

康太「……………今日はついでる」

さっきのカメラ屋さんで大量のカメラを安価で買った土屋君はほくほく顔でボクの隣を歩いていった。

愛子「よかったね　　あ」

ボクの視界に1つのお店が入る。  
そのお店は最近、ケーキが美味しいとかで有名になっているお店だ。

康太「……………行きたいのか？」

土屋君がボクの顔を見てくる。

愛子「そ、そんなことないよ!!ボクはただ…」

康太「……………ちよっと待ってる」

そう言うと、土屋君はそのお店まで歩いていき、ケーキを大量に買って戻ってきた。

康太「……………どれがいいか分からなかったから」

ケーキが入った袋を持ち、そっぽを向く土屋君。

愛子「え?あ…うん…ありがとう土屋君…」

康太「……………康太」

愛子「え?」

康太「……………土屋じゃなくて康太でいい」

それって、名前で呼べってこと!?!これは凄い進展だよ!!

愛子「ははっ。ありがとね康太君。ボクのことばは愛子でいいよ」

康太「……………それは恥ずかしい」

愛子「あれえ?ボクにはそんな恥ずかしい真似をさせたのに、自分にはできないのぉ?」

こんなことを言ってるけど、顔が赤くなるのが自分でも分かるくらい恥ずかしかった。

康太「……………あ…愛子……………」

愛子「ふえ?あ…ありがとう……………」

お互いに気まずい雰囲気漂う。

しばらくその状態で商店街を歩いていると、突然、康太君が歩みを止めた。

愛子「ど、どうしたの？」

康太「……………買いたいものができた。ちょっと待ってて」

康太君はそうボクに告げると、目の前のアクセサリーショップに入っ  
ていった。

愛子「どうしたんだろう。急にアクセサリーショップなんかに行っ  
て…」

まさか…いや、そんなわけないよね。あの康太君がそんなことす  
わけ…

でも、もしかしたら…………

愛子「って、ボクは何を考えてるんだあ!!!」

恥ずかしさのあまり、頭を抱える。

康太「……………どうした？」

すると、目の前には買い物から帰って来たのか、康太君が不思議そ  
うな目でボクを見ていた。

愛子「な、なななななんでもないよ!？」

康太「……………はつきり話せてない。深呼吸しろ」

康太君の言つとおり深呼吸をすると、だんだんと落ち着いてきた。

愛子「ふう、ありがとう。で、何を買ってきたの？」

康太「……………これ」

康太君が見せてきたのは緑の透き通った首飾りだった。

愛子「ふああ…綺麗だね…」

康太「……………これは、今日の買い物に付き合ってもらったお礼」

そう言つて、ボクの首にその首飾りを付ける康太君。

康太「……………うん。よく似合ってる」

愛子「え…あの…その…」

康太「……………気に入らなかった？」

康太君が心配そうな顔でボクの顔を覗き込む。

愛子「い、いや……………スゴク嬉しくて…その…ありがとう／＼／＼」

康太「……………気にするな」

康太君から首飾り貰っちゃった。嬉しいなあ。大事にしよう。

くくく

ボクが有頂天になっていると、康太君のケータイの着信音が鳴った。

康太「……………すまん」

愛子「どうぞどうぞ」

康太君はボクから少し離れて、電話をし始めた。  
あ。もうこんな時間だ。そろそろみんなのところに戻ったほうが  
いかも……

康太「……………分かった」

電話を終えた康太君がこちらに戻ってくる。

愛子「誰から？」

康太「……………秀吉から。そろそろ戻って来いって」

やっぱりね。でも、もう終わりかあ……もう少しだけでもいいから康  
太君と2人で居たかったなあ……。

康太「……………またカメラを買いに行くかもしれない」

愛子「え？」

康太「……………そのときも付き合ってくれるか？／／／／」

康太君がそっぽを向く。もう、照れちゃってさ。素直じゃないなあ。

愛子「しょうがないなあ。ボクがまた安くしてあげるよ／／／」

そして、ボクも本当に素直じゃない。



ボクとカメラと彼からの首飾り（後書き）

「……………大事な話がある」

B y 土屋康太

ボクと俺の本当の気持ち（前書き）

「まったく… 2人とも鈍感だな…」

B Y 神無月劉真

## ボクと俺の本当の気持ち

商店街からの帰り道、康太君がふと足を止めた。

愛子「どうしたの？」

すると、康太君はこちらに手をつきだし、

康太「……………荷物」

愛子「え？」

康太「……………持ってやる」

愛子「ええ！？でも、康太君だってたくさん持つてるよ！？」

康太君は大量のカメラとケーキの入った袋を持っていて、片手はすでに塞がっている。

どうしよう…？どうすれば、康太君の負担を減らしてあげられるかな…

康太「……………大丈夫。慣れてるから」

そう言っつて、一歩も引き下がらない康太君。そうだ！！

愛子「こ、こっちの手はボクが塞いであげるよ！！」

ボクは顔がすごい勢いで火照るのを感じながら、康太君の左手を握る。

康太「……………！？」

愛子「こ、これなら、両手が塞がってるから、荷物は持てないよね」

康太「……………でも」

愛子「い、いいから！！は、早く戻ろっよ！！」

康太君の赤い顔を見ていたら、恥ずかしさが込み上げてきてつい早足になってしまっう。

康太「……………ひ、引っ張るな……………」

本当はもつと長く手を握っていたい。

ボクのこの世でたった1人のいとしい人の体温をいつまでも感じていたい。

だって、手を繋いでいる間は康太君はボクだけのものだから。

ああ…この時間が永遠だったらどんなにいいか…。

でも、時間は進むもの。

神無月君のマンションは商店街からそんなに遠くないところにあるので、早足で歩くとすぐに着いてしまっう。

ボクは思わず足を止める。

康太君がボクに疑問の視線を向けているのがボクには辛かった。

おそらく、ボクの彼に対する気持ちは本人に伝わっていない。

このマンションに入れば、康太君の体温を感じることができなくなっってしまう。

ボクは怖いんだ。

康太君がどこか遠くに行っってしまうことが。

本当のボクは弱くて身勝手な人間なんだ。

好きな人を手放したくない。誰にも渡したくない。

そんな気持ちが日に日に強くなってくる。  
まるで、ボクがボクでなくなる様に。  
まるで、工藤愛子本人が別の誰かになるように……

ぐい

そのとき、誰かがボクの腕を引っ張り、抱き寄せた。

愛子「え……？」

それは康太君だった。今まで、離れた距離でしか見たことない彼の顔が今はすぐ目の前にある。  
顔が赤く染まっていくのが自分でも分かった。

康太「……………ス、スマン…悲しそうな顔、してたから……………」

ボクの赤い顔を見て、康太君が手を放す。

ボクらの間に気まずい雰囲気漂う。

康太「……………も、戻るぞ……………」

愛子「うん……………」

ボクらは気まずい雰囲気のまま、神無月君の家に向かって歩いていった。  
った。

そのとき、ボクらは気づかないうちに手を繋いでいたんだ。

愛子 side out

康太 side in

愛子の悲しそうな顔を見た瞬間、思わず抱きしめていた。なんでそんな行動をとったのかは自分でもよく分からない。おそらく、愛子にかける最善の言葉が見つからなかったからだと思う。

俺たちは劉真の部屋に向かった。

劉真の住むマンションは部屋の一つ一つが大きいせいか、6階までエレベーターが着くのが異様に長い。

エレベーターの中は白い照明で照らされていて、俺たちが違う空間に放り出されたような感覚に囚われてしまっていた。

エレベーターが6階に着き、劉真の部屋の前に歩いていく。その時、俺がまだ愛子の手を握っていることに気が付いた。

愛子の方は気づいていないようで外の夕焼けをぼーっと見ている。俺は考えていた。

この手を離すか離さないか。

俺はこの手を離して本当に良いのだろうか。

後悔はしないだろうか。

いや、おそらく後悔するだろう。

この手に伝わってくる、たった1人の愛しい人の体温が少し冷えた体を温めてくれる。

俺の愛子に対する思いは伝わっているのだろうか。

いつも俺に見せてくれるあの天使のような笑顔はどんな気持ちから向けてくれているのだろうか。

ただの友人としてなのか、それとも異性としてなのか……。

瑞希「あら？愛子ちゃんに土屋君。どうしたんですか？お2人も一緒に出掛けていたとか……」

自分の世界にトリップしていると、明久と姫路がエレベーターの方から歩いてきて、俺たちに声をかけてきた。

愛子「そ…そうなんだよ！！康太君のカメラ探しに付き合ってたね！！」

康太「……………愛子に手伝ってもらってた」

思わず握っていた手を離す。幸運にも明久たちにはばれていないようだ。

瑞希「え？『康太君』に『愛子』ですか…呼び方が変わりましたね」

俺は自分たちが墓穴を掘ったということにその時気が付いた。

俺と愛子の顔が熟れたトマトのように赤くなる。

愛子「え！？べ、別に深い意味はないよ！？ねえ、康太君！！」

康太「……………ただの気まぐれ」  
瑞希「ふーん……」

姫路は変なところで鋭さを見せてくる。明久の気持ちに気づけないぐらい鈍感なのに……。

雄二「お前ら、こんなところで何やってんだ？」

俺がどうやって姫路の猛攻を避けようか考えていると、雄二がドアを開けて呆れた顔を見せた。  
気のせいか疲れているように見える。

明久「えっと……か、鍵が無かったからどうやって入ろうか迷ってたんだよ……！」

雄二「インターホンを押せばいいだろうが」

明久の相変わらずのバカ発言に思わず笑いが出る。コイツはどんな時でも人を笑わせてくれる。

雄二「はあ……いいから、早く上がれ。せっかく作った飯が冷めちまう」

しかしこのチャンス、生かすべきっ……！！

愛子「は、早く上がるっよ……！」

康太「……………同意見。（バタバタ）」

俺たちは姫路から逃げるように部屋に上がった。

瑞希『愛子ちゃんには後でじっくりとO・H A・N A・S H Iすれ



ばいいですからね…』

後ろから聞こえてきた姫路の言葉が俺には悪魔の死の呪詛に聞こえた。

夕飯は最後というのもあってかなり豪勢だった。特に、劉真と雄二が捕獲してきたという黒毛和牛は絶品で量も多かった。

美波「どこに野生の黒毛和牛なんていたのよ!？」

劉真「企業秘密だ」

雄二「あまり聞かないでくれ。話したくない…」

おそらく、劉真のあの牧場で獲ってきたのだろう。こんな巨大な牛、あそこ以外に生息してるはずがない。

俺は満腹になったので席を立つ。

優斗「ん？ムツツリーニ、どこに行くんだ？」

最近、本名を呼ぶ人が減ってきた気がする。

康太「……………ちょっと風に当たってくる」

俺はマンションの近くの海岸に歩いていった。

康太 s i d e o u t

愛子 s i d e i n

康太君が風に当たるために外出した。

外はまだ冷えるというのに、薄いシャツ一枚で。

劉真「またアイツは…」

神無月君が頭を掻きながらそう呟く。

愛子「またってどういこと?」

ボクはついそう質問してしまった。

劉真「アイツ、外に出るときはよく上着を忘れんだよ。わざわざ上着届けるこっちの身にもなれってんだ…」

神無月は愚痴りながらも部屋から一枚のジャンパーを取り、玄関に向かう。

愛子「ま、待って!!」

劉真「ん?」

愛子「そのジャンパー、ボクが届けてあげるよ!!」

つい、そんなことを口走っていた。

劉真「そうか?なら、頼むよ。アイツは多分海岸にいると思うからな」

愛子「うん!!」

ボクは神無月君からジャンパーを受け取り、家を飛び出した。

劉真「頑張れよ…康太に工藤…」

神無月君の声が聞こえたけど、内容まではよく分からなかった。

海岸に行くと、康太君がぼーっと海を見ていた。  
彼の中性的な顔が月明かりに照らされて思わず目を奪われてしまう。

つと、そんな場合じゃなかった…

ボクは康太君の元に走った。彼は考え事をしているのかボクが近づいたことに気づかない。

こういつ時つてイタズラしたくなるのはしょうがないよね。  
ボクは自分に言い訳をして、来るときに買っておいたコーヒーの缶をポケットから出す。

愛子「えいつ」

その缶康太君の頬に押し付けた。

康太「……………！?!?!?!?（ビクウツ）」

驚きのあまり飛び上がる康太君。

愛子「グッドイブニング康太君。忘れ物を届けに来たよ」

ボクは紙袋からジャンパーを取り出し、康太君に渡す。

康太「……………礼を言う」

愛子「いいっていいって。じゃあ、遅くならないうちに帰ってきてきなよ？ボクは先に戻るから」

ボクが家に引き返そうとすると、康太君がボクの手を掴んだ。

康太「……………愛子」

名前を呼ばれ、思わず胸がドキツとする。

愛子「な、何かな？」

康太「……………大事な話がある」

愛子「大事な話？」

大事な話って何だろう？

康太「……………俺はお前のことが好きだ」

愛子「……………え？」

今、康太君が信じられないことを言った気がする。

康太「……………俺は愛子のが好きだ」

愛子「……………じよ、冗談、だよね…………？」

康太君がボクのことを好き？そんなのあり得るわけないって……！だつて、康太君はボクのライバルで

康太「……………これは、俺の本気だ」  
愛子「……………ッ!!」

思わず膝から崩れ落ちる。  
涙が一粒目から零れ落ちる。

康太「……………最初は、少し気になる程度だった。でも、試召戦争や今回の親睦会、それとお前との模擬試召戦争を通じて、俺のお前に対する気持ちはどんどん確かなものになっていった」

無口な康太君が珍しく饒舌に話す。

ボクは康太君の言葉の一つ一つを噛み締めるように聞いていた。  
涙が雨のように流れる。

康太「……………俺は、愛子の…工藤愛子の絶対に揺るがない努力に心を奪われた」

膝に落ちた涙が月明かりに照らされて輝く。

康太「……………だから俺はもう一度言う。俺は工藤愛子、お前のこととを愛している」

嬉しかった。

彼がボクなんかに興味が無いと思っていたから。

悲しかった。

ボクが彼の気持ちに気づけなかったから。

辛かった。

彼がボク以外の人と一緒にになるんじゃないかと思っていたから。

だから、ボクは彼に…土屋康太にこう返そう。ボクの気持ちの全部を込めて。

愛子「ボクも…君のことが心から好きだよ…バカ…」

ボクの初恋はぐだぐだだけど、今までで一番幸せな結果になった。





ボクと俺の本当の気持ち（後書き）

「楽しかったね!!」

B y 吉井明久

俺とみんなと親睦会最終日(前書き)

「個性的な奴らだと改めて思ったよ」

B Y 神無月劉真

## 俺とみんなと親睦会最終日

どうやら、アキと康太の告白はうまくいったようだ。

まあ、失敗するなんて微塵も思ってたし、友人として歓迎したいんだが…

劉真「朝からイチャラブしすぎだろ…」

起床し、朝食を作るためにリビングに来た俺を出迎えたのは姫路と工藤に朝食を食べさせてもらっているアキと康太が醸し出すピンクな空気だった。

雄二「まつたくだな」

秀吉「しょうがないじゃろ」

優斗「ま。成功したんだし良しとしようぜ」

各々の気持ちを口に出す男子陣。

優子「なに、朝からいちゃついてんの？」

翔子「……羨ましい」

美波「ここってリュウの家だったわよね…」

帰る準備を済ませたのか、制服姿の女子陣が呆れ半分羨ましさ半分といった表情をしている。

美波、それを気にするのは今更だ。

劉真「おはようバカップルども。俺たちも朝食を食べてもいいか？」

俺はリビングに繋がっているキッチンに行き、牛乳を取る。

明久「り、りりり劉真！？それにみんなまで！？」

秀吉「朝からオアツイのう。(ニヤニヤ)」

優斗「ムツツリーニモイチャイチャしてんなよ。(ニヤニヤ)」

康太「……………別にしてない。(ブンブン)」

優子「あら、愛子ったら羨ましいことしてるわね。(ニヤニヤ)」

愛子「優子…！」

美波「みーずーきー？昨晚の事、ぼっきりとお話ししようじゃない」

瑞希「そこは『じつくり』とか『ゆっくり』とかじゃないんですか！？」

絶対面白がってるよなコイツら。

翔子「……………雄二。あーん」

雄二「止める！！自分で食べるから！！だからその禍々しい色のジュースを机に置け！！」

雄二も雄二で大変なことになってる。

劉真「はあ…。お前ら、よく聞けよ」

俺は飲んでいた牛乳を冷蔵庫に戻し、みんなの注意をこちらに促す。

劉真「今回の親睦会の感想をみんなに提出してもらおう」

「……………な、なんだってえ」

！？「……………」

「……………」

明久「劉真！！そんなの聞いてないよ！！」

劉真「そударうな。今初めて言ったから」

雄二「なんでそんなことを思いついたんだよ!!」

劉真「んー…きまぐれ?」

明&雄「きまぐれでそんなふざけたことをさせるんじゃないやねえ!!」

劉真「ふざけてなんかいないさ。ただな、俺は思ったんだよ。今回の親睦会ではいろいろなのがあった」

アキと康太に視線をやる。

あ。顔をそらしやがった。

劉真「それを通じて俺はみんなの気持ちがどう変わったか、とか何を学んだか、とかそんなことを知りたいだけなんだ」

美波「…本音は?」

劉真「ぶつちやけ、お前らの恥ずかしい本音を知りたいだけだ」

明久「この悪魔!!君に人としての感情はないのか!!」

劉真「あるさ。たとえば、『もともと声が似ているのに最近、態度まで音無弓弦に似てきたからどうしよう』って日々考えてるし」

雄二「そんなこと誰も思ってたねえし、今の質問の答えになってたねえし、そもそもお前が決めることじゃねえ!!」

劉真「というわけでよろしくな」

雄二「俺の話を聞けえ」

「!!」

俺は雄二の叫びを聞き流しながら部屋へ戻った。

2時間後

劉真「文句を言った割には全員提出してる……」

アキたちは家に帰宅し、俺の家には俺と美波の2人だけとなった。

美波「じゃあ、早速読んでいきましょうか」

劉真「そうだな」

俺は紙を綺麗に折りたたんで箱の中に入れ、シャッフルし、紙を選  
ぶ。

劉真「えーっと……1人目は　　木下姉か」

可愛らしいピンク色の紙を箱から引き出す。

美波「早く読んでよっ」

劉真「分かった分かった。えーっと……」

『今回の親睦会ではなんだか影が薄いと感じてしまった。何でかは分からないけどあまり出番が無かったと思ってしまっう2日間でした』

劉&美「……………」

劉真「一発目からメタで重い内容が飛び出してきたな…」

美波「優子…そんなことない……………ごめんなさい。フォローの言葉が思いつかないわ」

劉真「次行くぞ」

箱から2枚目の紙を取り出す。

これは、多分…

劉真「優斗のだな」

美波「何で分かるの？」

劉真「内容を見たらわかるぞ」

『楽しかった』

美波「……………」

劉真「力強い字と短いながらも正直な文がアイツだと教えてくれるようなモンだ」

美波「次行きましょ……………」

美波があまりの呆れに憔悴してる。

そんなんじゃ全部読むまで持たないぜ…

えーっと次は……………

3枚目は広告の裏側を使った紙だ。

劉&美「アキだな（アキね）」

劉真「別に紙ぐらい頼めば貸してやるのに…」

美波「アキの節約根性そのまま表れてるわね…」

劉真「じゃあ読むぞー」

『今回の親友会ではいろいろなことを学び、体験した。一日目は劉真と美波の羨ましい秘密を知ってしまい、その後は銭湯で瑞希のあられない姿を目撃するなど驚きの連続だった。でも、みんなの中は確実に深まったと思った。二日目は瑞希との初めてのデート。最初はお互いに緊張していて、ガチガチだったけど、凄く楽しかった。その後の夕食では久しぶりの焼肉で限界まで食べた。雄二がすごく憔悴してたけど、一体どうやってあの牛を捕まえてきたの？今度は僕も連れて行ってほしいな。その後は…プライバシーなどところだからここまでにしとくね。本当に楽しかった!!』

劉真「アキらしい感想だな。しかも、また親友会って書いてるし」

美波「そうね。で、この伏せてある部分は何かあったの？」

劉真「黙秘権」

美波「まあいいわ。今度、ぼっきりと聞き出すから。次行きましょ」

劉真「できれば『じっくり』でお願いします」

次は…

4枚目は…って2枚取れたし…まあいいか。

劉真「次は康太と工藤のだな」

美波「アンタ、もうめんどくさくなってるでしょ」

劉真「そのような事実は一切確認されておりません」

美波「貸して。次はウチが読むわ。えっと…」



『感無量』

美波「……………」

劉真「簡潔かつ全てを表した最高の言葉を選んだな。アイツらしいや……」

美波「次よ次!!」

『年齢制限大丈夫そうじゃないから伏せておくよ』

美波「アンタら2人は何をやってたのよお

!!」

劉真「お、落ち着け美波!! 紙が破れるから!!」

修羅化しそうになっている美波を宥める。

ふう……やっぱりあの個性的な連中の感想文は面白いものばかりだな……。

劉真「次行こう、な?」

美波「リュウがそう言うなら……」

えーっと、6枚目は……

美波「ねえ、その禍々しい黒の紙ってまさか……」

劉真「おそらく霧島のだろうな。読むぞー」

『私と雄二の甘い部分が少なかった気がする』

美波「だから、メタな発言をしてんじゃねえよ!!」

劉真「美波！！キャラが！！キャラが変わってるから！！」

怖かった。今の美波の顔はスゴク怖かった…。

7枚目が…

美波「次の紙は普通ね」

劉真「雄二のだろうな。ていうか紙だけでここまで一喜一憂できる  
ってところがおかしいだろ」

雄二のは何て書いてるんだろう。

『牛の怖さが身に染みて分かる親睦会だった』

劉真「……………」

美波「それは何か心当たりがある目ね」

劉真「正直悪かったと思ってる」

美波「あえて聞かないであげるわ。次は…」

美波が箱から8枚目を引く。

美波「このきれいな字は…瑞希ね」

劉真「ホントにきれいな字だな。どっかの誰かさんとは大違い」

美波「喧嘩売ってんの？」

劉真「腕が！！折れる折れる！！」

美波「はあ…またあの拷問部屋を使う必要があるそうね」

劉真「いつも美波がやられてるような気がするけどな。あの部屋で  
は」

美波「（カアアアア）／／／／よ、読むわよ！！」

『明久君との仲が深まった親睦会になりました』

美波「仲が深まったとかいうレベルじゃないから！！友人通り越して恋人まで発展しちゃったから！！」

劉真「流石だな。天然な発言がここまで美波を崩壊に追い込むなんて」

美波「次、いつてちょうだい」

劉真「りょうかい」

次のは…何だ？この意味不明な色の紙は…

美波「消去法で木下でしょ」

劉真「だよなあ…」

アイツがこんな変わった紙を選ぶなんて…

まあ、気にしてもしょうがねえしさつさと読むか…。

『大雅さんとの電話が楽しかった』

美波「親睦会の感想を書けよ！！」

劉真「美波！！キャラが！！」

凄い破壊力だ。美波を一瞬で裏・美波に変貌させるとは…。

ま。いつものことだし気にしない気にしない。

残りの2枚は一気に読むか…

美波「？ 1枚ずつじゃないの？」

劉真「どうせ俺と美波のしか残ってないんだ。お互いのをそれぞれ

読もうぜ」

美波「フフッ。そうね…」

そして、俺たちは最後の一枚を読んだ。

『みんなとの親睦会も楽しかったけどやっぱり

』

『アイツらとの親睦会も良かったけどやっぱり

』

『『リュウ（美波）と一緒に入れたことが一番良かった』』

劉真「よくこんな恥ずかしいこと書けるよな」

美波「あら？それはお互い様じゃない？」

劉真「まっただ」

定番かもしれないが俺たちはお互いに笑いあい、唇を重ねた。

俺とみんなと親睦会最終日（後書き）

「我がFクラスの清涼祭の出し物についてなんだが

」

B y 坂本雄二

俺と中華と清涼祭（前書き）

「プレイボール！」

By 木下秀吉

## 俺と中華と清涼祭

笑いあり涙ありの親睦会から一か月たった今日。

本来なら清涼祭の準備を始めなければいけないこの時期。

お化け屋敷のために教室を改造したり

焼きそばやお好み焼きなど、食べ物系の模擬店をするために料理の勉強を頑張るなど、

いろいろな準備を始めないと間に合わなくなるであろうこの時期。  
俺が属するFクラスは何をしているかというところ

秀吉「プレイボール!!」

準備などせずに野球をしていた。

須川「吉井!!こいつ!!」

明久「勝負だ、須川君!!」

須川「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる!!」

須川、お前正気か!?!ここから場外っていうことはグラウンドの端から端まで飛ばすってことなんだぞ!?!

明久「言ったな!?!こうなれば意地でも打たせるもんか!!」

アキはそう言う足でマウンドを均す。

俺的にはさっさと自分の打順が回ってきてほしいんだけど…。

明久「それ反則じゃないの!?!」

どうやら雄二が危険球のサインを出したようだ。アキの焦り様を見れば一目で分かる。

すると、校舎の方から凄まじいスピードでこちらに走ってくる人物がいた。

西村「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか!!」

我らがFクラスの担任である鉄人こと西村宗一先生である。

明久「げっ!!鉄人!!」

西村「吉井!!また貴様の仕業か!!」

真っ先に疑われるアキは可哀相だと思う。

明久「どうして僕ばかり疑うんですか!? 主犯はクラス代表の雄二です!!」

いや、そこで雄二を売るお前もどうかと思うけどな…まあ、事実だけだ。

明久「違う!!今は球種やコースを求めてるんじゃない!!しかも、それをやったら怒られるのは僕一人じゃないか!!」

さっきから雄二はどんなサインを出しているのだろうか。スゴク気になるところだ。

西村「さっさと教室に戻れ!!まだ学園祭の出し物が決まってないのはFクラスだけだぞ!!」

「「「「「へーい」「」「」「」



俺たちはきのない返事を返し、教室に戻っていった。

雄二「さて、我がFクラスも学園祭である清涼祭の準備をしなくちやいけないんだが」

教室に連れ戻された俺たちは言われた通りに学園祭について話し合うことにした。

そろそろ決めないと拙いってというのが事実なんだけどさ…。

雄二「とりあえず、進行役を決めるからソイツに全権任せた。劉真、よろしくなー」

心からどうでもよさそうな雄二はそう言い残すと、自分の蜜柑箱で昼寝を始めてしまった。

劉真「しょうがねえか…じゃあ、進行役に適任だと思っやつを挙げ

てくれ」

福村『吉井が適任だと思う』

朝倉『坂本でいいんじゃないか？』

近藤『姫路さんと結婚したい』

竹中『ここは須川にやってもらった方が』

次々と名前を出すFクラスの連中。あと近藤、姫路へのラブコールは止めとけアキがスゴイ顔で睨んでるから。

劉真「これじゃきりがねえな…じゃあ、黒板に名前を書くから多数決で選んでくれ」

俺は頭に浮かんだ名前を黒板に書き連ねていく。

1、吉井

2、明久

よし、これでいいだろ。異存は無いはずだ。

須川『うーん…迷いどころだな…』

福村『どちらもバカだからなあ…』

有働『ていうかどっちでもよくないか？クスだし』

明久「こらあ！！そうやって悩んでいるフリをするんじゃない！！しかも、クラスメイトを平然とクス呼ばわりするなんて貴様らは本物のクスだ！！」

アキは自分が人にクズと言ってしまった事に気が付いていない。

劉真「いいから前に出てこい。進行役はお前に決まったんだからな」  
明久「うう…劉真の決め方は理不尽だよ…」

劉真「安心してくれ。自覚はあるから」

明久「もつと悪いよ!!」

劉真「誰かしたい出し物はあるか？」

明久「僕の話聞いてよ!!」

アキの文句を聞いてたら日が暮れてしまっただろっからな。ここはスルーの方向で。

俺の質問に数名が手を上げる。意外だな。少しでもやる気のある奴がFクラスにいるなんて。

劉真「じゃあ、康太」

康太「……………（スック）」

康太が静かに立ち上がる。俺的にはもつとコンタクトをとってほしいんだけど…。

康太「……………写真館」

明久「ムツツリーニの言う写真館って、かなり危険な感じがするんだけど」

その意見には大いに賛成だ。

劉真「はあ…アキ、一応、意見だ。書いておいてくれ」

明久「オツケー」

アキが黒板に意見を書く。どうやら名前を付けているようで結構書くのが長い。

劉真「はい、次」

横溝「はい」

劉真「じゃあ、横溝」

横溝「俺は無難にウエディング喫茶を提案します」

ウエディング喫茶か…。ということは美波のウエディングドレス姿とか見れるのか…

明久「劉真。顔がだらしなくなってるよ」

劉真「気のせいだ」

危ない危ない。つい、顔に出ちまった。

劉真「じゃあ、次。須川」

須川「俺は中華喫茶を提案する」

劉真「中華喫茶？理由は？」

須川「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な恰好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉から分かるように、こと『食べる』という文化に対して中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というのは」

な、何だ！？須川の奴、どんだけ中華に思い入れがあるんだよ！！熱弁しすぎだろ！！

劉真「わ、分かった。そこら辺でいいだろ。アキ、書いておいてくれ」  
明久「りょうかい」

焦った：まさか、須川があそこまで中華に関して熱弁するなんて…。  
ガラッ

須川の案を書いたところで、鉄人が教室に入ってきた。

西村「皆、学園祭の出し物は決まったか？」

劉真「今、黒板に書いてある通りです」

俺はそう言って、黒板を見る。

そこには、予想をはるかに上回るものが書いてあった。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

アキ：俺は、お前の発想力に脱帽だよ…。

西村「…補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな…」

鉄人の怖ろしい呟きが俺たち勉強嫌いのFクラスを震撼させる。

須川「先生！！それはあんまりです！！」

横溝『それを書いたのは俺たちじゃなくて吉井です!!』

福村『俺たちがそんなバカなことするわけないじゃないですか!!』

必死に鉄人の説得を試みる須川達。

西村「馬鹿者!!みつともない言い訳をするな!!」

流石、鉄人だ。教師なだけはある。そんなみつともない言い訳を許さないなんて

西村「お前らが吉井を選んだ行為自体をバカだと言ってるんだ!!」

隣のアキが凄まじい殺気を出したのが怖かった。

西村「まったく…学園祭の売り上げでクラスの設備をよくしようと  
は思わんのか…」

劉真「そんなことしても大丈夫なんですか?」

西村「今回は事情が事情だからな。まさか設備が蜜柑箱まで落ちるとは学園長も予想してなかったみたいだ」

俺だって卓袱台の下があるなんて思いもしなかったよ。

劉真「じゃあ、多数決を取るからな。写真館が良い人!!次つ!!  
最後つ!!はい!!Fクラスの出し物は中華喫茶に決定!!」

俺はまとまりが無くなる前に多数決を取る。

この個性的な奴らはすぐに意味不明なことをしだすからな。ちゃんと手綱は握っておかないと…。

劉真「じゃあ、厨房班とホール班に分かれてもらう。じゃあ、なり

たい班のところに名前を書いてくれ」

次々と黒板に名前を書いていくみんな。

劉真「よし、決まったな。では、クラスの出し物なのでしっかりと協力するように！！雄二！！やる気出さねえと秀吉の声まねで霧島にプロポーズの言葉送っとくぞ」

雄二「よし明久！！学園長のところに設備に関してのお願いに行くぞー！！」

俺の言葉に一気にやる気を出す雄二。まったく、素直じゃないんだから。。

明久「ま、待つてよ！！劉真も来てくれる？僕たちだけじゃ何か心配なんだ…」

劉真「まったく、しょうがねえな…じゃあ、各自、話し合いをしていてくれ！！」

俺はみんなに指示を出し、明久と共に雄二の後を追いかけた。

俺と中華と清涼祭（後書き）

「学園長、ちょっといいか？」

B Y 神無月劉真



俺とババアと裏事情（前書き）

「この時の劉真は本当に怖かったな……」

B y 吉井明久

## 俺とババアと裏事情

とりあえず学園長室の前まで来た俺たち。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

何やら、中で言い争いをしているようで騒がしかった。

劉真「学園長は中にいるようだな」

雄二「そうか。なら話は早い。行くぞ」

「」「失礼しまーす」「」

俺たちはノックもせず学園長室のドアを開き、中へと入る。

竹原「おや。とんだ来客ですね」

中にいたのは当たり前で学園長。もう一人は

劉真「なんだ。誰かと思えば、親父にクビにされた没落社員の竹原クンじゃないか」

竹原「またそんな古いことを……」

そう。この竹原教頭は以前、親父の会社で悪行を働いたためにクビにされているのだ。

劉真「またなにかの悪事でも働こうつてのか？」

竹原「御冗談を。別に私は悪事をするなんて一言も言ってませんが」

劉真「とぼけんな。俺の勘はどんな精密機械の予測よりも高性能でことぐらい貴様も知っているだろう」

俺の話し方が普段と違うのはいろいろと理由がある。

まあ、その説明は今度するとして。1つの大きな理由はコイツが俺の親父の会社の社員だったっていうことだ。

竹原「チツ。今日はこの辺にしておいてあげましょう。覚えておいてくださいね学園長。それと…神無月」

劉真「さつさと失せる。お前の顔などもう見たくもないのでな」

再び舌打ちをして姿を消す竹原。

はあ…慣れない話し方をしたから疲れたな…。

明久「な、なんか、さっきの劉真は凄く殺気立ってたね…」

雄二「牛を捕獲した時以上の殺気だったぜ…」

おっと、自分でも気づかないうちに殺気をだしてしまってたようだ。落ち着け落ち着け…ふう。

劉真「ごめんな。さっきの俺の事は頭から締め出しておいてくれ。さもないと  
雄二とアキをどっかの山奥に遺棄しなく

ちやならなくなっちまうからな」

明&雄「俺たちは何も見てないし何も聞いてないしそもそもここに来たばかりです」

うんうん。素直な子はおじさん、嫌いじゃないぞ。

明久「(でも、忘れるなってこと自体が無理だよね…)」

雄二「(ああ。殺し屋みたいになってたからな…)」

劉真「何か言ったか？」

明&雄「何も言ってません。劉真様」

学園長「アンタらはここに何しに来たんだい…？」

学園長が俺たちを見てため息を吐く。

おおっと、そうだった。俺たちは設備について交渉しに来たんだっ  
た。

雄二「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二です」

劉真「俺は神無月劉真だ。それでコイツは」

劉&雄「二年を代表するバカです」

明久「2人とも、なんて紹介をしてくれてるのさっ!？」

む。ちゃんと紹介してやったのに酷い言い草だな。

学園長「そうかい。アンタらが坂本と吉井、それに神無月グループ  
のボンボンかい」

明久「学園長。僕はまだ名前を名乗ってませんよね」

劉真「……………」

雄二「劉真。怒りたい気持ちは分からんでもないが、今暴れられる  
といういると拙いからそのどこから出したかも分からない黒光りし  
たトンファーをしまってくれ」

チツ。雄二の優しさに感謝するんだなクソババアが…。

学園長「気が変わったよ。話だけでも聞いてやるうじやないか」

劉真「なんて偉そうなババアなんだ…」

明久「実際、偉い人だからね？」

雄二「分かりました」

雄二の丁寧な言葉遣いに心の底から驚く。あの雄二が罵倒されながらも言葉遣いを保っていられるなんて…。

雄二「Fクラスの設備についての改善を要求しに来ました」

学園長「そんなことをしに来るくらい暇な人生送ってただね」

劉真「アキ。このクソババアを財力をフル活用して闇に葬っても構わないよな？」

明久「だから落ち着いてよ…」

雄二「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です。学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます。要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

雄二。お前はやっぱり最高の友人だよ…。

明久「あの、学園長…?」

アキが心配そうにババアの顔を見る。

確かに、あのお願いの仕方じゃダメだというのは分かるんだけど…。

学園長「よしよし。お前たちの言いたいことはよく分かった」

明久「え？それじゃ、直してもらえますね…!」

学園長「却下だね」

明久「雄二。このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

雄二「……明久。もう少し態度には気を遣え…」

しまった！！という表現しかしようのない顔をするアキ。俺も少しガツンと言っておくか…。

劉真「ババア。言い残すことはあるか…？」

雄二「お前はいい加減に落ち着け！！」

劉真「無理」

雄二「そこは頑張つて抑えてくれないか！？」

劉真「雄二。実は俺つて気が短いんだ」

雄二「そんなの始めから分かつてることだろ！？」

チツ。やっぱり駄目か…。後で優斗でもからかってストレス発散でしよう。

雄二「まったく、このバカどもが失礼しました。ババア」

明久「そうですね。ババア」

劉真「なんで断るのかなんて理由も聞きたくないからお前が隠していることを洗いざらい吐け。クソババア」

俺の言葉にえっ！？という表情をする雄二たち。

学園長「アンタはホントに勘が良いやつだねえ」

劉真「お褒めに頂き光栄だ。じゃあ、俺の考察を言わせてもらおうか」

目にかかるほどの長さの前髪を手で掻き上げる。真剣な話をする時の俺の癖だ。

劉真「アンタはこの文月学園の学園長であり、召喚システムの責任者だ。そして今回の清涼祭で行われる召喚大会の賞品は優勝すると『白銀の腕輪』と『如月ハイランドのペアチケット』。準優勝は『

青銅の腕輪』と『漆黒の腕輪』だ。俺が掴んだ情報では、『白銀の腕輪』は同時召喚用と召喚フィールド作製の2つがあり、『青銅の腕輪』は召喚獣強化用。『漆黒の腕輪』は召喚獣変身用と聞いている」

学園長「……………」

劉真「沈黙は肯定と取っても構わないな。ここからは俺の予想だが、『青銅の腕輪』と『漆黒の腕輪』は問題が無い成功作だが、『白銀の腕輪』の2つは大きな問題がある欠陥品だ。しかも副賞の『如月八イランドのペアチケット』は如月グループが訪れた人を強制的に婚約まで進めてしまうこれまた欠陥の賞品だ」

雄二「何だと!?!」

雄二が驚きの声を漏らす。ん?今の話にツツコムところなんてあったか?

雄二「…………絶対アイツは参加して優勝を狙ってくる…………。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚…………。俺の、将来は…………」

雄二にもいろいろと悩みがあるんだろう。

学園長「…………そこまで分かってるなら、説明はいらさないさね。要するに、アンタらの内、誰かが優勝してくれれば万事解決ということさね」

劉真「だつてさ。頑張れよ。雄二にアキ。俺も出るには出るけど、俺の狙いは準優勝の賞品だから」

明久「どういうこと?」

劉真「…………誰だつて、変身するのは憧れるだろ…………?」

明&雄「ああ……………」

あはは。太陽の日差しが眩しいな。

学園長「じゃあ、よろしく頼むよ」

雄二「はい。じゃあ、行くか明久。どうせ劉真は学園長と込み入った話があるだろうから」

明久「う、うん……」

雄二の奴、どこまで俺のことを分かるようになってやがるんだ…。

劉真「ところで学園長」

アキたちが部屋から出て行ったのを確認し、俺は話を始める。

劉真「今回、アンタが危険視している連中だが。そこら辺については心配しなくてもいい。俺の心強くて危ないマフィアのみなさんが綺麗さっぱり駆除しておくからな」

学園長「…今回はアンタに頼ろうじゃないかい。こっちは何も手が出せないからねえ…神無月グループの次期社長の力、とくと見せてもらつよ」

劉真「言われなくても見せてやるよ」

俺はそう言い残すと、学園長室を出、ドアを閉める。

よし。

ポケットからケータイを取り出し、ある一つの番号に電話をかける。

『兄さんですか！？何のようで？』

劉真「久しぶりの仕事の依頼だよ」



俺は俺の方法でこの文月学園を守るとしよう。

劉真「教頭の竹原のことを詳しく調べて文月学園に害を及ぼす連中を消せ」

『どんな方法でも構わないので?』

劉真「そんなことも聞かないと分からないのか?」

『へへっ。御意に』

俺は電話を終えると、教室に戻る。

誰もいなくなつた廊下にはただ風の吹く音だけが響いていた。

俺とババアと裏事情（後書き）

「バカなお兄ちゃんとトンファーのお兄ちゃん!!」

B y 島田葉月

俺と団子と一回戦目（前書き）

「葉月の出番はまだですかっ!？」

B Y 島田葉月

## 俺と団子と一回戦目

俺の指示でいろいろな人が星になってから数日後、ついに清涼祭初日がやってきた。

美波「これってホントにFクラスの教室？」

美波の言うとおり、あの小汚い教室は見事な中華喫茶へと変貌していた。

秀吉「劉真がテーブルを手配してくれたおかげでまともに仕上げる  
ことができたのじゃ」

劉真「テーブルぐらい、バカどもの店からいくらでも持ってこれる  
からな」

実はこの中華喫茶のテーブルは例のパン屋のだったりする。

明久「装飾も完璧だし、これなら上手くいくよね」

康太「…………… 飲茶も完璧」

劉&明「うわっ！！」「」

いきなり背後から響く康太の声。相変わらず気配が読めないやつだ。

秀吉「ムツッリーニよ。厨房の方は準備はできておるのか？」

康太「…………… 味見用」

そう言っ手渡されるとある料理。

美波「へえ…胡麻団子ね…」

秀吉「これはワシらが食べてもいいのかの？」

康太「……………（コクリ）」

瑞希「じゃあ、いただきます」

胡麻団子をゆつくりと味わう美波・秀吉・姫路の三人。

瑞希「美味しいですっ」

美波「表面はカリカリで中がモチモチなのがいいわね」

秀吉「甘すぎないところが良いのう」

そんなに美味しいのか。流石、康太だけはある。料理の腕は一級品だな。

劉真「じゃあ、俺もいただくとするか」

明久「あ、僕もっ」

残っていた団子を口に運ぶ。ふむふむ…これは…

劉真「表面はゴリゴリ中はベチャベチャ」

明久「甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても」

劉&明「ンゴバツ!!」

この世のものとは思えないような悲鳴を出して倒れる俺とアキ。  
なんだ…今の味は…意識が一瞬で持って行かれそうになったぞ…!?

秀吉「それはさきほど、姫路が作ったやつじゃな」

康太「……………!!（グイグイ!!）」

秀吉の言葉を受けて、アキの口にダークマターと化した胡麻団子を押し込もつとする康太。

明久「む、無理!! 食べられないよ!!」

劉真「即刻、処分するべきだと思っ」

瑞希「そんなあ。明久君、どうして食べてくれないんですかあ」

明久「う…」

アキ……辛いよな。恋人である姫路の料理が食べられない理由が姫路本人にあるなんて…。

明久「た、食べられるよ!?! もちろんじゃないか!?! み、瑞希の料理は僕の活力剤だよ!!」

涙目で叫ぶアキ。ゆ、勇者だ、ここに勇者がいる…。

チラッ

アキがこちらにアイコンタクトをしてくる。

明久「(どうしよう…)」

劉真「(食えよ。そして盛大に散れ)」

明久「(散れっておかしいよね!?)」

劉真「(あ。姫路が泣きそうだ (」

明久「吉井明久っ、いつきまーす!!」

アキが胡麻団子が入ったお盆を口の上でひっくり返す。

瑞希「ど、どうですか?」

姫路、それはさっきのアキのリアクションで理解してくれ頼むから。

明久「う、うん。とつても美味しいよ」

秀吉「明久　　！！！」

アキが真っ青な顔をして膝から崩れ落ちる。あれだけの量の化学兵器を食べたんだ。しょうがない。

瑞希「あ、明久君!？」

姫路が崩れ落ちたアキを抱き上げる。あ。アキの野郎、目の前に胸があるからつて顔がにやけてる。羨ましいなあ…美波だったらあんなこと絶対にな

ボコオ！！

美波「なんか言った？」

劉真「せめて殴る前に質問をお願いします!!！」

美波「つてことは、なにか言ったということね？」

劉真「あ…えつと…その……。 (だらだらだらだら) 」

ま、拙い!!美波の目に光が点ってない!!こ、ここは何か言い訳をして逃れないと…。

劉真「美波のペツタンコだったら抱き上げられても胸は顔の前にならないなあ、なんて…。」

俺のバカ!!何で正直に言っちゃうんだよ!!美波の殺気が数段UPしてるし…。

美波「リュウ？」

劉真「な、何だ……？」

美波は足元に石畳（神無月大雅仕様）を設置する。

美波「ここに、正座しなさい」

劉真「え？いや、でも……ここは学校だから……」

美波「正座」

劉真「い、いや……だから……」

美波「石畳と打ち首、どっちを味わいたい……？」

劉真「正座……します……」

自分の脛に激痛が走るのが凄く辛い。

美波「これも足してあげる」

そうやって俺の太ももの上に電子レンジ（家庭科室用）を載せる美波さん。

劉真「ぐっふう……い、痛いです……」

美波「当たり前でしょ？痛くしてるんだから」

劉真「べ、弁明を……俺に弁明をさせてくれ……」

美波「聞こえないわ」

劉真「このクソアママがあ　　！！」

美波「えいっ」

劉真「ウワギャア　　！！電子レンジの上に乗るんじや

ねえよ！！とれる！！足がとれるっ　　！！」

美波の世界最強の拷問にのた打ち回るこの俺、神無月劉真17歳。



秀吉「お主も大変じゃのう……」

俺は秀吉の言葉が聞こえたあたりで意識を手放した。

美波の拷問によって意識を刈り取られてから数分後、俺は教室に戻ってきた雄二によってこの世に帰還することに成功した。

雄二「はあ……まったく、どうして少し目を離しただけで死人レベルの被害を被ってんだお前は……」

違うよ雄二。死人レベルじゃなくて、ホントに死人になっていたんだ。

秀吉「そついえば、召喚大会に姫路たちが出るとするのは本当か？」

姫路たち？ということとは……

瑞希「はいつ。お父さんの鼻を明かしてやるんです!!」

美波「ウチも出るのよ。瑞希、昨日Fクラスのことをバカにされたから怒ってるみたい」

瑞希「このクラスが勉強嫌いの最底辺クラスだなんて言われたのでカチンとききました!!」

姫路、それは見事に的を射てるぞ。見ろよ、アキなんてすごい複雑な表情を浮かべてる……。

秀吉「劉真は出場せんのか？」

劉真「うーん…ペアがないんだよなあ……」

美波と出ようと思ってたけど、もう組んじまってるし…。

Bannon!!

そのとき、教室の引き戸を思い切り開けて、優斗が入ってきた。

劉真「優斗? どうしたんだ？」

優斗「お前は俺のペアで登録してんだよ!! で、今から一回戦だ。早く来てくれ!!」

劉真「なに人の名前を勝手に使ってるんだよ!!」

優斗「いいから!! 俺は『青銅の腕輪』が欲しいからな!!」

劉真「いやもうそれ、優勝する気ねえじゃん!!」

優斗「いいから早く!!」

劉真「ちよつとま、うわあ

!!」

俺は言葉の途中で優斗に会場まで引つ張られていった。

布施『それではBブロック一回戦目を始めます』

優斗に誘拐まがいの行動で参加させられた俺はただいま、一回戦が始まるのを待っていた。

ま、俺も『漆黒の腕輪』が欲しいから優斗と目的は同じなんだけど……。

愛子「奇遇だね。一回戦目が優斗君と神無月君だなんて……」  
美穂「よろしくおねがいます……」

一回戦目は工藤と佐藤。ま、大丈夫か。

布施『一回戦目の科目は保健体育です』

劉真「な、何だとおお　　!?!」

保健体育!?!終わった!?!もうこの戦いは終わった!?!

布施『それでは、召喚してください』  
「「「試獣召喚!!」」」

保健体育

Fクラス&Aクラス

神無月劉真&唐津優斗

13点&378点

VS

Aクラス&Aクラス

工藤愛子&佐藤美穂

456点&245点

やっぱり……点差が歴然じゃないか……。

優斗「劉真、お前その点数……」

劉真「正直、悪かったと思ってる……」

無理なんだよ保健体育だけは!! まあ、古典もだけど……。

愛子「残念だったね!! 今回はボクたちの勝利だよ!!」

美穂「私は神無月君を相手するので工藤さんは唐津君をお願いします」

愛子「オツケー!!!じゃあ、いっくよー!!!」

掛け声と同時に俺たちに突っ込んでくる工藤たちの召喚獣。

美穂「行きますよ!!!」

ガイン!!!

佐藤の召喚獣の鎖鎌と俺の召喚獣のトンファーがぶつかり、甲高い音が鳴り響く。

劉真「チツ。この点数差じゃヤバイな……」

美穂「すぐに終わらせてあげます!!!」

佐藤がトンファーをはじき、俺に鎖鎌を振り下ろす。

劉真「なめんなあ

!!!」

俺は召喚獣を一步後ろに下がらせ鎖鎌を避ける。その勢いを生かして、後ろにいた工藤に突進する。

愛子「ええ!?!」

劉真「優斗!!!俺ごと工藤をやれ!!!」

優斗「応!!!」

優斗の召喚獣がビーム砲をこちらに向け、発射する。

神無月劉真

0点

工藤愛子

0点

愛子「そんなんっ!!」

劉真「上手く頭に当たったみたいだな。後は頼んだぜ、相棒」  
優斗「任せろ!!」

優斗は驚きのあまり動きが止まっている佐藤の召喚獣に照準を合わせる。

美穂「しまっ

優斗「もう遅え!!ファイアー!!」

佐藤の召喚獣は優斗のビーム砲によって跡形もなく消滅した。

俺と団子と一回戦目（後書き）

「あと少しだと思う」

B y 神無月劉真

## 俺は優斗だキャラ紹介

唐津優斗  
からつゆうと

### 容姿

顔は意外とイケメン。上の中といった感じ。目の色と髪の色が青。頭に鉢巻装着。雄二までとはいかないが、ツンツン頭をしている。身長

178cm

### 体重

65kg

### 性格

熱血。お調子者。

### 得意教科

古典

苦手教科

特に無し

召喚獣

鉢巻を頭に着け、勇者のような重装備にビーム砲を所持。

### 腕輪

増殖（自分で指定した武器の数を好きなだけ量産できる。しかし、消費は1つの量産につき、50点）

### イメージCV

木村良平（Angel Beats!の日向秀樹）

優子と秀吉の幼馴染で優子の恋人。試召戦争以来、劉真とは親友のような関係になる。

欲望に素直に動く時が多く、その度に優子にサブミッションを決め



られている。

頭に着けている鉢巻は優子からプレゼントされたもので自分でも気に入っている。

Aクラスの中では優秀な部類に入り、苦手科目が無いことからオールラウンダーのような戦いをする。

俺と憐れな常夏コンビ(前書き)

「つ、常村あ!?!」

B y 夏川俊平



雄二「……劉真、お前今まで店の事忘れてただろっ」

劉真「何のことだ？俺にはさっぱり」

雄二「そうか、しらばっくれるならしょうがない。あと5分で戻って来い。さもなければ」

劉真「ここから5分で！？どんだけ全力疾走させるつもりなんだよ！！」

雄二「島田に【劉真が遅れてるのは他の女子とイチャイチャしてるから】と言いつける」

劉真「待ってる。10秒でそっちに行く」

あの野郎……人の人生を何だと思ってやがる……。

劉真「優斗！！俺は店の手伝いがあるから抜けるぜ！！」

優斗「ん？そうか。二回戦は二時間後だ。遅れんなよ」

応！！と返事を返し、俺はFクラスの中華喫茶に急いだ。

雄二「お。早かったな。まさか、12秒で着くとは……」

俺が出せる限界のスピードで教室に戻ると、出迎えたのはウェイタ  
ー姿の雄二だった。

劉真「俺を……ゼエ……なめ……ゲホツ……なめるなよ……」

雄二「ああ。凄く全力で走ってきたというのは痛いほど分かるんだ  
が、先に謝っておく。スマン」

劉真「ふえ？」

謝る？何を？ちゃんと時間内に戻って来たのに？

雄二「つい、島田にさっきのセリフを言っちゃまった」

劉真「なにしてくれてんじゃこの阿呆があ

！」

！

コイツ、バカだろ！！生粋のバカだろ！！間に合ったのに面白がっ  
て口から出まかせ並べるコイツはバカだろ！？

『オイ！！この店員は客に注文も取りに来ねえのか！！』

俺が雄二に飛びかかろうとしたところで、店の奥の方からそんな言  
葉が聞こえてきた。

瑞希「す、すいません！！しばしお待ちを！！」

??「ああ？こちらはずっと、待ってんだよ！！」

??「さつさと、してくんねえかなあ？」

美波「すぐ伺いますっ！！」

ほほう。美波に命令するとはいい度胸してんじゃねえか。

俺は早足で例の罵声を飛ばしている2人のもとに行く。

??「まったく、これだからFクラスはグボヘエ!？」

近かったソフトモヒカンの頭を蹴り飛ばす。

劉真「ウェイター責任者の神無月劉真です。何かご不満な点はございましたでしょうか？」

??「いや、今連れの常村が蹴り飛ばされたんだが……」

劉真「それは、私の家に代々伝わる交渉術『キックから始まる交渉術』でございます」

これは嘘だ。俺が単にムカついたので目に入ったソフトモヒカンを蹴り飛ばしただけだ。

??「ふざけんなよコラア

ふぎゃあ!！」

俺に飛びかかるうとした坊主頭の奴が俺の後ろにいた雄二のパンチによって宙を舞う。

雄二「クラス代表の坂本雄二です。思わず手が滑ってしまいました。何かご不満な点はございましたでしょうか？」

俺が客なら、その言葉の中に不満な点が存在していることを即座に指摘してるだろう。

っていうか、コイツらよく見ると先輩じゃねえか。ま、いつか。

常村「イテテ……な、夏川!！」

ソフト常村が意識を取り戻して、坊主夏川の惨状に悲鳴を上げる。

雄二「今のは『パンチでつなぐ交渉術』でございます。最後に、『プロレス技で締める交渉術』が残っておりますがいかがでしょうか？」

笑顔でソフトと坊主に近寄る雄二。うーむ……雄二の奴の交渉術はまだ甘いな……。

劉真「雄二、どけ。俺が手本を見せてやる」

雄二「……そうか。なら、頼むぞ」

雄二は俺の考えが分かったようで、一步後ろに下がる。

常村「な、なんだよ……」

劉真「ここからいなくなれえ

「!!」

某機動戦士Zの主人公っぽいセリフを吐き、ソフトと坊主を窓から外に突き落とす。

常村「お、おぼえてるよお

「!!」

夏川「ハッ!! ってなんで俺は宙に浮いてんだ!？」

さよなら先輩方。貴方たちの死は5秒間だけ忘れません。

雄二「流石劉真だ」

雄二が俺に拍手を送ってくる。

劉真「いやあ、これぐらいどつってことねえよ」

ただ、突き落とすだけだしな。

雄二「いや、違う。俺が言いたいのはそんなことじゃない」

劉真「え？じゃあなんだよ」

雄二「さっきの俺とのやり取りを思い出してみろ」

やり取り？確か、俺が間に合ったのに美波にガセ情報を流したってことだった  
ハッ！！

雄二「俺はそろそろ二回戦だからな。後は頼むぞ。し・ま・だ」

雄二は俺の後ろを見ながら言うと、アキと共に教室を後にした。

ギギギ……

俺は後ろをゆっくりと向く。錆びたブリキ人形のようにゆっくりと。

美波「ハロハロー」

そこには背後に修羅を降臨させた我が恋人の美波の姿があった。

~~~~~

誰だ！！このタイミングで電話なんてかけてきたのは！！

劉真「で、出てもいいか？」

美波「遠慮しなくていいわよ？」

劉真「そ、そうか……」

美波の顔をできるだけ見ないようにしながらケータイを取り出し、通話ボタンを押す。

優斗『劉真!! そろそろ二回戦だから早く来いよ!!』

劉真「あ、ああ。すぐ行くよ」

ガチャ… ツーツーツー…

電話が切れた音が俺の耳に嫌というほど伝わってくる。

二回戦か……。すぐ行くさ。

美波「坂本から聞いた話についてぼっきりと聞かせてもらいましょ
うか？」

この修羅をなんとかしたらな。

ポカツボキイ!! ゲシャ!!

劉真「ギヤア

!!」

優斗……遅れるかしんない……。

なんとか美波を説得した俺は二回戦が行われる特設ステージに時間通りに着くことができた。

劉真「お、おまたせ……」

優斗「なんでそんなにボロボロになってるんだ？」

劉真「いろいろあったのさ……」

優斗「…… Aクラスの喫茶店のケーキ。ただで1つ食わせてやるよ……」

ありがとう優斗。今はその気遣いになによりも嬉しいよ。

美春「あ、貴方は！！お姉さまを誑かしている豚野郎ですねっ！！」

源二「し、清水さん、その言い方は酷いと思うが……」

二回戦の相手は見覚えのないやつらだ。

優斗「うえ。嫌な相手と当たっちゃった……」

隣の優斗が心から嫌そうな顔をする。

劉真「そんなにヤバイ奴らなのか？」

優斗「男の方はDクラス代表の平賀源二だ。アイツはそんなにヤバイやつじゃないんだが、女の方がな……」

劉真「どんな奴なんだよ？」

優斗「アイツの名前は清水美春。さっきアイツが言った『お姉さま』って誰の事が言ってるのか？」

劉真「あ、ああ……」

優斗の巨大な負のオーラに一步後ずさつてしまう。

優斗「……お前の恋人の島田美波だ」

劉真「先生！！召喚許可を！！あのメス豚、ぶっ飛ばす！！」

美波をお姉さまあ？いい度胸じゃねえか。もう二度と立ち直れないぐらいにボコボコにしてやる……！！

木内「は、はあ……いろいろと心配事がありますが。召喚してください。教科は数学です」

ヨツシヤア！！数学なら俺の独壇場……！！

「……試獣召喚……！！」

フィールド内にお互いをデフォルメしたような召喚獣が現れる。

劉真「なあ、木内先生」

木内「なんででしょうか？」

劉真「一回戦目の立ち合いは布施先生なのに教科が保健体育だったことには何か理由があるのか？」

普通、教師は自分の担当の教科の召喚フィールドしか展開できない。だが、さきほど布施先生は保健体育のフィールドを展開した。これは何か理由があるのとっていいだろう。

木内『ああ。それは布施先生が保健体育のフィールド作製のチップを持っていたからですよ』
劉真「チップ？」

木内『ええ。今回の召喚大会では教師もいろいろと仕事がありますからね。自分の担当の教科に間に合わないと感じがあるんですよ。あとは、人数が足りないってことですかね』

劉真「なるほど……サンキュー、木内ティーチャー」

木内『はあ……それでは、二回戦開始！！』

数学

Fクラス&Aクラス

神無月劉真&唐津優斗

560点&357点

VS

Dクラス&Dクラス

清水美春&平賀源二

117点&132点

清水「な、何ですかっ、そのバカげた点数は!？」

今回の数学はヤマが当たったからなあ……思ったより正解したんだ

よ。

優斗「ナイスだ劉真！！清水の相手は任せた！！」

優斗はそう言い残し、平賀の方へとビーム砲をぶつ放す。

源二「くっ！！まだまだあ！！」

ビームになんとか耐えた平賀はバスターソードを構えて優斗に突っ込んでいく

美春「余所見するなんて余裕ですネっ！！」

清水の召喚獣がグラディウスで薙ぎ払いをする。

劉真「実際余裕だからな」

美春「美春はお姉さまを救うために貴方を倒しますッ！！」

ガイン！！

トンファーとグラディウスがぶつかり、火花が散る。

劉真「ほざけ三下！！テメエなんか俺に敵うわけないだろうが！！」

清水の薙ぎ払いをしゃがむことで回避する。

チッ！！メンドクせえ！！終わらせてやる！！

劉真「『停止』！！」

俺の召喚獣の腕輪が輝き、平賀と清水の召喚獣の動きを止める。

美春「なっ!?!」

源二「腕輪か!?!」

必死に召喚獣を動かそうとする2人。

俺はその隙にトンファーでボコボコにする。

劉真「ふはははは!?!オオラ!?!オラオラオラオラオラア!?!」

木内「……教師としては是非とも神無月・唐津ペアに負けてほしい
ものです」

木内先生の眩きが聞こえた気がするが今は関係ねえ!?!

優斗「照準SET!?!劉真、早くどけよ!?!」

こちらにビーム砲を構えた優斗が叫ぶ。

あれを喰らうと無事ではすまなさそうなので、召喚獣を全力退避させる。

優斗「消し飛べ!?!FIREEEEEEEEE!?!」

優斗のビーム砲が2人の召喚獣を丸ごと飲み込む。

清水美春

0点

平賀源二

0点

美春「そ、そんな……美春が負けた……？」

膝をつく清水。

源二「いい勝負だったよ」

劉真「スマンな。つい、本気になっちまった」

源二「気にしないでくれ。これは召喚大会だからな。本気を出すのは当たり前さ」

ガシッ

俺と平賀は固く手を握り合う。

源二「どうか、勝ちあがってくれよ」

劉真「任せろ」

木内『二回戦は神無月・唐津ペアの勝利です!!』

優斗「劉真」

劉真「ん？ああ」

パァン!!

俺と優斗はハイタッチをして、会場を後にした。

俺と憐れな常夏コンビ(後書き)

「ついに葉月の出番ですっ!!」

B Y 島田葉月

俺と葉月と理不尽な暴力（前書き）

「リュウのバカ!!」

B y 島田美波

俺と葉月と理不尽な暴力

劉真「ただいまーつと……あんまり客がないなあ……」

俺が教室に戻ってみると、中華喫茶の中はガランとしていた。

明久「あ。戻って来たんだね。二回戦、どうだったの？」

おそらくアキも帰って来たばかりなのだろう。蝶ネクタイを着けていないアキが俺を出迎えた。

劉真「楽勝だったな。この調子なら優勝まで軽くいけるかも」

明久「あはは。劉真と優斗は成績が良いからね。点数が高くてうらやましいよ」

アキ、俺は一回戦目でただの足手まといになっていたんだよ……。

??「お兄ちゃん、スイマセンです」

雄二「いや、気にするな、チビツ子」
??「チビツ子じゃないです。葉月ですっ」

アキと話していると、教室の外から雄二と少女の話し声が聞こえてきた。

雄二「んで、探してるのはどいつだ？」

引き戸を開けて雄二が教室に上がる。あ、あの少女は美波の妹じゃん。

葉月『えーつと……バカなお兄ちゃんを探してるですっ』
雄二『そうか』

教室を見渡す雄二。多分目ぼしいやつを探してるんだろつ。

雄二『たくさんいるんだが……？』

流石Fクラス。全員がバカという扱いをされてしまうなんて。

葉月『えーつと……すつごくバカなお兄ちゃんですっ』

「「「「「吉井だな」「」「」「」

一糸乱れずに口をそろえるFクラスのみんな。その中に俺も入っているというのはここだけの秘密だ。

明久「ちよつと待ってよ！！僕にこんな小さな知り合いはいないよ！！絶対に人違い」

葉月「あ！！バカなお兄ちゃんだ！！」

アキの抵抗もむなしく、特定してしまう葉月。

雄二「絶対に人違いがどうしたって？」

明久「人違いだったらいいなあって……」

諦めるアキ。この純粹無垢な小学生は確実にお前のことを『バカなお兄ちゃん』と言っていたから。

葉月「あ！！トンファーのお兄ちゃんもいます！！」

そう叫び、俺のもとに走ってくる葉月。
よしよし、可愛いなあ。その頭が俺の鳩尾にクリーンヒットしていなければけど……。

劉真「やあ、葉月。元気にしてたか？」

この少女の名は島田葉月。美波の実の妹だ。

葉月「はいですっ！！トンファアのお兄ちゃんと離れてから葉月、大雅さんに電話でいっぱい社会で大切なことを習ってました！！」

これはいけない。あの姉貴に教えを受けるなんて、自ら魔王の道を突き進んでいることと同等なのだから。

劉真「葉月？何を教えてもらったのか、俺に教えてくれないか？」

あんな姉貴でも常識は弁えるはず。流石に大変なことは教えていないはず

葉月「はいですっ！！『女は男を尻に敷くものだ』って教えてもらいました！！」

やだなあ、泣いてなんかいないぜ？

劉真「葉月、その教えは今すぐに忘れるんだ。お前とお前の人生のためにも」

葉月「？ トンファアのお兄ちゃんがそう言うなら忘れるです！！」
劉真「そうかそうか。良い子だなあ」

やっぱり子供は純粹なまま育てないといけないなあ。

葉月「なら、『拷問器具の使い方』は忘れなくてもいいんですか？」
劉真「頭を出せ。お前の脳に埋め込まれてる要らん情報を消し去ってやる」

葉月「ぼ、暴力は嫌ですっ!!」

劉真「ハッ!!す、スマン葉月!!つい、キレちまった!!」

葉月「そ、そうなのですか……葉月は良い子なので許してあげるですっ!!」

危なかった……危うく幼女暴行犯になるところだった……。

明久「ああ!!あのときのぬいぐるみの子か!!」

アキはようやく葉月のことを思い出したようだ。

葉月「ぬいぐるみの子じゃないですっ!!葉月ですっ」

明久「ごめんごめん」

アキ、ソイツを甘く見ちゃいけない。ソイツは

葉月「酷いですっ!!葉月とバカなお兄ちゃんとトンファーのお兄ちゃんは昔、結婚の約束までしたのに!!」

純粋な言葉で人を不幸にできるガキなんだ。

美波「瑞希っ!!」

瑞希「美波ちゃんっ!!」

美&瑞「殺るわよ!!」

劉&明「ごぶわあ!!」

首筋に激痛が！！やっぱり！！葉月のセリフで痛い目に遭った！！

雄二「姫路に島田か。どうやら勝ったみたいだな」

雄二が落ち着いて言う。オイコラ助けやがれ。

美波「結婚の約束ってどういうことよ！！ウチと結婚してくれるんじゃないの!?」

劉真「誤解だ！！だから関節を逆に曲げるのだけは勘弁してくれ！

！俺はまだ車いすには乗りたくない！！」

姫路「明久君？ちゃあんと説明してもらいますからね？」

明久「み、瑞希！！足は折るためにあるんじゃないよ！！そして誤解だ！！」

必死に訴えかける俺とアキ。こうでもしないと足を一本失うことになりかねない！！

葉月「ふえええん！！酷いです！！トンファアのお兄ちゃんとバカなお兄ちゃんにはファーストキスをあげたのにーっ！！」

美波「坂本は包丁持ってきて、10本あつたら足りると思う」

瑞希「私の分もあるから、20本です」

劉真「落ち着くんだ2人とも！！どちらにもファーストキスをあげているという不可思議な日本語に気づくんだ！！」

明久「そうだよ！！僕たちの話を聞いてよ！！」

やっぱり、俺はこの小学生が苦手だ！！

美波「しょうがないわね……10本ずつ刺したら聞いてあげる」

明久「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ

「？」

瑞希「なら、5本で許してあげます」

劉真「もう一度アキの言葉を理解してみる姫路！！」

このままじゃ俺とアキの体が愉快的な黒ひげの樽みたいな状態になっちまう……。

葉月「あ。お姉ちゃん、遊びに来たよーっ！！」

葉月はそう言うと、美波の腰に抱き着く。なんて羨ましいことを！
！お兄さんと代わりなさい！！

明久「え？葉月ちゃんって、美波の妹だったの？」

アキが驚きの声を漏らす。

劉真「よく顔を見てみるよ。目つきとかその他もろもろ、美波にそっくりだろう」

明久「そういえば……」

葉月は美波と性格が正反対だからな。分かるやつはそういない。

美波「なんか言ったかしら？」

劉真「No. I don't talk」

雄二「それより、なんだこの客足の少なさは？」

雄二が教室を見渡す。確かに、午前中に比べたら差は歴然だ。

葉月「葉月、ここに来る途中で変な噂を聞いたよ？」

雄二「ん？どんな噂だ？」

雄二が葉月に視線を合わせる。

劉真「……………ロリコン」

雄二「誰だ！！今の状況で言っではならないことを言ったのは！！」
しょうがねえだろ。ガタイのいい雄二が少女にそんな恰好をすると
ロリコンにしか見えないんだよ。

葉月「えつとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいいって」

おそらくさっきの2人組だろう。まったく、窓から突き落とされる
だけじゃ足りなかったのか……。

美波「葉月、どこでその噂を聞いたの？」

葉月「短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんがいっぱいいるお店で
す！！」

葉月の言葉を聞いて途端、俺とアキと雄二の目がキュピーンと光る。

明久「なんだって！？早く確認しに行かなきゃ！！」

雄二「そうだな明久！！これは急がないとな！！」

劉真「まったく！！急がないと短いスカートのウエイトレスが

もとい悪評広めてるやつがいなくなるかもしれないから！！」

俺たちは走った。おそらく、葉月の言ってた店はあそこだ！！

「「「うおおおおお！！短いスカートオ

！！」」」

俺たちは自分の欲望の赴くままに店に向かった。

俺と葉月と理不尽な暴力（後書き）

「ここは止めよう」

B y 坂本雄二

俺とマフィアと常夏ロンビ（前書き）

「兄さんの命令は絶対だ」

By ドイツのマフィアの一人 マーク

俺とマフィアと常夏コンビ

雄二「ここは止めよう」

葉月が言っていた短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんがたくさんいる店にたどり着いた瞬間、雄二がそんなわがママを言い出した。

劉真「はあ？なんでだよ」

雄二「ここだけはダメだ。Aクラスだけは……」

そう。たどり着いた店というのが、Aクラスの喫茶店「メイド喫茶

『ご主人様とお呼び！』だ。

ネーミングの矛盾さがどうも気になるが、ここはあえてスルーの方
向で。

美波「坂本もいい加減、素直になったら？」

瑞希「そうですよ。翔子ちゃんが可哀相です」

雄二「そうは言うけどな、アイツの求婚活動を一日体験したら考え
は変わると思うぞ」

その意見には同感かもしれない。

以前、朝早く来てしまって俺と雄二だけが教室にいたときに

雄二『劉真、そろそろ俺、ストレスで死ぬかもしれないんだ……』

そのときの雄二は目にクマができていて、凄く眠そうだった。

劉真『なんでだよ』

雄二『毎朝起きると、枕元に婚姻届が置いてあるんだ』

劉真『たかが婚姻届だろ？ただの紙切れじゃないか』

婚姻届は双方の同意が必要で、それを表す証拠みたいなのがいるって聞いたことがある。

雄二『実印入りだな』

どうやら物事は俺の予想の斜め上に行くようにできているようだ。

劉真『マジかよ……』

雄二『処分してるっちゃしてるんだよ。でも』

劉真『処分してるならいいじゃねえか。それで一安心だろ？』

雄二『処分すると、なにかされそうっていう恐怖に襲われて……』

何だろう？涙が止まらないぞ？

劉真『今度、一緒にバッティングセンターにでも行こう』

雄二『………っん』

あの時の雄二は本当に気の毒だったなあ……。
バッテリーセンターで全球ホームランにするぐらい全力でバット振ってたし。

瑞希「でも、翔子ちゃんが可哀相ですっ」
劉真「言い争いはそこら辺にしろよ。早く行こうぜ」

俺はヒートアップしそうだった姫路を宥め、喫茶店に入る。

翔子「……お帰りなさいませご主人様にお嬢様」

俺たちを出迎えたのはメイド服姿の霧島だ。
もともとスタイルが良く顔も良いのでメイド服がかなり似合っていた。

美波「なに見とれてるの？」

おかしいなあ。隣の美波から凄まじい殺気を感じる気がする。

劉真「み、見とれてなんかないさ！！ただ、胸が美波より大きいな
って腕が千切れるぐらいの激痛が！！」

美波「ウ、ウチだって脱いたら凄いんだからっ」

劉真「そうか？この前見たときは見た目も揉み心地も貧相だったよ

うなつて痛いから！！足に連続で踵落としを決めないで！！」

美波「セクハラ発言と胸の話は今後禁止

！！」

劉真「了解しましたギヤア

！！」

美波に暴力という名の教育を受けた俺はみんなが座るテーブルに移動した。

翔子「……こちら、メニューになります。お決まりになったらお呼びください」

霧島が置いたメニューを見る。

ふうん。意外に豊富なんだな。まあ、ケーキは優斗が無料で1つサービスしてくれるから大丈夫として

グイグイ

俺が飲み物どうしようかなあと考えていると、美波が俺の制服を引っ張ってきた。

劉真「なんだ？」

美波「ウチ、チョコパフェが食べたいな」

劉真「？ 食いたいなら頼めば？」

なんでわざわざ俺に言うんだらうか。

美波「リュウのおごりよね？」

劉真「は？」

美波「お・ご・り・よ・ね……」

劉真「まあ別にいいけどさ……」

別に、美波の顔が恐かったからとかじゃないからな！！

美波「ありがとね。リュウ」

美波が満面の笑顔をこっちに見せる。

まあ、この笑顔が見れるならパフェ1つぐらい軽いもんだ。

美波「翔子ーっ、注文いいかしらー？」

美波が近くにいた霧島を呼ぶ。

翔子「……構わない」

俺たちはそれぞれメニューを言う。

美波「ウチは『カップル限定チョコレートパフェ』で

瑞希「私は『ふわふわシフォンケーキ』で

葉月「葉月もー」

女子はやっぱり甘いものを頼む。ところで美波よ、カップル限定ってどういうことだ？

明久「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

アキのは注文じゃないと思ってるのは俺だけだろうか？

雄二「じゃあ、俺は」

翔子「……ご注文を繰り返します」

雄二の注文を遮る霧島。ていうか、俺まだ頼んでないんだけど。

翔子「……『カップル限定チョコレートパフェ』を1つ。『ふわふわシフォンケーキ』を2つ。『水』を1つ。唐津からのサービスで『男のチョコケーキ』を1つ。それと『メイドとの婚姻届』が1つと『美波から神無月へのいやらしい恰好』が1つでよろしいですね」
美&雄「全然よくないわよ！！（よくねえよ！！）」

美波のいやらしい恰好！？それって、猫耳とか裸エプロンとかその他もろもろも……！！

翔子「……それでは、メイドとの甘い結婚生活と恋人のあられもない姿を想像しながらお待ちください」

霧島はそう言い残し、厨房の方に下がっていく。

雄二「明久。俺は絶対に召喚大会で優勝しなくちゃならないんだ……」

明久「う、うん。それは僕も同じなんだけど……」

雄二「……相変わらず苦労してんなあ。」

常村「それにしてもあのFクラスの中華喫茶は酷かったよなあ！！」

すると、遠くの方から薄汚いソフトモヒカンの声が聞こえた。

劉真「どうやら予想はビンゴだったようだな」

あいつ等以外に考えられないし。

夏川『そうそう。汚ねえし、料理は不味いし!!』

常村『それに……中華喫茶なのにヨーロッパアンってバカじゃねえの!?!』

ギャハハ!!という笑い声が耳に触る。

明久「あいつ等!!」

アキが怒りを抑えられないのか、拳を握りしめる。

しょうがない。あの常夏先輩には社会の怖ろしさを味わってもらうことにしよう。

劉真「アキ。あいつ等をよく見ておけよ。面白いイベントを見せてやる」

明久「う、うん……」

俺はケータイを取り出し、例の番号に電話をかける。

『兄さんですかい?何の様で?』

劉真「この学園内に潜んでんだろ?Aクラスにいる奴に命令を出せ。ソフトモヒカンと坊主の二人組にちよつと社会の怖ろしさってのを思い知らせてやれ、とな」

『ウケケ。了解しました』

さて、俺は高みの見物と行くか……。

電話が終わり10秒後、常夏コンビのところには黒服の男たちが集まってきた。あれってマークとジョンじゃね?

夏川『な、何だよ teme 工ら!!』

マーク『兄さんの命令だちょっとこっちに来てもらおう』

常村『意味分かんねえよ!!』

ジヨン『クケケ。良いからこっちに来てってんだ』

夏川『ちょ…ま……うわああ　!!』

マークたちに腕を引っ張られ、常夏コンビ退場。

「「「「「「「「「「「「「「「」

衝撃の光景に言葉を失っている雄二たち。

劉真「これで学園祭を純粹に楽しめるだろ」

俺は笑顔で雄二たちにそう言った。

美波「……………今の気持ちは？」

劉真「……………正直、やりすぎたと思ってる…」

校舎の中なのに、俺のまわりには冷たい風が吹いていた。

俺とマフィアと常夏ロンビ（後書き）

「クケケ。兄さんの命令には従ってもらおうぜえ。ウケケケ」

B Y ドイツのマフィアの一人 ジョーン

俺と喧嘩と一方通行（前書き）

「覚悟しとけよオ、テメエら……」

B Y 神無月劉真

俺と喧嘩と一方通行

Aクラスで食事をとった後、俺は召喚大会で着々と勝利を収めていた。

福原『四回戦、勝者神無月・唐津ペア』

優斗「ヨッシャア!!」

よし。ここまででは順調だ。何の邪魔なく勝負ができている……。

優斗「劉真!!」

優斗が俺にハイタッチを求めてくる。

劉真「あ~~~~」 『あ!!とと……スマン、電話だ』

優斗「チッ。タイミング悪すぎだぜ……」

ええつと……雄二からか。何の用だろう?

俺は通話ボタンを押し、電話に出る。

劉真「もしもし?」

雄二『劉真!!落ち着いて聞いてくれ!!』

落ち着けという割にはものすごく焦っている雄二。何があつたんだ?

劉真「お前が落ち着け。何があつたんだ?」

雄二『あ、ああ……スマン。実は、島田たちが誘拐された』

ビキッ

雄二の言葉に思わずケータイを握りつぶしそうになる。

劉真「……場所は分かってるのか？」

雄二『ッ!?!? ああ、校門に来てくれ。俺たちもそこに向かうからな』

劉真「……分かった」

何故だ？害を成す者は全員処分したはずだ。何で美波が攫われることに……!?!

劉真「……優斗」

優斗「聞こえてたぜ。行って来いよ」

劉真「ああ」

俺は階段を二段飛ばしで降り、出口に向かう。

優斗『劉真!?!』

背後から優斗の叫び声が聞こえたので、思わず振り返る。

優斗『準決勝には間に合わせろよ!?!』

俺は返事をせずに出口を出、会場を後にする。

当たり前だろ、相棒……。

俺が校門に向かうと、アキと雄二と康太の3人が待っていた。

明久「あ！！劉真！！実は
「雄二から聞いた」
「う」
そ、そ

アキが俺の殺気に思わず後ずさる。

劉真「……………康太、早く案内しろ」

康太「……………分かった」

俺たちは康太の案内で美波たちが監禁されている場所に向かった。

康太に案内されてたどり着いたのは文月学園からそう遠くないカラオケボックス。

『これは依頼だからな。俺たちが考えることじゃない』

康太が仕掛けた盗聴器からそんな声が流れた。

康太「……………部屋はココ」

劉真「サンキユ。雄二、俺は乗り込む。異存は無いな？」

雄二「まあ、待て。少し様子を見る」

劉真「美波を見捨てるってのか!!」

雄二「お前は頭に血が上りすぎてる。少しは落ち着け」

劉真「これが落ち着いていられるかよ!!」

美波が誘拐されたんだ。防ごうとすれば防げたはず。俺の注意力不足が招いた事件なんだ…………。

葉月『お姉ちゃん…………』

美波『アンタたち!!! いい加減葉月を離しなさいよ!!!』

中から響いてくる美波の怒号。良かった……まだ無事みたいだ……。

雄二「ムツツリーニ、店員に化けて侵入してくれ」

康太「……………了解」

康太が店員の恰好に着替えて中に入る。

康太『……………灰皿をお取替えします』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする?』

『ヤっちゃっていいのか?』

『じゃあ、俺はこの巨乳のオネーチャンがいいなー!!!』

『あ、ズリー!!!それなら、俺二番ねー!!!』

我慢だ我慢だ我慢だ……………

瑞希『あ、あの!!! もう帰らせてください!!!』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だなあ!!!』

瑞希『いやっ、放してください!!!』

美波『ちよっと、やめなさいよ!!!』

我慢我慢我慢我慢……………

『うるさい女だな!!!』

美波『キヤア!!!』

美波が蹴られて、壁に激突する音が聞こえた。

ミナミガケラレテ、カベニゲキトツスルオトガキコエタ。

ブチィ！！

確実に俺の何かブチ切れて飛んだ音が聞こえた。

雄二「お、おい！！」

雄二が俺を呼び止めようとするがもう遅い。

我慢の限界だ。

劉真「我慢の限界だクズ共。パーティーを始めようぜエ！！」

トンファーを構え、手前にいた不良を殴り飛ばす。

不良「な、何だテメエは！？」

劉真「知る必要はねエだろオがア。オマエはココでボコボコにされンだからよオオオオオ！！」

ボコオ！！

2人目の顎にアッパーを決める。顎が碎けるような音が響いた気がするがどうでもいい。

不良「ヒ、ヒィ！！コイツ何者だ！？」

雄二「はあ………ったく、少しは落ち着けて言っただろっが………」
明久「あはは………劉真のキャラが一方通行みたいになってるよ………」

愚痴りながらも確実に不良たちを沈めていくアキと雄二。

不良「こ、こいつ等、吉井と坂本って奴らと神無月って奴らだ!!」
劉真「だからどうしたってんだアアア!!」

こいつ等は美波に暴力を振るい、傷つけた!!こんなモンじゃ終わらせねえ……。

劉真「こんなモンじゃ終わらせねえンだよオオオオ」もう止めて!!
「オオオ!!」

美波が腰に抱き着き、俺の動きを止める。

美波「ウチは大丈夫だから!!だから……もう止めてあげて!!このままじゃ死んじゃうよ!!」

俺はハツとなり、辺りを見渡す。

血まみれで呻く者。

歯を何本も折られ、地面に転がってる者。

劉真「……俺は……」

思わず床に膝をつく。

俺は……怒りで我を忘れて……こんな酷いことを……
こんなんじゃないコイツらと同じだ……。

フワッ

劉真「……え？」

美波が俺を抱き寄せる。

美波「…リュウはウチらを助けようとしてくれたんでしょ？だからリュウは何も悪くない」

劉真「でも…俺は怒りで…」

パン！！

美波が俺の頬を引っ叩いた音が辺りに響く。

美波「シャキツとしなさい！！アンタには準決勝が残ってるでしょうが！！それに勝って、決勝戦まで勝ち上がって、そして…アキと坂本達からウチらの仇をとりなさい！！このバカ劉真！！」

美波が俺のことを【劉真】と呼ぶときは大抵、俺を元気づける時だ。

劉真「…そうか…うん。そうだな。ありがとう美波！！俺、頑張るよ！！」

美波「その意気よ。それでこそ、ウチの愛してる人ね」

劉真「お前こそ、俺の愛してる人だな」

美波「意味分かんないわよ」

劉真「まったくだ」

俺と美波は口づけを交わす。本当に美波が傍にいてくれて良かったな。

明久「あの2人さ。絶対に僕たちの存在忘れてるよね」

雄二「ああ。しかもアイツと優斗の目的は準優勝の腕輪なのに俺たちを倒してどうすんだよ」

秀吉「お主ら、先にワシの縄を外してくれんかの」

明久「つて秀吉！？何で縛られてるのさ！！」

秀吉「姉上に縛られたときに残っておった縄があつてのう……」

雄二「それは災難だったな」

瑞希「美波ちゃん羨ましいです……」

明久「瑞希、そんな期待した目で僕を見ないで。僕にはみんなの前であんなことをする度胸はないんだ……」

アキの悲しい呟きが聞こえた気がした。

あの後、俺はダッシュで会場に向かっていた。

~~~~~

お。マークからだ。何か情報はつかめたのかな？

劉真「俺だ」

マーク「申し訳ございません兄さん。美波様の誘拐が起こるとは夢にも思わなく」

劉真「もう済んだ話だ。それで？誰の差し金だつて？」

マーク「おそらく、例のモヒカンと坊主の2人によるものかと」

あの常夏コンビか……やっってくれるじゃねえか。

マーク「そして……兄さんの次の相手でもあります」

劉真「！！　そうか……為になる情報をありがとう。もう無いとは思うが、引き続き警戒を続けてくれ」

マーク「了解しました」

さあて、準決勝は派手に行きますかッ！！



優斗「あ、遅いぞ劉真!!」

俺を会場入り口で出迎えたのは、ペアである優斗だった。

劉真「バアカ。時間には間に合ってるだろう」

優斗「作戦とかどうすんだよ!! 次の相手は三年のAクラスなんだぞ!!」

劉真「分かってるさそんなこと。でも、俺たちに敵なんていると思  
うか？」

優斗「!! そうだな……つい焦っちまった」

劉真「行こう。アイツらにはきっちりと礼をしなくちゃならないん  
だ」

優斗「? ああ。そういうことか。なら、俺もきっちりと礼をしな  
くちな」

劉真「行くぜ相棒」

優斗「任せろ」

俺たちは準決勝が行われる特別ステージの階段を上った。



幾何学模様が現れ、俺と優斗の召喚獣が出てくる。

『Fクラス                    神無月劉真                    &                    Aクラス                    唐  
津優斗

総合科目                    8023点                    &                    4004点  
』

優斗「り、劉真！その点数は！？」

劉真「フッ。高橋女史、時間が無いのに試験を受けさせてくれてありがとうがとな」

高橋「まさかあの短時間でここまで点数を取るとは思いませんでしたけどね……」

そう。俺はココに来る前に総合科目の試験を受けておいたのだ。

夏川「くっ……試験召喚！！」

常村「チィ！！試験召喚！！」

『Aクラス                    常村勇作                    &                    Aクラス                    夏川  
俊平

総合科目                    3954点                    &                    3876点  
』

流石はAクラスといったところか。総合科目の成績がかなり高い。

高橋「それでは                    始めっ！！」

俺と優斗対常夏コンビの戦いの火ぶたが切って落とされた。

俺と喧嘩と一方通行（後書き）

「お前らは美波を……みんなを傷つけすぎた！！」

B Y 神無月劉真

俺と大会と最終決戦（前書き）

「ね・ん・れ・い・せ・い・げ・ん！」

B y 神無月劉真

## 俺と大会と最終決戦

常村「舐めてんじゃねえぞテムエエエエエエエ！！」

常村の召喚獣がチャクラムをこちらにブン投げってくる。

狙いは優斗の召喚獣。おそらく、重装備だから動きが遅いと予測しての事だろう。

一つ先輩だけはある。  
だが、

劉真「俺の召喚獣の俊敏さを考えてなかったようだなあ！！」

優斗に迫っていたチャクラムをトンファーで打ち返す。

夏川「隙有りい！！」

今度は夏川の召喚獣が煙管型のハンマーを横殴りに振り回す。

ガイイン！！

トンファーで受け止めると、鈍い音が辺りに響き渡る。

劉真「チィ！！」

夏川「何だあ？その点数は飾りかあ？」

劉真「バアカ。周りをよく見れてないクソ坊主は念仏でも唱えてろ！！」

常村「夏川、早くそこから移動しろっ」

常村が何かに気づいたようだがもうすでに遅い。

優斗「やれやれ、俺の存在はシカトってか？」

優斗の召喚獣が銃口をこちらに向けている。

優斗「照準SET。劉真！！」

夏川の召喚獣を地面にめり込むぐらいの勢いで叩き付ける。

夏川「チィ！！動けねえ！！」

優斗「動かなくて結構だ！！くらいな！！先輩さんよお！！FIR  
EEEEEEEE！！！！」

夏川「チツクシヨー！！！！」

優斗の召喚獣のビーム砲が夏川の召喚獣に襲い掛かる。

Aクラス            夏川俊平

総合科目            0点

俺の攻撃で点数が減っていた状態であのビーム砲は防御しきれなかったようだな。

常村「夏川！！チツ、テンメエエエエ！！！！！！！！」



常村の召喚獣が再びチャクラムを投げってくる。

ジュ

常村「なっ!?!」

優斗「だからさあ、俺を忘れるなっつーの」

常村が投擲したチャクラムが優斗のビーム砲によって消滅する。

常村がシヨックのあまり動けなくなっているところに俺が召喚獣を突っ込ませる。

劉真「テメエみてえなくソヤローに腕輪と武器なんか必要ねえ!! この拳で黙らせてやる!!」

トンファーを投げ捨てパンチのラッシュを決める。

劉真「お前らは美波を…みんなを傷つけすぎた!!」

アッパー、フック、ストレート。数えきれないほどのパンチを的確に常村の召喚獣の顔面にブチ込んでいく。

劉真「警告なら何度もしたはずだ!!なのにテメエらはその警告を無視し、俺たちの人生で一回しかない高校二年生の文化祭をぶっ潰そうとした!!」

Aクラス 常村勇作

総合科目 16点



夏川「クッソ……」

常夏コンビが地面に膝をつく。

まさか後輩に負けるなんて考えもしなかったのだろう。

Aクラスみたいだし。

優斗「やったぜ劉真！！これで青銅の腕輪が手に入れれる！！」

劉真「そうだな。俺も漆黒の腕輪が手に入る。でも、決勝戦は本気で行くぞ」

決勝戦はアキと雄二のペアだ。

一回でいいから本気の勝負をしてみたかったし。

美波の仇も頼まれたし。

優斗「ああ、分かってるさ。やるからには本気だよな！！」

覚悟してるよ、雄二にアキ……俺は本気でお前らを潰しに行くからな……。

優斗「あ。でも、決勝戦は日本史だから明久の奴は点数良いかもな」

それを言わないでくれよ……

そんなこんなで清涼祭二日目がやってきた。

美波「今日がリュウとアキ達の決勝戦ね」

瑞希「明久君!! 頑張ってください!!」

康太「……………雄二も頑張れ」

俺とアキと雄二は補充試験の為に朝早くからテストを受け、喫茶店の準備を手伝っていた。

明久「うん、頑張るよ!!……………でも、少し寝てきていいかな? 徹夜したから全然眠ってないんだ……………」

雄二「俺も明久の勉強に付き合わされたからな。睡眠不足、ふわあ……………」

劉真「だらしがないな。そんなんで俺たちに勝てるのか?」

美波「そういうアンタも目の下に凄く深いクマができてるわよ」

劉真「これはクマじゃない。特殊メイクだ」

美波「はいはい。ウチの為にそんなに勉強頑張ってくれたんだよね」

劉真「う……………」

秀吉「劉真は島田の為なら何でもするからのう」

康太「……………一途な奴」

瑞希「あ、明久君も私の為に頑張ってくれたんですよね!!」

秀吉「姫路よ、お主たちを倒したのは明久たちじゃということをお忘

れたのかの?」

瑞希「うう……」

明久「あはは。僕が頑張ったのは副賞の『ペアチケット』を手に入るためだよ。瑞希と一緒にいきたいからね」

瑞希「明久君……」

アキが顔を赤くしながらも姫路を泣かせないためにクサイセリフを吐いている。

流石だな。アキの奴、ここ最近で一気に男らしくなってきやがった。

雄二「屋上で寝てくるから、十一時ぐらいには起こしてくれ」

美波「あれ?大会は一時からじゃなかったっけ?」

劉真「忙しい昼ごろぐらい手伝うさ」

明久「僕たちのクラスの喫茶店だしね」

今はとにかく睡眠時間を確保したい。さっきから頭がくらくらして倒れそうだ。

秀吉「了解じゃ」

明久「それじゃ、よろしくね」

俺たちは教室のドアを開け、屋上に向かう。

瑞希「(やつぱり、あの三人と一緒に寝るんでしょうか?)」

美波「(アンタは少しぐらいアキを信じなさいよ……)」

教室を出るときに聞こえた会話は気のせいだと思いたい。

美波『……ウ！！起きなさいリュウ！！』

美波の怒号で目が覚める。

……あれ？なんでこんなに頭が痛くないのだろう。ココ屋上だから  
コンクリートの上で寝てるはずなのに……？

俺は自分の頭が何かに乗っていることに気づき、それに触れてみる。

フニ

美波「……それはセクハラと受け取ってもいいのかしら？」

俺の頭は美波の脚の上に乗っていた。

簡単に言うと、美波に膝枕をしてもらっていた。

劉真「ごめんごめん。あまりに感触が気持ち良くてな」

美波「もう…バカ…／＼／」

美波の紙を手で梳くように撫でる。

劉真「アキと雄二は？」

美波「二人なら喫茶店を手伝いに行ったわ。リュウも起こそうとしたんだけどアキたちが『劉真は寝起きが悪いからぐっすり眠らせてやってくれ』って言ったから膝枕してあげてたのよ」

劉真「そうか……」

頭の痛みも引いたので起き上がる。

うん。体の調子も元通りだ。

美波「もういいの？」

劉真「ああ。だからそんなに悲しそうな顔するなよ。今日の文化祭が終わったら好きなだけ相手してやるからさ」

美波「……………キス」

劉真「え？」

美波「……………キスしてくれたら許してあげる」

美波はそう言うと、目を閉じ顔をこちらに突き出してくる。

劉真「はあ……………ったく……………」

俺も美波に口づけをする。

美波「んう……………んあ……………ん!？」





俺は優斗との集合場所に行っている会場前に来ていた。

優斗「よーっす！！勉強はしてきたかー？」

優斗がダッシュでこっちに走ってくる。

いつも思っただけど、コイツの脚の速さは尋常じゃねえよ……。

劉真「ああ。もともと日本史は苦手ってワケでもないからな」

優斗「なるほど。暗記を徹夜でして来たってところだな。その眼の下にできている大きなクマが全てを物語ってるぞ」

優斗ですら気づくようなクマなのか……せめて見えないようにして来ればよかったな……。

『皆様長らくお待たせしました！！これより召喚大会の決勝戦を始めたいと思います！！』

聞き覚えのない声が聞こえる。



優斗「分かつてるさ、相棒」

俺たちは拳をぶつける。

実況「こちらは二年Fクラス所属坂本雄二君と同じくFクラス所属吉井明久君です！決勝戦に四人中三人もFクラスの生徒が進出しているということはFクラスの認識を改める必要があります！  
！」

俺たちの反対側からアキと雄二が入場してくる。

雄二「降参、はしてくれないんだよな？」

雄二が向こう側からそう質問してくる。

劉真「美波と約束したからな。お前らを倒して仇をとるって」

明久「劉真……」

アキが顔を伏せながら俺の名前を呼ぶ。何だろっ？凄く寒気が止まらない。

明久「屋上で美波とキスしてたそうじゃないか……」

ダメだ。寒気が止まらなすぎて鳥肌が立ってきた。

明久「…異端者はFFF団の切り込み隊長であるこの僕、吉井明久が肅清する！！」

「「「「異端者は許さない……ッ！！」「」「」

観客席にいるFクラスの男子が黒い覆面を被る。

うわあ……俺、この大会終わってから無事に家まで帰れるかなあ……。

実況『それでは召喚してください。教科は日本史です！！』

「」「」「試験召喚」「」「」

俺たちに声に合わせて召喚獣が姿を現す。

『Fクラス                      神無月劉真                      &                      Aクラス                      唐津

優斗

日本史                      200点                      &                      210点

』

俺と優斗の点数が中央のディスプレイに表示される。

優斗「お前にしては頑張ったんじゃないか？」

劉真「大きなお世話だよ」

徹夜で暗記したかいがあった。思ったより解けたし、点数もそこそこ良いからな。

雄二「劉真、前よりもよくなってるんじゃないか？」

雄二が余裕そうな顔で聞いてくる。

劉真「そんなに良くはないさ。お前はどつなんだよ？」

雄二はAクラス並みの点数を出すとして、アキの奴がどれだけ点数を上げているかで勝敗が左右されるからな……。

明久「劉真。前に瑞希がこう言ってくれたことがある」  
劉真「姫路が？」

姫路がアキに言ったことがあることってなんだ？まあ、考えても意味がないけどな……。

明久「『報われない努力はない』って」

優斗「それはそうだろうな。俺もそう思ってるし」

明久「僕も、心の底からそう思った」

『Fクラス                      坂本雄二                      &                      Fクラス                      吉井

明久

日本史                      215点                      &                      190点

』

劉&優「『な………ッ!?!?』」

あのバカのアキがAクラス並みの点数を叩きだすなんてな……これは予想外だ……。

劉真「相変わらず俺の予想を裏切ってくれる奴だなお前は」

明久「褒め言葉として受け取っておくよ」

俺とアキは笑いあう。見つけたのだ。最高のライバルって奴を。

実況『それでは………始めっ!!!』

優斗「劉真避けるよ!!薙ぎ払えええええ」

開始の合図とともに優斗がビーム砲でアキと雄二の召喚獣を薙ぎ払う。

雄二「チィ！！明久！！俺が優斗を担当するからお前は劉真の相手をしろ！！」

明久「言われなくてもそのつもりさ！！」

アキの召喚獣が木刀を構えて突っ込んでくる。

劉真「いいぜ！！この勝負」

明久「瑞希が普通に過ごせる設備を手に入れるために、この勝負

」

劉&明「絶対に負けられない！！！！」

ガイン！！

木刀とトンファーがぶつかる。く……点数差があまり無いせいで押し負けそうだ……。

明久「瑞希のためにも負けられないんだあ！！！！」

アキが木刀で俺の顔面を横から殴りつける。

劉真「俺だって負けてられないんだよあ！！！！」

トンファーでアキの腹にラッシュを決める。

明久「ぐっふう……」

アキにはフィードバックがあるから苦しそうだ。意識を失いかけてる。

明久「く……」

アキが思わず地面に膝をつく。

雄二「テメエ明久！！根性見せろやア

！！」

雄二がアキの胸ぐらを掴み、喝を入れる。

アキがゆっくりと立ち上がり、笑みを浮かべた。

雄二「いけるか？相棒」

明久「当然っ！！」

！？ アキの雰囲気が変わった…？

明久「うおおおおお！！！！！！」

アキが木刀で怒涛のラッシュを決めてくる。

腕・脚・頭・手・腹・胸、的確にダメージがデカい個所に木刀を当ててくる。

これが『観察処分者』の操作能力か……。

雄二「とどめっ！！」

優斗「くっそおおお！！！！」

遠くの方で優斗の召喚獣が消滅していた。  
クソッ……優斗の奴がやられたか……。

『Fクラス                    坂本雄二  
日本史                            4点』

雄二の点数が残りわずか!!

劉真「隙有りiiiiiiii!!」

俺はトンファアの片方を雄二の召喚獣にぶつける。

雄二「しまった!!」

トンファアは召喚獣の顔面に命中しており、雄二の召喚獣は霧のよ  
うに姿を消す。

劉真「あとはお前だけだアキiiiiiiii!!」

『Fクラス                    神無月劉真  
日本史                            13点  
VS  
Fクラス                    吉井明久  
日本史                            10点』

明久「絶対に負けない!!!」

俺とアキの召喚獣がフィールドの中央で交錯する。





けでも流石だよ。

優斗「負けちまったな」

優斗が清々しい顔でこちらに歩みよってくる。

劉真「その割には悔しそうじゃないな」

優斗「まあ、もともと準優勝を狙ってたわけだしな。後で優子にどやされるだろうけどな……」

ハハ…と苦笑いを浮かべる優斗。まあ、それぐらいはしょうがないだろう。

実況『優勝者と準優勝者はステージ中央に集まってください』

俺たちの清涼祭は大盛況で幕を閉じた。

その日の夜。

美波「結局、アキに負けちゃったわね」

美波は俺の家に來ていた。美波曰く、『両親には許可取ってるからウチはリュウと一緒に暮らすわ』らしい。というわけでこの家は今日から俺と美波の家になる。

劉真「しょうがないさ。俺の実力不足だ」

点数では勝っていたのに負けたのは、操作能力の違いが原因だ。今回はアキの普段の行いに足元をすくわれる結果になったし。

美波「もう、そんなに落ち込むんじゃないのっ」

美波が俺の頬を引っ張る。

劉真「ひふあいひふあい」

美波「相手してくれるって言ったでしょ？」

それとこの行動は関係あるのだろうか……？

劉真「相手するってのはこういうことなんだよっ」

美波「んふう……!!」

美波にキスをする。今回は始めから舌を入れる。

それから小一時間ほどキスを続け、口を離す。

2人の舌が離れると、銀色の糸が垂れる。

美波「リュウ……」

美波が火照った顔で俺に抱き着いてくる。

美波「あの……その……シない……?」

美波がモジモジしながら聞いてくる。

劉真「すぐにイクんじゃないぞ。今日は手加減しないからな」

俺たちの夜はまだ明けない。

美波との事が終わり、美波が寝入ってしまった後、俺に姉貴から電話が入った。

劉真「何だよこんな時間に」

大雅「こっちに帰ってくるのが少し遅くなりそうだと伝えておきたくてな」

劉真「そうなのか？秀吉が悲しむなあ」

大雅「ひ、秀吉にはすまないと伝えておいてくれないか？」

劉真「それぐらい構わねえよ。アイツも心配するだらうしな」

大雅「そうか……なら、もう話すことは無い。そこにいる美波ちゃんにもよろしくな」

劉真「な……！！／／／／」

コイツ、気づいてやがったのか……。

大雅「避妊はするんだぞーじゃあなー」

劉真「やかましい!!」

そんなこと言われなくても分かってるさ。

俺は……美波が嫌がるようなことはしないからな……

清涼祭編 完

俺と大会と最終決戦（後書き）

「気にすんな」

B y 原石

俺とカラスと一方調教（前書き）

「今回は『バカとテストと召喚獣』文月学園のカラス』とのコラボだ。……先に誤っておくよ。ゴメンナサイ、クロさん。作者の実力不足だ……」

B y 神無月劉真



## 俺とカラスと一方調教

劉真「今日の夕飯はーっと……あれ？」

清涼祭が終わり、普通の日常へと変わったとある日の夕方。  
俺は夕飯を作るために冷蔵庫の中身を確認したのだが……

美波「どうしたのリュウ？」

リビングで雑誌を読んでいた美波が俺のところに来て聞いてきた。

劉真「食材が切れてるんだよ……はぁ……買い物にでも行くか」  
美波「ウチも行くわ」

俺たちは部屋着から私服に着替え、近所のスーパーに向かった。

美波「ところで夕飯は何にするつもりなの？」

スーパーに着いた俺たちは買い物カートを押しながら精肉コーナーを見て回っていた。

劉真「うーん……美波は何が食べたい？」

美波「ウチ？そうね……野菜炒めが良いわ」

劉真「太るんじゃないのか？」

美波「……ウチの怒りをこの拳に込めるわ」

拙い。俺の失言で人生の灯が消えようとしている。

劉真「ごめんごめん。じゃあ、野菜を見に行こうぜ」

俺たちはカートを押して野菜売り場に向かう。

美波「キャベツと……ニンジンと……それからそれから……」

美波が野菜炒めの材料を選んでいく。

っていうか、俺が作るのに美波が食材選ぶっておかしくないか？

店員『それではー今から、このカゴに入っている豚肉がー何とーパツク百グラム五十円！！五十円でございますー！！』

こここのスーパー恒例の大安売りがやってきた。

美波「へえ……リュウは行かなくていいの？」

劉真「俺は別に安売りなんか行かなくても豚肉買えるし、そもそもあんな危ない戦場なんかに行きたくない」

見ると、数えきれない数の主婦の皆様が豚肉を巡って争っている。

その光景はまさに阿鼻叫喚の地獄絵図のようだ。

『その意見には賛同しかねるな!!』

すると突然、俺の後ろからそんな大声が響いてきた。

俺と美波が後ろを振り返ると

劉真「ヒロを筆頭に主婦たちがボーリングのピンのように並んでいた……」

美波「リュウ、声に出てるわよ」

劉真「ていうか、何でヒロがこんなところにいるんだよ。アキたちにでもパシられたか？」

烏丸「んなわけねえだろ!!つとと、そんなことはどうでもいい。神無月、お前はさっき何て言った!!」

ヒロが俺に指を突き出す。

俺は黙ってヒロのもとまで行き、人差し指を合わせるように突き出して

劉真「ET」

烏丸「つまらんボケをかますんじゃない!!」

スパーン!!



も作ってるよ!!」

烏丸「そんなオマエには肅清を……このオレ、レイブン丸が世界の歪みを肅清するっ!!」

劉真「今更偽名を名乗る必要ないだろ!? しかもそのセリフはいろんなものに引っかけりそうだから出来れば止めてくれ!!」

ツツコム俺をシカトして、烏丸がハリセンを構え突っ込んでくる。

速い。とにかく速い。俺とアキと雄二が補習から逃げ出した時に追いかけてくる鉄人並みに速い。

烏丸「見つけたぞ!!世界の歪みを!!」

劉真「ホントお願いします!!そのパロディネタだけは止めてください!!」

脳天に次々とハリセンが落ちてくる。

劉真「ぐふえ!!ゲボオ!!ぐふっ!!」

そして耐えきれなくなった俺は地面に崩れ落ちる。

美波「リュウ!!」

美波が俺を抱き寄せる。ああ…そうか…そういうことか……。

烏丸「分かってくれたか?神無月」

劉真「ああ……食材は安いものこそ正義だということだな……」

え?そんな話だったっけ?と美波が呟くが今はそんなことどうでもいい。

烏丸「分かってくれたならいいんだ。じゃあオレはもう行くからな」  
劉真「ああ。ありがとな!!」

烏丸はそう言い残すと、レジの方に歩いていく。

劉真「イテテ……酷い目に遭った……」

美波「大丈夫?……そうには見えないわね」

劉真「分かってるなら起き上がるの手伝ってくれないか?ヒロの攻撃が地味に効いてるから……」

その日の夕食は心優しい主婦の皆様から譲ってもらった豚肉を使った野菜炒めだった。

俺とカラスと一方調教（後書き）

「心の底からゴメンナサイ」

B  
y 原石

俺と理不尽と脅迫文（前書き）

「落ち込むな、アキ……」

B Y 神無月劉真



## 俺と理不尽と脅迫文

清涼祭が終わって、ほのぼのとした日常を送っていたこの俺、神無月劉真は柄にもなく早起きをしていた。

美波「おふぁよう……今日は早いのね……」

俺が朝食を作っていると、パジャマ姿の美波がリビングにやってきた。

美波は昔から朝に弱く、今にも二度寝をしそうだ。

劉真「メシはもうできるから顔でも洗って来いよ。そのままだと顔を料理に突っ込みかねない」

美波「……うん……」

目を擦りながら洗面所へと向かう美波。

今日の美波も可愛いなあ……。

俺が料理をテーブルに並べていると、制服に着替えた美波がやってきた。

美波「おっはよう!!」

劉真「もう二度目の挨拶だけだな」

美波「そんなことは気にしないの。早く食べましょ。ウチお腹すいちかった」

今日のメニューは無難にスクランブルエッグとサラダ。

朝は忙しいので、簡単な料理が主体となる。

美波「ん……御馳走様。美味しかったわ」

劉真「そりゃどうも」

食器を纏め、洗っていく。

美波「ウチがやるからリュウは着替えてきて」

美波が俺からスポンジと皿を引っ手繰る。

劉真「そうか？ならお言葉に甘えさせてもらっよ」

俺は部屋に戻り、制服に着替え、登校の準備を始めた。

秀吉「お。劉真と島田は一緒に通学かの？オアツイことじゃのう」

Fクラスに着くと、爺言葉が特徴の秀吉が出迎えた。

劉真「美波とは家が近いからな。よく一緒になるんだよ」

因みに、同棲していることは誰にも話していない。  
ばれたら最期、俺は異端審問会によって闇に葬られるだろう。

明久「最悪じゃあ

！！」

今のはアキの声か？場所としては下駄箱辺りだろうか。何かあったのか？

ガラッ

明久「おはよう……」

案の定、憔悴しきつたアキが教室に入ってくる。

秀吉「明久。一体何があったのじゃ？」

いつもと様子が違うアキに秀吉が心配そうに声をかける。

明久「な、何も無いよ？あ、あはは……」

明らかに怪しいアキ。これは絶対に何か隠してるだろう。

美波「嘘ばかり。さっき凄い叫び声も聞こえたし、何かあったんでしょ？」

明久「あ。おはよう神無

美波」

秀吉「明久よ。今勝手に島田を入籍させておつたじゃろ」

明久「あはは。そんなわけじゃないか。後、言葉に気を付けるんだ秀吉。今の言葉で劉真がFFF団のみんなに凄い睨まれてるか

ら

何い!?

思わず後ろを振り向く。

須川『異端者滅殺……異端者枯渴……』

福村『ガンホー、ガンホー……』

ヤバイ。あんな殺気は今まで浴びていたものよりも何段階も上だ。

美波「うーん……あ。分かった!!アキ、アンタ、ラブレターでも貰ったんでしょ!!」

明久「言葉に気を付けると言っただけだ!!僕の横をカッターナイフが通り過ぎてるから!!」

流石Fクラス。投擲スキルなら世界一だろうな。

明久「じ、実は、劉真の靴箱にラブレターが」

ドスツ!!(カッターナイフが畳に刺さる音)

美波「次そんな冗談を言ったら耳を失うことになるわよ?」

明久「心の底からごめんなさい」

アキがまたバカなことをやってる……。アイツも懲りないやつだなあ。わざわざ自分の寿命を縮めるような真似して。

美波「それじゃあ、正直に答えなさい。何を隠しているの?」

明久「はい。実は……きよ……きよ……」

言おうとして言葉に詰まるアキ。また何かごまかそうとしてるのか？

美波「『きよ』…なによ？」

美波がアキを急かすように言う。

明久「競泳用水着愛好会の勧誘文!!」

流石だアキ。お前の発言と発想力に脱帽だよ。

劉真「あ、アキ、どの辺に興味を持ったのか教えてくれないか？」

少しでも!!少しでもアキの逃げ道を作ってやらなければ!!

明久「み、密着具合かな」

駄目だ。俺には荷が重すぎる……。

秀吉「島田に劉真よ。今のは明久の嘘じゃからな」

劉真「そうなのか!？」

美波「凄いいリアルだったから分からなかったわ……」

確かに、あんな場面で『密着具合』と答えたアキは勇者かもしれない。

明久「正直に言うよ……実は、僕の女装写真と脅迫文が入ってたんだ……」

劉&美「良かった……」

明久「別に安堵するところじゃないよね!？」



れちゃったら僕はもうおしまいだ!!」

劉真「いいから窓から離れる!! 見てるコッチがひやひやする!!」

俺と秀吉は必死にアキを窓から引き離す。

劉真「つたく、まずはどんな写真か見せてくれないか?」

明久「そうだね。僕もあんまり詳しくは見てないし……」

アキはそう言うと、封筒から三枚の写真を取り出す。

俺と秀吉はそれを横から覗きこむ。

明久「まずは一枚目……」

<<アキのメイド服バージョン>>

明久「ぐふっ」

劉真「大丈夫だアキ!! まだセーフのはずだ!!」

明久「そ、そうだよね!! これぐらいならまだ大丈夫だよね!!」

そう言つてアキが二枚目を取り出す。

<<アキのメイド服姿パンチラエディション>>

明久「トランクスだからセーフトランクスだからセーフ……」

ア、アキ!! オマエは凄いや!! 俺ならもうココで耐えきれないはずだ!!

秀吉「さ、三枚目はどうなのじゃ?」

明久「……」

アキが放心状態で三枚目を取り出す。

<<ブラを持って立ち尽くすアキ《着替え中メイド服着くずれバー  
ジョン》

明久「もう、いやあああああ！！！！！！」

秀吉「大丈夫じゃ明久！！ワシらは何も見ておらん！！」

膝から崩れ落ちるアキとそれを慰める秀吉。結構シユールだ。

劉真「あ、そくだ！！康太に相談してみろよ！！康太に相談して

明久「笑われる？」

劉真「違う！！脅迫の犯人を見つけてもらえばいいだろう？」

明久「そ、そうだね！！じゃあ僕はムツツリー二のところに行って  
くるよ！！」

秀吉「ムツツリー二は雄二と屋上にいるからの！！」

明久「うん！！」

全力で屋上に向かうアキ。

瑞希「あの…明久君はどうしたんですか？」

秀吉「姫路よ。一緒に話でもせんかのう！！」

美波「写真には何が映ってたの？」

劉真「美波。ゆっくり話そうじゃないか！！」



俺たちはアキが戻ってくるまで時間稼ぎという名の雑談をし続けた。

アキたちが教室に帰ってくるると同時に鉄人が教室に入ってきた。

西村「明日からの強化合宿についてだが、クラスごとに行き方が違うからな」

どうせAクラスがリムジンバスとかでBクラスとかが観光バスとかだろうけど。

西村「集合場所とか日程などは今配っているしおりを確認しておけ。まあ、勉強道具とか着替えとかを持ってくるだけでいいから忘れ物はないだろうけどな」

前からしおりが回って来たので一枚受け取り、後ろに回す。

西村「さて。我がFクラスの集合場所についてだが

」

俺たちは最底辺クラスだから電車かな？腰痛くなりそうだなあ……  
座布団でも持っていこう。

西村「現地集合だからな」

「「「「「案内すらないのかよ!?!」「」「」「」

全級友たちが号泣した。

俺と理不尽と脅迫文（後書き）

「そっいえば私、お弁当を作っ  
て来たんですけど……」

B y 姫路瑞希

俺と電車とバケモノ教師（前書き）

「貧乳はステータスだ!!」

B Y 神無月劉真

## 俺と電車とバケモノ教師

美波「おはようリュウ」

強化合宿当日、俺が目覚めると美波が馬乗りになっていた。

状況を整理しよう。

美波と同棲してるから美波がこの部屋にいることは別に問題じゃない。でも、恋人の上に乗っているという特異点があるじゃないか。普通は起こしに来ているという考え方もできるが、コイツは常人の行動からかけ離れている奴だ。胸も小さいが喘ぎ声は人並み外れているしとにかくコイツの行動はって腕が千切れるように痛い！！」

美波「途中から声に出てるんよこのバカ！！」

劉真「わ、分かった！！俺が悪かった！！だから腕を離してくれえ  
！！」

残念そうな顔をしながら手を解放する美波。  
良かった……隻腕にならずに済んで……。

劉真「ところで今は何時だ？」

今日は目覚ましをかけ忘れてたから時計を近くに置いてないんだよなあ。

美波「ちよつと待つてね………げ」

劉真「嫌な予感がするんだが」

美波「ねえリュウ。集合って何時だったっけ？」

劉真「7時に駅の前に集合だな」

我がFクラスは悲惨にも案内が無いから自分たちで足を見つけないといけないわけだからな。

美波「……集合まであと10分なんだけど」

劉真「急いで用意を済ませろ!!!!!!」

当日に遅刻は洒落にならない!!

俺たちは神速で着替えを済ませ、駅にダッシュで向かった。

駅にはすでに俺たち以外のFクラスの奴らが集合していた。

雄二「お。来たようだなんてなんで島田はお姫様抱っこをされてい  
るんだ？」

美波「幸せ……」

秀吉「見事にトリップしておるようじゃの」

美波は俺より走るのが遅いのでお姫様抱っこで運んだわけなんだが  
……あれ？視界がいきなり暗転したような……

須川「今から異端審問会を始める。我々は何だ？」

『『『愛を捨て、哀に生きるもの』』』

須川「異端者は？」

『『『サーチ&デス&デリート』』』

なんかパワーアップしてるぞ。

俺は一瞬でFFF団の奴らに視界を奪われ縛り付けられていた。

須川「異端者の罪状を」

福村「はっ」

あの声は須川と福村か。あとで処刑してやる。絶対だ。

福村「我がクラスメイト神無月、以下<甲>とする。が同じくクラ  
スメイトの島田、以下<ペツタンコ>とする。をお姫様抱っこをし  
て集合場所に走ってきたという罪状が」

須川「長い。簡単に言え」

福村「異性をお姫様抱っこしているのが羨ましかったのであります」  
劉真「ただの嫉妬かよ！！そんなつまらない理由で異端審問会にか  
けるんじゃない！！」

須川『判決、とつとと死刑!!』

クラスメイトによって死刑宣告が出された。このままでは俺の未来が無くなってしまう!!

劉真「待つてくれ!!俺は美波と結婚しなくちゃいけないんだ!!」

須川『神無月の処刑方法は電車からの紐なしバンジーだ!!』

何故か処刑方法が大変なことになっていた。

劉真「それは殺人だろうが!!」

須川『やかましい!!異端者に人権は無い!!』

『ガンホー!!ガンホー!!』

劉真「どこまでも腐ってやがりますねえ!!」

雄二「とつとと行くぞー。時間までに宿泊所に着かなくなっちまう」

見かねた雄二が助け舟を出してくれた。

雄二、お前は最高の友人だよ……。

雄二「安心しろ。劉真には必ず罰を与えるからな」

雄二、お前は最低の友人だよ……。

俺はFFF団のギスギスした視線を見ないようにしながら電車に乗り込んだ。



雄二「暇だな」

電車に乗って一時間ほど経った頃、雄二がそんなことを言い出した。

ちなみに康太がおとなしいのは、夜遅くまでアキと雄二の脅迫犯と盗聴犯について調べていて、今は就寝しているからだ。

美波「じゃあ、しりとりでもしない？」

本を読み終えた美波がそんな提案をしてきた。

雄二「そうだな……じゃあ、普通のじゃつまらないから、漢字二文字限定でいこう」

劉真「別にいいけど、アキと美波には辛くないか？俺は漢検準2級持ってるから大丈夫だけ……」

明久「サラッと凄いやったよね。僕は大丈夫だよ。漢字ぐらいどうってことないさ！！」

美波「ウ、ウチだって大丈夫よ!!」

雄二「そうか?じゃあ、順番はどうする?」

劉真「無難に、雄二から時計回りで、雄二・アキ・姫路・美波・俺・秀吉の順番でいいだろ」

雄二「そうだな。じゃあ行くぞ。『馬鹿』」

明久「それは僕に対する暴言だね!?えっと……『化学』」

瑞希「『く』ですか。ええっと、そうですね……じゃあ、『苦勞』です」

美波「『う』……『うー』……『運動』!」

劉真「げ。また『う』かよ。えっと……『海蛇』」

秀吉「またマニアックなものを……えっと……『備蓄』じゃ」

雄二「『く』か……『苦肉』だ」

明久「えっと……『車屋』」

瑞希「ちよつと無理やりですね……『薬物』です」

雄二「明&劉&秀」……(何でそれが出てくるんだらう……)「」

瑞希「何か言いましたか?」

劉真「別に何も無いぞ!」

美波「ウチね。じゃあ……『追肥』」

劉真「よくそんな言葉知ってたな。えっと……『ひ』は……『貧乳』」

美波「坂本。窓を開けてくれる?」

劉真「捨てる気か!?俺を窓から捨てる気か!」

雄二「クズはトイレに流してきてくれ」

劉真「誰がクズだ!!」

最近、このクラスから『親切心』というものが無くなってきた気がする。

秀吉「しりとりはもう飽きたのじゃ。しかも少しお腹が減ってきた

のじゃ」

明久「そうだね。じゃあ、何をしようか？」

瑞希「あの…明久君……」

雄二「そうだな。トランプでもするか？」

瑞希「あの…坂本君……」

劉真「腹減ったって言うてるみたいだし、昼飯にしようぜ」

瑞希「すみません!!」

「「「「はい……」」」」

瑞希「どうして私を無視するんですか!!」

姫路、その原因はお前が手にしている物体にあるんだよ。

康太「……………どうした？」

康太が姫路の大声で目覚める。

姫路「お弁当を作って来たんですけど、皆さん食べてくれませんか？」

姫路からの無自覚な死刑宣告。

「「「「……………」」」」

俺たちは黙って顔を見合わせ

俺　　グー

雄二　パー

アキ グー  
康太 パー  
秀吉 パー

雄二「逝って来い」

康太「……………俺たちは安心百パーセントの物を食べるから」

秀吉「頑張るのじゃぞ」

劉&明「チツクシヨー！！」

俺とアキは姫路から弁当を引っ手繰り、一気に食べつくす。

瑞希「どうですか？」

劉真「ああ。とつても美味しか

（ボタン）

明久「流石瑞希だね。凄く美味しかったよ

（ボタン）

俺と意識はそこで途絶えた。

劉真「ん？ここは……？」

俺が目覚めると、知らない天井が拡がっていた。

雄二「良かった……二人とも帰って来たか……」

康太「……………二人のうわ言が繋がった時はどうしようかと思っ  
た」

秀吉「姫路の料理は相変わらずの殺傷力じゃの……………」

どうやら、雄二たちが決死の救命活動をしてくれてたみたいだ。

劉真「あー酷い目に遭った」

明久「僕がちゃんとしたメニューを渡しておけば良かったよ……………」

それができるなら始めからしてきてほしいと思う。

雄二「二人が返ってきたところで本題に入るぞ」

雄二がカーテンを閉め、部屋を暗くする。

明久「本題？」

雄二「俺と明久の件についてだ」

確か、脅迫がどうだっていうやつか。

雄二「ムツツリーニ。どこまで分かった？」

康太「……………詳しくは分からない。分かったのは犯人のおしりに火傷の痕があるってことぐらい」

康太。お前は一体何を調べたんだ…………。

雄二「そうか。それだけ分かれば十分だ。みんなよく聞け。今から女子風呂を覗きに行こうと思う」

劉真「今の会話からどうしてそんな計画にいくんだよ…………」

雄二「これは別に覗きたいってワケじゃない。犯人の特徴が服の下にある以上、覗くのが一番手っ取り早い」

それはそうかもしれないけどな…………覗きって犯罪だし。

秀吉「この間ので懲りてなかったのかの…………」

この間というのは、おそらく親睦会の時のことだろう。

雄二「さあ、この提案に乗るといふ奴は拳手してくれ。別に強制はしない」

フツ。考えることでもないだろ。なぜなら俺たちは

「…………乗った!」「…………」

欲望にまみれた男子高校生だからな。

雄二「ムツツリーニ、今は何時だ？」

康太「……………二〇一〇時。女子が入浴を開始してから十分経過」

雄二「よし。一気に駆け抜けるぞ!」

俺たちは一つの野望を胸に秘め、女子風呂へと向かった。

雄二「この道を真っ直ぐ突っ切れば女子風呂だ」

階段を下り、隣の宿舎に来た俺たちは壁に隠れて様子を見ていた。

雄二「よし！！突撃だ！！」

雄二の合図で女子風呂に向かって突撃をかける俺たち。

布施「待ちなさい！！」

しかし、俺たちの前に布施先生という壁が立ちはだかった。

クソッ！！予測済みだったか！！

明久「雄二、どうするの！？」

雄二「構わん、ぶちのめせ！！」

布施「そこは構いなさい！！私は教師ですよ！！」

布施先生に殴りかかろうとするアキ。いや、それをしたら停学どころじゃすまないと思うけど。

布施「ヒイ！！さ、試獣召喚！！」

アキの拳を受け止めたのは布施先生が呼び出した召喚獣。

そうか。教師の召喚獣は物に触れるから生徒も抑え込めるんだ！！

布施「吉井君が観察処分者になる前は自分たちで雑用をしておいたからね。操作はお手の物ですよ」

秀吉「雄二よ。どうするのじゃ？」

雄二「布施センの召喚獣を叩き潰すまで！！試獣召喚！！」

秀吉「ワシも加勢しよう」

明久「頑張れ雄二と秀吉！！」

雄二たちを置いて先に行こうとするアキ。

雄二「一応、お前の点数を聞いておこう」

明久「確か、あと一点で……」

雄二「あと一点で？」

アキのことだからそんなに高くないだろう。56点ぐらいかな？



明久「二桁だった気がする」

雄二「ムツツリー二と劉真と先に言ってる」

お前の頭はお花畑だよ。

明久「了解　　つて、ムツツリー二がもつけない!」

劉真「前方を凄い速度で走ってるぞ」

康太の奴、性欲が入るとスーパーマンみたいになるんだから……。

大島「どこに行くつもりだ土屋？」

しかし、康太の前にも壁が立ちはだかる。

それは、保健体育教師の大島先生だった。

康太にとっては師匠にもあたる存在の教師だ。康太が勝てるわけない……。

康太「……………大島先生」

大島「何だ？」

康太が一步前に出る。大島先生を説得しようとしているんだろう。

康太「……………これは覗きじゃない」

大島「だったら何だというんだ？」

さあ、どうでる?ここでの発言がカギになってくるぞ……。

康太「……………保健体育の実習」

大島「試獣召喚だ」

康太は真面目に説得するつもりだったのだろうか？

明久「ムツツリーニ、ここは任せたよ!!」

劉真「教師を倒したら合流しろよ!!」

俺たちは女子風呂に走り出す。

大島「教師を倒すか……お前たち、教師を

舐めるなよ」

|        |      |     |      |      |
|--------|------|-----|------|------|
| 『 体育教師 | 大島武  | V S | Fクラス | 土屋康太 |
| 保健体育   | 663点 | V S | 424点 | 』    |

通り過ぎる時に見えた点数は嘘だと思いたい。

明久「まさか点数操作とか……」

アキ、それは絶対はないと思う。

西村「われわれ教師がそんな卑怯な真似すると思うか？バカ共が」

女子風呂を目の前にした俺たちの前に筋骨隆々の補修教師、西村宗一先生改め熱血鉄人先生が立ち塞がる。

劉真「出たな。鉄人123号……」

西村「西村先生だ。しかも、鉄人はそんなに量産されていない」

まさか鉄人が護衛に回ってるなんて……突破は難しいなこりゃ。

西村「ったく……我々教師だって日々の勉強は欠かしてないという

のに……」

明久「へえ、そんなんですか。では、西村先生の点数は？」

西村「俺はいろいろあって試験を受けて無くてな。今は点数が無いんだ」

明久「へえ、無いに等しい点数ですか。流石筋肉バカですね」

劉真「違つぞアキ。筋肉しかないんだ」

西村「……一応、血液型を聞いておこうか」

絶対に輸血のためだろ。教師としてそれは良いのか？

劉真「アキ。俺はトンファーで応戦するから、オマエは召喚獣である筋肉教師を倒せ」

明久「分かった！！試獣召喚！！」

|       |      |    |      |      |
|-------|------|----|------|------|
| 『補修教師 | 西村宗一 | VS | Fクラス | 吉井明久 |
| 総合科目  | NONE | VS | 929点 | 』    |

明久「あれ？先生は召喚獣を出さないんですか？」

西村「点数が無いと言つたろうが。いいから、かかつてこい」

劉真「アキ！！日頃の恨みを込めて、本気で行くぞ！！」

明久「うん！！」

俺とアキの召喚獣が鉄人に向かって武器を振り下ろ

西村「ふんぬっ！！」

そうしたら、拳で撃ち落とされた。

劉&明「……………は？」

カランカラン、と俺たちの武器が地面を転がる。

西村「お前たち、少しばかり俺を甘く見ていたようだな」

劉真「ぐ……!?!」

鉄人が俺と召喚獣を持ち上げる。

片手で人一人持ち上げるなんて、どんな馬鹿力だよ!?

西村「教育的指導!!」

劉&明「うぐっ!!」

鉄人の攻撃によって地面に転がる俺たち。

バカな!?!一撃で俺が沈むなんて……。

西村「今回は男らしく正面からきたということ、停学は勘弁してやろう。優しい西村先生で良かったな」

優しい先生は暴力なんてしないとと思う。

西村「五人仲良く反省室で英文を百回書け。もちろん反省文だ。一文字でも間違えたらやり直しだからな。終わった者から風呂に入っ  
てよし」

俺たちは反省室で鉄人に温かく見守られながら、反省文を泣く泣く書き続けた。

まあ、俺はすぐに終わったけど。



俺と電車とバケモノ教師（後書き）

「貧乳はステータスよ!!」

B y 島田美波

俺と自習と同志達（前書き）

「お前は俺たちの最後の希望だ！！」

B  
y  
福村

## 俺と自習と同志達

翔子「……雄二、一緒に勉強できてうれしい」

強化合宿二日目はAクラスとの合同学習となっている。  
学習内容は個人の自由で教師への質問もOK。  
それに、生徒同士が向かい合うように座っていた。

雄二「……当たり前のように乗るな。クラスの連中が凄まじい殺気を放っているから」

当たり前だ。俺たちは他人の幸せを妬む者。それが雄二ともなれば即死レベルの苦しみを味あわせてやろうと考えるくらいだ。

明久「でも、どうして自習なんだろう？」

雄二「バカ。お前はAクラスの授業を受けて、内容が分かるのか？  
明久「失礼な！！僕にとってはAもF也大差ないよ！！……どちらも分からないし」

劉真「この合同学習の目的はモチベーションの向上だ」

雄二「劉真の言うとおりだ。AクラスはFクラスの様にはなるまいと学習に励む。FクラスはAクラスを見て、あのようにになりたいと学習に励む。というわけだ」

断言しよう。Fクラスはそんなことでモチベーションが上がることは無い。

愛子「あ。代表もココにいたんだ。じゃあ、ボクもココにしようかな」



俺たちが雑談しながら勉強していると、工藤が勉強道具を持ってやってくる。

劉真「よう工藤。康太もいるぞ」

康太「……………おはよう」

愛子「ほほう。康太君ねえ……………」

怪しくニヤケ、目を光らせる工藤。絶対に何か企んでるな。

愛子「康太君。君、昨夜女子風呂を覗こうとしたんだって？」

康太「……………ッ!!」

工藤が放つ殺気に思わず背筋をピンと伸ばす康太。

愛子「ボク以外の女子の裸を見ようとするなんていい度胸だね……………」

神無月君と吉井君も一緒だったらしいじゃないか」

ビクウ!!

突然後ろから放たれた殺気に背中から嫌な汗を大量に流す俺とアキ。

瑞希「面白いことを聞きましたね。美波ちゃん」

美波「ええ。まさか、女子風呂を覗こうとした愚かな奴がいるなんてね……………」

拙い。後ろを向いたら確実に殺される。ええい!!こうなりや弁明だ!!

劉真「美波!!俺は女子風呂を覗いてなんかいない!!主犯はアキ

だ！！」

明久「こりゃあああああああ！！！！！！」

秘技！！友人を盾にして自分は案全区域！！

瑞希「明久君？詳しく聞かせてもらいますよ？」

明久「お願い瑞希、話を聞いて！！」

瑞希「だから聞くって言ってるじゃないですか？この石畳の上で」  
明久「そんなのは聞いてないよ！？」

あっちは大変だなあ。生贄は辛いよ。

美波「リュウ？じゃあ、共犯は誰なのかしら？」

劉真「え！？ええつと……………」

どうする？康太はすでに「お仕置きだよっ！！」工藤に折檻「ギヤアアア！！」されているし、雄二は霧島にもうばれてる……………いけない目はこれ？「から今更共犯と」いけない目はこれ？「じゃねえよ目が！！目があああああ！！！！」言っても遅いし。どうする？誰か生贄は……………あ。

劉真「共犯は秀吉だ」

秀吉「ワシを犠牲にした！？」

犠牲じゃない。だって、嘘はついてないし。

美波「もしもし大雅さん？木下が女子風呂を覗いたそうですよ。はい。分かりました。失礼しまーす。……………木下。大雅さんが帰ってきたらオボエテロ……………だつて」

秀吉「一転して最悪の状況になったのじゃあ

！

「！」

憐れ秀吉。姉貴のオシオキは世界で一番辛いからな。頑張れよ。

美波「まったく……裸ならいつでも見せてあげるのに……」

劉真「そのセリフを今言うんじゃない。Fクラスの連中が須川を中心にカッターを俺に向けているから」

嬉しいけど、そのセリフを言うときは時と場合と場所と雰囲気が必要不可欠だ。

パンツ！！

美春「お姉さまの裸ですかっ！？」

ああ……また変なのが増えた……。

ドアを勢いよく開けて入ってきたのはDクラスのツインドリル。

美春「ツインドリルじゃありません！！清水美春です！！」

劉真「うるさい！！オマエなんかツインドリルで十分だ！！」

このドリル妖怪は召喚大会でボコボコにしてからよく突っかかってくる。

まったく、こっちも暇じゃないんだからさ……。

美春「はっ！！。そんなことより……お姉さま　　！！」

美波にルパンダイブを決めようとする清水。駄目だ、間に合わない！！

美波「須川バリアー」

美春「最悪です！！腐った豚にも劣る抱き心地です！！」

盾にされ罵倒された須川は福村たちに肩を叩かれながら慰められていた。まあ、頑張れよ。

美波「美春！！いいから自分の自習室に戻りなさい！！」

美春「嫌です！！美春はお姉さまと一緒に勉強したいんです！！」

美波「ウチはリュウと一緒に勉強するからアンタの相手はできないの！！」

あ。俺をスケープゴートにしやがったぞアイツ。

美春「おのれこの類人猿があああああ！！！！！！」

劉真「ストップ清水！！その言い方は白井さんだ！！キャラが同じだからってやっていいことと悪いことがある！！」

俺の叫びが教室の騒音にかき消される。

この騒ぎは鉄人が怒鳴り込むまで続いた。

あその後、昼食や夕食タイムを楽しく過ごし、部屋に戻ってきた俺たちはテーブルを囲んで作戦会議をしていた。

明久「どうするの？このままじゃ女子風呂にたどり着くこともなく合宿が終わっちゃうよ？」

康太「……………昨日の今日だから、警備は強力になっている」

康太の言うとおりだ。作戦を思いついた昨日でさえあんな強力な警備がセットされていたんだ。

今日の女子風呂警備は相当な強者ぞろいのはずだ。

雄二「明久、昨日の敗因は何だったと思う？」

明久「敗因？数が少なかった、とか？」

雄二「そうだ。なら、解決策は一つしかないだろう」

劉真「増員、か……………」

でもなんか雄二らしくないな。雄二だったらもっとまともで強力な作戦を思いつくはずだし。

コンコン

須川「俺たちに用って何だ？」

すると、部屋に須川を先頭としたFクラスの男子連中が入ってきた。いや、だからその人数は入りきらないって。

福村「正直、勉強しすぎて疲れてんだよー」

有働「部屋に帰って寝たいんだけど」

雄二「お前ら、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

俺は欲望に素直なこのクラスが大好きです。

雄二「昨夜、俺達は女子風呂を覗きに行った」

『『『ふむふむ、それで？』』』

今の雄二の言葉に疑問を持たないこのクラスはやっぱりおかしいと思う。

雄二「だが、教師の野郎どもが俺たちの行く手を阻みやがったんだ」

『『『許されないな』』』

こんなことを計画してる俺たちもな。

雄二「だから、お前らには警備隊の討伐に加わってもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷の光景だ」

『『『乗った！！』』』

内容は最悪だが、これで仲間が増えた。昨日よりは幾分かマシ、結

構なところまでいけるだろう。

雄二「隊は五つに分けるA班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニ、E班は劉真について行ってくれ!!」

『『『心!!』』』

雄二「いいか!!俺たちの目標は男子禁制の理想郷だ!!神魔必滅・見敵必殺!!ここが我らが行く末の分水嶺と思え!!」

『『『おおおおおおつ!!!!』』』

雄二「Fクラス、出陣だ!!」

俺たちは二度目の女子風呂覗きを実行した。

女子風呂前の階段傍には、布施先生が立っていた。

劉真「秀吉部隊、進め!!」

『『『心!!』』』

布施先生に向かって秀吉たちが突っ込んでいく。

布施「へ、変態が編隊を組んで、やって来た!？」

上手い!!座布団一枚!!

劉真「よし!!俺たちは雄二たちの横を突っ切るぞ!!」

福村「行けそうだな」

福村と余裕そうに会話をしながら走っていく。

美波「そこで止まりなさい!!」

福村「し、島田!?!それに他のクラスの女子まで!？」

俺たちの行く手を遮ったのは、美波率いる女子部隊だった。

美波「まったく、昨日の今日でよく懲りないわね……」

劉真「美波、そこをどいてくれ!!俺たちは行かなきゃならないんだ!!」

美波「ウチは女子として、ココから退くわけにはいかないわ」

チィ!!俺たちの戦力じゃココを突破するのは難しい!!

劉真「美波!!俺はただ、オマエのペタンコを見たいだけなんだ!!」

美波「本人を目の前にしていい度胸ね」

福村「神無月、お前は勇者だな……」

あれ?言葉間違えた?



美波「アンタのその腐った根性、叩き直してあげるわ」

指をポキポキと鳴らしながら一歩ずつ俺に迫ってくる美波。拙い。捕まったら即死決定な気がする。

福村「神無月はやらせない!!」

なんと、福村が美波を羽交い絞めにしていた。

有働「俺だって!!」

竹中「神無月、逃げるんだ!!」

美波「こらっ!!アンタたち、上から退きなさい!!」

俺の部隊のみんなが体を張って美波を抑えこんでくれていた。

福村「神無月は教師を倒せる唯一のジョーカーなんだ!!」

竹中「こんなところで失うわけにはいかない!!」

劉真「そんな!?俺には、オマエらを置いて逃げるなんてできない!!」

有働「いいから逃げろ!!」

劉真「なっ……」

福村「俺たちが島田を食い止める!!だから、俺達の理想郷のためにも逃げてくれ!!」

劉真「福村……分かった!!スマンみんな!!」

美波「あ!!待ちなさい!!」

俺は涙を堪えながら部屋にダッシュで駆け抜ける。ごめんみんな……絶対に仇はとってやるから……。

部屋に戻ると、涙を流しているアキと会った。

劉真「アキ、お前も同じか？」

明久「うん……みんなの熱意は受け取ったよ……」

『吉井明久、神無月劉真は至急、反省室まで来なさい』

まあ、面割れてんだし当たり前だよな。

俺と自習と同志達（後書き）

「教育的指導」

B y 西村改め鉄人

俺と夢才と古今東西（前書き）

「り・ふ・じ・ん！！」

B y 神無月劉真

俺と夢才子と古今東西

反省室で百枚の反省文を書いた翌朝。

??「ううん……」

劉真「……ん?なんだ……ッ!？」

目を覚ますと、目の前に美波の顔があつた。

なんでだ?ここは男子部屋。美波は居ないはずだ。

美波「むにゃ……」

可愛い顔して眠りかけている我が恋人。ヤバイ、理性がぶっ飛んで  
取り返しのつかないことをしそうだ……。

悪魔『どうした?オマエの彼女なんだし押し倒しちまえよ』

お。悪魔がいる。初めて見たなあってそんな妄言には俺は騙されな  
い!!!

悪魔『……じゃあその胸を触ろうとしている右手は何だ?』

しまった!!俺の理性が欲望に負けている!!

悪魔『素直になっちまえよ。オマエは美波を好きにしたいんだろ?』

そりゃあ、自分の彼女だし?可愛いし?最高のパートナーだけど、  
やっぱりこんなところするのは美波が嫌がるから駄目だろ。

悪魔『……オマエが美波にキスしようとしてなかったら完璧だったのにな』

頑張れ弱弱しい俺の理性！！このままじゃ美波にあんなことやそんなことをしちまう……！！

天使『駄目だよ！！劉真は根っからのホモ野郎だから、美波を押し倒しちゃ駄目だよ！！』

俺の中の天使、正論なんだが俺はホモじゃない。

天使『こんなペツタンコなんか興味ないくせにいいいいいい！！！！』

ぶっ飛べ星のように！！！！

悪魔『天使が空の彼方に飛んで行ったんだが……』

粛清だ。これは粛清なんだ。

悪魔『そうかい。もういいんじゃないかねえか？オマエもそろそろ我慢の限界だろ？押し倒すのが拙いって思ってたんならキスぐらいに留めておけよ』

そうだな。キスぐらい日常茶飯事だし、こんなところでのキスってのも乙なものだ。

決心を固め、美波の可愛らしい唇に自分の唇を近づける。  
お互いの距離はもうすぐゼロに

ってところで目が覚めた。

劉真「どんだけリアルな夢なんだよ!!」

悪魔「いや、美波が男部屋で寝てるわけないだろ」

そうだけど!!それが当然なんだけど!!でも胸に燻るこの残念な  
気持ちはどこにぶつけなければいいんだ!!

??「ううん……」

背後からデジャブを感じさせる声が聞こえる。マジか!?

俺はゆっくりと後ろを振り返る。

康太「……………ん……………」

劉真「……………期待していた自分を殴り飛ばしたい」

俺が振り返ると、康太の寝顔が存在していた。

康太「……………う…………ん…」

康太が身じろぎ、俺との距離が縮まる。大惨事まであと一歩というところだろう。

悪魔『……………オマエならできさ』

何を！？康太は男だからすることなんて何もないはずだ！！

悪魔『素直になれつて。俺は止めない』

止める！！そこは普通に止めてくれ！！俺はノーマルだ！！

天使『劉真。キミは真正正銘のホモ野郎の階段を上るんだね』

俺の中の天使、オマエは二度と出てくるな。

劉真「そんなことしてる場合じゃない……………起きろ康太」

康太の肩を揺すって起こす。どうせ起床時間だから起こさないといけないんだよな……………。

明久『雄二！！死んで詫びるか死んで詫びろ！！』

なんだかアキの奴が暴走していた。

西村「おい、何をバカやつとるか」

明久「その顔面叩き潰す！！くらえ雄二！！」

雄二「何だ！？明久が朝からキまつてるぞ！？持病か！？」

秀吉「西村先生、明久を止めてほしいのじゃ！！」



西村「……お前らは朝から何をやってるんだ……」

劉真「おはよう康太」

康太「……………明久のことはシカトして挨拶？」

だつて巻き込まれたくないもん。

朝のドタバタの後、みんなで朝食を取りながら今日の計画を話し合う。

明久「雄二、どうするの？Fクラスだけじゃあの警備を突破できないよ」

ご飯を口に運びながら明久は言った。

確かに、Fクラスは昨日ボコボコにされたからなあ……………。

雄二「なら、増員するまでだ」

明久「うーん……………それってなんか僕たちらしくないと思うんだ…」  
雄二「よく分かったな。増員する理由はなにも覗きを成功させるためだけじゃない」

明久「え？そうなの？」

劉真「保身のためだろ。文月学園は世間に注目されている学校だからな。生徒の処分の差別をなくす必要があるから、他のクラスを巻き込んじまえば罪が軽くなるってことだ」

雄二「全部言っちなよ……………」

劉真「スマンな。でも俺の方が上手く説明できると思ったんだ」

雄二「まあ、いいさ。よし、自習の時にメンバーを集めるぞ」

「……………」

俺たちは残りの朝食を口にかきこんだ。

明久「ごめん、ダメだったよ……………」

Aクラスの男子代表の久保に話をつけに行き、失敗したアキは肩を落としていた。

劉真「優斗の説得もダメだった。アイツは木下姉にビビってるから動かない」

雄二「Aクラスの戦力ぐらいは確保してきたかったんだがな。まあいい。他のクラスの協力を得ればいいだろう」

劉真「この鉄人管轄の最強の独房を抜け出してか？」

明久「成功しそうにないね」

雄二「そうだな……どうするか……」

鉄人の察知能力は既に超能力者レベルだからな。すぐにばれる恐れがある。

美波「まあたアンタたち何か悪巧みしてるでしょ」

すると美波がこっちに近づいてきた。美波の『悪巧み』という言葉に鉄人が反応する。

劉真「悪巧みじゃないぞ」

名誉のための戦いの作戦会議だ。

美波「はあ……リュウはウチの裸なんて見慣れてるでしょうに……」  
劉真「そのセリフがすぐに出る男女ってなんなんだろうな。ん？」

雄二が遠くから目で『島田を遠ざける。鉄人がマークしている』と訴えてくる。

さて、どうやって美波を遠ざけようかな……あ。いいポジションに須川がいる。

美波「どうしたの？」

劉真「須川がオマエに用があるって言ってたのを思い出したんだ」

美波「そう。なら後で行つとくわ」

劉真「今行つてくれたら合宿の後、好きだけ抱いてやる」

美波「行つてきまーす!!」

美波が急いで須川のもとに行く。

よし。今のタイミングなら……。

俺たちは音もなく部屋から出る。

須川「話？何の事だ？」

美波「え？違うの？まあ、いいや。帰ってリュウに抱いてもらえるし」

須川「また友人を一人失うことになるな」

『『異端者即殺・神無月処刑……』』

FFF団の声が聞こえるのとドアが閉まるのがジャストだった。

明久「ここにも、監督の先生がいるね」  
康太「……………当たり前」

無事に教室から脱出した俺たちは廊下でどうやって入るか考えていた。

雄二「しょうがねえ。誰かが囿になって先公の目を引き付けるか」  
明久「お断りするよ」

身の危険を察知したアキが速攻で断る。……………最近、周囲の奴らがバケモノじみてきた気がする。

雄二「それなら、ゲームで決めようぜ」  
劉真「ゲーム？」  
雄二「古今東西だ」

古今東西か……………それなら平等だな。

雄二「坂本から始まる！！」  
「……………イエーツ！！」  
雄二「古今東西！！」  
「……………イエーツ！！」  
雄二「Hから始まる英単語」

チャンチャン

雄二「Hunny」

チャンチャン

明久「僕の、負けだ……」

秀吉「一つも出てこんのか!？」

流石だ。英単語の一つも出てこないなんて……。

明久「ム、ムツツリーニだって分からないよね!！」

康太「……………そんなことはない」

劉真「じゃあ、もう一回しよう」

チャンチャン

雄二「hit」

チャンチャン

康太「……………H」

ん?

劉真「待ってくれ雄二」

雄二「何だ?」

劉真「今のは英単語としてどうかと思う」

雄二「合ってただろ。次行くぞ」

チャンチャン

秀吉「high」

チャンチャン

劉真「hut」

チャンチャン

明久「himeji」

ん？

劉真「ストップだ雄二」

雄二「だから何だよ」

劉真「いつから姫路の名前は英単語になったんだ？」

明久「【名詞】 できてる人間の意。【-ful】で形容詞になる。He is so helpful. “彼はとっても親切な人間だ”」

劉真「卑怯だ！！人の名前を辞書に載っているように解説するなんて！！」

布施「廊下で遊んでいるのは誰ですか！！今は自習中ですよ！！」

しまった！！布施先生が教室から出てきちゃった！！

劉真「雄二、ちょっと　　ってもういない！？」

あの一瞬で隠れやがったな！！

布施「待ちなさい!!」

劉真「クソツ!!不幸だあ

!!」

布施先生と十分間ぐらい鬼ごっこをする羽目になった。あの人結構スタミナあるな……。

雄二「よくやった。おかげでD・Eクラスが味方に付いてくれた」  
劉真「と、途中から大島先生まで追いかけてきて……」

あの人の速さは凄かった。教師の中で鉄人の次に早いかもしれない。

明久「次はどうするの?」

劉真「もちろん古今東西だ。お題はこっちで決めさせてもらおうぞ」

秀吉「大丈夫なのか?」

劉真「大丈夫だ。逃げてる間に考えてたから」

さっきは動揺して大声だしてしまったただけだからな。



劉真「神無月から始まる!!」

「『『『イエーツ!!』』』」

劉真「古今東西!!」

「『『『イエーツ!!』』』」

劉真「Fクラスの女子の名前!!」

チャンチャン

劉真「みにゃっ」

五十嵐「待ちなさい神無月君!!どうして廊下を走っているんですか!!」

劉真「こつちにもいろいろあるんです!!」

五十嵐先生の足の速さは教師の中で五強には入りそうだとということが分かった。

俺と夢才と古今東西（後書き）

「この章って俺の出番少ないか？」

B Y 唐津優斗

俺と根本と過去話（前書き）

「……………は？」

B y 根本恭二

## 俺と根本と過去話

そんなこんなで恒例の出撃前ブリーフィング。

雄二「結局、手を貸してくれたのはDクラスとEクラスだけか……」  
劉真「昨日よりは戦力アップできたな」

Cクラスは代表がヒステリック小山だから男子が尻込みしてるし、  
Bクラスは代表の根本を先頭に『覗きダメ絶対』と反対してきたから参加はしてくれない。

明久「根本君は悪を許さないからね……」

雄二「アイツも変わったよな……」

何故か遠い目をして天井を仰ぐ俺以外のみんな。

劉真「根本が変わったってどういうことだ？」

秀吉「うむ。劉真は転入生だから知らなかったのう」

雄二「いい機会だ。話してやるよ。根本が悪から善に変わった話しを……」

明久「なぜか有名なんだよね」

そして雄二は落ち着いた声で話し出した。

根本は一年生の時は『卑怯・残忍・カンニング常習犯』という不名誉な称号を付けられていた男だった。  
しかし、彼の評価はとある出来事を境にして大きく変わる事となった。

一年生があと一か月で終わるといふ時期、根本はとある少女に出会った。

少女『私を家まで案内しなさい』

根本『……………は?』

その少女はツインテールで高圧的な少女だった。

少女『聞こえなかったの?私を家まで案内しなさいって言ったのよ』  
根本『意味が分からない。何で俺がお前みたいなガキの家さがしを手伝わなきゃいけないんだ』

少女『ガキじゃないわ。私は加藤佐奈、15歳よ』

根本『そんな外見してて中3かよ……………憐れだな』

ボカアッ!!

根本の股間に前蹴りを決める佐奈。根本は痛みあまり地面にのた打ち回る。

佐奈『フッフ、憐れね』

根本『テム……金的は……はんそ……くだろ……』

佐奈『あらゴメンナサイ。もう一回蹴ってほしいのね?』

根本『誰がそんなことを言った!?!』

佐奈『貴方が』俺は生粋のマゾなんでどんどん蹴ってください女王様』と言ったじゃない』

根本『病院に行け!!耳鼻科と脳内外科に!!』

佐奈『うるさいわね。いいから私を家まで案内しなさいな』

根本『ケツ!!やってられつかよ!!迷子なら交番にでも行け!!』

落とした鞆を拾い、帰路に着こうとする根本。

佐奈『分かんないのよ……』

根本『あ?』

佐奈の呟きに根本は思わず足を止める。

佐奈『ココに引越してきたばっかで……家までの道が分からないの……お願い、家を探すの手伝って……お兄ちゃん……』

根本『!?!』

”お兄ちゃん”という言葉が根本の胸に突き刺さり、電流が流れる。

佐奈『私……まだ友達いなくて……お兄ちゃんが初めてココに住んでいる人で喋った人なの……』

根本『頼む。お兄ちゃんと呼ぶのは止めてくれ。理性が持たない。』

はあ……分かった分かった!!家さがしに付き合ってやる!!』

根本はもともと心優しい人間なので佐奈を放っておけないのだ。学校内であんな評価を付けられているのは全て、他の人の罪を自分が被っているからだ。

佐奈『ありがとう!! えっと……』

根本『根本恭二だ。好きに呼んでくれていい』

佐奈『恭二、ありがとう!!』

涙目で精一杯の笑顔を根本に向ける。根本は思わず顔を背けた。

恭二『い、いいから家の住所とか分かるか? 家の特徴とかでもいい』

佐奈『えっと……赤い家よ』

恭二『他には?』

赤い家というだけでは特定は難しい。形とか大きさとかハッキリとした情報があれば家も探しやすくなる。

佐奈『表札に加藤って書いてあることぐらい……あ!! 丘の上にあるわ!!』

恭二『丘の上か……』

根本の頭の中に街の地図が映し出される。この街の住宅街はほとんど丘の上に位置しているので、あまり有力な情報ではない。

恭二『ま、それだけあれば十分だ。住宅街を一つ一つあたっていくぞ』

佐奈『あ、ありがとう…… / / /』

そして、恭二と佐奈は町中を歩き続けた。

恭二『見つからないな……』

あの後、三時間も街を歩き続けた恭二たちは公園のベンチで休んでいた。

佐奈『もう、いい……恭二は帰っていい。後は私一人で探す』

恭二『バカ言うな!!こんな遅い時間に女子を一人で歩かせられるわけないだろ!!』

佐奈『だって見つからないじゃないか!!』

佐奈の顔を見た恭二は言葉を失った。悲しみのあまり、瞳に何も映してなかったのだ。



佐奈『こんなに探しても見つからない……あとは交番にでも行くさ  
……』  
恭二『……………』

恭二は何も言わずに佐奈をおぶる。

佐奈『な、何をする!!!』

恭二『疲れてるんだろ?運んでやる』

佐奈『でも、家の場所は分からないって

恭二『うるせえ!!!』

佐奈の言葉を遮る形で恭二が叫ぶ。

恭二『俺は途中で諦める奴が大嫌いなんだ!!どんなに評価が最低  
になっても、どんなに最低な目で見られても、自分はいつか救われ  
るんだと諦めないやつになれ!!俺のお前に対する…加藤佐奈への  
唯一の命令だ!!!』

佐奈『うん……うん!!!』

恭二『よし、それでいい。もう一回探すぞ』

佐奈『了解!!!』

恭二と佐奈を夕焼けが照らしていた。

雄二「そして、根本と佐奈は無事に家を探すことに成功したんだ」

明久「佐奈ちゃんはこの根本君の彼女なんだよね」

康太「……………お似合いな2人」

秀吉「あの2人の出会いは演劇部が新入生歓迎会で再現したのじゃ」

明久「佐奈ちゃんって文月学園の一年生だったよね？」

康太「……………一年生の学年主席」

劉真「とんでもない才女じゃないか……………」

要するに、根本は優しいやつだったけど周囲の人の罪を被って評価を下げられてたけど、佐奈って子の家さがしに付き合ったことで評価がうなぎ上りになったってことか……………。

劉真「メチャクチャ善人じゃないか」

雄二「ああ。メチャクチャ善人なんだ」

明久「だから、この覗きにも参加してくれなかったんだよね……………」

康太「……………根本ならそうするとは思ってた」

秀吉「佐奈ちゃんが黙ってないじゃろうからのう」

劉真「尻に敷かれてるじゃねえか!!」

雄二「アイツは佐奈ちゃんだけには頭が上がらないんだと」

劉真「なんでだよ!! 普通は逆だろ!?! なんで恩人の方が頭が上がらないんだよ!!」

明久「佐奈ちゃんの親って警視庁の署長さんなんだって」

劉真「そりゃ頭も上がらないか……………」

恐いだろうな……………刃向かった時の処罰方法が。

雄二「よし。昔話もここまでだ。じゃあ、早速行くとするか」  
明久「そうだね。今回こそは成功させよう!!」

俺たちは二度目の女子風呂の覗きに出発した。

俺と根本と過去話（後書き）

「とある科学の異能操作が十万アクセス突破しました!!」  
「いや、ココで違う作品の宣伝すんなよ」

B Y 神無月劉真

B Y 唐津優斗

俺達と女子と三度目の挑戦(前書き)

「サブキャラのな立ち位置!!」

B y 福村幸平

## 俺達と女子と三度目の挑戦

亮「た、大変だー!!」

俺たちが部屋を出ようとしたところに亮（須川）が血相を変えて転がり込んできた。

雄二「どうした？」

亮「女子が食堂で待ち伏せしていた!!」

雄二「なんだと!?!」

男子の部隊は食堂で集合する予定だったから拙い状況だな……。作戦は漏洩することは無いだろうから、雄二の作戦が見破られたということになる。雄二の考えをこの学年で一番分かる人物は……

明久「霧島さんだね」

秀吉「よほど、雄二の覗きが許せんかったのじゃな」

雄二「くそー!!」

壁を拳で殴りつける雄二。自分の作戦が見破られることは頭脳プレーが得意の雄二にとって屈辱そのものだろう。

劉真「こんなところで落ち込んでても埒が明かない!!亮!!幸平（福村）のところに案内してくれ!!アイツの点数はクラスで上の方だが女子相手じゃいつまでもつか分からない!!」

亮「分かった!!」

劉真「雄二たちは作戦通り、女子風呂に向かってくれ!!こうなりや、できることを全力でやるしかない!!」

明久「分かったよ!!行こう、雄二・ムツツリー二・秀吉!!」

康太「……………了解」

アキたちが部屋から女子風呂への道を全力で駆け抜けていく。

亮「劉真、コツチだ!!」

俺は亮と一緒に幸平の救援に向かった。

|   |       |      |    |      |    |
|---|-------|------|----|------|----|
| 『 | 数学    | 198点 | VS | 98点  | 』  |
|   | 美子    |      |    |      |    |
|   | 『Fクラス |      |    |      |    |
|   |       | 福村幸平 | VS | Eクラス |    |
|   |       |      |    |      | 三上 |

俺は亮の案内で食堂へ向かった。  
幸平ってあんなに数学の点数良かったっけ？

劉真「試獣召喚！！」

亮「試獣召喚！！」

幾何学模様が地面に浮かび、お馴染みのデフォルメ召喚獣が姿を現す。

|       |       |   |      |
|-------|-------|---|------|
| 『Fクラス | 神無月劉真 | & | 須川亮  |
| 数学    | 567点  | & | 87点』 |

幸平「劉真！！助けに来てくれたのか！！」

劉真「当たり前だろ！！俺たちは親友に近い友人だからな！！」

亮「微妙な関係だなオイ……」

俺の召喚獣が三上の召喚獣を一瞬で消滅させる。

美子「きゃあ！！」

劉真「勉強してから出直してこい！！」

亮「この人数は抑え込めないぞ！！」

Fクラスの連中はほとんどが戦死しており、今この場には俺、幸平、亮、浩二（横溝）しか残っていない。

劉真「『停止』！！」

俺の叫びに呼応して召喚獣の右手についている腕輪が虹色のきらめきを放ち、女子の召喚獣の動きを完全に止める。



劉真「アーンド、『変身』<sup>チェンジ</sup>！！」

俺の右手についている『漆黒の腕輪』から黒い霧が生じ、召喚獣に降りかかる。

浩二「召喚大会の賞品か！！」

霧が晴れると、そこには白くて角ばった装甲を身に纏い、右手にビームライフル、左手にビームシールドを持ち、背中に青い9枚の羽根が着き、体の中央に黄金のビーム砲を搭載した俺のデフォルメ召喚獣が降臨していた。

幸平「ストライクフリーダムガンダム！？」

そう。幸平の言うとおり、俺の召喚獣はストライクフリーダムガンダムに『変身』していた。

劉真「一気に殲滅する！！行けっ、『スーパードラグーン』！！」

召喚獣の翼から放たれたドラグーンたちが女子の召喚獣を殲滅していく。

『Fクラス 神無月劉真

数学 376点』

この腕輪以外に消耗するな……それにドラグーンも結構点数を使う。あんまり何回も使えないぞ……。

幸平「女子の召喚獣が全滅した！！」

亮「よし。坂本達の援護に向かおう!!」

俺たちは召喚獣を戻し、女子風呂のほうに向かった。

朝倉「(土下座)」

竹中「(土下座)」

女子風呂に向かった俺たちの目の前には綺麗な土下座を決めている  
D・E・Fクラスの男子だった。

劉真「何があつたん？」

浩二「なんで方言？」

亮「お、おい！！高橋女史がいるぞ！！」  
幸平「何い！？」

土下座をしている男子たちの先頭には雄二とアキが立っており、その向こう側には姫路と霧島と高橋女史が召喚獣を足元に従わせて立ちふさがっていた。

劉真「……俺たちも自分の考えに従うぞ」  
「」「」

他の男子の後ろで綺麗な土下座を決める俺達。

明久「バカばかりだ！！」

違うぞアキ。これはバカの行動じゃない、負けを認めた潔い者の絶对的な降伏だ。

高橋「貴方たちは彼らのような真似はしないのですか？」

余裕ぶつた態度で高橋女史がアキと雄二に詰め寄る。

雄二「フツ。アンタは何もわかつちやいない」

明久「そうだね。これがテストなら高橋先生は0点ですよ」

高橋「なんですって……」

あ。アキと雄二の言葉に青筋浮かべてらあ。案外短気な性格なのかな？

雄二「俺達には分かってるんだ……」

明久「僕たちには分かってるんですよ……」

アキと雄二の顔に深い影が刻まれる。俺にも分かった気がする。あいつ等が言いたいことが。

雄&明「土下座なんかしても許されないってことぐらい」「」

瑞希「明久君？いつつつつぱいお話したいことがありますよ？」

翔子「……雄二、覗きは犯罪ってことを体に刻み込んであげる」

美波「リユウ？覚悟は良い？」

あれ？俺にも飛び火が来てる。

俺たちはその後、地獄のような痛みを味わった。

俺達と女子と三度目の挑戦（後書き）

「同じく……」

B y 横溝浩二

俺とメールと大きな失敗（前書き）

「かはっ  
」

B y 神無月劉真

## 俺とメールと大きな失敗

雄二「まさか高橋女史が参戦しているとはな……」

女子陣に圧倒的な戦力を見せられた俺たちは自室で反省会をしていた。

劉真「生徒は雑魚が多いけど、教師が厄介だな」

雄二「教師は俺達で何とかできるかもしれない」

明久「ウソっ!？」

教師を俺達だけで倒すだって!？俺が高いのは数学だけで、長谷川先生と互角に渡り合うのなんて難しいのに!!

雄二「数学の長谷川先生は劉真になんとかしてもらおう。腕輪が二つあるんだし何とかしてくれ」

劉真「んな無茶な……」

長谷川先生は俺の師匠のようなもの。よく二人で数学について語り合ってるからそれなりに仲がいいし……。仲がいいからお互いの強さも分かるってもんだ。

雄二「何とかしないと、また翔子たちに悪夢見せられる羽目になるぞ」

うう……それを言われるとさっきの痛みが蘇りそうだ……。これから美波の笑顔が夢に出るかもな……。もちろん悪夢で。

雄二「大島先生はもちろんムツツリーニ。いけるか？」

康太「……………次は負けない」

おお……………康太の後ろに凄まじいほどのオーラが見える。これは本気だ、期待できる。

雄二「秀吉は俺と一緒に高橋女史の相手だ。腹くくれよ」

秀吉「ワシの点数はそこまでよくないのじゃが……………」

雄二「大丈夫だ。お前の操作技術は人並み以上だから。何とかする」

秀吉「うむ。了解じゃ」

秀吉と雄二が高橋女史か……………苦しい戦術だな。まあ、俺は戦術を考えるのは苦手だからしょうがないか。

雄二「それと、鉄人のもとにある男子生徒を絶対に送る必要がある」

明久「それは誰？」

雄二「お前だよ明久」

アキの召喚獣は生徒の中で唯一物理干渉ができる召喚獣だから、鉄人を倒せるのはアキだけだ。

明久「ぼ、僕!？」

雄二「お前しか鉄人を倒せる可能性が無いんだ。覚悟決めろ」

明久「う、うん……………」

劉真「それより人数増やさないか？今の人数じゃとてもじゃないが敵わない」

雄二「そうだな。それに女子・教師軍はあれ以上数を増やせない。

AクラスからFクラスまで全員参加していたからな」

だが、どうすれば仲間が増やせる？Aクラスは久保と優斗が動かな



い限りは中立の立場だろうし、Bクラスは代表が究極善人根本恭二だから覗きの協力をしてはくれないだろうし……。

雄二「心配するな。姫路と島田と秀吉の三人にこの浴衣を着てもらって写真を撮り、その写真でA・B・Cクラスの劣情をおおることにする」

秀吉「ワシが着ることは決定なのかのう……」

ご愁傷様秀吉。オマエの浴衣姿の写真を姉貴に送らせてもらつよ。

劉真「それはいいんだが、作戦はどうするんだ？」

雄二「正面突破だ」

劉真「……」

雄二「劉真に明久、そんなに絶望した顔をするな。今回の戦闘で分かったことが一つある」

劉真「それは何だ？」

雄二「明久、ここで一つ問題だ。教師同士の召喚フィールドがぶつかったらどんな現象が起きる？」

明久「微塵も分からないね」

雄二「チヨキの正しい使い方を教えてやる」

明久「目があ！！目がああああ！！！！」

アキがまた何も考えずに口にしたことにより、一時の光を失うことになっていた。相変わらずバカだなアキは。

雄二「劉真、お前ならわかるだろ」

劉真「当たり前だろ？俺を誰だと思つてやがる。そんなことぐらい分かりません」

雄二「花瓶の正しい使い方を教えてやる」

劉真「頭があ！！頭がああああ！！！！」

花瓶で人の頭を殴るやつがいるか！？しかも花瓶は割らずにこんな威力を出すなんてFクラスの坂本雄二はバケモノか！？

秀吉「『干渉』じゃろ？」

雄二「そうだ。異なる教科の召喚フィールドがぶつかり合つと、お互いに相殺して消えてしまうんだ」

康太「……………試召戦争の一般常識」

俺とアキは三人から目をそらす。しよ、しよがないだろつ、知らなかったんだからつ。

雄二「そういうことだ。劉真と明久は島田と姫路を呼んでくれ。ムツツリーニはカメラの準備を。秀吉は浴衣を着てくれ」

劉真「りょうかい」

えーっと、美波のメアドはーっと……………あ、あつたあつた。

俺は慣れた手つきでメールの文を作成する。

【部屋に来てくれないか？ちょっと用事があるんだ】

これで良しと。メールを美波に送信し、返信を待つ。

ブーブーブーブー

すると雄二のケータイのバイブレータが起動した。

雄二「ん？メールか？」

ブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブ

雄二「な、なんだ!？」

雄二のケータイが机の上で踊るように震えまくる。

雄二「しょ、翔子からメールが百件も……」

雄二の顔から生気が出ていくのが感じられた。オマエも苦勞してるんだな……。

ブーブーブー

お。メールだ。なんか雄二がバイブレータにビクッとしていて、ど放っておこう。

ん? 幸平と美波からだ。まずは美波のは

【リュウたちの部屋ってどこだっけ?】

そういえば美波は一度も部屋に来てないな。女子だから当たり前だけど。次は幸平のか……。

【お前は屋上と教室ならどっちでいやらしいことをしたい?】

アイツらは一体何についての話題になったんだろう。まあいいや。俺は……

【屋上だ。あそこならどんな物音や大声、喘ぎ声が出ても人が来ることは少ないからな】

送信つと。ふう、アイツらの話題も楽しそうだな。俺もあっちに行

くか

【メール送信中…… 美波】

………は？

待て待て。落ち着くんだ俺。メールの送信後時を間違えるようなへマは俺がするわけないじゃないか。もう一度よく見直せば

【メール送信完了…… 美波】

劉真「かはっ」

俺の口から大量の血が吐き出される。バ、バカな！！こんな間違いをしてしまうなんて！！……ま、まあ、落ち着くんた。そんなに駄目な内容のメールを送ったわけじゃ……

【屋上だ。あそこならどんな物音や大声、喘ぎ声が出ても人が来ることは少ないからな】

劉真「ごぶっ」

畳が俺の血で真っ赤に染められる。な、なんて大胆で率直な誘い文だろうか！！このままでは俺は美波と共に宿泊所の屋上で年齢規制で言えないことをしてしまうことになる！！は、早く訂正のメールを送らなければ

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタッ（雄二がアキと秀吉を巻き込んで倒れる音）

グシャ（秀吉の背中が俺のケータイを粉碎する音）

雄二「スマン秀吉。で、明久。大変なこととはなんだ？」

明久「キサマがたった今作った状況だ」

劉真「あああああああああ！！！！！！ケータイが真っ二つに！！！！」

秀吉「ス、スマヌのじゃ！！」

劉真「謝罪なんかいい！！秀吉！！俺にケータイを貸してくれ！！」

秀吉「う、うむ」

俺は秀吉から緑のシンプルなケータイを受け取る。美波のメアド美波のメアドはどこだ！！

劉真「……………美波のメアドが無いんだが」

秀吉「島田のはまだ知らなくてのう」

俺の中でいろいろなもの崩れる音が聞こえた。美波のメアドなんてはつきりと覚えてるわけもないし、電話番号も覚えてない。

秀吉「劉真よ、そんなに絶望した顔をしてどうしたのじゃ？まさか、島田に年齢規制オーバーの間違いメールを送ってしまった、訂正分を送ろうとしたところにワシがお主のケータイを粉碎してしまっただけになっちゃったというような顔をしておるぞ？」

そんなにピンポイントな顔をするのは人間には不可能だ。

劉真「はははっ。そんなワケないだろ」

秀吉「そうじゃろうな。その通りならワシが即刻死刑の極悪犯みた

いになってしまっからのっ

劉真「ははは。まっただな」

よし。これでよしっつと……送信

【To:大雅さん From:木下秀吉

女子の裸は最高じゃ。覗き万歳】

秀吉「ん？ワシのケータイで誰に送信しておるのじゃっ」

ぐふ

秀吉の口から大量の血が零れ落ちる。

秀吉「な、なんてことをしてくれたのじゃ！！これではワシが変態みたいじゃろうが！！」

劉真「うるせえ！！俺の気持ちを味わいやがれ！！うおりゃああああああ！！！！！！！！」

秀吉「なっ！？ケータイを真っ二つに折りおったな！！これでは訂正のメールが送れんじゃろうが！！」

劉真「やかましい！！だまっていつか来るであろう最強の恐怖に身を震わせとけ！！」

雄二「と、とにかく、翔子の部屋に行つてあのメールは間違いだと言つてこなければ」

パンツ（雄二が部屋を飛び出す音）

ゲシッ（廊下にいた鉄人が雄二を蹴り飛ばす音）

ドシャグシャ（雄二が机を巻き込みながら崩れ落ちる音）

西村「部屋を出るな」

劉&明「了解です」

意識を失った雄二の代わりに返事をする。俺も美波に訂正を言いに行きたいがこれでは諦めるしかない。  
クソツ、俺はどうすれば……。

康太「……………部屋を片付けた方がいい。これじゃ撮影ができない」  
明久「そうだね」

劉真「じゃあ、ゴミは左に荷物は右に置こうぜ」

千切れたノートはゴミだから左、これは俺の荷物だから右、雄二はゴミだからガラスの上にonだ。

雄二「せ、背中にガラスが!!」

劉真「うるさい。片付け手伝え」

雄二「お前は俺の背中に刺さっているガラスが見えないのか!?!」

劉真「ゴミにガラスがくっついていて見るなら見える」

雄二「お前の服なんかこうだ!!」

劉真「ああああ!!俺の服がガラスまみれに!!」

明久「僕の服も道連れに!?!」

雄二「俺の気持ちをお前らも味わいやがれ!!」

劉真「俺たちは浴衣を着るから別にいい!!」

明久「禁止なんだけどね……………」

そんなバカなことをやっているうちに時間は過ぎて、

コンコン

明久「どうぞ!!」

瑞希「こんにちは」

劉真「姫路か。ん？廊下に鉄人はいなかったのか？」

雄二が廊下に出ようとするだけで容赦ない蹴りをかますような鉄人だ。俺たちの部屋の前に陣取っていると思っていたんだが。

瑞希「お菓子をあげたら通してくれました」

劉&明「さらば鉄人。安らかに眠れ」

彼は立派な教師だった。

瑞希「ところで、なんで明久君は浴衣なんですか？」

明久「部屋にあったから来てみたんだよ。どう？似合ってる？」

瑞希「はい!!綺麗な肌や鎖骨が凄く色っぽくてお持ち帰りしたいぐらいです!!」

姫路の何かが失われている今、俺たちはアキをどう慰めてやればい  
いだろうか。

雄二「よく来てくれたな。そんなお前にプレゼントだ」

瑞希「浴衣、ですか……。どうしてこれを？」

いきなり渡された浴衣に疑問符を浮かべる姫路。まあ、当たり前  
の反応だよな。

明久「瑞希の浴衣姿の写真を撮らせてほしいんだ」



瑞希「いいですよ。明久君と一緒になら」

どうやら成功したみたいだ。凄く妬ましい理由だったが。今回は見逃しておいてやる。良かったなアキ!!

秀吉「劉真から邪悪な気を感じるのじゃ」

康太「……………いつものこと」

明久「それぐらいいいよつ。それと、瑞希。撮った写真は男子皆に見せようと思ってるんだけどダメかな？」

瑞希「いいですよ。明久君の寝顔写真をプレゼントしてくれたら」

劉&雄「勿論だ」

明久「僕に決定権は無いの……………？」

当たり前だ。お前みたいな幸せ者のバカに人権はない。

康太「……………じゃあ。こっちに上目使い」

瑞希「こっ、ですか……………？」

その後、姫路と秀吉の浴衣撮影会は夕飯前まで続いた。

俺とメールと大きな失敗（後書き）

「こんばんわ、リユウ……」

B y 島田美波

俺と教師と数学対決（前書き）

「名前はオリジナルです」

B y はせがわゆきひろ 長谷川幸弘先生

## 俺と教師と数学対決

日が完全に落ち、みんなが寝静まった頃、俺は屋上に来ていた。美波にあんなメールを送ってしまったのでしようがなくジャージに着替えて夜空を見上げながら美波を待っていたのだが……

劉真「夜空ってこんなに綺麗だったんだな……」

いつも見上げている夜空は街の明かりに照らされて一つ二つしか星が見えないから気づかなかったけど、今見合えている夜空には無数の星が散らばっていた。あ。あれは………何座だっけ？

美波「ウチとどっちが綺麗？」

劉真「うわあ！！ビックリしたあ！！」

いつのまにか赤いジャージを着た美波が俺の隣に立っていた。

劉真「み、美波！！実はあのメールは……」

美波「どうせ何かの間違いで送って来たんでしょ？アンタのことぐらいウチはお見通しよ」

美波はよく俺に処刑並みの罰を与えたりするが、この世で一番俺のことを分かってくれる最高の彼女だったりする。

美波「で。アンタたちは何で女子風呂を覗こうと思ったわけ？何か理由があるんでしょ？」

劉真「ああ。実はな

」

俺は美波に覗きの目的を話した。美波は俺が話している途中は一言

も話さずに俺に寄りかかっていた。

劉真「　　ということなんだ。俺たちは別に女子風呂が覗きたいわけじゃない」

美波「そうだったの……ゴメンねリュウ。無実なアンタをあんなひどい目に遭わせて」

劉真「気にすんな。オマエの行動は何も間違ってたよ」

美波「そ、そう／＼……相変わらず優しいのね」

劉真「ん？何か言ったか？」

美波「べ、別に何も言っていないわよ……」

劉真「そうか。俺は優しいか。ありがとな」

美波「き、聞こえてるじゃない……」

美波が俺の肩をポカポカと叩く。あんまり力を入れてないようでもつとも痛くなかった。

劉真「ははは。スマンスマン」

美波「もう……！そんなリュウには……えいつ」

美波が俺にキスをする。し、舌まで入れてきやがった……！

劉真「ん……んふう……ふあむ……」

美波「んむ……う……んふあ……」

お互いの舌を絡め、口内をかき混ぜる。やばっ、変な気分になってきた。

劉真「んあ……」

お互いの唇を離す。けど、舌は残し、最後に離す。お互いの舌は銀

色の糸のようなものでつながっていた。

美波「もう終わり？」

劉真「上目遣いは止める。襲うぞ」

美波「大歓迎よ？」

劉真「……………合宿後にな……………」

コイツにはいつになっても敵わねえ……………俺にだけは素直な自分を見せるんだから……………可愛いし。

美波「まあいいわ。今のキスでウチはアンタら男子の味方になってあげる」

劉真「！？ホントか！？……………でも、そしたら美波が他の女子に敵視されないか？」

女子が女子の味方をするのは当たり前だ。まあ、男子の味方をしない男子もいるんだけど……………。

美波「ウチはどんな時でもリュウの味方でいるって決めたの。ウチはリュウのお嫁さんだからね」

劉真「随分と飛び越したな」

美波「嫌なの？」

劉真「バーカ。そんなわけねえだろ」

俺たちは再び顔を近づける。今度は美波が目を瞑って俺を見上げる形だ。俺はゆっくりと唇を近づけながら

劉真「何があっても、一生傍から離さねえよ……………美波」

俺たちのキスは舌が数えきれないぐらい交わるまで続いた。

別にいやらしいことまではいってないからな！！！

明久「A・B・Cクラスは味方に着いてくれるかな……」

今日は昨夜撮った写真を他クラスに回して覗きへの興味をひかせることに全力を注いだ。

雄二「それは神のみぞ知るだ」

秀吉「お。そろそろ時間じゃのう」

秀吉が部屋に備え付けてある掛け時計を見て呟いた。明日は帰るだけで一日が終わるので、今日が本当のラストチャンスとなる。

康太「……………補充試験は完璧」

美波「ウチも今回の数学は最高点よ」

得意げな顔で美波と康太が自信ありげに言う。美波が男子側に着くことになったので数学面の戦力が大幅増加した。

雄二「しかし島田が味方になってくれるとはな……予想外だ」

美波「ウチはいつでもリユウの味方であるって決めたのよ」

明久「こんなところでデレないでくれる？劉真の息の根を止めたくなっっちゃうからさあ……………」

こわっ！！アキの後ろに薙刀構えたハムスターが見える！！ハムスター自体は凄く可愛いのに薙刀に大量の血が付いているから怖さが倍増どころか百倍ぐらいになってる！！

秀吉「島田は劉真と一緒に長谷川先生の相手をするのかの？」

雄二「ああ。島田と劉真が組めば、数学で負けることはまずない」



Aクラス戦で圧倒的なパワーを見せてやったからな。信頼度は抜群だと自負できる。

コンコン

ん？こんな時間に誰だ？まさか教師が作戦の前に捕獲に来たとか……俺たちは物音を立てないようにしながら臨戦態勢をとる。

明久「どうぞー」

アキが叫ぶと部屋のドアが開き、優斗が入ってきた。……体中キズだらけの姿で。

劉真「ゆ、優斗！？どうしたんだ？」

優斗「オレもお前らの味方に着こうと思ってこの部屋に向かったら、優子に見つかってサブミッションかけられた」

明久「ご愁傷様」

雄二「でもいいのか？木下姉に嫌われるかもしれないぞ？」

雄二の言うとおりだ。木下姉は文月学園きつての優等生だ。学園の害になる行動など絶対に許さないだろう。それに、木下姉は優斗の彼女だ。これが原因で破局なんかがありえるかもしれない……。

優斗「こんなことで別れることになったらオレたちの仲はそんなもんだっただってことだ。オレは優子がオレを嫌わないでいてくれると信じている」

優斗が言い切ると、優斗の背後に七色の煙がもくもくと噴き出してきた。どうやってんの？そこってただの玄関だよな？何か仕掛けで

もあつたっけ？

雄二「分かった。なら優斗は木下姉の相手をしてくれ。アイツはおそらく古典のエリアにいると思う」

明久「そんなこと何で分かるの？」

雄二「ムツツリーニが集めた情報を参考にしたところ、木下姉は古典エリアで男子勢を蹂躪していたらしい」

劉真「いや、どんだけ強いんだよ！！」

蹂躪って！！蹂躪って言葉を日常で聞くことになるなって思いもしなかった！！あ。これは日常じゃなくて非日常の部類に入るのか……。

プッ

俺たちが緊張をほぐすための会話をしていると作戦開始のアラームがなった。

雄二「……よし。お前ら気合は入ってるか！！」

「「「「「おうつ！！」「」「」「」

雄二「女子だろうが男子だろうが教師だろうが関係ねえ！！俺たちの道に立ちふさがるものは全て排除だ！！」

「「「「「おうつ！！」「」「」「」

雄二「これがラストチャンスだ！！俺達から始まったこの覗き騒ぎ、成功以外にありえねえ！！」

「「「「「おうつ！！」「」「」「」

雄二「俺たちの力、とくと思ひ知らせてやるっじゃねえか！！」

「「「「「おうつ！！」「」「」「」

雄二「強化合宿最終決戦、出陣だ！！！！」

「「「「「よっしゃあ　　っ！！」「」「」「」

男子連合軍VS教師・女子連合軍の最終決戦の幕が開けた。

古川「いたわっ!!!主犯格五人よ!!!」

源「あれっ？島田さんと唐津君が加わってるんだけど」

古川「そんなの関係ないわ！！長谷川先生、召喚許可を！！」

部屋を出てすぐに長谷川先生率いる数学部隊が展開されていた。

劉真「作戦通りここは俺と美波が引き受けるっ。試獣召喚！！」

美波「先に行きなさい！！試獣召喚！！」

相手はおそらくEクラスの女子、俺達の敵じゃない！！

『Eクラス 古川あゆみ & 源静香 VS Fクラス 神無月劉  
真 & 島田美波

数学 83点 & 77点 VS 数学 783  
点 & 656点』

劉真「勉強してから俺たちの前に立ちふさがることたなあ！！」

古&源「キヤア ツ！！！！」

相手の召喚獣をトンファーとサーベルで一瞬にして葬り去る俺達。

長谷川「ま、待ちなさい！！」

劉真「長谷川先生、ここは通さない！！」

長谷川「くっ……」

『数学教師 長谷川幸弘 & Fクラス 神無月劉真 & 島田美波  
数学 567点 & 数学 783点 & 656

点』

長谷川「君たちはいつの間にそんな点数を……」

劉真「ちよつと本気を出しただけですよ」

美波「ちよつと頑張っただけですよ」

長谷川「僕一人じゃ難しいか……っ!!」

俺も美波も長谷川先生に点数で勝っている。この勝負、俺が貰った!!

?? 『試獣召喚』

すると突然、俺達と長谷川先生の間一体の召喚獣が召喚された。数珠で繋がれた二対の大鎌に陣羽織を羽織った武将風の出で立ちをした召喚獣でそのデフォルメされた顔には凄く見覚えがある。

劉真「……………根本か」

恭二「よ。長谷川先生の援軍登場ってか？」

美波「ということはBクラスは全員敵なの!？」

恭二「いや、Bクラスの連中は覗きに加担したさ。まったく……覗きは犯罪だっただけぐらい知っているだろうに……」

長谷川「根本君、援軍感謝します。僕一人じゃきつかった」

恭二「なあに、心配ありませんよ。俺だって今回は頑張ったんですから」

『 Bクラス      根本恭二

数学              700点』

劉真「マジかよ……」

恭二「数学は俺の得意科目なんでな、というわけでBクラス代表の根本恭二がFクラス神無月・島田に試験召喚獣対決を申し込む。代表の力を舐めるなよ……」

俺達VS根本達の数学対決が火ぶたが切って落とされた。



俺と教師と数学対決（後書き）

「Bクラス代表のチカラ、とくと味わえ……」

B y 根本恭二

俺と終焉と強化合宿（前書き）

「今回で強化合宿編終了!!」

B Y 神無月劉真



## 俺と終焉と強化合宿

劉真「『チェンジ変身』！！」

戦闘が始まったと同時に俺は漆黒の腕輪を発動する。俺の召喚獣が黒い霧に包まれ始める。

恭二「スキが大きいんだよっ！！」

根本の召喚獣が動けない俺の召喚獣めがけて大鎌を投げつけてくる。チツ、早く変身終わりやがれ！！！！

キーン！！

美波「リュウはやらせないわよ」

俺の召喚獣の目の前に大鎌が来る前に、美波の召喚獣がサーベルで斬り払った。

黒い霧が晴れると、そこにはピンク色の髪に大きなアホ毛。小さい胸と低い背の少女が立っていた。

劉真「『桜野くりむ』降臨！！」

美波「戦力がゼロになった!?!」

戦力がゼロ？フツ、この召喚獣に変身させたのには大きな意味があるってことを見せてやる！！

劉真「さあ来い根本！！いくらでも斬っていいぞ！！」

恭二「く……卑怯な!!」

劉真「長谷川先生もどうしたんですか？早くかかってきてくださいよ……!」

長谷川「僕には……できない!!」

何故か攻撃ができない二人を見て、美波が目を丸くしている。そろそろ説明してやろう。

劉真「掴んだ情報では、根本の彼女はロリっころしい。というわけで思いついたのがこの作戦だ。根本はロリっこを攻撃できないからこの姿で押し切っちゃおう作戦!!」

美波「長谷川先生は?」

劉真「彼は教師という役職柄、小さい女の子を攻撃できないのだ!!」

美波「あ……そう……なら、ウチの腕輪で畳み掛けるわね」

美波の呟きに呼応して、美波の召喚獣の左手にはめてある腕輪が神々しい輝きを放つ。

美波「二年生になって初めて使う腕輪よ。『<sup>ワーブ</sup>転移』!!」

美波の召喚獣がサーベルを天に向かって構えると、長谷川先生の召喚獣と根本の召喚獣の目の前に巨大化したサーベルが出現した。

美波「真っ二つに斬られなさいっ!!」

ガイイン!!

恭二「く……」

長谷川「これは……結構きついですね……」

根本と長谷川先生の召喚獣がそれぞれの武器、大鎌と三角定規でサ  
ーベルの攻撃を防ぐ。

長谷川先生の召喚獣は教師仕様でフィードバックがあるから、長谷  
川先生の体にもダメージが行く。  
相当辛いだろう。彼の顔には脂汗が見て取れた。

劉真「『停止』」

俺の召喚獣の右手の腕輪が輝きを放ち、根本と長谷川先生の召喚獣  
の動きを止める  
は  
ずだった。

恭二「

キャンセル

『却下』」

俺にも腕輪ぐらい使えるってことを忘れてないか？

劉真「な……………」

根本の召喚獣の腕輪が輝きを放つと、俺の腕輪の停止の効果が打ち  
消された。

劉真「随分と良いもん持つてんじゃねえか……………」

恭二「一応、代表なんぞな。これぐらいの能力ぐらいセーフだろ。

……………これで形勢逆転だ」

根本の召喚獣が巨大サーベルの下から抜け出し、俺に迫ってきた。

恭二「犯罪って概念を敗北の二文字と共に刻み込んでやるよ！！」

根本の召喚獣が持つ二対の大鎌が左右からギロチンのように繰り出  
される。

拙いな……。根本を倒さないことには『停止』が使えないし……。でも、美波の腕輪も防がれたし……。ん？なんで俺の召喚獣はまだ会長さんなのに根本は攻撃できるんだ？

恭二「召喚獣の見た目は元から子供だろうが！！」

劉真「そうだったああああああ！！！！！！！！！！」

そつだよ！！今更戦力ゼロの会長さんにしたところで見た目はそんなに変化は見られないんだつた！！  
どうする！！俺の漆黒の腕輪は自身の召喚獣に密着している物しか変身させられないし……。ん？密着？

劉真「そつだ！！それでいこう！！」

美波「何か作戦でも浮かんだの？」

長谷川先生の三角定規をサーベルで受け流しながら美波がこちらに意識を向ける。

劉真「美波！！オマエの召喚獣を俺の召喚獣に密着させてくれ！！」

美波「……。！！そついうことね！！分かったわ！！」

どうやら俺の考えが美波に伝わったようで、美波は長谷川先生の猛攻を抜け出すと、自身の召喚獣を俺の召喚獣に突撃させた。

長谷川「な、なにをするつもりですか！！」

劉真「シヨ一の始まりですよ！！『変身』！！」

俺と美波の召喚獣が黒い霧に包まれる。

根本と長谷川先生は動けない俺たちに猛攻をかけるが、霧に遮られ

て攻撃が届かない。

恭二「くっ、これだから特別性の腕輪は厄介だ!!」

そして、黒い霧が晴れ、一体の召喚獣が姿を現した。

その召喚獣の髪型は黒いポニーテールで右目は黒、左目は翡翠色。軍服と学ランを混ぜたような服を着ており、手には刃が付いたトンファーを持ち、背中からはドラグーン付きの青い機械の翼が生えていた。

劉真「これが今の俺たちの本気……神無月劉真と島田美波の召喚獣の合体1stだ!!」

美波「ウチが本体を操るからリユウはドラグーンで応戦して!!」

恭二「だが、腕輪を合計で3回も使ったんだ!!点数は残り少ないはず!!」

そして、俺達の召喚獣の頭の上に点数が表示された。

『Fクラス 神無月劉真&島田美波

数学 900点 』

長&恭「……………は？」

まさかの高得点に言葉を失う根本と長谷川先生。そりゃ驚くよな。点数が減るところか一気に増加してんだから。

劉真「この召喚獣は俺と美波の召喚獣の合体形だ。だから点数は二人の残りの点数の合計になるわけだ」

恭二「卑怯を通り越してチートじゃねえか……………」

劉真「自覚はある。こつからは俺たちのターンだ。簡単に倒れるんじゃないぞ?」

美波が召喚獣を突っ込ませ、ブレードトンファーで長谷川先生の召喚獣を斬り付け、ラッシュをかける。

美波「近接攻撃はウチの十八番なのよ!!」

長谷川「す、すみません根本君!!」

美波のラッシュが長谷川先生の召喚獣の頭にクリーンヒットし長谷川先生の召喚獣が姿を消す。

美波「次はアンタよ!!」

恭二「く……」

劉真「上方にもご注意くださいー!!」

美波が先ほどのように根本にラッシュをかけ、俺が上からドラゲーンで援護する。

恭二「Bクラス代表を舐めるなあああああ!!!!!!!!」

上からの複数のビームと前からの美波のラッシュを二対の大鎌でいなして防御する根本。

流石は二番手のクラスの代表と言ったところか、召喚獣の扱いが凄く上手い。

劉真「美波!!腕輪を使って終わらせるぞ!!」

美波「了解よ!!」

俺と美波の合体召喚獣の両手に装着されている腕輪が神々しい輝き

を放つ。

劉&美「『終焉』！！」<sup>エンド</sup>

俺と美波が腕輪のキーワードを叫ぶと、根本の召喚獣の点数が一気にゼロになった。

『 Bクラス 根本恭二 VS Fクラス 神無月劉真&島田美波  
数学 0点 VS 数学 100点  
』

恭二「そんな……バカな……」

根本が膝から崩れ落ちると同時に、数学の召喚フィールドが消滅した。

劉真「この召喚獣の腕輪は一回の使用につき、800点の点数を消費する」

美波「しかもこの『合体』はウチとリュウの組み合わせでしか発動できないの」

劉真「まあ、なんというか……チートくさくてスマン」

恭二「もう完全にチートだからな!？」

長谷川「学園長も大変な発明をしてくれたものですね……」

長谷川先生が足を引きずりながらこちらに近づいてきた。フィールドバックのせいだろうか？

劉真「大丈夫ですか？」

長谷川「心配ないですよ。ちょっと疲れただけですから」

長谷川先生はそう言うと、廊下の端に移動する。

長谷川「君たちの勝利です。ここを通りなさい」

そう。俺たちが勝つたのだからココを通る権利が与えられることになる……でも、俺達の目的は女子風呂覗きじゃないから。

劉真「いいです。俺たちは部屋に戻りますよ。だから、停学は勘弁してもらえるように口添えしてもらえます？」

美波「ウチたちはアキたちの手伝いをしただけなんで」

長谷川「そうですか……次は負けませんか？」

劉真「はははっ。俺も今回みたいな点数はもう出せませんよ」

恭二「……神無月」

俺たちが長谷川先生と話を終わると、根本が俺に手を差し出してきた。

恭二「……今度、俺と模擬試召戦争をしてくれると嬉しい」

劉真「フッ、いつでも歓迎だ」

ギョッ

俺と根本は固く握手をした。

『『割にあわねえ

っっ！！！』』

女子風呂から男子どもの悲痛な叫びが聞こえたが理由は聞かないでおこつと思う。なぜなら長谷川先生がしてやったりという顔をしていたからだ。



☐ 処分通知

文月学園第二学年

神無月劉真を除く全男子生徒

総勢148名

上記の者たち全員を

一週間の停学処分とする

☐

アイツら結局覗きやったのかよ………



俺と終焉と強化合宿（後書き）

「劉真、美波と康太を今すぐ家に呼べ」

B y 神無月大雅

俺と姉貴と憐れな子羊（前書き）

「教育の時間だ」

b y 神無月大雅

## 俺と姉貴と憐れな子羊

とある休日の昼下がり、俺は家でテレビゲームをしていた。ちなみに、美波は自宅に帰っている。葉月が家に一人なそうなので相手をしてやってるそうだ。

劉真「うわ!!このタイミングでゴーレムはねえだろ……」

俺がしているゲームは「ストコンクエスト」。世界中に散らばっている伝説の石を探すRPGだ。名前がパクリ疑惑ギリギリだとか旅の目的がショボイとかいう意見を一切無視したこのゲームは文月学園Fクラスでひそかに流行っている。

劉真「よっしゃ!!撃破」

## ピンポーン

HPがヤバイ状態でゴーレムを討伐し、勝利の余韻に浸っていると、玄関のインターホンが押される。

劉真「誰だよこんな良い瞬間に……」

俺はゲームをセーブし、私服に着替えて玄関に向かう。流石に部屋着で応対するのは拙いからだ。

劉真「はいはい今開けますよーっと……」  
??「久しぶりだな劉真」

俺が玄関のドアを開くと、凄く見覚えのあるスーツ姿の美人女性が立っていた。

劉真「あ……あね……き……？」

大雅「実の姉も顔も忘れたのか？まったくこれだからお前という奴は……」

そう。目の前に立っている絶世の美女は俺の実の姉である神無月大雅だ。

いや、姉貴がいるのはまだいい。ただ……

劉真「その後ろのパパラッチ軍団は何だああああ！！！」

姉貴の後ろには20人ほどのカメラ野郎たちが所狭しと並んでいた。

記者「神無月大雅さんの弟さんですか？」

記者「是非、家の中を見せてほしいのですが」

記者「実は神無月大雅さんの彼氏だったりしますか？」

ハッキリ言おう。俺はニュースでよく見るパパラッチやら記者やらが大つつつつっ嫌いだ。

人のプライバシーやらプライベートやらを完全にシカトして情報を集めるために人権を軽く無視する集団だから。

劉真「テメエらいい加減にしやがれ！！」

シ  
ン……

俺の怒りの叫びによって呆然とする記者共。

俺はその間にとある番号に電話を掛ける。

すると……

マーク「兄さんの邪魔をしているというのは貴様らか？」

記者「な、なんですか!？」

ジョン「クケケ。お前らみてえな人間のクズに名乗る名前はねえよ。

オイお前ら!! コイツら外に放り出して教育してやれ」

「『『イエツサー!!』』」

黒服のドイツ産マフィアによってマンシヨンの外に放り出されるパラッチ&記者の奴ら。

劉真「ジョン、マーク、よくやったありがとな」

マーク「いえいえ、当たり前のことをしたままでですから」

ジョン「クケケ。いつでもお呼びくださいってなあ」

大雅「アイツらはアメリカからついてきてな……正直迷惑だった」

姉貴が本当に迷惑そうな顔で家に入っていく。それは分かったから家に入るときにそんな顔しないでくれると嬉しい。俺の家が汚いって思われてると錯覚してしまうから。

大雅「ほお……なかなか片付いてるじゃないか」

姉貴はリビングに行く、ソファの上に旅行バッグを投げると、冷蔵庫からビールを取り出し一気飲みして、テレビゲームの冒険の書を削除してちよっと待て。

劉真「なに流れるような作業で俺の冒険の書を削除してんだよ!!」

もう少しでラスボスだったのに!!一週間かけて進めたのに!!一瞬で泡となって消滅しやがった……。

大雅「私に内緒でこんな流行りのゲームを進めていたのが気に食わなかったのな。つい」

劉真「つい、じゃねえよ！！アンタは忙しい身だからゲームとは縁遠いだろうが！！」

大雅「もう忙しくないぞ」

劉真「そうですね忙しくないですね！！ってなあ！？」

大雅「私は女優を引退して主婦になると決めたのだ。テレビではもう放送されてるんじゃないか？」

姉貴の言葉が終わる前にテレビのリモコンをソファの上からとり、テレビをつける。

TV『今日午前8時ごろ、羽田空港に降り立った神無月大雅さんは報道陣に向かつて“私は今日で女優をやめる”という爆弾発言をしました。当局は突然の引退の理由を究明しておりますが未だはつきりしておりません』

劉真「主婦って言ったって突然すぎるだろ……」

大雅「お前が紹介してくれた秀吉と結婚すると決めているからな」

劉真「早えよ！！しかもアイツはまだ17歳だ！！結婚は不可能なんです！！」

大雅「それと私はココに住むからな。家さがしが面倒くさい」

劉真「それは想定済みだったつうの……」

姉貴の相変わらずのマイペースっぷりに頭を抱える俺。

この姉貴はいつもそうだ。

ドイツにいるところに突然アイドルデビューしたかと思えば、アメリカに行つてハリウッド女優になつてるし。本場のキムチが食べたいとかいう理由で俺と兄貴と朱雀を連れて、韓国に日帰り旅行に行か



せるして胃潰瘍になるかと本気で心配したものだ。

大雅「あ、そうそう。康太と美波を家に呼べ。久しぶりに話したいことがたくさんあるからな」

劉真「……………拒否権は？」

大雅「あると思うか？」

姉貴の笑顔の後ろに閻魔大王への面会チケットが見えた俺は康太と美波にメールを打つ。

『姉貴が帰ってきてオマエらを呼んでいる』

送信つと。アイツらの家の距離はさほど変わらないからどっちも五分後くら『ピンポンピンポンピンポン！』いにつてえええ！？

大雅「来たようだな」

劉真「はっや！！ココに来るの早っ！！どんな足の速さしてんのアイツら！？」

俺は驚きを口に出しながら玄関のドアを開けようとするとドアの向こうから争う声が聞こえる気がする。

よく耳を澄ますと…………

美波『土屋はウチの後ろから入りなさい！！』

康太『……………あの人がいるところでそんな真似はできない！！』

美波『大丈夫よ！！ウチの分も罰を受けるだけだから！！』

劉真「何してんのオマエら」

呆れながらドアを開けた俺は二人を出迎える。

康太「……………お邪魔します」

劉真「なんで平然としてんだよオマエ……………」

美波「お、おおおおおおおおお邪魔します!!」

劉真「オマエは緊張しすぎだから」

絶対にいつもと様がおかしい二人をリビングに連れて行き、姉貴を合わせた四人でテーブルを囲む形で座る。

美波「大雅さん、お茶はいかがですか!？」

康太「……………それよりもコーヒーのが好きのはず!!」

大雅「どちらも結構だ」

美&康「そうですねか……………」

どうにかして姉貴の目の前から去ろうとする二人の作戦はあえなく失敗した。成功するはずないからな、そんな思いつきの作戦。

大雅「本題に入ろう」

俺たちが静かになるのを待っていたかのようなタイミングで姉貴が話し出す。

大雅「私は女優をやめ、秀吉の専業主婦になると決めたわけなのだが……………」

ん？美波と康太がアイコンタクト会議を訴えてきてる。

『アイコンタクト会議』とは、ドイツで姉貴の空気に耐えられなかった俺たち三人が無言で会話をするために編み出した技の事である。

劉真『何だ?』

美波『大雅さんが女優をやめる理由ってそんなことだったの!?!』  
劉真『ああ。俺もさつき言われたばっかで驚いた』  
康太『……………衝撃の事実』

大雅「……………お前らアイコンタクトで会話とかしてないよな?」

「……………(ビクウツ!!)」

大雅「私が話しているのにお前らは三人で内緒話とかしてないよな?」

「……………(ブンブンブン)」

頭が振り切れそうになるぐらいの勢いで頷く俺達子羊トリオ。

大雅「そうか。なら美波、今私が話していたことを言ってみろ」

美波「え」

ゲームオーバー。美波の顔色が真っ青になっていくのが見るだけで俺達には分かった。

俺たち二人は静かに胸の前で十字を切る。神よ。彼女をお守りしたまえ!!!

美波「えーっと……………しわが増えぐふえ!!!」

大雅「……………ちょっとこっちに来い」

美波の鳩尾に容赦ない右ストレートを決めた姉貴はあの伝説の拷問部屋に美波を連れて行く。

美波「ごめんなさい!!!本当にごめんなさい!!!だからその部屋だけは勘弁してええええええ!!!」

ガチャ

キイイイイ  
バタンツ

劉真「……………」  
康太「……………」

姉貴がいなくなっても尚、正座を解かない俺達2人。いや、解かないんじゃない。解いたら殺されそうだから解かないんだ。

大雅「貴様には教育が必要みたいだな」

美波「ああ！服を脱がさないで！！これからの大雅さんの行動が目に浮かぶようだから！！」

大雅「やかましい！！まずはこれに乗ってもらおうか？」

美波「いや！！いやあああああ！！！！！！！！！！」

【年齢規制に引っ掛かりそうなのでここで中断】

劉真「……………壁一枚隔てて、俺の彼女が18禁な拷問受けてるんだけど」

康太「……………恐怖で鼻血も出ない」

残された俺たちは美波と姉貴の声を涙を流しながら正座して聞いていた。



俺と姉貴と憐れな子羊（後書き）

「漆黒の腕輪の合体について？」

B Y 神無月劉真

俺と腕輪と新たなチカラ（前書き）

「秀吉…… / / /」

B y 神無月大雅

## 俺と腕輪と新たなチカラ

学園長「　　というわけさね、分かったかい？」

劉真「いえ全然」

昨日の悲劇を忘れるために早寝早起き早登校をした俺は教室に入つて早々、学園長に呼び出されて漆黒の腕輪について説明されていた。

学園長「アンタは一体何を聞いていたのかい？」

劉真「えっと……【漆黒の腕輪】の能力である『<sup>チェンジ</sup>変身』で俺と美波の召喚獣が合体できたことについてで、いままでは俺と美波の組み合わせしかできなかつたけどこれからは俺と誰でもペアを組めば、どんな組み合わせも成功するってことぐらいですね」

学園長「詳しく言えば、総合科目以外の教科で801点以上の点数の合計が出る生徒同士の組み合わせ限定ってことさね」

劉真「なんで801点以上なんですか？」

学園長「その【漆黒の腕輪】で合体した召喚獣の腕輪の消費点数が800点だからだよ」

劉真「すでに実戦に活用できる仕様になってるんですね……」

学園長「というわけで、西村先生には許可出してるから、高得点の友人捕まえて合体して来いってことさね」

劉真「はあ……また研究ですか……」

学園長「当たり前さね。さっさと行かんかいクソガキが」

俺は“このババアいつか絶対に海に沈める”と心に刻み、Fクラスに戻っていった。



劉真「　　ということだ」

雄二「ほお、召喚獣の合体か」

Fクラスに戻った俺はいつものメンバーに漆黒の腕輪の研究について話した。

明久「美波と劉真はその腕輪で『合体』したの？」

劉真「ああ。なんなら見るか？鉄人先生、召喚フィールドを数学でお願いします」

雄二の背後に嫌な顔をしながら立っている我らが担任である西村先生に召喚フィールドを展開してもらおう。

西村「新しい呼称で呼ぶな……召喚許可する」

鉄人が呟くと、文字や記号が書いてある召喚フィールドがクラス全体に張られる。

劉真「んじゃ行きますか。試獣召喚」

美波「了解よ。試獣召喚」

足元に幾何学模様の魔法陣が浮かび上がり、俺と美波のデフォルメ召喚獣が姿を現す。

劉&美「『変身』」

俺の召喚獣と美波の召喚獣の手を繋がせてキーワードを言うと、召喚獣が黒い霧に包まれて影が一つになっていき、例のく劉真&美波召喚獣>が姿を現した。

秀吉「ふむ……見た目が二人の合成みたいになっておるのう」

劉真「これが1stバージョンだ」

康太「……………他にもあるのか？」

美波「この召喚獣はウチの召喚獣の近距離を主にした召喚獣なのよ」

劉真「今のところは後一つだけだな」

雄二「見せてくれないか？」

劉真「応。えつと……………」

劉&美「『変身』」

再び召喚獣が黒い霧に包まれ、姿を変える。

現れた召喚獣は、茶髪のショートカットで右目が黒、左目が翡翠色で恰好は赤い忍者装束を着ており、背中には巨大な手裏剣、右手に

は小太刀を持っていた。

『Fクラス 神無月劉真 & 島田美波

数学 820点 』

劉真「これは俺の召喚獣の俊敏さを主にしたって感じた」

明久「ムツツリーニの召喚獣に似てる……」

劉真「俊敏さといえば忍者らしい。あのババア長の貧困な想像力が現れているようだな」

この召喚獣は俺と美波の見た目を顔しか受け継いでない召喚獣だからあまり使わないようにしようと思っっている召喚獣だ。防御が紙だし。

雄二「それで、その召喚獣の腕輪は？」

劉真「コイツのは相手が必要なんだよ。そうだなあ……おい！！

亮！！召喚獣を出してみてくれ！！」

亮「別にいいけど……試獣召喚」

同じように亮の召喚獣が姿を現す。

俺と美波は召喚獣の手をを亮の召喚獣の肩に乗せ、キーワードを口にした。

劉&美「『<sup>デス</sup>消滅』」

亮の召喚獣が苦しそくに首を抑えて消滅した。

「……………」

クラス中が沈黙に包まれる。まあ、目の前で苦しそうに召喚獣が消滅したら目を丸くするのは当然だろう。

西村「……………須川、戦死者は補習だ」

亮「納得いかない！！今の戦死は納得いかない！！補習は嫌だああああああああ！！！！！！」

鉄人に抱え上げられ補習室に連れて行かれる亮。スマン、ホントに今回はスマン……………。

雄二「最強だなオイ」

劉真「いや、そうでもないんだ」

『Fクラス 神無月劉真 & 島田美波

数学 20点 』

美波「この合体召喚獣の腕輪の消費点数はどんな腕輪でも800点なの」

劉真「しかもコイツの『消滅』は相手の召喚獣の肩に触れていないと発動できない」

要するに宝の持ち腐れってところだ。最強だけど使い勝手が凄まじく悪い。

雄二「そうか……………俺との合体も可能なんだよな？」

劉真「ああ。お互いの合計点数が801点を越えていけばな」

雄二「なら問題ない。今回の俺の世界史の点数はこれだ」

鉄人が教科を世界史に入れ替え、雄二が召喚獣を召喚する。

『Fクラス                    坂本雄二  
世界史                        390点』

雄二「ヤマが当たってな。もう少しで400点だったんだが……」  
劉真「十分だ。今回の世界史のテストは三択問題だったから俺の点数はおそらく神レベルだ」

俺は消滅した召喚獣を再び召喚する。

『Fクラス                    神無月劉真  
世界史                        989点』

「……………」

俺の点数を見て凍りつくFクラスのみんなと鉄人。もう少しで1000点だったのにな……。

明久「劉真には『10分の一までの可能性を確実に当てる』能力があるからね……」

瑞希「それって解いてないじゃないですか……」

姫路、それは禁句だ。俺の能力の存在意義が無くなっちまう発言だ。

劉真「じゃあ、『変身』っつと」

雄二「同時に言わなくてもいいのか？」

劉真「あれは俺のに美波が合わせてただけだ」

アイツは俺の心を読めるんじゃないかというぐらい合わせてくるから本気で隠し事ができなくなるんじゃない？と思いは始めているこの頃だ。

霧が晴れると、右は白、左は黒の学ランを着ていて髪型は赤と黒の混ざったツンツンヘア。目の色は右が黒で左が赤。両手にはメリケンサックとトンファーを持ってしている召喚獣が登場した。

劉真「超近接型って感じだな」

雄二「コイツの腕輪は何だ？」

雄二が興味深そうに召喚獣を見ながら質問してきた。

劉真「これ以上生贄を作るわけにはいかないから口で説明するぞ。

コイツの腕輪の能力は『<sup>グラン</sup>覇気』。相手の召喚獣を自らの覇気で気絶させる腕輪だ。言っておくが、気絶をさせるだけで戦闘不能にはできないから」

雄二「微妙だな」

劉真「合体召喚獣なんてそんなもんだ」

俺と美波の合体召喚獣1stの腕輪は特殊なようで、学園長がじっくり研究したいってブツブツ言っていたのを先ほど目撃した。というか目の前でした。

秀吉「ワシは点数が低いから無理じゃのう……」

劉真「ちなみに教科ごとに合体できる生徒が決まっているんだ」

康太「……………どんな風に？」

劉真「現代文では秀吉か平賀、古典では優斗か木下姉、数学では美波か根本、日本史がアキ、世界史が雄二と霧島、保健体育が康太と工藤、総合科目が久保、英語では姫路ってところだな」

明久「なんでDクラス代表の平賀君？」

劉真「仲がいいんだ」

雄二「根本？」

劉真「仲がいいんだ」

美波「同じ理由じゃないのよ……」

いやだつて嘘ついてないし本当の理由だし実際に仲良いし根本に至ってはよく模擬試召戦争するぐらいの仲だし。

劉真「アキと秀吉と平賀との合体はあんまりできないな。点数低いし」

明久「はつきり言わないでよお、気にしてるんだから……」

瑞希「大丈夫です！！明久君は私が責任を持って成績を底上げしますから！！」

劉真「だそうだ。良かったなアキ」

秀吉「ワシはどうすればいいのじゃ？」

劉真「今日ぐらいに家に来い。姉貴がオマエに会いたいそうだ」

今日の朝に呼べって命令されたからな。逆らうと命が消えちまう。

雄二「劉真の姉といえば女優引退したそうだな」

劉真「ああ。秀吉の主婦になりたいんだと」

瑞希「あ、あもう、神無月君？」

秀吉をからかってやろうと思った矢先に、姫路が俺の名前を呼んだ。疑問形で。

劉真「なんだ？」

瑞希「私も行っていいですか？」

秀吉「明久、飛び降りなんて止めるのじゃ……！！」

明久「瑞希が浮気するなんて僕はもう生きていけない……！！」

秀吉「まだ分からんじゃろ……！！」

明久「だって異性の家に行くんだよ？僕の家にもまだ来たことないのに！！」

秀吉「親睦会の時もそうじゃったろうが！！」

何だ何だ？アイツら何をやってるんだ？

劉真「姉貴のサインが欲しいのか？」

瑞希「はい！！」

翔子「……私も是非」

雄二「翔子！？いつの間にココに！？」

翔子「……妻は夫の傍にいるのが義務」

雄二「そんなの聞いたことないぞ！？」

相変わらず仲睦まじいことで。

劉真「じゃあもうみんなで来いよ。美波と康太もな」

俺たちが話しているうちに逃げ出そうとした二人を捕まえる。

康太「……断固拒否」

劉真「残念ながら姉貴の指名済みだ」

美波「今日は葉月の相手しなくちゃいけないから！！」

劉真「アイツは今日は友達の家でお泊り会って言ってただろうが」

とっさの意見も打ち消されて力なく崩れ落ちる2人。もうトラウマレベルじゃないかよ……。

劉真「じゃあ、行こうぜ。霧島がどうせ工藤と優斗と木下姉も呼ぶんだろ？」

翔子「……正解」



劉真「俺の家までの道は覚えてるだろうから先に帰ってるぞー」

俺たちは家という名の魔窟に向かった

俺と腕輪と新たなチカラ（後書き）

「大雅…… / / /」

B y 木下秀吉

俺とジェイソンと恐怖体験（前書き）

「嫌いなものは恐怖です」

B y 神無月劉真

## 俺とジェイソンと恐怖体験

劉真「ただいまーって暗っ!？」

学校からみんなを連れて家に戻った俺を出迎えたのは、真っ暗なマイハウスだった。

明久「誰もいないのかな？」

劉真「いや、姉貴はいわゆる金持ち無職モードだから家にはいるはずなんだけど……」

家の明かりのスイッチを押してみるが反応が無い。ブレーカーを落とされているみたいだ。

雄二「とりあえず中に入らないか？」

劉&美&康「」「絶対にイヤ」「」

雄二の提案にゼスチャーを加えて断固反対の構えをとる俺達三人。コイツらは姉貴の怖ろしさを知らないからこんなことが言えるんだよ……。

劉真「こんな暗闇であの姉貴が何もしないワケがない」

美波「ウチもリユウも怖い無理だから絶対にそこに付け込んでくる」

康太「……………あの人の前で無防備な姿はさせない」

瑞希「三人とも顔が真っ青です……」

顔色が悪くなるのはしょうがない。俺たち三人は姉貴による悪戯を

心のそこから恐怖しているからだ。

雄二「じゃあ、ペアに分かれよう。俺と劉真、明久とムッツリーニ、島田と秀吉、姫路と優斗、翔子と工藤、最後に木下だ」

優斗「了解だ」

劉真「いたのかよ！？気づかなかった……」

俺たちの背後にはいつのまにかAクラス連中がそろっていた。

優子「今の会話を聞いて一人で入るの嫌なんだけど」

優斗「ビビってるのか？」

優子「上等じゃない！！坂本君、先に行かせてもらえるかしら!？」

雄二「あ、ああ。構わないが」

優子「見てなさい優斗！！アタシが度胸があるってところを見せてあげる！！」

ズンズンと俺の家に入っていく木下姉。今思ったんだけど、コイツら勝手に俺の家で肝試ししてるよね。

アミューズメントパークに来た気分で作ってるよね。

優子『キヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！』

早い！！今回の姉貴は本気だ！！開始十秒以内で脱落者を出すなんて!？」

優斗「瞬殺じゃねえかよ」

雄二「じゃあ俺たちも行くか」

俺の腕を力いっぱい握って引っ張っていく雄二。









劉真「今日無事に戻れたら、一緒にベッドで寝てくれる？」

美波「キヤアアアア！！！！！かぁいい！！お持ち帰りいいいいいい！！！！」

秀吉「待つんじゃ島田！！我を失うでない！！」

美波「話して木下！！ウチはあのかぁいいリユウをお持ち帰りしなくちゃならないの！！」

明久「いいから落ち着いて！！」

ピッ

雄二が俺のケータイの電源ボタンを押し、通話を強制終了した。

雄二「現実逃避すんな。さっさと進むぞ」

俺に降りかかる雄二の辛辣なお言葉。俺のライフポイントはおそらく0だろう。

劉真「分かった……そろそろ部屋に着くからそれまでの辛抱だ……耐える……耐える神無月劉真。お前は強い子だ。こんなババアの狂った遊びなんかで倒れるような奴じゃない」

ブー、ブー、ブー

すると、俺のケータイのメールのバイブレーション機能がなった。何だ？誰だ？うわ。姉貴からだ……一体何の用だよ……

『お前に今世紀最大の恐怖を味あわせてやる。この23歳の私にババアと言ったのは許されない罪だということをその体に恐怖で刻み込んでやるから覚悟しろ』

メールを読み終わった途端に顔の傍を何かが通り抜け、頬を血が伝った。

劉真「……………今何が飛んできた？」

雄二「俺の目が腐ってなければ、おそらく今のは斧だ」

『斧』……………対象を叩き切るための刃物である。おもな用途は樹木の伐採や木材の成型だが、武器としても使用された。武器として発達した斧は戦斧と呼ばれ、儀式もしくは紋章のシンボルにもよく見られる。石器時代から世界中に遍在する、歴史のある道具である。和語では「よき」とも呼んだ。ローマの束桿フアッシンでは斧が斬首する権能を表すという説もある。

劉真「殺される。実の姉貴に首を切り落とされて殺される」

雄二「手元狂えば俺も巻き添えなんだが……………」

劉真「いまさら逃がさないぜ？巻き添えは一人でも多い方がいい」

雄二「この悪魔が！！」

劉真「なんとでもいえ！！元々はオマエが嫌がる俺を連れて来たんだからな！！」

雄二「そうだからって俺が殺される理由にはならな

」

言い争いをしている俺たちの目の前にとある何かが現れた。

それはホッケーのマスクを着けていて、巨大なチェーンソーをぐわんぐわんと稼働させていた。

コイツは……………まさか……………。

劉&雄「「じえ、ジェイソンさん！？」」

ジェイソン「オマエラコロス。ミンチニナレ」





「!」

この日一番の悲鳴が高級マンション中に響き渡った。

俺とジェイソンと恐怖体験（後書き）

「好きな物は人に与える恐怖だ」

B y 神無月大雅

俺と姉貴と夕飯戦争（前書き）

「美味いか秀吉？」

B y 神無月大雅

俺と姉貴と夕飯戦争

劉真「ん……………」

雄二「……………んあ……………」

衝撃の殺戮現場を目撃し、意識を失った俺と雄二は揃って明るくなつたりビングで目を覚ました。

おかしい。気絶しただけなのに体中に鈍い痛みが残っている。腕に見覚えのない青あざがあるし。

雄二「劉真、気づいたか？」

隣で同じように体中の青あざを確認した雄二が俺に確認をとってきた。

劉真「ああ。見覚えのない傷跡が数えきれないぐらいある」

雄二「お前の傷跡はあの姉だろうが¥と予測できるが、俺の傷跡は一体誰が……………」

そついえばそつだ。俺は姉貴に対する『ババア』発言によって肅清されてしまったのだろうと思う。

というか、絶対にそれしかありえない。

だが、雄二がケガをする理由が思い当たらない。霧島が雄二へのお仕置きをする理由もないからな……………。

大雅「それも私だが？」

劉&雄「うわあああああああ！……………！！……………！！……………」



突然背後から聞こえた姉貴の声に飛び上がる俺と雄二。け、気配すら感じ取れなかっただと!?

劉真「驚かすな!! さっきの恐怖がまだほんのりと体に染みついているんだから!!」

雄二「ホントに勘弁してください。あれは心臓に悪いですから」

大雅「はっはっは!! スマンスマン!! お前らの驚きっぷりを見ていたら私の中に眠るドS精神が我慢できなくな」

眠ってねえ。絶対にこの姉貴のドS精神は心の中なんか眠ってねえ。絶賛外出中のはずだ。

大雅「何か言ったか?」

劉真「いえ別に」

今できる最高の笑顔を姉貴に向ける俺、文月学園二年F組神無月劉真。

笑顔は危険を切り抜ける際の最高のパートナー。アナタも笑顔の練習をして危険を乗り越える修行を試みませんか?

大雅「そうか。ならいいんだ。劉真とえっと……………」

雄二「坂本です。坂本雄二です」

大雅「そうか。劉真と雄二は料理をテーブルに運んでくれないか? まだアイツらは起きてないんだ」

姉貴が自分の背後を親指で指差す。そこには、口から泡を吹いた美波たちが倒れていた。

劉真「やりすぎだろ……………」

俺はげっそりとした声で呟く。あの康太と霧島が泡を吹くレベルの恐怖って何？

大雅「『面白ければそれでいい』がわが神無月家の家訓じゃないか」  
劉真「いや、そうですけどね……」

最近思ってきたんだけど、俺の家族はみんなどこかがおかしい気がするんだ。特に頭とかheadとか頭部とか……。

大雅「いいから料理を運べ。今日の料理は私の手作りだ」

劉真「あれ？姉貴って料理できたっけ？」

俺の記憶が正しければ、姉貴がこれまで料理をしたことなんて一度もないはずだ。

大雅「今日独学で作ってみたんだ。お前らはいわゆる試食役だ」

劉真「マジかよ……まあ、姉貴なら失敗なんてありえないと思うけどさ……」

雄二「凄い心配になって来たんだが……」

俺と雄二はげっそりとした顔をしながらも料理を次々とテーブルに運んでいく。

えつと……エビチリにパエリアに卵焼きに……って

劉真「料理のレパートリーに統一性が見られないんだけど」

大雅「私の好物を作ってみたんだ」

劉真「せめてもっと簡単なものを作ってくれませんか!？」

大雅「劉真。人間は高いハードルを越えてこそその人生だ」

雄二「良いこと言ってるつもりでしょうけど、料理初心者は言っ  
はいけませんからね!？」

グラタンを運び終わった雄二が思いつきツッコム。オマエの気持ち  
が痛いほどわかるよ、雄二。

大雅「雄二。君は私に敬語を使っているようだが、必要ないぞ。今  
の私は女優ではないからな」

雄二「そうですか……そうか。分かった」

大雅「じゃあ私はあの寝坊助どもを起こしてくる」

そう言うと姉貴は寝ている一人一人に復活チヨップを決め始めた。

劉真「俺たちは飲み物でも用意しようぜ」

雄二「あの光景は何ともグロテスクだな……」

あの姉貴の行動一つ一つにツッコんでたら体持たないから。

美波「うち、もうお化け屋敷なんて行けない……」  
瑞希「うう……夜中にトイレに行けるか心配ですう……」

姉貴の体術によって無事にあの世から生還した美波たちは以前の親睦会の時に座った順番で席に着いた。

愛子「あはは……ボクもしばらくはホラー系がダメになるかもね……」

翔子「……衝撃の恐怖だった」

大雅「そんなに褒めないでくれ。照れてしまうではないか」

劉真「いや褒めてないから」

姉貴の頭は常にお花畑だから手におえない。なんでこんな人がハ―

バードなんだろうか……神は不公平だと思う。

明久「そんなことより早く食べない？ 僕お腹ぺこぺこだよ」  
優斗「右に同じだ。早く食べようぜ！！」

アキと優斗が腹を抑えながら俺に訴えかけてくる。オマエらは食欲に素直すぎんだよと思っていても実は俺も限界だったりする。

大雅「よし。食べていいぞ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

早速いただくとしますか。まずはグラタンからいって「ぐふあ！！」  
みょうか

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

優斗が卵焼きを食べた瞬間に地面に崩れ落ちた。

優子「ゆ、優斗！？大丈夫！？」

優斗「だ、大丈夫だ……あまりに美味すぎて崩れ落ちただけだから  
……………」

しかし優斗の目は俺たちにこう訴えかけていた。この料理はヤバイ  
と。

俺は男子＋美波にアイコンタクトを送る。

劉真「姉貴の料理が姫路化した」

雄二「俺はパスだ。あんな目には遭いたくない」

康太「……………」でも大雅さんの料理を残すわけにはいかない。自分

の命の確保の為に』

明久『まさかあの完璧女性にこんな欠点があったなんてね』  
美波『でもどうするのよ？この料理の量多すぎるわよ？』

確かに。姉貴は初めての料理を張り切ってしまったようで、この人数でも食べられるかどうか分からないほどの料理を作っている。しかも本人は、秀吉への愛の結晶とまで言っていたのだ。その愛の結晶が化学兵器になっていると知ったら卒倒モノだろう。

秀吉『ワシが食べようぞ』

秀吉が凜々しい顔で宣言した。オマエは自ら進んでくれるのか？あの魔窟へと……。

明久『大丈夫なの秀吉？』

秀吉『愛する大雅の料理じゃ。ワシが完食してやらすして誰が完食するのじゃ？』

男らしい！！顔に似合わず秀吉が凄く男らしくなってる！！これが愛のチカラか……うえ。自分で言ってる痛々しくなってきた。

大雅『どうしたんだ？まさか私の料理が不味かったか？』

優斗『いや凄く美味しかったすよ！？最高でしたよ！？』

大雅『そ、そうか……秀吉も食べてみてくれ！！私の初めての料理を！！』

秀吉『うむ。頂くぞい』

秀吉が姉貴に渡されたエビチリを口に運ぶ。なぜか周囲の俺たちにはスローモーションに見える。

秀吉「すごく……美味じゃー!!」

膝が!!膝が笑ってるって秀吉!!もういいよ!!オマエは頑張ってたって!!そんだけできれば十分だって!!

大雅「そうか!!それは良かった!!ならコツチも食べてみてくれ!!」

秀吉「う、うむ」

次々と姉貴が渡す料理を完食していく秀吉。心なしか顔色が優れない。かなり無理しているのだろう。

俺は今決心した。姉貴に料理を始めから叩き込んでやるってことを。

秀吉「御馳走様じゃ。おいし……かつ……た……ぞ……」(バタン)

「……………秀吉いいいいいい!!……………」

全てを完食した秀吉が意識を失い地面に倒れる。俺たちは彼に向かって……秀吉という名の勇者に向かって涙しながら敬礼していた。

明久「ありがとう秀吉。君の雄姿は絶対に忘れない」

康太「……………最高に男らしくった」

雄二「お前は立派な男になれたんだ。良かったな秀吉」

劉真「安らかに眠れ」

その後、倒れた秀吉を心配する姉貴をどうにか説得して、アキたちは家に帰っていった。

ちゃんと忘れずに姉貴のサインをもらってからな。

美波「はいどじぞー」  
コンコン



あの惨劇の後、俺と美波は風呂に入って部屋でのんびりとしていた。

大雅「相変わらず仲良いなお前らは」

劉真「思っただけだけどココって俺の部屋だよな？」

風呂上がりの姉貴が部屋に入ってくる。ん？なんだか落ち込んでいるように見えるんだけど。

美波「なにかあつたんですか大雅さん？ウチ達が相談に乗りますよ？」

大雅「うう……美波いいい

！！！！！！」

姉貴が突然泣きじゃくりながら美波の胸に飛びついた。体格差のせいで美波が少し後ろの押される。

なんてうらやま……羨ましいことをしているんだ！！代われ！！今すぐに俺と代われ！！

劉真「で、どうしたんだよ？」

大雅「秀吉が今日全部食べて……くれただろ？」

美波「ああ。さっきの料理のことね」

大雅「今からの私の質問には正直に答えてくれ。不味かつたんだろ？私の料理は」

こうやって自分の悪いところを見つけてるのが姉貴は本当に上手いから凄いと思う。

普通は自分の欠点なんて模索しないだろうし認めたくないものだろう。

劉真「はっきり言えばな」

美波「ごめんなさい。正直、凄い味でした」

大雅「そうだろうな……じゃあなんで秀吉は全部食べてくれたんだ？そんな必要はなかっただろうに……」

この姉貴はどうやら男というものを分かってないようだな。ここは俺が一つ説明してやるう。

劉真「姉貴。男にはやってはいけないタブーとされていることが一つあるんだ」

大雅「タブーが一つ？」

劉真「ああ。それは、『女を泣かせること』だ。男は本来、女を守るためにいるもんだ。だからどんなときでも自分が大切だと思ってる女を泣かせないようにしなければならぬ。秀吉は姉貴に心底惚れているからな。姉貴を悲しませないためにあんな真似をしたんだろう。良かったな。婚約者が一途な奴で」

大雅「／／／／（ボンツ）」

俺の言葉で顔を真っ赤に染める姉貴。もともと顔が整っているので凄く可愛く見えるというのはココだけの秘密だ。ばれたら美波と秀吉に殺されかねん。

劉真「だから気にするな。秀吉は自分であんな方法を選んだんだ。

姉貴はその気持ちに応えられるようになるまで料理を練習すればいい。

俺も美波も手伝うからよ」

美波「ウチにできることがあつたら何でもしますよ！！」

大雅「お前ら………ありがとう！！」

劉真「じゃあ今日はもう寝よう。明日は休日だが、忙しくなりそうなんだな」

美波「そうね。おやすみなさい」

劉真「コラ待て。なんで俺のベッドに上がる。俺の場所が無いじゃねえか」

美波「ウチの隣で寝れば？」

劉真「やっぱりそうなるのか……」

大雅「ははっ。お前らを見てると本当に飽きないよ。じゃあおやすみだ」

俺たちの長い一日はやっと幕を下ろした。

しかし、俺はこのときまだ平和だと思っていたんだ。明日の俺と雄二に降りかかる最悪の悲劇を体験するまでは……。

俺と姉貴と夕飯戦争（後書き）

「ここはどこだ……………」

「無人島だと思う。またオマエと悲劇体験とはな……………」

B Y 坂本雄二

B Y 神無月劉真

俺の姉貴のキャラ紹介（前書き）

「私のターンだ!!」

B y 神無月大雅

## 俺の姉貴のキャラ紹介

かなづきたいが  
神無月大雅

### 容姿

少しツリ目。髪は腰まで届くぐらいのロングヘア。瞳と髪の色はどちらも黒。胸のサイズは姫路レベルで頭の良さは吉井玲レベル。

### 身長

170cm

### 体重

そんなに聞きたいのか？それなら私を越えてみるっ！！

### 性格

男勝り。生徒会の一存のマギールの性格。意外と乙女。秀吉にゾッコン。

### 得意なこと

勉強と努力と演技と人を怖がらせること。

### 苦手なこと

料理オンリー

イメージCV 斉藤楓子 (Angel Beats!の椎名さん)

元ハリウッド女優。秀吉と知り合ったときに一目ぼれをし、女優を辞めて、弟である劉真の家で花嫁修業をするようになる。劉真と康太と美波に恐れられており、面白ければそれでいいという家訓を誰よりも気に入っている。マイペース。料理は特訓中。

俺の姉貴のキャラ紹介（後書き）

「次回もよろしく頼むぞ！！」

B y 神無月大雅

俺と孤島とサバイバル開始（前書き）

「はぁ……不幸だ」

B y 坂本雄二



## 俺と孤島とサバイバル開始

ザザー、ザザー……

波のような音が聞こえる。また翔子の奴が勝手に俺の部屋のテレビでも点けてやがるのか？

まあ、どうでもいいか。今で目が冷めそうだし、あとは自分の体に任せるでしょう。

?? 『雄二……』

ん？誰かが俺の名前を呼んでいる……？いや、そんな少年漫画の第一話みたいな状況になるわけがない。

ということはこの声は翔子か？ったく、少しぐらい解放してくれてもいいだろうに……。

?? 『さつさと起きんかこのポケッ！！』

雄二「ぐふえ！！」

鳩尾に強烈な衝撃と痛みが走る。昨夜の劉真の家で食べた無事な料理が出てきそうだ。

雄二「うえ……なんだ劉真か……」

俺は口を押えながらも目を開く。俺の目の前にはジャージ姿の劉真がいた。劉真ならさっきの攻撃も領けるな

って！！

雄二「なんで俺の部屋に劉真がいるんだ!？」

劉真「寝ぼけんのも大概にしるよこのクス。オマエの部屋はいつからこんなに広く開放的な場所になったんだ？」

劉真が額に青筋を浮かべながら俺の後ろを指差す。そういえば、波の音とか空の明るさとかおかしい点がいくつかあるような……………

雄二「な……………なんだこりゃあ!？」

何故か俺の目の前には海が広がっていた。

一面青青青。テレビでしか見たことのないような海が広がっている。

雄二「……………これは一体どういうことだ？」

劉真「俺が知っているように見えるか？」

劉真が髪を掻き上げながら答える。

雄二「ものすごく知ってそう」

劉真「オマエな……………」

コイツは面白いことがあれば一目散に巻き込まれに行くような奴だからな。意味不明な場所に連れて行かれたこともあるし。

劉真「はあ、おそらく姉貴の仕業じゃないか？俺が目え覚ましたら隣にウエットスーツ二着と銚と釣竿と調理道具一式置いてあったし」

サバイバル

そんな単語が頭に浮かんだ。以前テレビで見た『一週間無人島サバ

イバル』という番組が頭に鮮明と浮かぶ。

雄二「大雅さんに連絡は取ったのか？」

分からないのなら本人に聞けばいい。少なくとも、こんな右も左も分からないような場所からは抜け出せるはずだ。

劉真「ココは圏外みたいなんだ」

雄二「……………マジ？」

劉真「大マジだ」

ふざけなど一切ない真面目な顔で言いきられた。

雄二「他の奴らは？」

劉真「一応、オマエが目え覚ます前に海岸を搜索してみたが、カメラと盗聴器ぐらいしか発見できなかった。チツ、こんなときに康太がいればな……………」

雄二「いや確実にいるだろ。こんな島にカメラと盗聴器が打ち上げられているっておかしいだろ！？」

劉真「おおー！そういえばそうだなー！」

雄二「お前は本当にバカな発言があるよな……………」

しかしこれでムツツリー二の存在は確保できた。だが、存在が分かっても合流できなきゃ意味がない。

どうする？どうすればアイツをここに呼べる……………？

劉真「よし。じゃあいると判明したなら呼ぶとすつか」

俺が一生懸命考えていることをあっさりと実行しようとしている劉真。え？呼べるのか？そんなに簡単にムツツリー二をここに呼べる

のか？

劉真「はあ……ふう……はあ……… ああ！！こんなところに全裸の美人なお姉さんがあああああ！！！！！！」

劉真が大声で島の中央に向かって大嘔を吐いた。

雄二「そんなんであいつがここに来るかあああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

康太「……………！？どこにもいない……………つ！！」

雄二「ええ！？来たあ！？」

ムツツリーニがいつのまにか隣にいた。俺たちと同じくジャージ姿で。

劉真「よう康太。早速だけど、なんでこんなことになってるか分かるか？」

康太「……………少しぐらいなら」

劉真「じゃあ、話してくれ」

ムツツリーニによると、以前サバイバル番組を見た大雅さんが身近な人でサバイバルしたら面白くない？という気まぐれでこの企画を発案したらしい。こちらとしてはいい迷惑だ。いや、ただの迷惑だ。

劉真「サバイバルならアキがいるはずじゃないのか？アイツなら絶食でもなんでもいけるだろ」

そういえばそうだ。文月学園一の巻き込まれ体質であるあいつがここにいないのがおかしい。

康太「……………明久が参加すると一週間耐えきれそうだからつまらないって」

劉真「あ…の…クソドS姉貴がああああああ！！！！！！！！！！」

劉真が一面に広がる海に向かって石ころを投げ飛ばす。えーっと…… 142メートルぐらいか。結構とんだな。

雄二「ムツツリーニ。俺たちが選ばれた理由は？」

あのいつものメンバー（Aクラス含む）の中で運動神経が良いトップ3の俺たちがココに揃って集められているということにはなにか理由があるはずだ。

康太「……………霧島と島田と愛子の推薦。自分の彼氏のサバイバル姿を見たいらしい」

雄二「それはすでに人権侵害じゃないのか!？」

俺たちは興味だけで一週間の差倍場溜をしなくてはならないらしい。

康太「……………あとは全員料理ができるから」

雄二「そうか……………ここには海もあるから魚とかで料理して生きていけるしな」

要するに、テレビで見るようなサバイバルをしるというわけだ。まったく……………文月学園の一週間の学校閉鎖日を使ってこんなところでサバイバル生活することになるとはな……………。

劉真「あの姉貴のことだ。きっちり一週間過ごすまで帰してはくれないだろうな」

康太「……………同意」

雄二「そうと分かれば食料探した。折角海があるんだし、魚でも獲るっぜ」

幸運にも俺たちは全員泳ぎができる。今日は魚でも獲って腹を満たしてから明日からの事を考えればいいだろう。

劉真「そうか。なら俺は果物でも獲ってくるよ」

雄二「オイコラ待て」

ジャングルの方へと向かおうとした劉真の腕を掴んで止める。

劉真「だって海に入って魚とるなんて危ないだろうが!!」

雄二「サバイバルってのはそんなもんだよ!!」

劉真「ビタミンだって大事だろ!? 魚だけで生きていけるか!!」

雄二「魚も無かったら餓死すんだよ!! 俺たちは明久じゃないからな!!」

劉真「じゃあ魚獲りは雄二たちに任せる!! 俺は果物をとってくるから!!」

雄二「ああ、そうかって行かせるかよ!! お前は俺とムツツリーと一緒に素潜りするんだ!!」

劉真「嫌だああああ!!!!!! 離せええええええ!!!!!!」

嫌がる劉真に無理やりウェットスーツを着せて、俺たちは海の中に潜った。

雄二（意外と海の中って綺麗だな）

海に潜って数秒後、俺がまず最初に思った感想だった。海の中は太陽の光に照らされて透き通るように輝いていて、魚の群れや海藻などが綺麗に背景として存在している。お。あれはウツボか？

劉真「ごぼごぼごぼ……」

劉真がこちらに向かって必死に何かを訴えている。俺は上にかかる様に指示した。

雄二「どうした？」

劉真「サメが！！サメがいた！！今、康太が必死に逃げてる！！ほらあっち！！」

劉真が指差した方角をしてみる。そこには必死にクロールでサメから逃げているムツツリーニの姿があった。

康太「……………ッ！？（バシャバシャ）」

なにあのスピード。オリンピックいけるんじゃない？とかいう考えが頭に浮かんだが今はそれどころじゃない！！

雄二「ムツツリーニ耐えるよ!!」

劉真「助けないのかよ!？」

雄二「助けられないから見捨てるんだ」

劉真「オマエは悪魔か!？」

雄二「じゃあお前が行くか?」

ムツツリーニを追いかけているサメを親指で示す。

劉真「耐えろよ康太ああ!!!!!!!!」

康太「……………!?!?!?!?!?!?!」

雄二「身代わり速いなオイ」

劉真「俺は康太を信じてる……………っ」

雄二「青春ドラマと見違えそうなほどの顔で涙を流すな。今のお前は確実に映画で最初に死ぬパターンだ」

劉真「あ。ウニだ」

雄二「見捨てるのにも抵抗がないあたりがコイツらしい……………」

俺はそんなことを呟いていたが、劉真と同じようにウニを捨ったり魚を獲ったりし続けた。



俺と孤島とサバイバル開始（後書き）

「……………サメ……………怖い……………」

B y 土屋康太

俺と料理と無洗浄（前書き）

「料理バトル!!」

B y 神無月劉真

## 俺と料理と無洗淨

ムツツリーニが海でサメに襲われるという不可思議で貴重でデンジヤラスな光景を見た日の晩、海と山で十分な量の食糧を確保し、近くの洞穴を寢床に決めて、さあ料理を作ろうと思ったところに大きくて命に係わる問題が浮上した。

劉真「水無くね？」

俺たちに届けられていたカバンの中身は、一週間分の服、ガスコンロとライターと調理道具一式、調味料一式、ウェットスーツ、銚、枕の九つの日常道具だ。

康太「……………枕いらないから水を入れてほしかった」

雄二「どうするんだ？水なしでなんてとても生きていけないだろ」

人間は水なしでは生きていけない。そんなことは幼稚園生でも知っているようなこの世の中の世界の常識だ。

劉真「まずは料理を作ろうぜ。腹が減っては何とやらってな」

康太「……………同意」

俺たちは釣った魚と山で採った山菜やフルーツを使って夕食を作った。

料理は無事に完成した。完成したのだが……

雄二「水が無いってんだからもちろん水洗いもできないよな」

劉真「盲点だった……」

俺たちの目の前に広がっている料理は外見だけのハリボテ料理と化していた。水洗いもしていないからどんな病原菌が付着しているかわからない。体に有害なものだった場合は即アウトだ。

劉真「俺はあまり腹減ってないから雄二から食べよ」

康太「……………今日は雄二が一番働いたからどうぞどうぞ」

なんて友達おもいな奴らなんだろう。自分が生き残るために人を犠

性にしようとするなんて。

雄二「おいおい何言ってるんだ？俺なんかよりもサメとリアル鬼ごっこしたムツツリー二が食べるべきだ」

康太「……………俺は別に空腹じゃない」

劉真「ほら、康太もこういつてるみたいだし、雄二が食べよ。俺たちは小柄だからそんなに食べなくても生きていけるんだよ」

雄二「いやいや。小柄な奴はたくさん食って栄養を摂取しないと大きくなれないんだ。俺は十分に大きいからお前らに貴重な栄養を分けてやる。ほらよ」

劉真「いやいやいやいや要らないって言うてるんだろ。それにお前は大柄だからこそたくさん食わないとその体を維持できないだろうが」  
雄二「俺の体は二日間ぐらい飲まず食わずでも生きていけるような構造になってんだよ。いいから遠慮しないで食べこのチビドラゴン」  
劉真「お前はFクラス代表として生き残る使命があるからビビってないでさっさと食せこのクソゴリラ」

一触即発。その言葉が今の俺と劉真を包んでいる空気を的確に表していた。なにかの拍子に惨劇が始まりそうなほどだ。

雄二「誰に向かってクソゴリラとか言うてんだチビ。海に沈めんぞ」  
劉真「テメエこそ人間様に向かってドラゴン呼びたあい度胸してんじゃねえか。埋葬すんぞコラ」

右手に魚の串焼きをセットし、左手でお互いの顔を掴む。この手を離れたものがこのダークマターを食すこととなる最初の被害者になるのは間違いない。

康太「……………姫路の料理よりは幾分かマシかも」

劉&雄「…だったらテメエが食べ！！」

康太「もがあー!!」

隙を見せたムツツリーニの口に魚の串焼きを押し込む俺たち二人。小さい口に魚が丸ごと二匹も入っている光景は心に来るものがある。

劉真「そうかそうか美味いか。なら、この無洗淨ウニもくれてやるよ」

雄二「喉も乾いただろ?だからこの無洗淨アップルもやるよ」

ゴミ箱にゴミを捨てるような感覚で次々とダークマターをムツツリーニの口で処分していく俺たち。

今更だが、これってどう考えても友人にするような行動じゃないよな……。

康太「……………(ガクウ)」

白目をむき、ムツツリーニが膝から崩れ落ちた。なぜか頭の上に白い靄のようなものが見える。あれ、絶対に魂抜けてるよなあ!?

劉真「悪は去った……………」

雄二「第三者視点から見れば俺たちがどう考えても悪だろうけどな」

俺の呟きは海の波の音にかき消された。ザザー、ザザー……



俺と料理と無洗浄（後書き）

「違う意味でな……」

B y 坂本雄二



十万アクセス突破記念！！ 俺とラジオとファイバーステージ？（前書き）

「皆様のおかげでここまで来ることができました！！ありがとうございます！！」  
「ざいますー！！」

B y 原石

## 十万アクセス突破記念！！ 俺とラジオとファイバーステージ？

優斗「こんにちは。バカテス帰国ラジオのお時間です。司会はわたし唐津優斗と……」

明久「吉井明久がお送りします！！」

優斗「さて、今回は『バカとテストともう一人の帰国子女』の十万アクセス突破記念ということですが、いかがでしょうか明久君」

明久「なんで敬語なの？つていうか、僕たちがお送りして言いわけ？普通は劉真と大雅さんがするべきだよ。オリジナルキャラだし、あとヒロインの美波とか……」

優斗「劉真は今雄二たちとレッツツサバイバル中だからな。島田と大雅さんはその観戦中」

明久「平和だね」

優斗「ああ。スゲエ平和だ。というわけでお便りのコーナー！！」

明久「唐突！！コーナーの移り変わりが凄く唐突！！」

優斗「明久の原作主人公特有のツツコミはおいといて……はい！！死後の世界にお住いの音無弓弦さんからお便り！！」

明久「別作品！？」

優斗「『神無月のキャラがこっちの心野のキャラと被ってる気がするんだけど……それに俺とキャラも少し被ってて声も似てるってどういうこと？』ということです。そうだなあ……どう思う明久？」

明久「なんで死後の世界からお便りが来るのか、とか、別の二次創作の主役の名前をここで聞くことになるとは思わなかった、とか、そもそもこのコーナーは一体何？とかいうツツコミは置いとくとして、劉真の声は音無くんと一緒だったよね？」

優斗「ああ。因みに俺の声は日向秀樹と同じだ」

明久「大雅さんは椎名さんと同じ声だし……オリジナルキャラの声って全員Angel Beats!のキャラクターと同じだったりするの？」

優斗「一応、劉真の兄である玄武さんの声は野田と同じで妹の朱雀ちゃんの声は入江みゆきと同じみたいだ。そして、根本の彼女である加藤佐奈ちゃんの声は関根しおりと同じだ」

明久「そうなんだ……ん？なんか書類が配られたんだけど……」

優斗「き、緊急速報だ！！今後登場すると思われるオリジナルキャラの情報が届いた！！まず一人目は劉真の父親であり神無月グループの現社長の神無月麒麟だ！！才色兼備、文武両道、おまけに長身！！最高の三拍子揃ったパーフェクト人間だ！！」

明久「劉真の父親なのに長身なんだね」

優斗「そこは遺伝子の悪戯だ！！」

明久「えーっと、二人目は予想ついていると思うけど、劉真の母親でありNASAで働いているスーパーウーマンの神無月白澤だね。劉真の家族の名前は全て神獣に因んだ名前だけど、白澤ってなに？」

優斗「まあ、スツゲエ影が薄い神獣だからな。」

白澤……中国より伝わる、深山にすむとされる聖獣。麒麟などと同じく四つ足だが、頭上には一对の角、下顎にはヤギにも似た髭を持ち、さらに体のあちこちに合計九つもの目があるらしい。『和漢三才図会』によれば、白澤は江西省の東望山にすみ、言語をあやつるという。そして、王が有徳でその徳が明照幽遠なときに姿を現すという。九つもの目を持つというのも、世の中を注意深く見守るという意味合いがあると思われる。日光東照宮の拝殿内には、狩野探幽の作とされる二枚の霊獣画がある。その絵は拝殿の正面に向かって左右の杉戸に描かれており、右に麒麟、左に白澤となっている」

明久「なるほど。麒麟の隣に描かれているから劉真のお母さんの名前は白澤なんだね」

優斗「作者である原石は、麒麟の相棒レベルの神獣を探すために通っている春〇高校の図書館の図鑑を隅から読みまくったそうだ」

明久「バカなんだね」

優斗「ああ。バカなんだ奴は」

明久「それで最後の一人が、謎の生徒会長の近衛小宇宙先輩です。このえこすも声は岩沢まさみと同じらしいです。この三人は次の章の期末テスト編に登場する予定です」

優斗「多すぎね？キャラ出しすぎじゃね？」

明久「はい。えつと次のお便「リクエストのコーナー！！」りはつてまたしても唐突！？」

優斗「時間の都合だ。このコーナーは寄せられたお便りに書かれているリクエストの場面をこの小説の登場キャラにしてもらおうというコーナーです」

明久「一応、劉真と雄二とムツツリー二の声は秀吉が担当することになってるらしいよ」

優斗「そうか。というわけでお便り、東京都早良区にお住いの朱雀さんから！！」

明久「妹さんキタ

！！」

優斗「『バカテス帰国ラジオ、毎週楽しませてもらってます

』」

明久「嘘だ！！このラジオは第一回放送のはずだ！！」

優斗「『それでリクエストの方なんですが、優斗さんと優子さんとAngelBeats!の第十話の名シーンをして欲しい！！』というワケなんだが、第十話って言うことはユイと日向のあの感動シーンか？」

明久「アドリブらしいからセリフも自分で考えてね」

優斗「じゃあねえな、やるか。じゃあ別室に行ってくるさ。優子がそこで待ってるからな」

明久「というわけで優斗&木下さんのAクラスコンビでお送りするAngelBeats!第十話、スタアアアアアアアト！！」

優子「神様って酷いよね。アタシの幸せ……全部……奪っていったんだ……」

劉真「そんなこと……ない……」

優子「じゃあ神無月。アタシのBL本西村先生から取り返してきてくれる？」

劉真「え……あ……それ「俺が取り返してきてやんよー！」は……あ！？」

優子「あ……は……！？」

劉真「優斗……」

優斗「俺が取り返してきてやんよ！！これは…俺の本気だ」

優子「う……そんな……優斗はホントの内容を知らないもん」

優斗「内容が、とられた本の内容がどんなでも…俺が取り返してきてやんよ！！もしBL本がどんな濃い内容であつたとしても！！」

優子「男が抱き合つよ、イチヤイチヤするよ？」

優斗「どんな内容でもつつたる！！」

優子「っは……」

優斗「抱き合つてもイチヤイチヤしてても……もし、ベッドシーンがあつても……それでも、俺は鉄人からBL本を取り返してきてやんよ！！……何度でも何度でも…取り返してきてやんよ。アイツに奪われた本は普通のBL本じゃない、お前のBL本だ。誰に奪われてたとしても、俺は取り返しに行つてたはずだ。また持ち物検査の時に没収されたら、そんなときもまた…没収されたのがBL本だつたとしても……俺が取り返してやんよ」

優子「……取り返せないわよ。BL本、西村先生の机の上だもん」

優斗「俺、職員室の掃除の担当やつてるからさ、ある日鉄人の机の上の書類、ドサツつて落としまうんだ。へへっ…それが作戦。試しに読んでみるとさ、ハマつてさ、いつしか毎日読むようになる。執筆も始める。そうするのはどうだ？」

優子「……うん……ねえ、そんなときは、さ、アタシをいつも楽しませてくれるようなBL本をプレゼントして頂戴ね」

優斗「任せろ」

優子「良かった……」

明久「おつかれー」

優斗「きつついー！あのセリフを真顔で言うのはなんか辛いものがあるー！」

明久「すさまじいキモさだったよ？」

優斗「キモいことは自覚してますからあー！別に言いたくてあんなキモイセリフ言ったわけじゃありませんからあー！優子の出だしが原因ですからあー！」

明久「あはは……さて、次のコーナーは『サバイバル四日目途中経過中継』って……なにこれ？」

優斗「それは無人島で水なしで四日間生き抜いた劉真たちの様子をレポートしてくるってコーナーだ」

明久「水無しって……どうやって生きてるのあの三人？」

優斗「ヤシの実割って水分摂取してるみたいだぜ？」

明久「サバイバル能力が著しく向上してるー！」

優斗「というわけで現場の工藤さん？」

明久「もうそこにいるの！？準備速っー！」

優子『はいはいー！こちら現場の工藤優子ですー！ボクは今、

例の無人島の砂浜の上に立っています！ここから見る海は凄く綺麗です！！」

明久「楽しんでる！！ここでは過酷な自給自足があつてるはずなのに工藤さん、絶対に楽しんでるよね！？」

優斗「工藤、そこから劉真か誰か発見できるか？」

愛子「そうだねー……あ！あつちの方に赤い髪の人が動いたよ！カメラ早く早く！！」

明久「もうすでにノリがUMA発見のノリだよ」

優斗「てか赤い髪って絶対に雄二だよ」

明久「そうだね。つと……今回は残念ですがお時間がやってきてしまったようです」

優斗「また次の放送会いましょー！！」

明久「この土日には会えると思います！！それは作者の発想力と執筆スピードにかかっていますので！！」

明&優「また次回！！」



十万アクセス突破記念！！俺とラジオとファイバーステージ？（後書き）

「次回もラジオ！！」

B y 唐津優斗

十万アクセス突破記念！！ 俺とラジオとファイバーステージ？（前書き）

「今回は前々回の文字数を取り返す！！」

B Y 神無月劉真

十万アクセス突破記念！！ 俺とラジオとフィーバーステージ？

優斗「リスナーの皆さん、おはようございますこんにちはこんばんはおやすみなさい。司会の唐津優斗です」

明久「こんにちはで統一してもいいと思うよ？どうも、同じく司会の吉井明久です」

優斗「言つとくけど、俺はこの小説の主人公じゃないんだからねっ、ただのオリキャラなんだからねっ」

明久「なんでツンデレになってるの？」

優斗「ノリだノリ。かの偉人ナポレオンも言つてただろ？『吾輩の辞書にはノリという言葉しか無い』って」

明久「捏造だよな！？ナポレオンさんはそんなネガティブ発言してないよね！？」

優斗「……………無知つて罪だよな（ボソツ）」

明久「聞こえてるよ！？だいたい、無知でもナポレオンさんの名言ぐらい僕でも分かるよ！？」

優斗「ほほう、じゃあ言つてみるよ」

明久「『吾輩の辞書に可能という文字はない』でしょ？」

優斗「流石だな明久。あとは『可能』を『不可能』に変えられれば完璧だ」

明久「……………あー言えばこー言う……………」

優斗「明久のバカ発言は聞こえなかったこととして進めていくぞ。

さて、前は工藤が雄J……………赤い髪の生存者を発見したところで終わつたよな？」

明久「もう雄二つて分かつてるんだからバラしても問題ないよね？」

優斗「バカ！！この超バカ！！世界最強のバカ！！」

明久「バカの三段活用！？」

優斗「お前はリスナーに敵しすぎるんだ！！いいか！？この小説を初めて読む人がいるとする。その人は第一話から読み始めると、な

にこの駄文？と思うかもしれない！！」

明久「親睦会編から作者は全力投球し始めたもんね」

優斗「しかしこの十万アクセス突破記念ラジオを読んでもみると、『おお？この小説って面白いっす！！』って思ってくれるかもしれないだろ！！」

明久「ラジオなのに読むっておかしいと思うんだけど。しかも読者のキャラが体育会系のノリじゃない？」

優斗「そんなことないっす！！普通っす！！」

明久「優斗は普通にしててよ！！まったく話が先に進まないんですけどー！！」

優斗「現場の工藤さーん？」

明久「スルー！？シカト！？無視！？」

愛子『モグモグ、いやあ、美味しいねこの果物ってはーい！！現場の愛子でーす！！』

明久「サボってた！！今絶対サボってたよね工藤さん！！」

愛子『いやあ、先ほど坂本くんたちと再会してさあ、あまりにも喉が渴いてそうだったからへりに積んである水分を全部あげたんだよ。そしたら島特有の珍しい果物貰ったんだ』

明久「やつぱり雄二だった……」

優斗「劉真たちはそこにいるか？」

愛子『いるよ？』

優斗「ちよつと声を聞かせてくれ」

愛子『はいはいーい！！代わってって』

明久「思ったんだけど、これって電話なの？前回の終わりにカメラカメラって言ってたような気がするんだけど」

優斗「カメラはビデオカメラだから中継は不可能だ」

明久「さいですか……」

雄二『優斗！！ teme はどうせ平和にぬくぬく過ごしてんだろっな  
あー！！』

優斗「ゴ、ゴリラが人語を話してる!？」

雄二『だれがゴリラだ!?!』

優斗「お前がゴリラだ」

雄二『その話は今度ゆっくりとしよう。一つ質問してもいいか?』

明久「なに?」

雄二『せっかくの十万アクセス突破記念なのに主人公の劉真の描写が無いのは非情じゃないか?』

明久「それは僕も思ってたんだけどね」

優斗「そうだなあ……あ!雄二、劉真に代わってくれるか?」

雄二『ああ。劉真、代われとさ』

劉真『オレ、リュウマ、コニチハ』

明久「原始人化してる!？言葉もカタコトだし!?!」

優斗「お前：ネタだろ?」

劉真『リアクション薄いな。せっかく一分も考えた力作なのに』

明久「短っ!?!」

優斗「それはそうと、元気にしてるか?」

劉真『してると思うか?ああ?』

明久「随分と不機嫌だね」

劉真『気づいた時には無人島の上っていう状況がどんだけ辛いからお前に分かるのか!?!』

優斗「やべえな。あいつマジギレだわ」

劉真『あと三日間も美波と会えないなんて……そんなのってねえよ……ねえよ……耐えきれねえよ……』

優斗「またアニメネタに走りやがったぞこいつ」

明久「それはさておき、劉真の出演増やすって何をするの?」

優斗「簡単な事さ。劉真にオリ主としての本当の力を見せてもらうのさ。その名も『神無月劉真による神無月劉真だけの神無月劉真のためのギャグ大会』!?!」

明久「なにそれ」

優斗「要するに劉真にギャグを披露してもらって『あ、これはもう

放送できねえな』って思ったら即中継斬る」

明久「斬るんだ、切るじゃなくて斬っちゃうんだ」

劉真「俺、主人公だよな？決してギャグ要員なんかじゃないよな？」

明&優「……………」

劉真「黙り込むのは止めてくれ！！それは肯定してると思うから！！」

明久「再びお便りのコーナー！！」

劉真「おい！！俺のでは」

優斗「というわけで中継カット！！」

明久「劉真が自分の立ち位置に気づくところだったね」

優斗「キャラ設定的には俺がギャグ要員みたいなもんだと思ってただけだな」

明久「そうだね。えっと……………思ったんだけど、このラジオの八ガキ職人さんっておかしいよね」

優斗「なんでだ？」

明久「読めばわかるよ……………東京都早良区にお住いの玄武さんから『アメリカに朱雀と旅行に行ったときに吉井玲という美人と仲良くあったんだけど、そこから進展がないままだったんだ。誰か、玲つちが日本に来るとか聞いてないか？』って姉さん！？劉真のお兄さんと僕の姉さんが知り合い！？」

優斗「こつちの八ガキに続きが書いてあるぞ。『そのときに玲つちから異常なまでに腕を組まれたり抱き着かれたりしたんだけど俺って嫌われてるのかな？』だとさ」

明久「鈍感！！以前までの僕もそうだったけど玄武さんの鈍感さは半端じゃないよ！！しかもあの姉さんが異性に興味を持つなんて……………神様ありがとう！！」

優斗「なんで喜んでるのかよく分からないけど次のお便り！！文月学園にお勤めの西村宗一さんから！！」

明久「鉄人！？なんで鉄人がこのラジオにお便りを寄せるの！？」

優斗「知らねえよ。『俺の出番が少くないか？』って……………アンタ

は元から準レギュラーだから別に少なくないよ？福原先生よりは絶対  
対に多いよ？」

明久「鉄人らしからぬ悩みだったね」

優斗「リクエストのコーナー！！」

明久「無視しないでスルーしないでシカトしないでしかも始まりと  
終わりが唐突すぎ！！」

優斗「大人の都合だ。えっと……学園都市にお住いの光騎の友人の  
一方通行さんからのお便り」

明久「二次創作のほうの一方通行は性格が優しいからね」

優斗「えっと……コッチの方才は更新しねエのかア？」だそうだ」

明久「お便りじゃない……えっとね、この小説の作者は一気に二つ  
の事をできない凡人なのでしばらく待つてね？多分今月中には更新  
できると思うから」

優斗「あつちの小説も十万アクセス記念書いてるんだっけか？」

明久「うん。途中でネタ切れになるなんて相変わらずだようちの  
作者は」

優斗「まったくだ。というわけでリクエストのコーナー！！」

明久「同じコーナーを使いまわしにしてるだけだよ。このラジオ  
……」

優斗「しょうがないだろ。まだ出番が無い奴らが残ってるからな」

明久「そうだね。えっと……今回のリクエストは文月学園Aクラス所  
属の霧島翔子さんから！！」

優斗「どんだけやる気増加してんだよ」

明久「いや、霧島さんのリクエストって一つしか思い当たらないし  
その予想が合ってたとしたら雄二が不幸な目に遭うからね。FFF  
団に粛清されたりグへへ……」

優斗「この小説って原作キャラの崩壊が半端ないよな」

明久「……雄二が私にプロポーズする場面が欲しい」だそうです。  
というわけで秀吉と霧島さん、別室にお願いしまーす」

優斗「直に言われるわけじゃないから意味がないと思うんだが……」

明久「録音すれば問題なし！！それでは！！霧島翔子さん&秀吉による『翔子！！俺と結婚してくれ！！』をご覧ください！！」

翔子「……雄二、話って何？」

雄二「翔子、お前に大事な話があるんだ」

翔子「……大事な話？」

雄二「ああ。いままで俺はお前のアプローチを避けてきたよな？」

翔子「……気にしてない。私の好意の一方通行だってぐらい理解してる」

雄二「実は、俺が避けてたのには理由があるんだ」

翔子「……理由？」



雄二「俺は……お前に釣り合えるようになるまで自分を磨くと決めていたんだ」

翔子「……………え？」

雄二「俺は……一度、人生を踏み外した男だ。そんなクズがお前のよ  
うなバラに釣り合うとは思えなかったんだ。だから今まで自分を磨  
くために……翔子のパートナーとして恥ずかしくないようにと念じ  
て生活してきた」

翔子「……雄二」

雄二「そして俺は今日で18歳だ。成績もAクラスレベルまでアッ  
プしてる。だからこそ言おう。翔子、俺と結婚してくれ。絶対に幸  
せにしてみせる」

翔子「うんっ!!」

優斗「甘っ!!脳みそが溶けそうなくらい甘っ!!」

明久「あとで雄二に文句言われるだろうね」

優斗「最期にもう一つだけリクエストをして、今回の十万アクセス記念ラジオを終了しよう」

明久「そうだね。えっと…ラジオネーム『劉真の嫁』さんからのお便り」

優斗「島田!!それは絶対に島田!!」

明久「『ウチの夫が島流しに遭ってすでに四日目。彼の声が聴きたいです。というわけでリユウとウチの甘い生活』ストップ!!」を  
ってどしたの?」

優斗「そのリクエストは破棄だ破棄」

明久「え?なんで?」

優斗「あいつらの甘ったるい私生活なんて聞きたくもない。しかもあいつらの私生活の描写、結構多いだろ」

明久「そうだね。じゃあこっちのハガキ行こうか。ラジオネーム『グルガイ』さんから」

優斗「誰!?!」

明久「『新しく登場するオリキャラの三人にトークさせてほしいY  
O!!』だそうです」

優斗「分からない!!コイツが誰なのか分からない!!」

明久「というわけで新たな三人のトーク、スタアアアアアアアア  
アト!!!!」

麒麟「何を話せというのだ」

白澤「そんなこと言わずにトークしましょー。トーク」

小宇宙「うん！！コスモ頑張る！！」

麒麟「君は見た目は美人なのに中身は子供なのかね……」

小宇宙「子供じゃないもん！！コスモは18才なんだよ？」

白澤「若いつていいよねー。私だつてあと十年若ければなー」

麒麟「二十年の間違えだと思っただが」

白澤「なにか言っただ？」

麒麟「心の底からゴメンナサイ」

小宇宙「はくたくさんとときりんさんつて仲良しなんだね！！」

白澤「そうなのよー。私はこの人を心から愛してるわー」

麒麟「愛してるなら背中をハイヒールでふむのをやめてもらえない  
だろうか。穴が空く。穴が」

白澤「あア！？文句言っただじゃねエよ！！………コホン、もう、  
しょうがないなーエヘッ」

小宇宙「二人とも仲良しだねー」

麒麟「汗が半端ないのだが……」

白澤「えー？もう終わりー？まだなにも話してないんだけどなー」  
スタッフ「時間とか大人の都合です」

白澤「ああ！？私に指図するたアいい度胸じゃねエか！！ちよっと  
コツチ来い！！」

スタッフ「え！？ちよ！！うわあああああ！！！！！！！！」

麒麟「スタッフが攫われた……」

小宇宙「おつかれさまでしたー！！え？お菓子くれるの？わーい！  
！ありがとう！！」

明久「劉真のマジギレモードはお母さんの遺伝だったんだね」

優斗「っていうか、スタッフ連れていかれたんだけど」

明久「それには触れないで。というわけで長いようで短かった『バカテス帰国ラジオ』。次は二十万アクセス突破記念の時に会いましょう!!」

優斗「それまで連載されているのかそもそも二十万アクセスなんて突破するのか、さっぱり迷走中なこの小説『バカとテストと帰国子女』を今後もよろしく願います!!」

明&優「さようなら

!!!!!!」

十万アクセス突破記念！！ 俺とラジオとファイバーステージ？（後書き）

「次はサバイバル五日目！！」

B y 坂本雄二

俺と特訓と一方通行（前書き）

「かかかききくくくかかけけけ!!!」

B y 一方通行

## 俺と特訓と一方通行

きつかったサバイバルの残すところあと三日となった今日。  
俺たちはとある重大な秘密を知ることとなる。

劉真「この島で召喚獣出せた」

雄&康「……………は？」

劉真「いや、だから、召喚できたんだって」

こいつは一体何を言ってるんだ？俺たちが持っている召喚獣は文月学園内か強化合宿の宿でしか召喚できないはずだ。しかも劉真は教科フィールドを展開することができないから召喚なんて不可能なはずなんだが……………。

劉真「これを見れば信じるだろ。試獣召喚」

劉真が召喚のキーワードを口にする。すると劉真の足元に幾何学模様  
の魔法陣が浮き出てきてってちよつと待て。

雄二「召喚しやがっただと！？」

劉真「だから召喚できるって言っただろ。教科は自分の意志で変えられるみたいだな。それとさつき研究所っぽい家を見つけたんだ。

おそらくこの島はあのクソババアの研究施設のようだな」

康太「……………まんまと騙された」

雄二「ということはあれか？俺たちは大雅さんの気まぐれとクソババアの好奇心によって一週間の休暇を棒に振ったというわけか？」

劉真「そういうことになるな。ん？待てよ。好きな教科が設定できるってことは、雄二の腕輪も見れるってことにならないか？」



康太「……………雄二は400点越えている教科はあるのか？」

400点越えてる教科か……………確かに俺は最近の猛勉強のおかげで点数は急激に上がってる。だが、400点を越えてる教科なんてあったか？……………

雄二「あ」

ある。ああ！！あるじゃねえか俺にも400点を超える教科が！！

雄二「世界史なら400点越えてるぞ」

劉真「なら大丈夫だ早速試験召喚してくれ」

雄二「試験召喚」

先ほどの劉真と同じように俺のデフォルメ召喚獣が出てくる。

劉真「俺と康太の合体召喚獣を見てみたいんだけど……………無理じゃね？」

それはそうだ。保健体育が得意なムツリー二と苦手な劉真のペアで800点を超えるのは絶望的だ。

康太「……………劉真の点数は？」

劉真「今回は結構頑張ったけど……………254点だ」

雄二「苦手科目の成績じゃないだろ！！」

劉真「選択問題が結構多かったからな」

雄二「このカンニング疑惑学生が……………」

生まれつきの能力で点数を上げるなんて卑怯だ。まあ、こいつは同じクラスだから良かったけどな。劉真がAクラスにいたときのこと

なんて考えたくもない。

康太「……………それだけあれば十分。試獣召喚」

『Fクラス 土屋康太

保健体育 608点』

康太「……………強化合宿の時の点数が残ってるから」

劉真「教師一人と保健体育二位を相手にして消費点数百点ってどういふことだよ……………」

雄二「まあムツツリーニだしな」

劉真「……………そうか。じゃあ康太の召喚獣は俺の召喚獣と『合体』だ」

劉真が腕輪の二つ目のキーワードを口にすると黒い霧が二人の召喚獣を包み込む。

劉真「強化合宿の時に分かったんだけどさ、この黒い霧が防御してくれるんだ」

雄二「変身シーン対策だろうな」

そして霧が晴れて一体の召喚獣が姿を現した。瞳は右が青に近い感じの黒で左が漆黒の黒。髪の色は青と黒の混合色で忍者装束を着用している。そして武器がトンファーとカメラって……………

雄二「変化があまり見られないんだが……………」

違う点といえば、目の色と髪の色と武器ぐらいだが、そもそもムツツリーニの召喚獣はカメラ常備だし髪の色もともと黒っぽいから

この召喚獣を例えるなら『トンファー装備のムツツリーニ』だろうな。

劉真「でも腕輪の能力は偉大だぞ？俺と美波の合体召喚獣1stに匹敵するかもしれない」

雄二「思ったんだがそもそもなんでお前は腕輪の能力を知っているんだ？合体したことないんだろ？」

この『合体』を見せられた時から不思議に思っていた。初めての合体のはずなのに劉真は全ての合体の腕輪を把握していたしな。

劉真「学園長に渡されてるんだ。俺の合体召喚獣の腕輪の能力一覧表が」

雄二「だったらわざわざ合体しなくてもいいだろうが」

劉真「姿は載ってないから見たかったんだよ……」

雄二「ガキかお前は」

ていつか一覧表？

雄二「おい。一覧表って今も持つてるのか？」

劉真「ん？ああ。いつ必要になるか分からないから常備してるな」

雄二「見せる」

劉真「人使いが荒いんだよな雄二は……」

劉真がバッグからラミネート加工された書類を俺に渡す。

雄二「えつとなになに……」

秀吉「相手の脚を掴むのが条件の『石化』<sup>ストーン</sup>＜相手を石にする＞

平賀…逆立ちするのが条件の『閃光』フライトニング <目くらまし>

根本…武器を全部捨てるのが条件の『鉄壁』ガード <絶対防御>

姫路…点数を900点消費が条件の『料理』ボイスンクッキング <相手を戦闘不能にする>

工藤…点数を850点消費が条件の『理想』リアリテイ <相手を理想の形に変える>

翔子…点数を残り一点まで消費が条件の『拘束』チェイン <行動不能にして締め付ける>

久保…8000点消費が条件の『迷走』ストレンジラブ <18禁>

優子…点数全消費が条件の『爆走』ボイスラフ <18禁>

優斗…特に条件なしの『射撃』スナイパー <相手の頭を確実に撃ち抜く>

そしてムツツリーニが特に条件なしの『神速』ジェット <速く動く>で  
明久が………「オイ」

信じられない腕輪の能力を確認した俺は劉真に冷たい視線を送る。

劉真「俺に言わないでくれ。決めたのは召喚システムだからな」

雄二「あの気まぐれシステムが明久との合体を鼻屑にするとはな…

…」

康太「………明久のはどうなんだ？」

劉真「俺とアキの合体召喚獣の腕輪の能力は『支配』キング <何人でも好きな人数だけ操ることができる>能力だ。………多分だが、俺とアキ

で800点越えるなんて予想してないんじゃないか？」

雄二「でもこの前お前の点数は1000点近かっただろっが」

劉真「だから俺に言わないでくれって」

明久も最近、姫路のおかげで成績が向上してきているからこの腕輪が実現するのはそう難しくないかもしれない。

康太「……………で、なんで召喚させたんだ？」

劉真「そうそうー！俺はこのサバイバル期間を使って召喚獣の操作の特訓をしようと思ったんだ」

雄二「特訓か。いい考えだな」

別にやることもないから暇つぶしにちょうどいい。次の試召戦争にも役に立つだろうしな。

劉真「というわけで俺&康太VS雄二でOK？」

雄二「ああ。教科はどうする？」

劉真「世界史だ。オマエの腕輪見たいから」

雄二「そうか。じゃあ

「『試獣召喚』」

|       |      |    |            |
|-------|------|----|------------|
| 『Fクラス | 坂本雄二 | VS | 神無月劉真&土屋康太 |
| 世界史   | 450点 | VS | 365点&13点』  |

劉真「康太……………」

康太「……………俺の実力はこれぐらい」

雄二「いやもつと勉強しろよ……………」

いい加減こいつの点数を何とかしないと保健体育でしか戦えなくな

つちまう気がする……。

劉真「じゃあ、こつちから行くぞ！！康太は俺の援護！！」

康太「……………了解」

劉真の召喚獣が凄まじいスピードでトンファーを俺の召喚獣の顔面に向かって突き刺そうとする。

雄二「チイ！！」

俺は最小限の動きだけでそれを回避していく。点数が高いと召喚獣の動きも良くなるんだな。

雄二「俺の腕輪を見せてやるよ！！『鉄拳<sup>てっけん</sup>』！！」

俺が能力発動のキーワードを口にすると、召喚獣が装備していたメリケンサックが手甲に変形した。

劉真「棘付き手甲って怖いんだが……………」

雄二「フィードバックが無いだけマシだろ」

劉真「あ。言い忘れてたけどこの島の中ではアキの召喚獣と同じ仕様になるらしいぞ。オマエが感じている操作の向上もそれのお蔭だ」  
雄二「つつことは痛みはそのまま？」

劉真「返ってくるってことだ」

康太「……………だからって俺を狙うな」

雄二「問答無用！！」

ムツツリー二の召喚獣に向かって拳を振り下ろす。次に顔面に右ストリート。腹にボディブロー。

『Fクラス　土屋康太  
世界史　0点』

康太「……………かはっ」

痛みに耐えきれなかったムツツリーニが大量の血を吐いてぶっ倒れた。

雄二「珍しく鼻血以外の血を出したな」

劉真「いや、着眼点が違うと思うぞ」

雄二「隙アリッ！！」

ツツコミの為に動きを止めたのが貴様の運の尽きだ！！

劉真「俺の腕輪が『合体』だけだと思っなよ？『変身』」

チィ！！忘れてた！！劉真の腕輪には能力が二つあるんだった！！

劉真の召喚獣が黒い霧に包まれて姿を変えていく。髪は白髪に、服は黒いシャツにジーパンってまさか！！

劉真「操作には変身対象になりきることが大事なのでキャラをマジギレモードにして操作します。覚悟しろよ三下ア！！」

一方通行に姿を変えた劉真の召喚獣がそこにいた。

雄二「チートだろうが！！攻撃効かないだろ！？」

劉真「そんなにチートな召喚獣じゃねエよ。攻撃は全て反射するけどなア。ちなみに頭ブチ抜かれる前のアクセラさんだぜエ？」

雄二「無制限！！最強の能力大売出しだなあ！？」





俺と特訓と一方通行（後書き）

「やっと最終日だ……」

B y 坂本雄二

俺と二人とサバイバル最終日(前書き)

「今日は短め？」

B y 神無月劉真

## 俺と二人とサバイバル最終日

雄二「ついに最終日だ……」

浅い眠りから目覚めた俺は、無駄に晴れ渡った空を見上げながら咳いた。

康太「……………もうこんにちはの時間だ、雄二」

劉真「全然浅い眠りなんかじゃねえっつーの」

雄二「マジか？最終日だからって気い抜きすぎたみたいだな……………」

ムツツリー二たちの言う通り、太陽は真上に上がっているので昼みたいだ。もうなんだか野生児に戻ってるみたいで嫌だ……………。

劉真「そういう雄二に朗報です」

雄二「朗報？迎えても来るのか？」

最終日だし早めに家に帰らせてくれてもいいだろう。明日から学校みたいだしな。

劉真「半分正解で半分不正解だな」

雄二「もったいぶらずに言えよ」

劉真「姉貴たちは確かにこの島にくる。だが……………乗れるのは二人までだ」

雄二「殺気！！」

ブウン！！

俺の頭の上をヤシの実が通過した。

雄二「ムツツリーニ!!」

康太「……………俺は帰るところがあるんだ……………!!」

雄二「俺にだってあるんだよ!! つつーか劉真!! 二人までつてど  
ういうことだ!？」

こんな無人島に来るぐらいだからヘリで来るはずだ。それなら四人  
は乗れる確信はあるんだが……………。

劉真「姉貴の気まぐれ」

雄二「イツシャアアアアアア!!!!!!」

劉真の腹めがけて鉤を突き出し、顔面めがけてパンチを叩き込む。

劉真「甘いわああああああ!!!!!!!!ぬうん!!」

カランカラン……………

武器と拳を足で防がれた。なんて常識はずれな体してるんだこい  
つは……………。だが、俺の底力はこんなもんじゃねえ!!

雄二「ムツツリーニ、隙がありすぎるぞ!!」

康太「……………っ!？」

俺と劉真の戦いを観戦していたムツツリーニの肩を掴み、海に放り  
投げる。

雄二「よしっ!!これへりに乗れる!!」

劉真「雄二。後ろ後ろ」



劉真「分かればいいんだ分かれば。康太、殺れ」

グシヤッ!!

雄二「だから貝で頭を割ろうと……する……な……」

バタンッ

俺の意識はそこで途切れた。

優斗「いやー、長かったな。一週間サバイバル」  
明久「サバイバル的なことってほとんど描写されてないよね」

ずずー

二人がお茶をすすめる音がFクラスの教室に響く。この一週間、この

二人はFクラスで雄二たちの様子をずっと観察していたのだ。

優斗「結局さ。三人ともヘリに乗れたわけなんだが……騒音に耐えきれなくてのた打ち回ってるな」

明久「大雅さんもせめてヘッドフォンぐらい貸してあげればいいのにね」

ずずずー

優斗「あ。明久、そっちの和菓子とつてくれ」

明久「あ！これって新発売のヤツだよ。僕も食べてもいい？」

優斗「かまへんよ」

明久「なんで関西弁？」

ずずずずずー むしゃむしゃ

明&優「平和だ………」

優子「アンタらちよつとは心配とかしてあげなさいよ」

秀吉「驚くべきスルー能力じゃな」

優斗「だってさあ、やることねえんだもん」

明久「この一週間はお菓子食べて雄二たち見て笑ってポケモンで暇つぶししての繰り返しだったからね」

優子「それにしても傍観者すぎるんじゃないの？」

秀吉「勝手にサバイバルを要求された雄二たちはご愁傷様じゃな」

明久「あ。それだけだね、雄二たちにも責任があつてサバイバルさせられたらしいよ？」

優斗「どうということだ？初耳だぜ？」

明久「えっとね、ムツツリーニは工藤さんとのデート中に他の女性を見て鼻血を滝のように出したのが原因で……劉真は美波を拷問部



屋で調子に乗って追い込みすぎたせいで……雄二は霧島さんが結婚してくれないのが許せないというのが原因みたいだよ」

秀吉「……雄二には深く同情するのじゃ……」

優子「代表の八つ当たりみたくなってるんじゃないの……」

優斗「よかった……不祥事はおこさなくて……」

明久「というわけで、最後はここにいるみんなで次回の予告でもしようよ」

明久「平和に暮らしていたこの僕、吉井明久に迫りくる姉という名の黒い魔王!!」

優斗「そして俺たちに襲ってくる期末考査という学生の最大の難関!!」

優斗「BL本を読む時間が減ってしまうテスト期間!!」

明久&優斗&優子「この三重苦を君は乗り越えることができるのか!?!?!?!カミングスーン……」

秀吉「突っ込みどころが満載なのじゃが……ではまた次回もよろしく頼むのじゃー!」

俺と二人とサバイバル最終日（後書き）

「部屋には入れてくれないのですか？アキくん」

B y 謎のバスローブの女性

僕とテストと非常識な姉（前書き）

「出番なし？」

B Y 神無月劉真

## 僕とテストと非常識な姉

明久「えい！！やあ！！」

期末テストが近くなった日の祝日、僕はテレビゲームをしていた。このゲームで雄二に負けちゃったから特訓をしてるんだ。

ピンポン

ん？誰だろう今いいところなのに……

仕方なくポーズ画面で止めて玄関に向かう。

「新聞はお断りですよーって……」

お決まりの断りゼリフを言った僕の言葉が尻すぼみになっていた。なぜなら僕の目の前に

バスローブ姿の姉が

いたからだ。

玲「お久しぶりですアキくん」

明久「……………」

パタン

静かに玄関の扉を閉めて鍵をかけ、ティーンでロックする。  
あの人は僕の知り合いなんかじゃない。きっと別人だ。

玲「アキくん？どうして部屋に入れてくれないのですか？」

H A H A H A。僕にはなにも聞こえないよ？決して実の姉の声なんか聞こえてないよ？

玲「仕方ありませんね……………お隣さんにあいさつでもしましょうか」

明久「それだけは勘弁して!？」

玲「やっと開けてくれましたねアキくん」

はっ! !しまった! !姉さんの流れに吞まれてついドアを開けちゃ

った！！

この奇妙な恰好をしている女性は僕の実の姉である吉井玲だ。

明久「っていつかなんでバスローブ姿なのさ！！」

僕の中の常識ではバスローブを着て街を闊歩する人なんていないはず。

玲「アキくん。私は長旅で汗をかいてしまいました」

明久「そ、そう」

確かにアメリカから日本に来たのだから結構な時間がかかっているだろうね。

玲「そして私はここまでの電車の中で自分の姿をガラスで確認したところ、汗をいっぱいかいていました」

どうしよう。すでにオチが見えてるんだけど……。

玲「だから私はその場でバスローブに着替えました」

明久「はいそこダウト！！」

玲「吸汗性に優れているバスローブによって私の汗はぐんぐん引いていきました」

明久「さっきから話し方が作文風だし電車の中で着替えること自体が間違ってるしそもそも何故タオルを持ってなくてバスローブを持つてるのさ！？」

この姉は昔からそうだ。

自由気ままでマイペース。

おまけに厳しくて極度のブラコン。

玲「というわけでアキくんのテストの結果を見せてください」

明久「唐突すぎて話について行けなくてちよっと待って姉さん」

今凄くマズイことを聞かれた気がする。

玲「どうしたのですかアキくん？」

明久「ごめん姉さん、もう一度言ってくれますか？」

玲「アキくんのテスト結果を見せてください」

マズイ……僕の耳がどう処理してもテストを見せろという単語が聞こえてくる……。

明久「ははは、何言ってるのさ。僕はちゃんといい点は取ってるよ？」

玲「目を閉じて歯を食いしばりなさい」

明久「殴る気！？実の弟の顔面を殴る気なの！？」

玲「違います。これは怒りの鞭です」

明久「暴力だ！！まごうことなき暴力だ！！」

玲「とにかく家に上がりますね」

明久「ちよ、ちよっと！！」

僕の手を振り払ってズンズンとリビングまで進んでいく姉さん。

ホントいつもマイペースな人なんだから……。

玲「へえ……結構片付いてますね」

普段はそんなことないんだけど今日は黒光りした流星を見つけたから掃除をしたんだというのは口が裂けても言えない。



玲「ホコリも見当たりませんし……」

ソファの上に荷物を置いた姉さんは窓のカーテンを開き町の風景を見てゲームのコンセントを抜き、キッチンに向かってつてちよつと待て。

明久「今凄く自然な流れで僕のゲームを中断しなかった!？」

せつかくいいところまでいっていたのに!!

玲「アキくん。私と母さんがあなたの一人暮らしを認めるときに与えた条件を覚えていますか？」

明久「……………」

嫌だなあ、泣いてなんかいないよ？ちよつと目から水分が出てきただけさ。

玲「覚えてないのですね…………？」

明久「ちよつと待って!!あれだよね!？えつと……………」

働け僕の脳細胞。普段働かない怠慢な君たちに一生に一度ぐらいの建設ラッシュの時がやって来たんだ。

明久「早寝早起き朝ごはん……………」

玲「お嫁にいけなくなるチューをしてほしいのですか？」

明久「不純異性交遊の禁止とゲームは一日三十分だよね!？」

お婿ではなくお嫁というところがなにげに怖ろしい。

姉さんは天然だけど本気で言っているときがあるから油断はできな

い。

玲「そのことなんですが、不純じゃない異性交遊はオーケーとします」

この人に一体なにがあったんだろうか？ 仄かに頬を赤く染めちゃってるし。

まさか……

明久「まさか姉さん……好きな人でもできたの……？」

ボンツ！！

誰が見ても分かるぐらいなほどに姉さんの顔が真っ赤に染まった。

玲「な、ななななななななななななななななを言ってるのですか！？ 私は別にすすすす好きな人ができたなんて一言も言っていませんしそもそも玄武さんとはアメリカで知り合っただけです！！」  
明久「へえ、玄武さんって言うんだあ（ニヤニヤ）」  
玲「か、からかわないでください！！」

へえ、玄武……玄武……ん？玄武！？

玄武ってまさか！？

明久「姉さん、その玄武さんって人の名字とか分かる？」

玲「確か、神無月とおっしゃっておいまして……」

明久「オーマイガー……」

確定した。

姉さんが好きになってしまった玄武さんは僕の友人である神無月劉真の兄だ。

職業はプロ野球選手で昨年の盗塁王だったりするスーパーエリートなんだ。

実際に会ったことは無いけど、劉真と友人である限りは会う機会なんていくらでもあるだろうと思っではいる。

将来劉真と親戚関係になるかもしれないだなんて考えただけでも怖ろしい……。

玲「どうしたのですかアキくん？」

明久「いや、ちょっと自分の将来が心配になっただけだよ」

玲「そうですね。アキくんは大人になったらちゃんと生きていけなような人間ですし」

何故だろう、実の姉にガンガン侮辱されている気がする。

玲「そういうアキくんこそ好きな人とかいないんですか？」

そういえば姉さんには話してなかったっけ？

明久「僕は少し前から瑞希と付き合ってるけど？」

メキヨオ！！

姉さんが握っていた冷蔵庫の扉が握りつぶされた。

どうやら姉さんの心の中は世界恐慌のときの経済状態ぐらい荒れてしまったらしい。

玲「アキくんごときが私よりも先に異性とお付き合いですって……

「？」  
明久「ストップ姉さん！！それ以上握ったらこれから食材が保管できなくなっちゃうから！！」

僕にとって冷蔵庫が無くなるのは非常に痛手だ。最近瑞希に言われてゲームの買っ量を減らしてちゃんと料理を食べるようになってきたし。

玲「そもそもアキくんに彼女ができるということ自体腹立たしいのに私より先にできるですって……？」

明久「本当に最低な性格してるよね姉さん」

この人はアメリカでどんだけ歪んできたのだろう。僕のアメリカに対する憧れが薄れてきた。

玲「冗談はさておき」

明久「冗談！？ただの冗談で僕の冷蔵庫は処刑されそうになっちゃったの！？」

それは困った。これからの日常生活に支障が出てしまつてはないか。

玲「アキくんには期末テストで良い点数を取ってもらいます」

明久「……………どれぐらい上回ればいいのか？」

玲「意外と物わかりが良いですね。私がこれからテストまでにアキくんが減点をつけていきます。アキくんはその点数分上回ればよいのです」

明久「ちなみに今の減点数は？」

玲「私より先に異性とお付き合いしていたので減点千点です」

既に僕の一人暮らしは終焉を迎えたようだ。



僕とテストと非常識な姉（後書き）

「「「「怪しい……」」」」

B y 神無月劉真&島田美波&坂本雄二&土屋康太

俺と家族とテスト前（前書き）

「変身。サドレンジャー」

B y 神無月大雅

## 俺と家族とテスト前

アキが悲劇を見ている頃、俺は俺で大変な目に遭っていた。

劉真「眠い……」

期末テストが迫ってきた休日、珍しく昼間に起きた俺はパジャマのままリビングのソファに倒れこんだ。

美波「こらこら、二度寝するんじゃないの」

彼女であり同棲している美波が俯せの俺の体をソファからどかした。  
ダメだ……眠気が全然取れない……眠。

劉真「ホント無理。あと14時間だけ眠らせてくれ……」

美波「日にちが代わるわよ。いいから起きなさい……」

劉真「ぐぼえ……」

おはようの代わりに腹に叩き込まれる美波の拳。

劉真「効いたぜ……世界チャンピオンになれるかもな……」

美波「いいから顔を洗ってこーい……」



俺は美波が近くのを物投げてくる前に洗面所に駆け込んだ。

美波「そういえば」

顔を洗って覚醒した俺が美波と共に昼食をとっていると、何を思い出したのか美波が箸を止めて俺の方を見てきた。

美波「今日の夜に麒麟さんたち神無月家がこの家に集合するらしい

わよ」

劉真「ブーツ！！ゲホッ！！ゲホッ！！」

の、のどに魚の骨が刺さった！！痛え！！

美波「うわぁ……ちゃんと拭いてよね」

劉真「そんなことはどうでもいい！！それより、親父たちが帰ってくるってどういうことだ！？」

アイツらのスケジュールは忙しいというレベルじゃないから四人が四人とも予定が悪とは思えないんだが。

美波「大雅さんがなんとかしたみたいよ」

劉真「アイツはなにか！？どつかの国家レベルのお偉いさんか何か！？」

ありえねえ……現在主婦である姉貴が親父たちの予定を掌握するだなんて……明日は地球滅亡か？

大雅「誰がアンゴルモアの大王だ」

劉真「そんなこと言ってねえし思ってもねえよ！？てか、突然現れるな！！心臓に悪いだろうが！！」

大雅「突然じゃないぞ。ついさっき買い物から帰って来たばかりだからな」

劉真「それを突然と言わずして何を突然と呼ぶんですかぁ！？」

大雅「歩行中に上から降ってくる鉢植え」

そりゃ確かに突然だ。

美波「おかえりなさい大雅さん。お風呂にします？食事にします？

それとも……拷……問ですか……？」

号泣するなら言うんじゃないよ。

そんなことをあえて言うから姉貴が思い出したようにあの部屋を使  
うんだよ。

大雅「そうだな……今日は拷問にしようかな」

ほらな。やっぱり予想通りになった。

大雅「というワケでこっちに来い美波」

美波「いやああああああ……！！！！ウチのバカアアアアアアア  
アアア……！！！！」

キー………ボタンッ

大雅「今回はこの服に着替えてもらおうか」

美波「それって服というよりは拘束具」

大雅「いいから着ろ」

美波「………はい………」

大雅「今日はコレで攻めようか」

美波「え！？そんな大きいもの入らな

」

<年齢規制の為にこれ以上放送できません>

出たよ年齢規制。相変わらず危ない橋を渡るのが好きだよな、この小説は。

そういえば親父と会つのは二か月ぶりぐらいか……。

最期に会ったのはドイツを出るときだったからなあ。

まあ、元気でやってるだろうけどな。あのエロ親父は。

どうしてあの親父は普段の態度からエロが関わるとあんなに豹変するのかな？

康太と一番気が合っていたみたいだし……よく分からん。

劉真「そういえば、母さんと会つのは三年ぶりか……」

あの人の忙しさは家族一だから会う暇なんてほとんどなかったしなあんな破天荒な性格をしているからまず逆らう家族はいなかったから家族で最強の立ち位置だったなあ……別に泣いてなんかいないぜ？別にあの人にこき使われていたなあとか思っただけだよ？

劉真「兄貴とはこの前電話で話したしなあ……」

アイツは運動能力がバケモンだから誰もスポーツで勝てなかったなあ。

ま、俺はトランプ最強だからよく金を巻き上げてたんだけどな。その時の兄貴の絶望している顔と言ったら……ププツ。

劉真「朱雀は……………会いたくねえ」

あのヤンデレブラコンシスターは家族で一番厄介なヤツだったなあ。俺の誕生日の時なんか、自分にリボン巻いて『私がお兄ちゃんへのプレゼントだよっ。愛してるお兄ちゃん！』とまで言ってくる始末だったなあ……………どこで教育間違ったんだろあの両親は。

劉真「思ってみれば俺の家族ってまともな奴一人もいねえじゃんか……………」

いや、悲觀的になっただけだ。

思い出すんだ……………あの家族のいいところを……………。

劉真「嫉妬深い……………自己中心的……………基本S……………」

おかしいな、全くと言っていいほどネガティブなことしか出てこねえ……………。

劉真「……………うん。やっぱり俺の家族はみんな変人ばかりだな！！」

悲しさで胸が張り裂けそうだった。

俺と家族とテスト前（後書き）

「なにやってんの？」

B Y 神無月劉真

俺と家族と全員集合？（前書き）

「久しぶりだな」

B y 神無月劉真

## 俺と家族と全員集合？

七時二十八分

家族がそろそろ時刻まで残り二分となったワケだが……

劉真「見事なまでに集まらねえなオイ」

俺と姉貴と美波以外は誰も集まっていなかった。

どんだけ時間にルーズな連中なんだ……

大雅「流石は神無月家の変人トップ4だな。時間という名の概念に囚われていない」

劉真「囚われるよ！！時間はどんな職業においても絶対不可欠なものじゃねえのか！？」

大雅「私には別に必要のないものだがな」

劉真「必要だよ！？主婦にとつても時間は絶対不可欠だよ！？煮込む時間とかどうやって測る気だ！！」

大雅「腹時計」

劉真「それも時間に囚われてるって言うんだよ！！屁理屈で世界の法則を歪めようとしてんじゃねえこのアホ！！」

大雅「美波、言われてるぞ」

劉真「美波じゃないですからあ！！アナタに言ってますからあ！！」

大雅「えええ！？」

劉真「どんだけ自覚が無いんだオマエは！！今のはどう考えてもオマエの流れだっただろうが！！」

大雅「……………ごめん」

美波「ああー、大雅さん泣かしたわねー」





朱雀「足元にいるっての!!」

劉真「ギャアアアア!!!足が足首からもげるつっつっつっつっつ  
!!!!!!」

八、ハイヒールで人の足首踏み潰すたあい度胸してんなこの妹は  
ア……

朱雀「久しぶり!お兄ちゃん!」

劉真「あ、ああ……久しぶり……」

目が笑ってない朱雀を見て冷や汗が止まらない。

ははは、死ぬかもな。こりゃ。

玄武「俺もいたりするんだな。これが」

劉真「チツ」

玄武「舌打ち!?それが久しぶりに兄と会う時の態度かよ!?!」

劉真「やかましい。クズが」

玄武「絶対に教育の仕方間違ってるよ親父……」

それは俺も同感だ。

大雅「ん?なんだ玄武と朱雀じゃないか。遅かったなあ?」

玄&朱「(ビクウ!)」

エプロン姿で笑顔を浮かべた姉貴が二人を出迎える。

姉貴、目が笑ってませんよ?兄貴と朱雀も腰が引けてるし。

すると兄貴が俺の襟を掴んで引き寄せた。

玄武「(なんで姉さんはお怒りなんだ!?!)」

劉真「(テメエらが遅刻したからだろうが……クズ)」

玄武「(クズって言うなよ!というか遅刻はしょうがないだろ!? お前の家の場所が分からなかったんだから!)」

劉真「(知らねえよ!? オマエらの都合なんて俺が理解してるワケねえだろ!後、俺を巻き込もうとするな!)」

玄武「(そこは兄弟だからということ)」

劉真「(知るか!死ぬならテメエと朱雀の二人だけで逝って来い!)」

大雅「なにを二人だけで話してるんだ?ああ?」

劉&玄「「き、気のせいさ!(ヒイイイイイイイイ!!!!)」

おそらく心の中が一致したであろう俺と兄貴はこの後、我が身に降りかかるであろう不幸に身を震わせていた。  
つつーか俺無実じゃね?

美波「あ、玄武さんに……い・も・う・と・の朱雀ちゃんお久しぶり」

すると、リビングでテレビを見ていた美波が玄関にやって来た。

なんで妹の部分を強調してるんだ?

ん?何故だか朱雀の殺気が膨れ上がったような気が……。

朱雀「お久しぶりです美波さん。一年後には捨てられてそうですね」

美波「あらあ?世間的には認められていない恋を追いかける非現実主義者が一体何の戯言をほざいているのかしら?ウチには理解できないなあ」

朱雀「……………全裸でベランダに張り付けるぞコラ」





劉真「……………ここから消えていなくなりたい」

とりあえず今の状況報告をしようと思う。

リビングに移動した俺らは指定されている自分のそれぞれの席に腰を下ろし、自分たちの状況報告をしていたのだが……

朱雀「お兄ちゃん、お茶いる？」

劉真「ん？ああ、さんきゅ」

朱雀「えへへー（チラッ）」

何故か美波に視線を送る朱雀。

美波さん、額に青筋が浮かんでますよ？

美波「リュウ？頬にキスしてくれる？」

劉真「は？みんないるんですけど……………」

美波「キ・ス・し・て・く・れ・る？」

劉真「……………喜んで！（グスッ）」

言われるがままに美波の頬にキスをする無力な俺。  
別に泣いてなんかないよ？これは心の汗なんだ。

美波「あれ？朱雀ちゃんはしてもらわないのってごめんなさい。

朱雀「ちゃんはた・だ・の・妹だったわねえ。ホントにごめんなさい。ウチ、つい幸せすぎて尋ねちゃったわ」

朱雀「（ピクッ）べ、別に構いませんよ？私は妹だから平気でお兄ちゃんと一緒にお風呂に入れますし」

劉真「オイコラその問題発言女」

朱雀「（イラッ）ウ、ウチはいつでもリュウと○○○とか×××ができるから構わないわ」



俺と家族と全員集合？（後書き）

「久しぶりっ」

B y 島田美波



俺と家族と全員集合？（前書き）

「作者がバカテスの懸賞でスタッフジャンパー当ててテンションが最高潮になってやる」

B Y 神無月劉真

## 俺と家族と全員集合？

ピンポン

美波と朱雀が冷戦状態になってから三十分が経過した頃、来客を知らせるドアベルの音が部屋に鳴り響いた。  
やっとこの状況を脱出できる術が見つかった！

劉真「は、はい！ただいまー！」

玄武「あ！テメエ汚えぞ！」

兄貴が必死に喰らいついて来るが華麗なステップで回避成功。  
誰が道連れなどになるものか！

生き残るのは……俺だ！

劉真「ふう、だーれでーすかー？」

緊迫したりビングから解放されて気分が抑揚していた俺はテンションを普段の数倍上げてドアを開いた。

ドアの向こうにはツリ目の中年男性とややツリ目の女性が立っている。

劉真「遅えぞクソペアレンツ、今何時だと思っただやがる」

そう。

何を隠そうこの二人が俺の両親である神無月麒麟と神無月白澤である。

因みに母さんは四十を超えているが外見のせいで二十代にみられる

変人だ。

白澤「なんでかなー？今凄く劉真ちゃんを掘らなきゃいけない気がしてきたんだけどオー？」

劉真「別に何も言っていないからそのバッグから取り出したシャベルと鍬を片付けてくれ！」

殴るじゃなくて掘るというあたりがこの母さんの怖さだ。

この人は若いころ地域じゃ有名な不良だったらしく、今でも時々その頃の怖さが垣間見えてしまうときがある。

因みに俺の一方通行モードはこのバカ母譲りだ。  
遺伝って怖いね

麒麟「はあ、君も落ち着きたまえ。……久しいな、劉真」

劉真「三か月ぐらいしか経ってねえだろ？親父は大袈裟なんだよ」

麒麟「私もいろいろと忙しくてね。特に母さんの機嫌取りとか、母さんの願い叶えたりだとか……」

劉真「親父……」

べ、別に泣いてなんかないんだからね！

これはただの心の汗なんだからねっ。

………うん、ツンデレは男が使うと速攻で警察呼ばれるくらい気持ち悪いな。気を付けよう。

話も済んだ俺たちは混沌で埋め尽くされているリビングへ向かった。  
持てよ、俺の胃と心臓……



朱雀「……………」  
美波「……………」  
玄武「……………」グスツ

リビングに行くと、いまだに笑顔のまま睨み合っている美波と朱雀

と、

あまりに二人が怖いのでついに涙目になってしまった兄貴の姿があった。

……流石に悪かったと思ってるよ？でも……逃げなかったらあの立場にいたのは俺だったかもしれないんだよ……

麒麟「……劉真、説明を頼んでもいいかな？」

劉真「俺の許嫁と実妹が俺を巡って冷戦中」

麒麟「……状況は痛いほどよく伝わった、だからその涙を止めてくれ」

だったらこの二人を止めてくれ。

麒麟「私ついては時間が無いので早く食事を始めたいのだが……しようがない。母さん」

白澤「りょーかいよー」

バカな！？

こんなしょうもない争いを止めるために母さんの一方通行モードを解禁するだ！？

劉真「正気が親父！？」

麒麟「劉真よ。社長というものはな、切り捨てなければならないものが多く存在するものなのだ……」

白澤「神無月白澤、いきまーす！」

そんな人生の教訓なんて学びたくもなかった！

そして母さんは凄惨な状況で突っ込んでいきますねえ！？

白澤「はあ、ふう。……よし。私がこの場にいるのに空気を悪くし

てるのはどこのどいつだア？」

美&朱『（ビクウ！）』

凄え。

俺と兄貴がいくら言っても止まらなかった二人が  
母さんの喝一つで正座まで追い込まれたと……？

白澤「まさかとは思うけどよオ、美波ちゃんと朱雀ちゃんが原因じゃねエよなア？」

美&朱『（ブンブンブンブン！）』

首が取れるんじゃないかね？と錯覚させるぐらい勢いよく首を横に振る美波と朱雀。

俺だったら首の関節痛めてKOだな。

白澤「なーんだ！それならよかったー！もし二人が空気を悪くしている根源だったら富士の樹海に死体が二つ増えるところだったよー！」

美&朱『（プルプルプルプル）』

その増える予定の死体がどう考えても美波と朱雀の死体だろうな  
と考えてしまった。

うええ…吐き気があ……

白澤「それじゃーご飯にしましょーか？」

玄武「そ、そうだな！早く家族会を始めよう！」

いろいろとあったが、俺たち神無月家＋１の夕食会が始まった。







用意していた料理も完食し、雑談タイムを迎えた俺たちの話の話題は俺の学校生活のことについてに転換した。

美波「リュウは学校で至って真面目ですよ？特に問題も起こさない

し」

大雅「そうだな。別に私が学園に呼び出されることもなかったしそこまで心配するようなことは起きてないんじゃないか？」

実は強化合宿の集団覗き騒ぎに一枚噛んでいただなんて口が裂けても言えない。

白澤「へー、そうなんだー。私はてっきり学年の男子皆でお風呂を覗くとかしてると思ってたんだけどなー」

麒麟「母さん、流石に今の高校生がそこまでするとは思えんのだが」

玄武「そうだな。昔と違って今の子供は真面目だしな」

朱雀「お兄ちゃんに限ってそんなことしてるわけないよねえ？」

劉&美&大「く、口が裂けても覗きしてましたなんて言えな

い！』

俺と美波と姉貴から滝のような量の汗が流れ始める。

守らなくては……この秘密だけは絶対にバレてはいけない……

玄武「そういえば劉真はテストでどんな点数を取ってるんだ？お前の事だから全部学年トップレベルだと思うけど」

劉真「え」

玄武「……………お前まさか」

やべえ、俺のテストの点数が白日の下に晒されそうだ。

劉真「べ、別に隠し事なんてしてねえぞ！？」

玄武「誰も隠し事してるのかとか聞いてないから」

墓穴を自ら掘ってしまった俺、神無月劉真17歳（最近、年齢が上がりましたー）

白澤「美波ちゃん？アナタの苦手な教科の点数を教えてください！」  
美波「ウチとリュウの苦手科目は古典でどちらも1桁ですっ！」

劉真「こりゃああああああああああああああああああああああああああああ！なんて俺の点数まで暴露しちゃってんの！？自分の点数だけ  
言えよ！俺を巻き込むな！」

美波「地獄旅行ウエルカム」

劉真「今世紀最悪の地獄へのなあ！」

まさか自分の許嫁によって未来への希望を絶たれることになるとは思ってもいなかった。

どないしよう……

麒麟「劉真よ、今の話は本当か？」

劉真「あのう……そのう………本当です」

麒麟「古典は帰国子女のお前には鬼門だからな……」

分かってくれますか親父！

ああ、地獄で天使を見つけた気分だぜ！

白澤「三桁」

劉真「へ？」

白澤「次の定期テストで二人とも古典の点数を三桁まで上げなさい」

この母親は一体何を言ってるんだ！？

美波「待つてくださいとお義母さん！ウチとリュウが古典でそんな高  
得点獲れるわけないじゃないですか！」

劉真「そうだそうだ！古典なんて今の時代まったく使用機会が無い

のによ！」

大雅「お前ら、全く自分のフォロワーになってないからな？」

生まれつき天才のパーフェクトシスターは黙ってる！

白澤「ごちゃごちゃ五月蠅エぞ！」

劉&美「ひい！？」

白澤「私が聞きたいのはYESかOKだ！さア、どっちですかア！？」

まさかの一択問題に頭の中の警鐘がガンガン鳴って鳴り止まない。  
はあ、遊びが厳禁になるのは覚悟の上か……

劉真「……YES」

美波「……リュウに同じ」

玄武「俺は人生で初めてそんな嫌そうな顔で肯定する人間を見たよ……」

ウルサイ。俺はまだ左遷されたくないんだよ。

白澤「それなら良いわ。でもね、もし三桁取れなかったら……」

……この家族みんなの前で〇〇〇してもらわよ？」

劉真「死より恐ろしい罰ゲーム！？」

美波「殺して！いつそウチたちを殺せばいいのよおおおおおおお  
おおおおおおお……」

絶対に負けられない理由が今ここにできてしまった。

自分の家族の前で【検閲削除】をするなんて真似は絶対にしたくない。

白澤「あら、もうこんな時間。じゃあ帰りましょうか貴方」

玄武「それなら俺たちも帰るとするか。行くぞ朱雀」

朱雀「お兄ちゃん、今度会ったときは私と【検閲削除】しようね？」

劉真「するか！」

麒麟「分かった。……………劉真に美波ちゃん、私は応援しているか

らね？絶対に悔いの残らない結果を残すのだぞ？」

劉真「了解」

美波「分かりました」

麒麟「それじゃあな」

キー……………バタンッ

大雅「もう我慢しなくてもいいぞ？」

劉&美波『ぜ、絶望じゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！』

俺と美波と絶叫はマンション中に響き渡った。

俺と家族と全員集合？（後書き）

「「姫路（瑞希）！古典を教えてください」  
い！」「

B Y 神無月劉真&島田美波

俺と女バレとFFF団(前書き)

「こんにちは！」

B Y 神無月劉真



## 俺と女バレとFFFD団

翔子「……雄二、携帯電話を見せてほしい」

雄二「はあ？一体どうしたんだ？」

翔子「……テレビで夫の浮気を知るにはメールを確認するべしって  
言ってた」

雄二「相変わらずテレビからの影響受けすぎだろって今すぐにスリ  
もビツクリのスピードで抜き取った俺の携帯電話を返せ！」

翔子「……雄二」

雄二「なんだ？良いから早くケータイを返せって」

翔子「……私よりも神無月と吉井とのメールの方が多い」

雄二「明久とのメールは遊びの予定ばかりかだろうが。それに劉真と  
は試召戦争についての作戦会議が主だ」

翔子「……それなら、ココに書いてある『例のビデオどうだった？』  
っていう神無月からのメールは何？」

雄二「……ぜ、前回の強化合宿の時のビデオだ。相手  
の実力は戦い方を知るためにな……」

翔子「……そう。それなら今回はデート一回で許してあげる」

雄二「それって許されてねえよな？っつーかケータイを返してくれ。  
別にやましいことなんてなかっただろ？」

翔子「……うん、分かっ  
」

雄二「うん？明久と劉真からだなってコラア！俺のズボンを返しや  
がれ！」

翔子「……浮気は許さない」

雄二「ズボン取られた挙句にアイアンクロー！？あいつ等は一体ど  
んなメールを送って来たんだあ！？」

『From：吉井明久』

今日、家に泊めてくれないかな？ちょっと帰りたくないんだ……』

『From：神無月劉真』

お前の家で寝泊まりしてもいいか？美波と一緒にだけど。ちょっとヤバいんだ……』

昨晚、母さんから精神的な死刑宣告を受けた俺と美波は教室に就いた途端に卓袱台に崩れ落ちた。

秀吉「い、一体何事じゃ!？」

康太「……………劉真と島田が同時に登校してきたことも気になる」

康太、その件についてはノーコメントだ。

バシたが最後、俺の学園生活は死を迎える。

劉真「昨日、母さんたちが家に帰ってきてな……」

康太「……………それ以上言わなくてもいい。事情は痛いほど分かった。今度のテストでいい点とれって言われたんだろっ？」

劉真「俺と美波が古典で三桁取らないと家族の前で【検閲削除】させられるらしい」

康太「……………【検閲削除】！？（ブシャアアアアアアアアアア！）」

俺の口から出た18禁ワードに大量の鼻血を拭いて倒れる康太。

まあ、倒れるとは思ってましたけど……

秀吉「古典で三桁？それは難しいことなのかな？」

美波「木下にはウチとリュウの辛さが分からないようね。いい？帰国子女にとって古典は鬼門なのよ！？」

秀吉「分かったのじゃ！その辛さは痛いほど伝わったのじゃ！だからそんな鬼気迫る表情で詰め寄ってくるでない！」

美波「分かればいいのよ。分かれば」

少しばかりスカツとしたのか、美波は卓袱台の上に一時間目で使う教材を置き始めた。

劉真「ん？そういえばアキと姫路の姿が見えないな？」

秀吉「明久はまだ登校しておらん。姫路は先ほどトイレに行ったよっじゃが……」

劉真「そうか。それにしても……………テストなんて滅べばいいのに」  
秀吉「全国の学生が常に持つておる悲願をそんな人類滅亡を迎えた人間のような顔で呟くでない。ハッキリ言ってもものすごく怖いからの？」

あはは、そつだよなー。と軽い感じで秀吉に返事を返したところで  
姫路が教室に入ってきた。

うん。普段のように揺れてるな。

美波「リュウ？今、瑞希の胸見てニヤついてなかった？」

劉真「心の底からゴメンナサイ」

美波の修羅フェイスを目の当たりにした瞬間に人類の神秘であるD  
O G E Z Aを決める。

……この学校に来てからこれで何回目かなあ？俺の人生大丈夫か？

美波「まったく……リュウはいつもいつも巨乳の人を見かけると立  
ち止まっては声をかけ立ち止まっては声をかけえ……」

劉真「ほんつつつつつとうに悪かった！だから怒りを鎮めてくれ！」

美波「天誅！」

劉真「結局殴られるのかグブリア！」

美波に殴られて壁に激突してトドメとばかりに亮率いるFFF団の  
メンバーからオーバーヘッドキックを脳天に決められて俺は地面に  
崩れ落ちた。

劉真「な……んで……？」

秀吉「うーむ、今回はかりはお主が十割方悪いからのう」

瑞希「なんで私がトイレから帰って来た途端に地獄絵図のような光  
景が拡がってるんですか……」

劉真「秀吉、諸悪の根源はやっぱり姫路だと思う」

瑞希「ええ！？どうして突然！？」

劉真「その巨大なメロンが駄目なんだよ。アキとか康太とかFFF  
団とかいう野獣に狙われることになるし、とある特定の誰かが常に  
悲しそうな眼をするしいいいいいいいいいい！！」

美波「ダレガカナシムツテ？」

劉真「別に美波が悲しむだとか言ってるないだろ！？」

美波「ほほう、この状況に追い込まれても白状しないつもりね？それじゃあ……アンタが一生歩けない体にしてあげる」

劉真「どの道を通っても地獄しか待ってるないじゃないか！？」

美波「問答無用！浮気者には死あるのみよおおおおおおおおお  
おおお！……！」

劉真「霧島の影響受けすぎだ畜生おおおおおおおおおお！  
！」

美波「あ！待ちなさい！」

待てと言われて待つ奴がどこにいる。

さあて、屋上にでも逃げましょつかね……

俺は自分の全力ダッシュで屋上に向かった。

屋上にたどり着く寸前で女子バレー部の連中に身柄を拘束された。

劉真「卑怯だぞ美波！運動部に協力を煽るなんて！」

美波「うっさいポケエ！アンタが逃げるからでしょ！？」

劉真「リトルバ○ターの鈴のキャラになっちゃってますよ！？落ち着いて！」

頭に血が上っている美波は俺の話をまったく聞いてくれない。

ヤバイ……そろそろ一時間目が始まるっていうのに……

部員「あれって島田先輩の彼氏さんですか？」

部員「美波い、一体何があったのよお？」

美波「このバカが瑞希の胸で興奮してたのよ！」

劉真「全員動くなあああああああああ！！！」

『『『『つ！？』『』』』』

劉真「よしよしいい子だ。早くその手に持っているケータイを床に置いて頭の後ろで手を組むんだ」

『『『『くっ……』『』』』』

悔しそうに顔を歪めながらケータイを床に置いていく女子バレー部一同。

つつーか人一人捕まえるのに部活総出で協力しなくてもいいだろうに。

劉真「教室に戻ろう美波。授業が始まっちゃうからな。それとこのケータイは職員室に届けさせてもらう」

部員「そんなあ!?!」

劉真「やかましい!校内でのケータイの使用は禁止されてるはずだ!というわけで没収」

部員「アナタだって校則違反ぐらいするでしょ!?!鳥田先輩、何か言っただけでください!」

美波「どうしてウチとリュウの間には子供がまだできないの!?!」

劉真「うわあ!?!コラッ!ケータイ返せ!盗られたからって奪い返しに来るなあ!」

どうしよう。混乱している美波の言葉で俺の学園生活が音を立てて崩れ落ちて行っている気がする。

劉真「落ち着け美波!今のオマエは自分の株を自分で下げている状態だ!も、戻るぞ教室に!」

パシャパシャパシャ!

後ろから大量のフラッシュを浴びながらも俺は美波を抱え上げて教室に戻っていった。

……俺、テスト大丈夫かなあ?

亮『これより異端審問会を始める』

教室に戻ってきた俺を出迎えたのは後頭部への激しい衝撃だった。そして目が覚めたら俺はミノムシ状態で畳の上に転がされていた。

劉真「今日はなんて厄日だ!？」

亮『やかましい!……コホンツ。誰かこの異端者の罪状を発表せよ』  
幸平『了解です』

あの声は幸平だな?後で覚えてるよ……地獄を見せてやる。

幸平『被告人神無月劉真<以下、クソとする>についての罪状発表です』

劉真「おいコラア!??どう考えても私情含みまくった呼び名じゃねえか!」

幸平『クソは先ほど姫路<以下、巨乳とする>の胸を見て欲情して





浩一が放った袋から出てきたのはボロボロの優斗だった。

俺と女バレとFFF団(後書き)

「テスト勉強会？」

B y 島田美波

俺と異端と審問会（前書き）

「「「愛を捨て、哀に生きる者！」「」

B Y 異端審問会FFF団

## 俺と異端と審問会

「優斗!？」

浩二が放ったぼろぼろの麻袋から出てきたのは俺の親友でありAクラスの優等生である唐津優斗。

顔には大量の痣が浮かび制服は埃だらけ。

そして大量の涙を流してる。

な、なんて酷いことを……

「亮!! 優斗は一体何をしたんだ!? ここまでボロボロにされてるやつ見るの久しぶりだぞ!？」

『木下優子の手作り弁当を食していたのだ』

「俺の縄を解け。このイカレポンチ異端者を補習室<sup>エデン</sup>へ送る!! 試験<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>!!」

「承認します」

「!？」

教室の前を偶然通りかかった数学<sup>モンスター</sup>教師船越が召喚フィールドを展開する。

おそらくだがリア充を満喫している優斗が許せなかったのだろう。俺だって許せない。

「て、テメエ劉真!! いきなり何してやがる!？」 チツ 試験<sup>サモン</sup>召喚!  
「!」

|       |       |     |      |       |
|-------|-------|-----|------|-------|
| 『Fクラス | 神無月劉真 | V S | Aクラス | 唐津優斗  |
| 数学    | 800点  | V S | 数学   | 339点』 |

『『『特別処刑人神無月劉真、異端者に死の鉄槌を！！！！』』』  
「任せろ！！」<sup>チェンジ</sup>「変身」！！！」

俺がキーワードを宣言すると召喚獣が真っ黒な霧に包まれる。

これは漆黒の腕輪の能力で召喚獣を形状を変身させることができる。  
さて……今回はどんなキャラにしようかなー……………

「これに決めた！！」

パアアアンツ！！

俺の頭の中で変身対象が創造された瞬間に霧が消し飛んで召喚獣が姿を現す。

白いフード付きジャンパーにこれまた白いジーンズ。  
髪の毛も真っ白で肌も白い。

しかしその白い顔に浮かぶウサギのように真っ赤な瞳が凄まじい存在感を醸し出している。

そう。このキャラこそ

「<sup>アクセラレータ</sup>一方通行降臨！！そして俺も一方モード！！」

一方モード。

それは俺がブチ切れたときに発動する人格だ。

最近になって自由にこの人格を発動できるようになった。

そしてこのモードの時に一方通行に変身した召喚獣を操作すると攻撃力防御力操作性スピードの四つが向上するんだ。

理由は不明。おそらく召喚システムの気まぐれだろう。

しかしこのきまぐれこそが俺に力を与えてくれる。

「チツ！それならこっちも腕輪で応戦だ！！」<sup>アップ</sup>強化！！指定はスピード！！」

青銅の腕輪で召喚獣のスピードを強化した優斗。  
青銅の腕輪の能力を見るのは初めてだ。  
どれほどのチカラなのか試させてもらっぜ！！

「そらア！！」

『ベクトル操作』で地面を蹴って優斗の召喚獣に突っ込む。  
狙いは頭。

アレに攻撃が当たりさえすれば勝利は確定だ！！

「当たるかよ！！」

「なっ……！！？ 速エ！？」

俺の攻撃を軽いステップで回避した優斗。

クソッ！あんな重装備であるスピード出せんのかよ！！

しかもアイツの武器はビーム砲。

こっちは素手。

距離を空けられたら負けだ！

「逃がすかア！！」

ビュン！ブオン！

腕を思い切り振りかぶって頭を狙うが速度を上げた優斗の召喚獣は軽いステップで右に左に攻撃を避けていく。

このままじゃマズいな……チツ、しょうがねえ。変身対象を変更だ。

「一方モード解除!!!アーンド『変身』!!!」

キイーン!!!

「チツ!」

俺の召喚獣の周りに漂っている黒い霧に優斗の攻撃が弾かれた。この霧は浮かんでいる間相手の攻撃を絶対に無効化する。ヒーローの変身は邪魔しちゃ駄目なのだ。

「ストライクフリーダムガンダムの装甲纏った俺、降臨!!!」

最近になってようやく自分の召喚獣を基盤とした状態でストライクフリーダムに変身させることができるようになったんだ。しかし……やっぱり見た目はSDガンダムだなあ……

「いつけええええええええ!!!スーパードラゴン!!!」

「『強化』!!!指定は命中率!!!連射連射連射ああああああ!!!」

テュイン!テュイン!テュイン!

俺のビームと優斗のビームが交錯して互いの攻撃を消していく。しかしすべては捌き切れずに俺と優斗の召喚獣は少しずつダメージを負う。

「強いな優斗!!!」

「一応Aクラス所属なんだ!!!こんなことでへばるような唐津優斗様じゃねえよ!!!オレを嘗めんな!!!」



『Fクラス            神無月劉真            VS            Aクラス            唐津優斗  
数学                    600点                    VS                    数学                    120点』

善戦している優斗だが元々の点数差は覆せないよう<sup>で</sup>着々と点数が減っていた。

さーて、そろそろ補習室<sup>エディン</sup>へと送ってやるとしますかねえ!!

「『停止』!!!」

俺の召喚獣の右手についている腕輪が輝きだす。

そして優斗の召喚獣が動きを止める。いや、止められた。

これが俺の召喚獣の腕輪の能力。

相手の召喚獣の動きを一定時間止めるとい<sup>う</sup>もの。

しかしその一定時間は俺にとって永遠にも等しい。

「なっ……!!しまった!!」

「異端者死滅異端者滅殺!!俺たちは異端審問会!!そう!俺たち

は

『『『            愛を捨て、哀に生きる者!!』』』

「相変わらず意味不明な目標抱えてますねえ!?!」

「俺たちの無念をその胸に抱いて補習室<sup>エディン</sup>へと墮ちろおおおおお

おお!!!!」

「天国へ送りたいのか地獄へ送りたいのかツッコミどころが満載のセリフを吐かれたあああああああ!!?!?!」

チューン!!!

俺の召喚獣が放った一陣のビームが優斗の召喚獣の脳天をぶち抜いた。

『Fクラス 神無月劉真 VS Aクラス 唐津優斗  
数学 190点 VS 数学 0点』

『『『ツシャアアアアアアア！！！！！』』』

異端者の負けを確認した亮たちは天に向かって拳を突き上げて歓喜した。

これが異端審問会の強さ。  
誰であるうと裏切者は許さない。

「クソッ！補習室くじ送りになんかされてたまるか！！早くクラスに戻りさえすれ  
」

「戦死者は補習！！！」  
「つて早あ！？ 来るの早あ！！ いやだ！！補習室は嫌だああああああああああああああああああああ……………」

ガラッ  
パタン

「……………」

鉄人に抱え上げられて連行された優斗に流石に罪悪感を覚える俺たち。

流石に補習室はやりすぎたかな？  
いやでもそれ以外の選択肢は処刑しかねえし……………」

「……………亮、結論」

「俺たちに一切の非無し！！」

「……………ですよね！！」

俺たちは間違っていない。  
その事実だけ確認できたことが今回の収穫だ。  
さらば親友。永久にな……

「ねえ雄二、今日雄二の家で勉強教えてくれないかな？」  
「……………っ!?」「……………」

アキの口からこぼれた言葉が俺たちFクラス全員の頭に突き刺さった。  
アキが勉強!? しかも雄二の家で!? どうなってるんだ!?

「お、おい今の聞いたかよ……………」  
「あ、ああ……………まさかあの二人本当に……………」  
「『『愛し合っていたなんてな……………』』」

その発言はNGだ。  
俺の真後ろで身支度をしていたハズの姫路から死にたくなるような程の殺気が漏れちまつてるから。

「……………神無月君、ちょっといいですか?」

悪魔の迎えが俺にも来ました。

だ、誰か天の助けを！！

俺は味方になってくれそうな人を探すために教室中に視線を張り巡らせる。

「(サツ)」

「……………(サツ)」

康太と美波が目を目を逸らしやがった。

畜生。これで生還できる確率が大幅ダウンだ。

そつだ秀吉！アイツならこのピンチをどうにかしてくれるハズ！！

「(健闘を祈るのじゃ)」

コイツも俺を見捨てやがったあああああああああああああああ

あ！！！！！！

クソツ！何でこのクラスの連中はこんなに薄情なんだ！？

友達一人見捨てるのに何の躊躇いも無いなんて！！

「あ、あの姫路サン？ い、一体何の用で……………？」

「明久君は坂本君と浮気してるんデスカ……………？」

め、目に光が灯ってねええええええええええええええええええ！！！！

闇姫路降臨かよ死ぬだろこれマジで！！

ダメだ無理だ絶望だ！！俺にはこっから逃げさすスキルがねえ！！

「そ、そんなわけねえだろ？ アキをもつと信じるよ……………」

「でもみなさんが明久君と坂本君が愛し合ってイルツテ……………」

「正気を保て姫路！！雄二とアキが愛し合っている何てことは絶対

に起きない！！まず霧島が黙ってねえだろ！！」

あのヤンデレ学年主席は雄二にベタ惚れだからなあ……  
浮気なんて絶対に許さねえだろ。

「そうですねっ！ありがとうございます神無月君！これで安心しました！！」

「そ、そうか……」

とりあえず解放された。

兄貴………朱雀に振り回されているアンタの気持ちが今少しだけわかった気がするよ………大変なんだな。

「あ、明久君！勉強なら私が教えてあげます！だから私の家で是非！！」

「ええええ！？ い、いや悪いよ！結構夜遅くまで予定してるから！！」

「構いません！なんてたつて私たちは恋人同士なんですから！」

「はいはいその異端審問会は落ち着こうなー」

『『『ぐく………』』』

メリケンサックを装着する振りをしてFFF団を睨みつける。

その行動を見て俺の恐ろしさを知っているFFF団は引き下がった。相変わらず執念深い奴らだ。

え？ さっきまで俺も混ざってただろうって？ 気のせいだ気のせい。

「でもやっぱり瑞希は女の子なんだし少しは気にした方が良く  
と思

「美波ちゃんだって神無月君と毎日毎日お楽しみしてるんですよ！？」

「はいはい！！！！何も聞こえませんでしたねー！？」

「……………かなり無理があると思う」

姫路の暴露発言万歳。

後で覚えてるよ姫路。

「というか明久君の家で勉強会しましょう！それがいいですそうに決まっていますそうしましょう！！」

「押し通せると思うてるの！？ だから僕の家は今日はダメなんだって！！えっと……………今日は水道管の工事があるから！！」

「嘘を吐くんじゃない明久。今日は本当なら俺と格ゲーする予定だっただろうが」

アキの浅はかな嘘が最強の天才児に破られた。

ってというか誰がどう聞いても言い訳にしか聞こえん。

「アキ、何か隠してるのか？」

「ギクツ。そ、そんなわけないじゃないか」

「わざわざ言葉に出さんでいいだろうに。何か隠し事してるってバレバレだぞ？」

「……………正直に白状した方が身の為」

「ワシも隠し事は駄目じゃと思うがのう」

「いい加減言っちゃいなさいよアキ」

「明久君！！」

Fクラスの仲良しメンバー全員に詰め寄られた拳句に恋人である姫路に涙目で迫られてしまったアキははあああゝと深いため息をつ

いて正直に話し出した。

「姉さんが帰って来たんだよ。姉さんが」

「ん？ アキって姉貴がいたのか？」

「うん。最近まで海外にいたんだけど……僕の成績がニートンもびっくりなぐらい急降下しちゃってるから監視しに帰って来たんだ」

「……………自業自得」

「バカが遂に不幸を招いたってわけか」

康太に雄二。それぐらいにしといてやらないとアキが地面に潜って出てこなくなっちゃうから。

「そうか。じゃあ今日はアキの家で勉強会ってことで。OK？」

「……………異議なし」

よし。じゃあ決まったところで早速アキの家に行くとしますか。夕飯はまあ大丈夫だろ。姉貴が勝手に一人で喰うだろうし。

「って待って！！僕の言い分を聞かずになんでそう勝手に決めちゃうの！？」

「オマエがバカだから」

「反論できねえよ畜生！！」

だったら成績上げろっての。

さーて、アキの姉貴に会いに行くとしますかー！

この時の俺はアキの姉貴が俺の超身近な人の関係者だとは思っても

い  
な  
か  
っ  
た  
ん  
だ  
…  
…



俺と異端と審問会（後書き）

「……………えっと……………今何て？」

B Y 神無月劉真

俺とアキの家と聞じゃない鍋(前書き)

「料理ってなんなんだろうね……」

B y 吉井明久

## 俺とアキの家と闇じゃない鍋

「さて……扉を開いてもらおうか？ アキ」

学校が終わってFクラスのいつものメンバー揃いに揃ってアキの家に向かった。

アキは学校近くのマンションに住んでいるらしく、アキの家に向かっているときに商店街と住宅街を通過した。

料理が好きで姫路とよくデートに行くアキにとっては最高の立地条件なのかもしれないなあ。

と、こんなことを先ほどまで思っていたわけだが、アキの家の前にたどり着いた瞬間から俺の思考は一つのこと集中することになっていった。

自分の姉を見せたくないアキが鍵をバッグにしまいこんでしまった家に入れないんだ。

かれこれ十分ぐらいここで開ける嫌だの押し問答を繰り返してる。

そろそろメンドクなくなってきたんですけど……

「嫌だね。僕はここで劉真たちを何としても食い止める。それが僕の役目だから!!」

「どっかのファンタジー系学園ものだったら最高にカッコいいセリフなんだが、今のオマエはダダこねる赤ん坊にしか見えねえんだよ」

「劉真、それを言ったら赤ん坊が可哀相だ。せめて捨てられそうになって悲しんでいるクズと言ってやらなきゃな」

「雄二！？ それは単に僕を侮辱してるだけだよな!？」

「当たり前だろう。俺はお前が苦しむ姿を見るのが大好きなんだからな」

「悪魔か!!」

アキが涙目で雄二にツッコミをいれているがそれはどう考えても逆効果だと思ふ。アキの悲惨な光景を見るのが大好きな雄二はいかにも『満足っ!』といった表情を顔に浮かべている。コイツだけは敵に回したら駄目だ。そう、俺の本能が告げている気がした。

「ねえアキ。いいから鍵を開けなさいよ」

「だからいやだつて言ってるでしょ!？ 僕はみんなが帰ってくるとかな〜り嬉しいんだつて!！」

「じゃあ尚更帰らない」

「雄二に劉真!！お前らには人間としての情というものが無いのか!？」

「なあ雄二。オマエはそんなもの持つてるか？」

「いや、聞いたこともないな」

「というワケだけど何か？」

「笑顔を浮かべた状態で僕を弄るのは止めてよ!！そしてムツツリ!！と秀吉もそこでニヤニヤしないっ!！」

「すまんの明久。しかし劉真たちに弄られとるお主を見ると笑顔が我慢できんのじゃ」

「秀吉までそつち側!？ くそつ! 僕の味方はこの世に存在しないのか!？」

「……………いいから鍵を開ける。さもなくば……………お前の女装写真を全世界にばら撒くぞ」

「六名様ごあんない!！」

文月学園が誇る(?)最強の情報屋を目の前にしてあっさり敗北してしまった文月学園最強のバカ。

やっぱり自分の女装写真をばら撒かれるのは勘弁だよな。俺だって嫌だ。っていうか康太の奴、男の女装写真も扱ってるのか……………需要はあるのかな?あるんだろうね。



オイ美波、その言い方は流石に失礼だろう。さっきの言葉からしてアキの姉貴だと思っただけれど。

「アナタ方はアキくんの御学友か何かですか？」

「はい。俺たちはアキのクラスメイトです。お美しいと噂されている貴女様に会わせてもらえると聞いてやってきた所存にございます」

「それって日本語合ってるのか？」

「帰国子女が無駄に敬語使おうとするからそうなるのよ……」

ほっとけそんなの。

「そうだったのですか。では自己紹介をさせていただきますね。私は吉井玲よしあき。残念ながらこの愚弟の姉となる立場の人間です」

「残念って何さ!!」

あ。アキが目覚めた。案外軽い傷だったんかな？ 結構いい音したと思っただけど。

「とりあえずあがってください。御馳走しますよ」

「「「「「はい。ありがとうございます」「」「」「」

玲さんに促されて俺たちFクラスメンバーはアキの家へと足を踏み入れた。それが地獄への一方通行だとは思ってもせずに……

「では、料理を作ってきますのでここで待っていてください」

玲さんがエプロンを着用してキッチンへと消えていった。

ん？ 何故かアキが小刻みに揺れているけど何かあったんか？

「どしたのアキ？」

「姉さんが料理だつて……？ クソツ！今日はなんて厄日なんだ！」

「まあまあ落ち着けて。玲さんが一体どんな料理を作るのかは知らねえけど毒殺料理ひめじみずき人が作るよりは百倍マシだと思っぞぞ？」

「まあ……瑞希は僕が料理を教えてもその調理法を根本から覆すような料理を作っちゃうからね」

「ほう、それは気になるな。明久、どんな料理ができたんだ？」

「カレーを作っていたはずなのに鍋が中央から溶けてなくなつたシチュー」

「それは料理と呼べるのか！？」

「………なんだか以前よりもレベルが上がっている気がする」  
「ポイズンクッキングというものは成長するのなの？」

そんなものが成長したらアキは誰よりも先にあの世行きた。そう考えれば俺は幸運かもしれねえ。幸い美波は料理が上手だからアキたちのような目に遭うこともない。よかつた……神様ありがとう。

「そついえば姫路の姿が見当たらんのだじゃが……」

「「「「「！？」」「」」」」

顔を青ざめた秀吉がふとそんなことを言い出した。姫路がいない！  
？ それは大惨事の予感がする！！

「な、なあ美波……姫路はどこに行っただ？」

「ん？ 瑞希なら玲さんを手伝いに行っただわよ？」

隣で美波が『相変わらずエライわよねー』とか何とか言っているが俺の耳には入ってこなかった。姫路が玲さんと料理！？ な、なんてコンビを組んでやがる！！

「全力で阻止して来いアキ！！玲さんの実力は知らねえけど姫路がそこに加わるともう取り返しがつかん！！」

「う、うん！！分かったよ！！」

俺たちの必死な瞳に気圧されながらもキッチンへと急ぐアキ。俺たちの運命は彼に託されていると言っても過言ではないだろう。頑張れアキ！！オマエならできる！！

『姉さんに瑞希！！料理なら僕が作るからおとなしくリビングで円満な会話を楽しんでよくぺっ！！』

『キッチンは女の戦場なんですよアキ君。そんなところに入ってきたら駄目です』

『そうですよ明久君！！これはいわば花嫁修業！！あ、このスープ味見しますか？』

「康太！！アキをこっちに取り返して来い！！！！」

「……………了解！！」

康太がその俊敏さを生かしてなんとかあの毒殺料理人たちからアキを取り返すことに成功。アキは顔を真っ青に染めて『た、助かった



よ……』と涙を流してる。

「くそっ！まさか明久の家に来るっただけで地獄の試練があるなんてな……」

「地獄程度で済めばよいのじゃが……」

「……………下手すれば転生すらできないかも」

「俺たちには来世の希望もないってのかよ……！」

「さようなら父さん。僕は貴方の事を絶対に忘れないよ……」

それぞれ絶望して祈願して号泣して　となんとかこの気持ちを紛らわそうとする俺たち。

そして……その時はやって来た。

「どうぞぞ！」

「人数が多くてちょうど食材が魚介類ばかりでしたので今日は鍋にしてみました」

「……………へ、へえー、鍋ですか……………」

緊急のアイコンタクト会議勃発。

「（オマエからいけ雄二。Fクラス代表としてな……）」

「（そういうテメエがいけよ……）」

「（……………いやここはやっぱり明久が行くべき）」

「（いやいやそこはムツツリー二が……………）」

何て醜い争いなのだろうか。しかしこれは自分の命を懸けた戦い。絶対に負けるわけにはいかねえ……

「（ワシが行こう）」

「……………（秀吉……）」

「ワシはジャガイモの芽ぐらいなら食べても平気な胃袋をしておるから少しは我慢できるはずじゃ」

「ま、まあ俺の姉貴の料理で耐性はあるとは思っけど……」

「(木下秀吉、いつくのじゃあー!!)」

「いただくのじゃー!」

そういつてお玉をぐわしつと掴んで秀吉が鍋の中に突っ込んだ。

そしてゆっくりとかき混ぜて行つて

皿にその中身を

移した。

「……(な、なんか黒いんですけどー!?)」「」「」「」

「(ちよつとリュウ!あれ何よ!何であんなに黒いのよ!?)」

「(きつとあれは俺たちの目の錯覚だ!気にすることじゃねえ!

!ほら、ぐいつと行けよ美波)」

「(行くわけないでしょ!?) どう考えてもあれは生物兵器よ!?

食材のなせる最悪の料理よ!?)」

「ぐう……い、いただきます……」

秀吉が震える手でハシを皿に突っ込んだ。その光景が何故か俺たちにはスローモーションに見えてくる。そして皿からハシを引き抜いて掴んだ魚の切り身を口へと運んでいく……そしてついに魚が口に入つて

「っ!?(がしゃーん!!)」

秀吉がその場に倒れこんだ。

「……脈が無い」

「「「「「とりあえず救急車あ

！」「」「」

アキの家での一夜は凄いいことになりそうだ。

俺とアキの家と聞じゃない鍋（後書き）

「私は海外でとある一人の王子様に出会ったのです」

B y 吉井玲

俺と玲さんと意外な事実（前書き）

「あの人嫌い……」

B y 神無月劉真

## 俺と玲さんと意外な事実

先ほど絶体絶命のピンチに追い詰められていた秀吉は決死の救命活動でこの世に帰ってきた。

その時に『川が見えるのじゃ……』とか『我が人生に一片の悔いなし……』とか秀吉が言い始めたのは流石にヤバイと全力で思ったけどな。

「大丈夫か秀吉？」

「もう平気じゃ。しかし何故かこう体が一気にだるくなったのじゃが……」

それはさっきの料理と幽体離脱のダブルパンチを食らったからに違いない。

「しかし……どうして木下君は突然気を失ったのですか？特に具合も悪くなかったように見えたのですが……」

「玲さんと姫路の料理に感激して昇天寸前までいってしまっただけつすよ！！なあ雄二！？」

「お、おう！！秀吉は自分の感情をすぐに表に出してしまう癖があるからこんなオーバーリアクションなんですよ！！」

「そうですか。それなら良かったです」

憐れ秀吉。誰よりも男らしい選択をしたにも関わらず変な癖があると思われてしまっている。っていうか本人まだ顔が真っ青じゃねえか。いいのか？ 病院行かなくて。

「そ、そうだ！！とりあえず玲さんの海外での話を聞かせてもらえ

「ませんか？ 俺って海外に行ったことないから新鮮なんですよ」

「ナイスだ雄二！！話題を変えれば料理の事に誰も気が行かなくなる！！そうすれば姫路と玲さんが受けるダメージもなくなるってものだ！！さっすが元神童！！」

「海外の話ですか…… そんなに面白い話じゃないと思いますが……」  
「いやいやいやいや俺すつごく聞きたいなあ！！アメリカなんて行ったことないから！！なあ美波？」

「そうね。確かにウチもアメリカには行ったことないから話を聞きたいわ」

「…………… 右に同じ」

「ぼ、僕も聞きたいなあ！！」

「私にも是非！！」

「しょうがないですね……………では」

俺たちの必死の訴えが届いたのかついに玲さんが海外での出来事を話し出した。っていうかこのノリ、なんだか一時代前の紙芝居屋とそれに集まる子供のノリみたいじゃね？ いやドイツにいたから知らねえけど。

「つい二か月前、私はとある王子様に出会いました」

「「唐突だなオイ！！」」

アメリカってそんなうようよ王子様がいるの！？ 大丈夫か自由国家！！

「うっ、嫌な予感が……………」

「どうしたんですか明久君？」

「い、いや別に……………」

「その方の髪はとても美しい碧色で瞳は透き通ったライトグリーンでした」

「へえ、変わった外見ですね」

「工藤も同じような外見してるよな」

「……………（コクコク）」

っていうか文月学園の人たちって変わった髪の色多いよな。姫路はピンクだし工藤は緑だし清水はオレンジだし……………染めてんのか？

「すらつとした体格をしていますがかつしりとした印象もある方でした……………」

「なんかスポーツでもやってるんだろっな」

「そ、そうかもねー」

ん？ 何故かアキの顔が真っ青だ。どうした持病か？

「聞けば日本人ではありませんか。私はすぐにその方と仲良くなりました」

「意外と積極的なのねー」

「最初はお互いにガチガチだったのですが話していくにつれて距離がだんだんと縮まっていきました」

「小説みたいだな。しかも超ベタな」

「それを言ったらお終いだろっが劉真……………」

「しかし……………出会いには別れというものがつきものだったのです。そう。ついに私が日本へと帰る日がやってきてしまったのです」

「……………（うるうるうるうる）」

「おいアキ。オマエの彼女が泣いてんぞ」

「そっちなぞ」

「そのとき！彼は私に約束してくれました。『俺も日本へと帰るか』らその時にまた出会えたらいいな』と」



「「「それって約束!?!?!」」」

世間ではそれを約束とは呼ばない。

「と これが私の話です。ハーバード大学主席、吉井玲」

「.....は?」

思わずマヌケな声が漏れた。い.....今この人なんて言った? いや待  
て。聞き間違いかもしれない。いやでも.....アキの姉だぞ? そん  
な人が頭が良いハズ.....いや待てまさか.....

「アキ、オマエ.....出洩らしか.....」

「その言葉の意味を聞かせてもらえないかな?」

「「えええつ!? ハーバード!?!」」

「.....衝撃の事実」

「いやはやこれは凄いのう.....」

「恐るべし吉井家の血。まさか姉弟でここまで差があるとはな.....」

「みんな酷いつ!?!」

だってしょうがねえだろうアメリカで一番有名なあのハーバード大  
学を首席で卒業だぞ? どの完璧人間だ。って俺の姉貴もハーバ  
ードの首席だったな.....死ね神様。

「えつと.....それでその例の男の人ってどんな人なんですか?」

「それは俺も気になるな」

「緑の髪のイケメンってそんなにいないだろうし。出会ったら挨拶  
の一つぐらいしいた方が良くもされないからな」

「.....劉真は一度と言わずに十六年間余り出会ってるよ.....

.....

「ん? 何か言ったかアキ?」

「いや別に」

今日のアキはなんだか変だ。

一喜一憂が激しい気がする。

いやいつもおかしいけど今日は異常だ。

病院に連れて行った方が良くもしれない。

「いいですよ。その方はこの国で有名らしいですし……」

「有名人!? それって凄く運命的な出会いだと思います!」

「そうね!! あゝ憧れるう!!」

「今の島田の発言で劉真が血の涙を流しておるのじゃが」

「……………放っておいた方が良い」

黙ってる

「で、どんな人なんですか?」

「神無月玄武さんと言ったら分かるでしょうか? あのプロ野球選

手の

「……………か、神無月玄武う!?」

「はあ……………ついにバレた……」

「神無月玄武? はははっ、奇遇ですね。俺の兄貴も同じ名前ええ

ええええええええええ!? あ、兄貴のことかあ!?」

「……………遅っ!?!」

「アンタ気づくの遅すぎじゃない!?」

「だって自分の兄貴とアキの姉貴が運命的な出会いをするって信じ

られるか!? 俺は信じられないって言うか信じたくない!! 玲さ

ん!! あのバカのどこがいいんで ひい!?」

俺は言葉を途中で切らざるを得なかった。なぜなら……………玲さんが包丁を俺の首元に押し付けていたからだ。な、なんだ今の速度!! ま

「まったく見えなかつたんですけどっ!？」

「玄武さんの悪口を言っつけない口はこれですか？」

「ストツプ姉さん!!劉真だつて悪気があつたワケじゃ」

「ああ？」

「全部コイツが悪いんです」

「裏切りおつた!？」

まさかのキャラが急変してしまつた玲さんを目の前にしてすごす引き下がるアキ。いやそこで負けないでツ!!俺を助けてヘルプ・ミー!!!

「玄武さんは私の全てです。それをアナタはバカにしたのですよ？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「劉真が土下座してる!？」

俺の土下座はそんなに貴重価値のあるものなのか。っていうか土下座程度で許されんのこれ?まったく怒りが静まってないように見えるんですけど。

「リピート・アフター・ミー。『私は二度と玄武さんをバカにしません』」

「わ、私は……に、にど……と……げ、げ、げー……」

「どんだけ嫌なんだよ」

「劉真は絶対に玄武さんだけには負けたくないって言ってたからね

……」

「そつだとしても葛藤しすぎでしょう……」

「頑張りリュウ」

クソッ!! どうして俺があのかバカ兄貴を弄ってはいけないという約束をさせられてるんだ!! 兄貴を弄ることこそ俺の生きがい!! いや、人生そのものと言っただろ!! なのにそれを奪うかのごときこの所業!! 許されて良いものか!!

「早く言わないと一生光を拝めなくてあげます」

「私は二度と玄武さんをバカにしません!!」

「」「」「」「」「」「」「」「」

負けましたけど何か!? 流石の俺でも失明だけは嫌だ!! しかもこの人マジでやりそうなんだよ!!

「そうですか(ニコッ)それならいいんです」

「ハイ。モウシワケゴザイマセンデシタ」

吉井玲。俺の中で今のところ母さんとトップ争いしてます。怖い人ランキングで。

「じゃ、じゃあ俺はそろそろ帰るわ……んじゃまた明日ー……」

「あ、ウチも行くー!じゃあねー!」

「(俺たちを置いていった!?)(「」「」

「(確実に逃げたのう)」

「美波ちゃんまた明日ー!」

「劉真大丈夫かなあ……?」

「あー……マジで怖かった……」

「いやあれは十割方アンタが悪いから」

アキの家から俺の家までの帰り道、俺は肩を落として美波と並んで歩いていた。

いやーなんだろうねあの人。あの気迫は人間じゃねーよ。

「っていつか今思い出したんだけど俺たちって勉強会した方がよくないか？」

今度の期末で古典を三桁とらないと悲劇の【ドキッ 家族の目の前で『検閲削除』】をする羽目になってしまふ。それだけは全身全霊をかけて避けなければ……勉強嫌いだけど。

「そうね。このままじゃウチたちが社会的な死を迎えちゃうもの」

「でもどうする？ 俺的にはアキの家はもうパスだ。二度とあの人に会いたくない……」

「でももし玲さんと玄武さんが結婚したら親戚になるわよ？」

「そうなったら俺は海外に逃げる。んで連絡先変えて逃げ延びてみる」

「どこまで苦手なのよアンタ……」

もうすでにあの人は俺の中で苦手といレベルを超えて脅威というところまできている。まさか母さんと姉貴以外で俺に恐怖というものを覚えさせる人間がいたとはな……吉井玲恐るべし。

「そついえばアキも勉強会がしたいって言ってたわよ？」

「おそらくあの姉貴関連だろうな。成績が悪いから監視しに来まし

たーって言ったし」

「アイツもアイツで苦労してるのね……」

まあとりあえずは自分たちの古典を上げることが先決だ。このまま何もしないでいたらさらに悪い点数を取りそうだし。

「うーん……誰か頭のいいやついねえかなあ……ん？ 待てよ。頭のいいやつ……あ。」

「どう？ 見つかった？」

「ああ。メチャクチャ身近に一人いた」

「へえ、誰？」

俺は一人の赤髪逆立て男を頭に思い浮かべながら美波にこう言った。

「Fクラス代表の坂本雄二。アイツなら俺たちに勉強を教えてくださいるはずだ。恥を忍んで頼んでみようぜ？ アイツが優秀なのは確かなんだし」

「そうね。じゃあ明日学校で頼んでみましょうか。というわけで……ハイッ！」

美波が突然俺の左手を右手で握った。ってココはまだ商店街だぞ！？

「あ、あのー……美波さん？ まだ人がたくさんいるんですけど……」

「何よ。嫌なの？」

「大歓迎です」

「なら良いじゃない」

「はあ……」

いつもいつも俺は美波に押し切られている気がするのは気のせいだ

るうか。まあ、大事な彼女だからいいんだけどさー……でも人目とか気にして欲しい。かなり顔が熱くなってるから。

「さあ、早く帰りましょう!!」

「ってオイ!!引つ張るな!!転ぶ転ぶ!!」

「そんなのは根性で何とかしなさい!!」

「んな無茶な!!」

俺は美波に引つ張られながら家まで走っていった。そのときの美波は目で見ても分かるぐらいに顔が真っ赤だった。案外可愛いのかなコイツ。

「何よ? / / /」

「顔赤いぞ美波」

「なっ…… / / / バカ!! リュウのバカア

!! / / /」

今日の成果。

アキの姉貴の怖さを知って美波の意外な可愛さを知りました。

俺と玲さんと意外な事実（後書き）

「……………出番が少ない」

B y 土屋康太



## 俺と優斗とイラストと

劉真「俺と優斗のイラストが遂に完成しました!!」

優斗「わー!! ついにか!! やつとか!! 相変わらず長えんだよ!!」

劉真「それではトップバッターはこの俺、神無月劉真です!! どうぞ!!」

> i335391 — 3416 <

劉真「どうですか? 因みに俺が三頭身なのは理由があります。

それは……単純に作者がバカテスの四コマが好きだからです」

優斗「〜これが僕らの日常〜だったっけか? 面白いよなあれ」

劉真「ハイ説明完了。次は唐津優斗です!!」

> i335392 — 3416 <

優斗「どう? カッコいい?」

劉真「微妙だ。というワケで今日はココでお別れ。また次回会いましょう!!」

「」おまじつならあ

!!「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8814t/>

---

バカとテストともう一人の帰国子女

2011年11月20日19時14分発行